



N・ルーマンの構成主義の社会理論－社会的な「構成」とその時間性についての研究－

梅村, 麦生

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6011号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006011>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

平成25年12月10日

N・ルーマンの構成主義の社会理論

—社会的な「構成」とその時間性についての研究—

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程社会動態専攻

梅村 麦生

目次

序章	3
1. 本稿の背景と目的	4
2. 本稿の構成	5
第一章 構成主義の時代と社会理論	9
1. 構成主義の時代	11
2. 同時代の社会理論の諸特徴	13
3. 小結	26
第二章 構成主義の社会理論の前史——社会的な「構成」の問題化	28
1. 社会科学における「構成」の問題化と社会学の根本問題としての「社会はいかにして可能か」	29
2. A・シュッツの『社会的世界の意味構成』における多元的な構成	31
3. 小結	49
補 シュッツ「社会的世界の意味構造」(Alfred Schutz, “The Meaning Structure of the Social World”, 1958)	50
第三章 現象学的な行為理論とシステム理論的な社会理論における「構成」	53
1. ルーマンの社会理論への現象学的な意味の構成分析の導入——ルーマン前期におけるシュッツの受容について	55
3. 小結	83
第四章 社会的な構成の時間としての「同時性」	85
1. シュッツの「同時性」論——「われわれ関係」の前提としての「同時性」	86
2. ルーマンの「同時性」論——システム相対的な時間と「システム/環境」の「同時性」	100
第五章 構成主義の社会理論	112
1. 構成主義の諸理論と社会理論との関わり	114
2. 社会問題の構築主義	116
3. ルーマンのラディカル構成主義	121
4. 小結	132
終章 社会的な構成の時間性——現代社会の時間と「時間の社会学」について	135
1. まとめ	135
2. 時間の社会学序説	139
文献	146

序章

1. 本稿の背景と目的

現代社会学のなかで理論的な枠組として一定の役割を果たしているのが、社会学における「構成主義」ないし「構築主義」(social constructivism)の立場である。そのなかでは、社会的な「構成」や「構築」という概念が、重要なものとして用いられている。この視角が社会学のなかで登場してきたことには一定の背景がある。なおかつ、社会的・時代的背景と、学説史的な背景の双方が考えられる。まず社会的な背景としては、1960年代以降、世界中でさまざまな抵抗運動や社会運動が展開され、旧来の制度や差別がいかにかに「社会的に構築」されたものであるかが訴えられるようになった。この流れに沿い先駆となった研究として、「現実」が「社会的に構成(構築)」されたものであることを説いたピーター・L・バーガーとトマス・ルックマンの『現実の社会的構成』(Berger/Luckmann 1966=2003)がある。またその後、ジョン・I・キツセとマルコム・スペクターの研究(J. I. Kitsuse/Spector 1977=1990)が端緒となった社会問題の「構築主義」や、ミシェル・フーコーの研究などの影響を受けた言説分析の「構築主義」の主張が現れた。また、これらの「構築主義」以外の論者の中でも、特に往時に流行した「機能主義」や「構造主義」に対する反論として、社会には確固たる「構造」とその「機能」があるのではなく、社会は人びとによって不断に「構成」されるものである、と主張する社会理論が現れてきた(cf. Giddens 1993=2000)。

しかし、今日まで社会学のなかで「構成主義」や「構築主義」の社会理論が広く展開されていくうちに、次第に「社会的」な「構成」「構築」をめぐる議論群に問題点が見えてくるようになってきた。とりわけ、以下の点で不明瞭なところが見られるようになっている。

(1) 「構成」「構築」概念の多義性：さまざまな社会現象が「構成」されたものとされることで、この「構成」が指す内容が多義的になり曖昧になっている¹。

(2) 「構成」「構築」概念の積極的意義への疑問：旧来の概念に対する批判として「構成」概念は登場したが、この概念自体の含意がはっきりとしない。既存の社会制度が「社会的に構築」されたものであることを指摘し批判する「闘争」概念以上の積極的意義はどこにあるのか²。

(3) 「構成」「構築」概念と現代社会との関係が不明：現代の構成主義的な知識社会学は、社会思想が当代の社会構造を記述する一方、当代の社会構造が社会思想を規制する、という知識と社会との再帰的な関係を想定する。しかしこの構成主義的な社会理論自体が現代社会といかなる関係のうちに立っているのか、つまり現代社会のどのよ

¹ この点について、例えば副題で「ポスト構成(構築)主義の社会理論・メディア理論」と題された Renn ほか(2012)の論文集を参照。

² 社会的な「構成」「構築」が「闘争概念」である点に関しては、社会的なものの「構成」に関する議論の整理を行なっている科学哲学者イアン・ハッキングの『何が社会的に構成されるのか』(Hacking 1999=2006)を参照。

うな側面を反映あるいは投影しているのか、ということが必ずしも十分に議論されていない³。

以上のように、社会学において「構成主義」「構築主義」の社会理論が広がるにつれて、社会的な「構成」「構築」の概念もさまざまな形で展開されてきた。そして構成主義や構築主義の視点が定着する一方で、そうした社会的な「構成」「構築」の概念が多義性と曖昧さを孕むようにもなっている。

本稿では、「構成主義」の社会理論を学説史的に位置づけ、そのことをとおして社会的な「構成」の概念を整理し、そこに含まれる一貫した構想と今日的な意義を見出すことを目的とする。そして本稿が注目するのは、ニクラス・ルーマンの構成主義の社会理論である。ルーマンは一方では同時代の学術理論の摂取に意欲的で、社会学以外の分野からも「構成主義」の視点を導入している。しかし他方で、ルーマンは社会学的な視角についてきわめて自覚的であり、タルコット・パーソンズを筆頭とする社会学における社会理論の伝統を受け継いでいる。したがってルーマンによる「構成主義」の社会理論を追いかけていくと、社会学における構成主義の視点がどのようなものか、ということがよく見えてくる。そこで本稿では、ルーマンの構成主義を中心に、社会理論における前史や同時代の理論との比較も踏まえて、社会学における「構成主義」の社会理論と、社会理論における「構成」概念の意義について研究する。

2. 本稿の構成

まず前置きとして、「構成」と「構築」の語についての本稿の用法を記しておきたい。これまで「構成」「構築」と並べて記載してきたが、以上の議論で登場したのは英語で表せば *construction* の一語である。また「構成主義」「構築主義」に関しても、*constructivism* または *constructionism* の訳語であることに代わりはない⁴。そこで以下では、「構成」と「構築」の語を、基本的に「構成」で統一する。「構成」の語の方がより多義的で曖昧という向きはあるが、「構築」の方がより作為的・創造的といった一定の意味合いに限定して用いられることが多いため、より広い意味を示すものとして「構成」を本稿では選んでいる。

ただし、*construction* とは別の語との訳し分けの必要が生じた場合には、「構築」を用いる。特に本稿で見ていくことになるように、そもそも現代の「構成主義」「構築主義」の用いる *construction* の語には、遡れば複数の概念が収斂している。この点については、アルフレート・シュッツの理論を取り上げた章で詳細に検討する。

³ 構成主義的な知識社会学に関しては、以下で言及するニクラス・ルーマンの『社会構造とゼマンティック』（Luhmann 1980a=2011）を参照。

⁴ この両者に関しては、分野によって用いられる語が違うこともあるが、含意に明確な区別が存在するわけではない。ただし、社会構築主義を *constructionism*、生物学的な構成主義を *constructivism* と見なす論者もいる（千田 2001: 13-14）。

*

初めに、構成主義の社会理論が登場してきた時代について、この時代に寄せられたさまざまな語彙をもとに一瞥する。そして構成主義と呼ばれる理論以外の同時代の社会理論も含めて、社会的な「構成」という概念がいかなる方法論的な意図と内容的な含意を伴って用いられているかを分析し整理する（第一章）。

社会的な「構成」に関して取り上げる現代の社会理論は、特にピーター・L・バーガーとトマス・ルックマン（Berger/Luckmann 1966=2003）、アンソニー・ギデンズ（Giddens 1984; 1993=2000）、ピエール・ブルデュー（Bourdieu 1980=2001）、ニクラス・ルーマン（Luhmann 1984=1993-1995; 1997=2009）の理論である。これらの理論を見て行くなかで、社会的な「構成」を軸とする社会理論について、(1) 方法論的含意として旧来の「二元論の超克」の意図が前提とされており、(2) そのための方策として、社会的な媒介となる知識やメディアの概念が構想されている、ということを確認する。社会学のなかではかつて、ゲオルク・ジンメルが、主観主義的、客観主義的、そして主観主義／客観主義の超克を狙う理論の分析を行なったが、そこで導かれていたのは、主観主義／客観主義に対する批判を行なう議論では、主観的なものと客観的なものに対して媒介となる第三項が提出される、ということであった。その視点をもとに考えると、現代の社会理論のなかにも同じことを見出されることがわかる。以上に上げた議論のなかでは、「(社会的) 知識在庫」（バーガーと）、「構造化」（ギデンズ）、「ハビトゥス」（ブルデュー）、「コミュニケーション・メディア」（ルーマン）といった、第三項的な媒介概念が提出されている。例えば、「行為」と「構造」をつなぐような第三項としてそれらの概念が想定されている。「社会問題」や「言説分析」の構築主義を初めとした他の「社会構成」（構築）主義的な諸研究⁵においても、旧来の二元論を乗り越える意図と、そのための媒介項や代替項（言説や闘争の場）が示されていることが見出される。

次に、ルーマンの構成主義の社会理論や、社会的な「構成」について論じている他の社会理論の背景をなしている理論を取り上げる。そのなかで、いかに社会的な「構成」が問題化されるに至ったかを追跡する。まず、社会学の成立期にジンメルが行なった「社会はいかにして可能か」の問題設定を参照する。次に、社会学のなかで社会的な「構成」を軸とする現代の多くの社会理論に影響を与えている、アルフレート・シュッツにおける多元的な「構成」の議論を参照する（第二章）。

現代社会学における構成主義的な社会理論を検討するなかで、アルフレート・シュッツの行為理論へと遡っていく理由は、(1) 彼の現象学的な知見を取り入れた行為理論がさまざまなかたちでのちの構成主義的な諸理論へと影響を与えており、(2) さらにシュッツ自

⁵ 既出の文献に加え、中河伸俊ほか編（2001）、Rusch/Schmidt 編（1994）、Keller ほか編（2013）なども参照。

身の主張のなかに、多様な意味での「構成」が現われ出でている、ということにある。その点を明らかにするために、シュッツの「構成」の議論が参照している、20世紀初頭の社会科学の「構成」に関わる諸理論、特にマックス・ヴェーバー、エトムント・フッサール、マックス・シェーラー、ヴィルヘルム・ディルタイ、ルドルフ・カルナップの「構成」の議論に遡る。それらを踏まえて、シュッツの『社会的世界の意味構成』（1932）にそうした社会科学の「構成」の多様な議論がいかに取り入れられているかを見て行くことになる。

そしてシュッツの「意味的構成」の理論を踏まえた後で、シュッツの現象学的な行為理論から、ルーマンのシステム論的な社会理論への展開を検討する。シュッツとルーマンを対比するなかで、両者に共通する「意味的構成」の要点と、両者のあいだで相違のある行為理論的な「構成」から社会理論的な「構成」への転換を明らかにする。そのために、特にルーマンがいかにシュッツの「意味的構成」の理論を取り入れ、また批判や発展をしているのかを参照する（第三章）。

その続きで、シュッツやルーマンの「構成」の内容的含意に「時間性」が含まれていること、およびルーマンの社会理論が意味の時間的な次元と「同時性」の概念に関してシュッツから多くを取り入れていることに注目し、シュッツとルーマンにおける「同時性」の議論を検討する（第四章）。

シュッツの時間論と「同時性」の議論の背景には、エトムント・フッサールの内的時間意識とアンリ・ベルグソンの持続の議論がある。そのうえでシュッツは、行為者たちの意識の流れの同時性が彼らのあいだでの共同を可能にし、彼らのあいだでの共同が行為者たちの意識の流れの同時性を感じさせる、ということを読いた。他方でルーマンは、あるシステムが創発するとき、そこにそのシステムの内側と外側とのあいだでの同時性が立ち上がり、システム独自の時間が流れるようになる、と読いた。つまり個人ならぬ社会的なシステムが立ち上がる時、そこに社会的なるものを社会的ならざるものから区別する境界が生じ、そこに同時性が、そして社会的な時間が産み出される、と。ここにあらためて、シュッツからルーマンへの変化として、行為理論から社会理論への、また **Konstitution** から **Konstruktion** への舵が切られていることが見て取れる。また社会学的な時間論という観点から、社会の諸領域についてのルーマンの諸議論を見直すことができる。

以上の展開を踏まえて、ルーマンの構成主義の社会理論を詳細に分析する。これまでに見てきたシュッツを含めた従前の社会的な「構成」の議論からいかなる点を継承しそしていかなる部分で相違があるのかを明らかにし、併せて他の構成主義の理論、いわゆる「構築主義」の社会理論や、また他分野での構成主義の理論との対比をとおして、ルーマンの言う「ラディカル」な構成主義の社会理論と、それを含む社会学的な構成主義の特徴を浮上させる。ルーマンの構成主義に関しては、特に「構成主義の認識プログラムと未知のままのリアリティ」、「構成としての認識」、『社会の科学』という論文と著作 (Luhmann 1990a; [1988] 2001=1996; 1990=2009) を参照する（第五章）。

最後に終章で、本稿のこれまでの見解をまとめた上で、社会的な「構成」の概念と「構成主義」の社会理論の構想に含まれる現代社会に特有の時間性という観点から、今日における時間の社会学の可能性について提示する。

第一章 構成主義の時代と社会理論

社会的なものの「構成」「構築」という視点、また社会学的な「構成主義」「構築主義」の立場は、現代の社会学の理論枠組みのなかで中心的な位置を占めているもののひとつである。社会的な「構成」「構築」を主題として提示した研究の先駆けとしてピーター・L・バーガーとトマス・ルックマンの『現実の社会的構成』(Berger/Luckmann 1966=2003)がある。彼らの研究が提示した「社会的構成」の視点は、多かれ少なかれのちの「構成主義」「構築主義」の社会理論に受け継がれている。また特に「構築主義」の立場を広めたものとして、ジョン・I・キツセとマルコム・B・スペクターの『社会問題の構築』(Spector/Kitsuse 1977=1990)に端を発する社会問題の「構築主義」や、ミシェル・フーコーや哲学における言語論的展開の影響を受けた言説分析の「構築主義」の視角がある(参照、上野編 2001)。加えて、より理論的な研究には、アンソニー・ギデンズのように「構造化」「社会の構成」(Giddens 1984)や、ニクラス・ルーマンのように「ラディカル構成主義」(Luhmann 1990a)を説く社会理論も登場した。

こうしたさまざまな「社会的構成」の議論、社会学的な「構成主義」の理論の解明を目指すのが本稿の試みである。初めに、これらの多岐にわたる「社会的構成」をめぐる議論が現れてきた背景を考察する。

1. 構成主義の時代

バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』は、副題を「知識社会学論考」としているように、人びとの日常的な現実の構成における知識と社会との関係を問うている。そして彼らのみならず、のちの社会学的な構成主義や構築主義の理論の多くもまた、知識社会学の視角を合わせもっている。例えばキツセらの社会問題の構築主義や、他の言説分析の構築主義の研究が対象としているのも、社会に生きる人びとの一定の知識である。さらにルーマンの構成主義は、彼の言う「ゼマンティック論」（歴史的・社会的意味論）とセットで捉えられなければならない。

この点についてはやがて見て行くこととするが、その知識社会学の視点からすればこれらの理論もまた、「知識の存在拘束性」（Mannheim 1965: 227=1975: 298）に関わる。構成主義の社会理論は、知識の社会的な「構築」性のみならず、認識の自己言及性や再帰性を強調するが、そうした理論にもまさしく社会を分析する枠組自体とその同時代の社会との関係（いわば、社会学的な記述の産物としての社会かつその記述の源泉としての社会、という再帰性）が備わっている¹。

「社会的構成」の議論が登場した時代について振り返ってみると、『現実の社会的構成』が公刊された1960年代、『社会問題の構築』が公刊された1970年代は、日本で言えば高度経済成長期の後半から安定成長期に入る時代であり、1968年に代表される世界各地での学生運動、反戦運動や公民権運動なども含めたさまざまな抵抗運動や社会運動が展開された時代であった。そのなかで旧来の制度や枠組、そして差別がいかにか「社会的に構築された」ものであるかが訴えられるようになった。社会的な背景としては、第二次世界大戦後の世界的な高度経済成長、都市化、高等教育の普及、といったことも前提となっている。

しかし何より、社会的な「構成」「構築」が論じられるようになるのは、その次の段階である。それまでが特に近代化の発展段階にあったとすれば、脱産業化、情報化、消費社会化、郊外化などがその側面とされる「ポスト近代化」の段階である²。また学説史的な背景としては、新旧のマルクス主義や、パーソンズらの機能主義、構造主義などと対峙して、社会には事前に確固たる「構造」がありそれに従った「機能」があるのではなく、あくまでそのときどきの人びとによって不断に「構成」「構築」されるものである、と主張する社会理論が現われてきた。

つまり「構成主義」の社会理論は、「ポストモダン」「後期近代」「再帰的近代」などと呼び称される時代、あるいはそれらの理論と同時代に現われてきた。ここでそれぞれの議論の当否を比べることはできないが、それらの議論が同時代の社会をどう記述しているかについて、以下でまとめて紹介しておきたい。

1960年代、70年代という時代の変わり目に位置した論者たちの言葉を借りれば、

¹ この点に関しては、ルーマンのゼマンティック論（Luhmann 1980a=2011）を参照。

² 下記の「ポストモダン」の箇所を参照。

この時代は経済的な側面からは「ポスト工業社会」(Bell 1973=1975 ; Touraine 1969=1970)、「晩期資本主義」(Habermas 1973=1979)、「消費社会」(Baudrillard 1970=1979)、また技術的な側面からは「メディア時代」「情報化社会」などと称された。消費社会とメディア時代の両側面を掛け合わせて、「シミュラクル」といった言葉もこの時代の特徴を示す言葉として使われている(Baudrillard 1981=1984)。そしてこの時代に政治的な領域では「新しい社会運動」(Touraine 1978=1983)の登場や、その反面で「新保守主義」「新自由主義」の擡頭が言われた。さらに思想的な側面では、「主体の死」(Foucault 1969=1970)や「ポストモダン」における「大きな物語(歴史)の終焉」(Lyotard 1979=1986)といったことが言われている。

この時代はやがて「ポストモダン(ポスト近代)」あるいは「後期近代」や「再帰的近代」と呼ばれるようになる。どの定式化が妥当かをここで判断することはできないが、従来の近代との対比あるいは延長で捉えられていることに変わりはなく、「近代性」それ自体を問題とするものでもある³。

この時代の社会の特質とされるものを挙げていくと、まず『ポストモダニティの条件』のデヴィッド・ハーヴェイの言葉を借りれば、「時間-空間の圧縮」がとりわけ大きな変化として指摘されている(Harvey 1990: 284-307=1999: 364-396)。『リキッド・モダニティ』のジグムント・バウマン(Bauman 2000: 1-16=2001: 3-20)が想定している「液体的」「流動的」ということも、また『近代の帰結』のアンソニー・ギデンズ(Giddens 1990: 17-28=1993: 31-44)が言う「時間と空間の分離」や「脱埋め込み」も、同じ問題に関わる。「グローバル化」(Robertson 1992=1997)はその一大局面とされる。

そのなかで、ウルリッヒ・ベックやギデンズらは「再帰的近代化」と言い、近代そのものの前提も次々と再帰的に検討に付される段階になったと見ている(Beck et al 1994=1997)。例えばいわゆる「伝統」に関して言えば、この時代は「ポスト伝統社会」(ギデンズ)であり、いかなる伝統といえども単なるこれまでに伝承され保全されてきた文化的遺産ではなく、「創られた伝統」(Hobsbawm/Ranger ed. 1983=1992)たらざるをえない。併せて、学業での進路選択や職業選択、親密圏ないし家族の形成、政治的行動等に関して「選択」が「個人」に委ねられそのリスクもまた個人に覆いかかってくるという「個人化論」や「リスク社会論」がベックを筆頭に行なわれている(Beck 1986=1998)。

以上のような諸定式でもって記述される時代に、構成主義の社会理論は登場してきた。その点を踏まえたうえで次節では、構成主義と同時代の社会理論の諸特徴を、とりわけ「社会的構成」に関わる議論を提出しているものを中心に検討する。

³ Habermas (1980=2000)、Turner ほか (1990)、Latour (1991=2008)、三上 (1993) なども参照。

2. 同時代の社会理論の諸特徴

現代の社会学の特徴として、統一的な社会理論の不在がある。社会学という分野が成立して以来、時代が下るにつれて細分化が進んでいるのであるが、特にかつて隆盛を極めたマルクス主義的な社会理論やヴェーバーやデュルケームといった社会学の古典、さらにタルコット・パーソンズの構造・機能主義の社会システム理論に主に依拠していた時代に比べて、今日では中心的な社会理論、つまり社会的なもの一般の説明を行い、あらゆる社会現象を記述する際に参照される社会理論は不在である。

しかし他方で、社会学という学的分野が成立しうるためには、つまり各個別領域の内部だけにとどまらない議論をするためには、社会学の諸領域の間を媒介するような社会理論が必要である⁴。そして中心的な単一の世界理論というものにはもはやありえないとしても、現代の世界理論に共通する視角というものはある。それが社会的な「構成」「構築」(social construction) 概念に定位する理論である⁵。これに近い立場として、「構造化」(structuration) の理論などもある。そしてこれらのいわば「構成主義」的な視角は、構造主義や機能主義、現象学や実存主義の興隆以降の人文諸学に広く存在する視角であり、「ポスト構造主義」や「ポストモダン」の議論、また「脱構築」の理論と比すこともできる。

以下で見る「社会的構成」の諸理論について前もって記しておくとして、バーガーとルックマンは『現実の社会的構成』(*The Social Construction of Reality*, 1966) の中で「現実が社会的に構成されている」(Reality is socially constructed) ということを前提にし、その構成の過程を記述している。またアンソニー・ギデンズは『社会の構成』(*The Constitution of Society*, 1984) のなかで、自身の「構造化理論」(Theory of Structuration) を展開し、社会的実践が再生産されるなかでの「構造化」の過程に注目した理論構築を行なっている。そしてニクラス・ルーマンは「ラディカル構成主義」(radikaler Konstruktivismus) の名を借りて、自己言及的な社会理論の構築を説いている。

本稿で特に注目するのはルーマンの構成主義であるが、以下では「社会的構成」の先達であるバーガーとルックマンの理論、またルーマンと同時代に「構成」や「構造化」について論じたブルデューとギデンズを併せて、それらの社会的な諸理論に共通する特徴を見出したい。

⁴ 以上の議論について、例えば富永 (2006)、盛山 (2006)、北田 (2007) 参照。

⁵ 今回取り上げる諸理論を本稿では便宜的に「構成」主義と呼ぶ。他に「構築」主義や「構造化」理論など別の言い方も考えられるが、後二者はそれぞれ特定の立場を指すのに用いられているので、社会学ではむしろより一般的でない構成主義という言葉を採用した。

2-1. 構成主義的視角に共通する出発点としての二元論批判

社会学における構成主義的な諸理論の多くには、まず出発点のひとつの共通点がある。それは、何らかの形での「主客二元論」批判である。このなかには、主観主義と客観主義の双方への批判、および主観／客観という二分法それ自体に対する批判を含む。これらの理論は旧来の理論に対し、二元論批判という形をとって難点を指摘し、その乗り越えや代替を自身のアプローチによって示すために「主観主義・客観主義を超えて」や「主客二元論を超えて」と銘打った議論を行なっている。

社会学では例えば、個人とその行為に定位し行為者（＝主体）から出発して社会現象を説明しようとする理論を主観主義（例、ヴェーバー「社会的行為」「主観的意味」として、また全体社会とその構造に定位し社会的構造（＝客体）から出発して社会現象を説明しようとする理論を客観主義（例、マルクス「土台」（下部構造）、デュルケーム「社会的事実」「物として」、パーソンズ「社会システム」として、双方に批判を加えている⁶。

2-1-1. 「主観的意味」かつ「客観的事実性」としての社会（バーガーとルックマン）

この点に関して、やはりバーガーとルックマンの『現実の社会的構成』が先鞭をつけている。バーガーたちは『現実の社会的構成』の導入部の末尾で彼らの論考の主題を、ウェーバーとデュルケームの命題を引き合いに出して以下のように述べている。

社会は確かに客観的な事実性（objective facticity）を備えている。そしてまた、社会は確かに主観的意味（subjective meaning）を表現する行為（activity）によって築き上げられて（built up）いる。〈中略〉社会がもつ「一種独特の現実」（reality *sui generis*）を作っているのは、客観的事実性かつ主観的意味でもあるという、社会のもつまさにこの二重の性格なのである。それゆえ社会学理論にとっての中心の問題は次のように言い表すことができる。さまざまな主観的意味が客観的事実性になるのはいかにして可能か（How is it possible that subjective meanings become objective facticities?）、と。

(Berger/Luckmann 1966: 18=2003: 25-26)

バーガーたちはここで、デュルケームの言う「一種独特の現実」としての社会がもつ特徴を、客観的な事実であるとともに主観的な意味でもあるという二面性のうちに見ている。彼らは自身の社会理論を定立するにあたって、出発点に社会のもつこの二面性を据えている。そして社会学理論の中心課題として、かつてジンメルがカントの認識論に倣って立

⁶ 留意が必要なのは、批判されている当の理論家自身が主観主義や客観主義、行為一元論や構造一元論を唱えていることはまずない、ということである。あくまで後代の理論家が彼らを批判するに際してそう名指しているにとどまる。その点、上記の古典家たちが主客二元論を超え出る議論をすでに行っていたとして再評価される場合にも、反対の主張ながら同様のことがあてはまる。結語参照。

てた社会学の根本問題としての「社会はいかにして可能か」という問いを、「主観的意味が客観的事実性になるのはいかにして可能か」という問いに置き換えている。「社会がもつ《一種独特の現実》を適切に理解するには、この現実が構成 (construct) される仕方を研究することが必要になる」と続けている (Berger/Luckmann 1966: 18=2003: 26)。

バーガーたちは、以下の論者たちとは異なり、旧来の主客の二分法を否定しているわけではない。そうではないが、ヴェーバーの「社会的行為」に象徴される社会の「主観的意味」と、デュルケームの「客観的事実」に象徴される社会の「客観的事実性」との総合のなかで、「現実の構成」を捉えようとしている。少なくとも、社会を単に主観的なものないし客観的なものと見なす一面的な観点ではなく、両者の総合過程に注目する観点を採用している。

しかしバーガーたちの次の世代では、明確にこれまでの二元論的な社会理論に対する批判を行なうようになっていく。とりわけ「行為」の側に定位する理論が主観主義的なものとして、また「構造」に定位する理論が客観主義的なものとして、双方ともに批判の俎上に挙げられている。ここでは、ギデنز、ブルデュー、ルーマンの順に見ていこう。

2-1-2. 主体の帝国主義と社会的客体の帝国主義の分断の克服 (ギデنز)

ギデنز自身は自身の構造化理論を説くにあたって、明示的に主客二元論批判を行なっている。彼がその理論をまとめた『社会の構成』の序論では「構造化理論を定式化するに際して、私は客観主義と主観主義に関わる二元論を避けることにしたい」(Giddens 1984: xxvii) と述べ、本編の冒頭を以下のように始めている。

構造化理論の主要な概念の予備的な提示を行なうにあたって、一方での機能主義(システム理論を含む)や構造主義と、他方での解釈学やさまざまな形の理解社会学とを分かつ分断線から始めることが有益だろう。(中略)

理解社会学がいわば主体の帝国主義に基づいているとすれば、機能主義と構造主義は社会的客体の帝国主義を示している。構造化理論の定式化における私の主なねらいは、ひとつにはこれらの帝国建設的な試みを終わらせることである。構造化理論に従えば、社会科学の土台となる研究領域は個々の行為者の経験でもなければいかなる形の社会総体 (societal totality) の存在でもなく、空間と時間を越えて秩序づけられる社会的実践 (social practices ordered across space and time) である。(Giddens 1984: 1-2)

ギデنز自身は構造主義・機能主義・システム理論に現れている客観主義的傾向と、解釈学・理解社会学に現れている主観主義的傾向とのあいだの分断を批判し、自身の構造化理論は「個々の行為者」でも「社会総体」でもなく、「社会的実践」に定位することでその分断を乗り越える、としている。

加えて、『新しい社会学的方法の規準』(1976, 1993) の「第二版への序論」では、行為／

構造と個人／社会という二つの区別を持ちだしてこのように述べている。

理論的視角のもつこうした〔行為 (action) と構造 (structure) の〕二元論 (dualism) と決別するなかで、『新しい社会学的方法の規準』で展開した分析は、同時にまた「個人」(the individual) と「社会」(society) という二元論も排除している。「個人」も「社会」も、理論的熟考のための適切な出発点にはならない。その代わりに、焦点が当てられるのは再生産された実践 (reproduced practices) に対してである。

(Giddens 1993: 4-5=2000: 16-17)

ギデنز氏は「構造の二重性」(duality of structure)、「再生産された実践」、「行為体」(agent) といった概念を活用しながら、行為／構造の二元論と、個人／社会の二元論を退けている。そのときギデنز氏は個人とその行為に依拠する主観主義的立場 (理解社会学、解釈学) と、社会とその構造に依拠する客観主義的立場 (機能主義、構造主義) の双方を批判する。そのうえで、社会的実践に志向する構造化理論を提起している。

2-1-3. 社会科学における主観主義と客観主義の対立 (ブルデュー)

ブルデューもギデنز氏と同様に、社会科学に分断状況をもたらす主観主義と客観主義の対立を批判し、その乗り越えを目指している。

社会科学を人為的に分割する諸対立のうちで最も基本的で最も破滅的な対立は、主観主義 (le subjectivisme) と客観主義 (l'objectivisme) の対立である。この分断 (division) がほとんど変異なしに絶えず再生産する事実そのものは、この対立し合う認識様式 (les modes de connaissance) が社会現象学にも社会物理学にも還元出来ない社会的世界の科学 (une science du monde social) にとって不可欠でもあることを十分に証言している。各々の認識様式の成果を保存しながら (立場の違いを明確に自覚して関与することから生まれることをも無視しないで) 二つの認識様式を対立させる敵対関係を乗り越えるためには、学問的な認識様式 (社会的世界の日常的経験の原理をなす実践的認識様式 (le mode de connaissance pratique) に対立する) である限りで両者が共有する諸前提を解明しなければならない。(Bourdieu 1980: 43=2001: 37-38)

ただしブルデューは上に記しているとおり、この対立自体は社会科学にとって不可欠であるとしている。つまり形を変えて絶えず再生産される主観主義／客観主義の対立を前に、これらをどちらか一方の立場に還元することはできない、と見ている。しかしそのうえで、単なる分断状況、敵対関係に終わらないために、両者が共有する前提を解明する必要がある、とするのである。

そしてまたブルデューも、この対立を乗り越える鍵として社会的実践への注目を挙げて

いる。

問題はしたがって、構造の实在論 (*le réalisme de la structure*) から逃れることだ。一次的経験と手を切り、客観的な関係を構築 (*la construction des relations objectives*) するうえでは必要な契機たる客観主義が、それらの関係を、個人と集団の歴史の外で既に構成された实在 (*les réalités déjà constituées en dehors de l'histoire de l'individu et du groupe*) として取り扱うことによって実体化 (*hypostasier*) する時には必ずや行き着く構造の实在論を、しかも、社会的世界の持つ必然性の説明力を全く欠く主観主義に陥らずに逃れることである。そのためには実践 (*pratique*) に立ち戻らなければならない。製作物 (*opus operatum*) と製作法 (*modus operandi*) との、歴史的实践の客観化された生産物と身体化された生産物との、諸構造とハビトゥスとの弁証法の場である実践に。(Bourdieu 1980: 87-88=2001: 83)

ブルデューは「実践」を介すことで、構造との客観的な関係を捉える一方で、構造の実体化は避ける道を探している。

2-1-3. 主体でも客体でもないものとしての社会（ルーマン）

ルーマンはブルデューやギデنزと違う方向に向かいながら、同様に主観／客観の二分法を否定している。まず特に「意味」概念を規定するにあたり、従来のように主体に依拠して求めることを批判する。そしてまた「社会」（社会的システム）を規定するにあたって、この主観（主体）／客観（客体）の区別に基づいてどちらかに割り当てることを批判している。

「社会学の基礎概念としての意味」（1970）の冒頭でルーマンは、意味概念を定義するにあたって、意味を主観（主体ないし主体の志向）に結びつけて規定した超越論的哲学の限界を指摘したうえで、こう述べる。

意味 (*Sinn*) と意識についての関係はほとんど争うべくもないことであり、むしろ両者の内容をこそ明らかにしなければならない。意味概念は一次的なものであり、したがって意味概念は主体概念 (*Subjektbegriff*) に準拠せずに規定することができる。なぜなら主体概念は意味的に構成される同一性 (*sinnhaft konstituierte Identität*) としてすでに意味概念を前提しているからである。

主体への準拠の代わりに、われわれは機能概念とシステム概念が特別の意義を持つ、きわめて分化したひとつの分析道具を配置することにする。われわれは意味の機能分析から出発して、この機能の実現には意味を構成するシステム (*sinnkonstituierende Systeme*) が前提にあることを明らかにしたい。(Luhmann 1971a: 28=1987: 32-33)

ルーマンは意識哲学のように意味を主体によって基礎づけるのではなく、意味概念の側を一次的なものとして措定する。さらに意味が単独で成り立っているのではなく、「意味を構成するシステム」(sinnkonstituierende System)のもとで可能になっているものとして扱う。そしてこの「意味を構成するシステム」には、心的システムと社会的システムの二つが含まれる。「社会学の基礎概念としての意味」が所収されているユルゲン・ハーバーマスとの論争本のなかで、ハーバーマスからの批判への応答として書かれた「システム理論の諸論拠」(1971)でも、意味を構成するシステムをさらにを主観(主体)と結びつけることを否定してこう記している。

意味構成的システム(sinnkonstituierende Systeme)の理論による試みは——この点でもフッサールの現象学と比較しうるが——もはや主体と客体の分離や行為する自我(handelndes Ich)と非自我(Nicht-Ich)の分離とは両立しえない。システム概念は、主体(Subjekt)や主体構築(Subjektkonstruktion)、主体の集合体(Subjekttaggregation)として導入されるのではない。(Luhmann 1971b: 322=1987: 407-408)

他方でルーマンは、「社会」を何らかの主体や客体として捉えることも退けている。これも「意味」と同様に、主体/客体の区別ではなく自身のシステム理論に準拠して規定する。ルーマンの『社会の社会』(1997)第五章「自己記述」第二節「主体でも客体でもなく」では、社会を記述・観察する営みもまた社会内の出来事であるとしてこう述べている。

社会の理論では、適切な外的観察者の可能性は放棄されねばならない。〈中略〉つまりわれわれが扱っているのは、主体哲学が考慮しなくてもよかった事例、あらゆる認知が自己観察及び自己記述を介して操舵されているような事例なのである。〈中略〉このシステム [=社会] 自身が、観察することを観察し、記述することを記述しなければならない。それ故にこのシステムを、この区別の古典的な意味に即して、主体ないし客体として把握することはできないのである。(Luhmann 1997: 875=2009: 1172-1173)

ルーマンは自身の社会理論を、主体/客体の区別にではなく、システム/環境の区別に基づくシステム理論によって構築している。そのなかに「意味」や「社会」、あるいは行為やコミュニケーションもまた位置づけられる。

以上では、既存の社会理論における二元論的傾向に対する、バーガーとルックマンによる総合の試み、またギデنز、ブルデュー、ルーマンの批判と代替を見てきた。こうした二元論への批判的な態度が、構成主義的な社会理論に共通して内包されている。次項では、彼らがいかにそうした社会理論における主客の二分法や主観主義・客観主義の対立に対する乗り越えや代替の試みを行なっているのかを検討することとする。

2-2. 社会理論における媒介概念——二元論の克服・代替として

「社会的構成」に関わる社会理論のなかで、バーガーとルックマンは主観的意味と社会的客体との総合を、ギデنزやブルデューは主観主義と客観主義の対立の克服を、そしてルーマンは主観／客観の二分法の代替を目指した。

社会的なものに関する主観主義と客観主義の対立とその乗り越えについて、かつてゲオルク・ジンメルが哲学的研究のなかで検討を行なっているが、そこで提示されたのはここに見出される対立を一方か他方に還元したり、別の何かに収斂させたりしないためには、「理念的内容」をもつ「第三項」が必要とされる、ということであった⁷。社会的なものに関して見出される主観的なものと客観的なものとの対立という問題を、どちらか一方に解消するかあるいはまったく無意味な二分法として廃棄するのではなく、ここに含まれる問題性自体は認めるのであれば、両者を架橋しうる概念を見出す必要がある、ということになる⁸。

ジンメルのこの指摘は、バーガーたち以下の社会的なものに関する主観主義と客観主義の総合や架橋の試みにも当てはまる。したがってここでは特に、いかなる媒介概念が想定されているのか、という点に注目してそれぞれの主張を記述する。

2-2-1. 「知識」を媒介とした「個人」と「社会」の弁証法（バーガーとルックマン）

バーガーとルックマンは、人びとにとって社会現象が主観的意味を伴うと同時に客観的事実としても現われるということを踏まえて、「現実社会的に構成される」と主張した。そして『現実の社会的構成』が「知識社会学論考」とされているように、その「社会的な構成」の鍵となるのが「知識」(knowledge, Wissen)であるとしている。ここで言う「知識」とは、彼らがアルフレート・シュッツの諸論考に依拠しながら述べているように、「社会のなかで《知識》(knowledge)として通用するすべてのもの」(Berger/Luckmann 1966: 15=2003: 20)、つまり「人びとが日常生活 (everyday life) のなかで、つまり非理論的であったり前理論的であったりする生活のなかで、『現実』(reality)として『知っている』(know)もの」(Berger/Luckmann 1966: 15=2003: 20)のことを指す。このような「知識」概念をもとに、バーガーたちは人びとの主観的現実と客観的現実との、また個人と社会との構成的関係を、「知識」(それとまた、それらの蓄積としての「社会的知識在庫」(social stock of knowledge)や制度)が媒介として働くことで可能になるとしている。

バーガーとルックマンはこうした構成の過程に対して、ヘーゲルとマルクスの言葉を借

⁷ ジンメル『哲学の根本問題』(1910)第三章「主観と客観について」(Simmel 1996: 80-102=1994: 117-151)参照。併せて、第四章「理想的諸要求について」(Simmel 1996: 103-157=1994: 152-237)も参照のこと。詳細については、併せて梅村(2011)も参照。

⁸ この点については、次章で取り上げるジンメルの「社会はいかにして可能か」における回答も参照。

りて社会の「弁証法過程」と呼んでいる⁹。彼らは「社会は人間の産物である」「社会は客観的現実としてある」「個人は社会の産物である」という、社会についての様相の異なる三つの常識的理解を、どれもが社会にとって不可欠の契機であるとし、その三つの契機が交わる過程を、「知識」を媒介とした「個人」と「社会」の「弁証法過程」とした。翻って個人と社会の間にあるその弁証法的関係を、「外化」「客観化（制度化）」「内在化（社会化）」の三つの契機から捉えている。外化と客観化（制度化）は諸個人による社会の構成の契機であり、内在化（社会化）は社会による個人の形成の契機である。そして、この両方の過程において「知識」が媒介として働く。つまり、人々によって産み出され蓄積された知識（知識在庫、制度）をとおして社会は構成され、またそれらの知識をとおして社会が人々に内在化されるというのである。

バーガーとルックマンは、のちの論者とは違い二元論批判を行なっているわけではなかったのと一致して、「個人」と「社会」という対置を保持しており、さらに言えば「社会」という概念の内実も曖昧な点が残る。しかし構成主義的な社会理論の先駆として重要な点は、彼らが個人と社会を繋ぐものとして、日常生活の世界に生きる人びとたち自身の「知識」を挙げたことである。この点は、「社会的構成」における「構成」の一側面を表している。まとめると、彼らの理論の要点は、人びとが日常的に知っている「知識」を介して、「個人」と「社会」とが双方向的に、ないし弁証法的に「構成」を行なっている、ということにあった¹⁰。

2-2-2. 実践の過程としての「構造化」と「構造の二重性」（ギデンズ）

ギデンズは「社会の構成」（constitution of society）を、一方では一定の知識や能力を持ち、他方では既存の社会的条件によって影響を受ける存在である行為者による、社会的実践の再生産として捉えている。行為決定論的な現象学と構造決定論的な構造主義の双方を批判しつつ、行為と構造の相互依存関係を示そうと試みている。

構造化理論を説く際にギデンズは、「個人」と「社会」の「二元論」（dualism）を排除すべきと主張する。社会理論が出発すべきは個人からでも社会からでもなく、社会的実践の再生産にこそ焦点を当てるべきである、と（Giddens 1993: 4-5=2000: 16）。これは個人や社会の存在を否定するものではなく、あくまで一方から他方を——例えば自由な個人から社会を、あるいは統制的な社会から個人を——還元することを否定するものである。完全に自由な行為でもなく、決定論的な構造でもなく、再生産される社会的実践を、と。更には、「個人と社会の二元論」は「行為能力（agency）と構造の二重性」として理解し直すべきである、とも述べる（Giddens 1984: 162）。

かくしてギデンズは、「行為が構造を構成（constitute）し、構造が行為を構成する」「構

⁹ 以下、例えば Berger/Luckmann（1966: 186-187=2003: 282-284）を参照。

¹⁰ 『現実構成』でのこうした知見をバーガーが応用した研究としては、Berger（1967=1979）、Berger ほか（1973=1977）を参照。

造は、行為が産出した結果であると同時に行為を産出する媒体 (medium) でもある」ということを指す「構造の二重性」(duality of structure) の概念を用いながら、社会的再生産を、行為と構造との相互作用を媒介する構造化の過程の契機として説明しようと努めている。

ギデنزの場合、行為論と構造論のどちらも放棄しているわけではない。両者を架橋するものとして「構造化」や「構造の二重性」の概念を導入し、行為論と構造論それぞれの偏りを補正しようと試みている。行為者は一定の能力をもったものとして、ある程度能動的に、しかし既存の規則や資源を利用し、そしてそれらから影響を受けて、行為を行なう。そして既存の規則や資源の影響を受けて、一定の社会的実践が、特定の時間・空間を越えて再生産されていく。この中間の過程を理念的に表したのが「構造化」であり「構造の二重性」である。

しかしそうであるとすれば、構造化とは一体何であろうか。ここには、行為が構造を作る過程と、構造が行為を規定する過程の二者が含まれており、構造に影響を受けた行為の再生産が描かれている。であるとするならば、結局はその場合に、行為による産出を強調すれば行為論になり、構造による規定を強調すれば構造論になる。そして行為や構造のそれぞれを記述する理論が必要であるということになる。つまり構造化という事態が、それ自体で独立に記述可能なものではない。ギデنز自身も『新しい社会学的方法の規準』で、

- ・ 構造化は実践 (practices) の再生産として、構造が存在するようになる動的な過程を抽象的に言い表すものである (Giddens 1993: 128=2000: 213)。
- ・ 構造の二重性という概念は、〈中略〉それだけで社会的再生産や社会的変容の諸条件について何らかの形の一般化を提示することはない (Giddens 1993: 5=2000: 18)。

と述べ、「構造化」とは行為と構造の依存関係を抽象的に言い表したものであって具体的な内容を提示するものではなく、「構造の二重性は、何らかの現実的・歴史的状況を検討する際にのみ説明価値をもつ」としている (Giddens 1993: 6=2000: 20)。

したがって「構造化」は、社会的な「実践の再生産」において行為と構造とが相互に条件づけ合っている関係を、理論的な媒介概念によって指示しているものと言える。この点で、媒介を「人びとが日常生活の中で『現実』として『知っている』もの」としたバーガーたちは異なり、抽象的で理論的な媒介を措定している。しかしギデنزはさらに、行為者たちは自身の行為の経過の「再帰的モニタリング」(reflexive monitoring) を行なっており、自身や他者の行ないを継続的にそして再帰的にモニタリングしていることが日常的な行為の特徴をなしている、と主張している (Giddens 1984: 5-6)。そしてギデنزは『新しい社会学的方法の規準』のなかで、シュッツや解釈学などの成果を参照して次のように記している。

相応な能力をもつどの社会的行為者も、自らが社会理論家 (social theorist) であり、いつものように (as a matter of routine) 自分自身の行いと他の人びとの意図や理由、動機を、社会生活の生産に不可欠なものとして解釈する。それゆえ、社会の成員たちが用いる概念と、社会学的な観察者が用いたり、新造語として生み出す概念のあいだには、必然的に相補的な関係が存在する。(Giddens 1993: 4-5=2000: 261)

ギデنزは、個人の意識を出発点としたり、個人の行為のもつ「主観的な意味」を強調し「客観的な帰結」を考慮しない点に関してシュッツや他の現象学的な行為論を批判するが、社会学が何らかのかたちで行為者たち自身の意味と解釈とを扱う「二重の解釈学」たらざるを得ないことを前提とした点は認めている¹¹。

社会学は諸客体からなる「あらかじめ与えられた」世界 (a “pre-given” universe of objects) に関わるのではなく、諸主体の能動的な活動によって構成され生産された世界 (one which is constituted or produced by the active doing of subjects) に関わる。
(Giddens 1993:168=2000: 272)

つまりギデنزは、「社会の生産と再生産を、単なる機械的に連続した過程としてではなく、社会の成員たちによる熟達した遂行と見なす必要がある」とする一方で、「人間の行為能力 (human agency) の及ぶ範囲は限定されている」とし、「構造の二重性」や「構造化」の概念のもとで「社会的実践の構造化」(the structuration of social practices) を探究することで、「いかにして構造が行為をとおして構成される (structure is constituted through action) ということが起こるのか」と「いかにして行為が構造的に構成される (action is constituted structurally) のか」についての説明を求めべき、としている (Giddens 1993:169=2000: 274)。

こうしたかぎりでは構造化理論とは、行為論や構造主義に取って代わるものではなく、行為と構造との媒介として「構造化」の過程を想定することで、行為者の側には「再帰的モニタリング」で表されているような再帰性を見出し、構造の側には「構造の二重性」を見出し、双方向的に両者の理論を補正し、そうすることで両者の架橋を図るものである。

2-2-3. 『構造化する構造』として『構造化された構造』としてのハビトゥス (ブルデュー)

ブルデューは人びとの実践と、社会的な制度や構造をつなぐ原理として、「ハビトゥス」の概念を提起した。ブルデューによれば、ハビトゥスが実践に方向性を与える一方、制度や構造はハビトゥスとして人びとに身体化されることで初めて実現する。

¹¹ ギデنزによるシュッツ理解と批判については、例えば Giddens (1993: 29-39=2000: 55-70) を参照。

生存のための諸条件のうちである特殊な集合に結びついたさまざまな条件付けがハビトゥスを生産する。ハビトゥスとは、持続性を持ち移調が可能な心的諸傾向のシステム (systèmes de dispositions) であり、構造化する構造 (structures structurantes) として、つまり実践 (pratiques) と表象 (représentations) の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造 (structures structurées) である。

(Bourdieu 1980: 88=2001: 83-84)

既得の生成図式のシステム (système acquis de schèmes générateurs) であるハビトゥスは、ハビトゥス生産の特殊な諸条件に内在する諸限界の内に組み込まれている全ての思考、全ての行為の、そしてそれだけの自由な生産を可能にする。ハビトゥスは構造の所産であるが、その構造はハビトゥスをとおして、機械的決定論の道に従ってではなく、ハビトゥスが行なう発明の始めから割り当てられる制約と限界を通じて実践を統御する。無限でありながら厳格な限界を持った産出能力たるハビトゥスを思考するのに困難を覚えるとすれば、それは、決定論と自由、条件付けと創造性、意識と無意識、個人と社会といったどこにでもある二者択一、ハビトゥスが乗り越えんとする二者択一の虜になっている間だけである。(中略) ハビトゥスが保証する自由、条件づけられ、かつ条件付きの自由は、初期条件付けの機械的な単なる再生産からも、予見できない新奇なもの創造からも、等しくかけ離れたものである。(Bourdieu 1980: 92=2001: 87)

ともすれば「ハビトゥス」は「身体化された構造」として行為者に対して確固たるものとして働きかけるものと捉えられがちであるが、ブルデューはハビトゥスに関して、機械的決定論のもとでの構造とは異なるということを再三主張している。そこで先には「構造化する構造」という表現も用いられていたように、構造決定論でも個人のまったくの自由でもなく、そうした二元論を超え出るところに「ハビトゥス」概念の主眼はある、と言う。

したがって、自分自身に透明な意識作用か、さもなくば外在性において決定される事物かしか知ろうとしない二元論の見方に、行為の現実的論理 (la logique réelle de l'action) を対立させなければならない。行為こそが身体における客観化と制度における客観化という歴史の二つの客観化を、同じことだが、客観化 (objectiver) された資本と身体化 (incorporer) された資本という資本の二状態を対面させる (中略)。

(Bourdieu 1980: 95=2001: 90)

規則に適った即興によって持続的に組み立てられる生成原理であるハビトゥスは、実践感覚 (sens pratique) として、制度のなかに客観化されている意味感覚 (sens) の再

活性化 (*la réactivation*) を行なう。〈中略〉またハビトゥスを介して行為者たちは制度へと客観化された歴史の性質を帯びることになる。〈中略〉ハビトゥスとは、それによって制度が自らの全き現実化 (*réalisation*) を見出す当のものである。

(Bourdieu 1980 : 96=2001 : 91)

ギデンズが「構造化」という概念によって、「構造」に対して行為者による産出の側面を与えようとしたのと同様に、ブルデューもまた「ハビトゥス」の概念によって、「構造」が「社会的実践の論理」の産物であるということを示そうとしている。

2-2-4. 「構成主義」の社会理論としての社会システム理論 (ルーマン)

ルーマンが社会を論じるにあたって主体／客体の区別に依拠しないとするとき、代わりに参照されるのは「構成主義」的な社会理論としての社会的システムの理論である。

ルーマンが「構成主義」(*Konstruktivismus*) という場合、彼が依拠する方法としてのシステム理論とその対象であるシステムの双方 (両者は不可分だが) の自己言及性を指している。方法としてのシステム理論の自己言及性は、別様でもありうる現実の観察を特定の区別 (システム理論ならシステム／環境の区別) から始め、その区別に依拠して以降のすべての理論構築・対象記述を行なう (かつその理論自体もこの枠内で語る) というものである。すべてが自身の採用した区別とそれを用いた観察に基づくという意味で「構成的」である。この理論の対象であるシステムの自己言及性は、システムがあくまで自身の作動によって構成されるとすることによる。したがってルーマンが「システムがある」(*es gibt Systeme*) ということから議論を始めると言うとき (Luhmann 1984: 30=1993: 17)、学的観察者がシステムを構成しているというのではなく、対象としてシステムが存在していることから出発するということを前提している。社会的システム (*soziales System*) に関して言えば、このシステム自体がそれ自身のシステム／環境の区別をとおして独自のリアリティを構築している、と。

つまりルーマンの構成主義は、単に学的な観察や社会的な行為の端緒の恣意性を指摘しているのではなく、「社会のなかで社会について記述する」という営みのもつ自己言及性を扱おうとしている。われわれの営みも社会の一部であるというかぎり、社会はわれわれにとって単なる「客体」でもなければ「主体」でもない、と。ルーマンの社会的システムの理論は、何らかの主体と客体の、個人と社会の、あるいは行為と構造の間の構成的関係を描くものではない。システムを「システム／環境の差異を自身の作動 (*Operation*) によって再生産するもの」と捉え、そのなかで社会的システムを、自身の作動である「コミュニケーション」によって環境との差異を再生産する、つまりコミュニケーションによってコミュニケーションの連鎖を継続するシステムとする。そのなかで個人はあくまで社会的システムにとって環境に属するものとし、また行為や構造も、コミュニケーションのなか

で産み出され割り当てられるものとしている¹²。

このようにルーマンによる主客二元論に代わる試みは、「社会」を「コミュニケーション」の連鎖として捉えることで、主体／客体、個人／社会、行為／構造といった二分法から脱却することにあつた。またその社会は、システム／環境の区別に基づくシステムのひとつとして捉えられている。主客二元論の代わりにコミュニケーションやシステムの一元論を採用しているとも受け取れるが、必ずしもそうではなく、あくまでシステムはシステム／環境という差異に基づき、分析に当たってはさまざまな二項図式が登場する。社会システムのなかでの区別としては、例えば合法／不法、真／非真、といった特定のメディア（法、真理）と結びついた区別も導入される。しかしそれらの区別をつかさどるのはあくまで特定の作動（社会ならばコミュニケーション）であるという点で、構成主義的・自己言及的な理論である。

そのうえで、行為や構造といった旧来の概念を廃棄するのではなく、上記の枠組を中心としてそれらの位置を置き換えている。何が行為で何が構造か、行為や構造が社会のなかでいかに作用するかは、そのつどのコミュニケーションによって規定される。

しかしまた、コミュニケーションの連続性を担保するのが「意味」とそのもとでの「コミュニケーション・メディア」であるとし、また個人の「心的システム」と社会の「社会的システム」は別のシステムであり、たがいはあくまでたがいのシステムの「環境」に属するとしながらも、両者ともに「意味構成的システム」であるとしていることから考えると、ルーマンは個人と社会の間を「意味」（および意味から分岐する、ゼマンティック、構造、コミュニケーション・メディア等々の諸概念）が媒介すると捉えているとも見なしうる¹³。

¹² 特に『社会システム理論』第四章「コミュニケーションと行為」と第五章「システムと環境」（Luhmann 1984: 191-241, 242-285=1993: 214-278, 279-330）を、また「構成主義」に関して『社会の社会』（Luhmann 1997: 154-156, 1119-1120=2009: 166-168, 1448-1449）を参照。

¹³ ルーマンによるコミュニケーション・メディアの理論については、中期までの諸論文（Luhmann 1974 ; 1976a ; 1981b）と、『社会システム理論』第四章「コミュニケーションと行為」の第七節（Luhmann 1984: 216-225=1993: 247-257）、『社会の社会』第二章「コミュニケーション・メディア」（Luhmann 1997: 190-412=2009: 209-474）を参照。またゼマンティック論については、特に『社会構造とゼマンティック』第一巻（Luhmann 1980a=2011）を参照。

3. 小結

以上で見てきたように、「構成主義」的な社会理論は、旧来の対立する立場を媒介する役割を果たしている。例えば、構造主義（機能主義、システム論）と行為論（現象学、実存主義）のあいだで、あるいは理論社会学と知識社会学のあいだで、あるいは概念で示せば、行為 — 構造（システム）、知識 — システム、個人 — 社会のあいだの媒介を行なっている¹⁴。加えてそうした媒介的な視角で、マルクス、ヴェーバー、デュルケーム、パーソンズといった古典の再評価・再解釈も行なわれている¹⁵。

したがって、現代社会学において見られる構成主義的な諸理論は、「構成」ということで、いわゆる構築主義や「脱構築」（デリダ）の言葉でまず想起されるような、既存の諸制度の自明性を解体することにのみ主眼があるというわけではなかった。また二元論批判のうえで俎上に挙げられている旧来の理論をただ批判し放棄するものでもない。むしろそこで対立しているとされた理論同士をつなぎ合わせることで、それぞれに伴われていた難点を克服しようと努めている。そのなかで、脱構築の方向のみならず、構築・構成の仕組みを捉えようとしている。

そして社会現象のなかに「構成」の過程を挿入することで、行為と構造といった対立的に扱われてきた概念の間に媒介概念を打ち立てている。バーガーたちの「知識」、ブルデュエーの「ハビトゥス」、ギデンズの「構造化」、ルーマンの「ゼマンティック」「コミュニケーション

¹⁴ この点を直接言い表したものとして、ジェフリー・アレクサンダーらの「マイクロ・マクロ・リンク」の試みがある（Alexander et al 1987=1998）。「マイクロ・マクロ・リンク」は行為論や相互行為論と、マルクス主義や構造主義・機能主義との対立を、それぞれ行為に志向するマイクロの立場と秩序に志向するマクロの立場への分裂と見て、それを乗り越え両者の架橋を目指す試みである。アレクサンダーは「マイクロ・マクロという二分法」は「分析的な区別」であって、「個人対社会」「行為体秩序」といった「具体的な二分法」に結びつけることは誤りであるとし、「マイクロとマクロのリンケージは分析的な観点からのみ成し遂げることができる」と主張している（Alexander/Giesen 1987: 1=1998: 10）。そして彼らを含めたマイクロ・マクロ・リンクの試みは、そうした分析的な二分法に発する、どちらか一方への「還元をめぐるコンフリクト」から「リンケージの探究」にとって代わるものである、としている（Alexander/Giesen 1987: 2-3=1998: 12）。

¹⁵ マルクスに関しては、人間の「活動」や「実践」を重視する初期の草稿である「フォイエールバッハに関するテーゼ」（Marx 1953=2002）や「経済学・哲学草稿」（Marx 1932=1964）の「発見」と評価、ヴェーバーに関しては、「諒解」（*Einverständnis*）概念への注目（参照、松井 2007）、デュルケームにおける「個人」と「個人主義的道德」の評価（cf. Giddens 1971a; 1971b）、パーソンズに関しては、「努力」（*effort*）や「感情」（*affect*）概念への注目（cf. Alexander 1987; Robertson/Turner ed. 1991=1997）を挙げることができる。また複数の古典理論家に言及しているものとして、Giddens（1971c=1974）、Alexander（1982-1983）も参照。

ョン・メディア」。またルーマンは社会システムの作動をコミュニケーションに一元化することで、行為や構造といった旧来の概念の位置価を置き換えている。

しかし、以上はあくまでこれらの理論に共通する点を取り出しただけであり、これだけであれば良く言えば旧来の理論の偏向の修正、悪く言えば単なる折衷、にとどまる。これ以降の評価については、旧来の理論の批判や活用を除いて、また単なる言葉の変更にとどまらない、彼ら自身の視角ならびに論述にそれぞれ注目していかなければならない。

そこで本稿では、このなかでルーマンの「構成主義」の社会理論を取り上げて、この理論の内実について検討する。しかしその前に、ルーマン以前の社会学における試みを参照する。本章で見たように、ルーマンの「構成主義」には、社会科学方法論としての「構成主義」の構想と、「社会的構成」（社会による構成、社会における構成）を含めた「意味構成」の問題という二つの視点が内在していた。特にこの両者をすでに検討していたのが、現象学的な行為論を提起したアルフレート・シュッツである。次章ではシュッツのその「意味構成」の議論について検討していくこととする。

第二章 構成主義の社会理論の前史——社会的な「構成」 の問題化

1. 社会科学における「構成」の問題化と社会学の根本問題としての「社会はいかにして可能か」

認識の構成主義は、遡ってみれば少なくともカントまで辿ることができる。対象や物の世界ではなく認識を行なう主観の側に基礎づけを求めるという意味でカントはまさに構成主義の先駆けであり、また「神なき時代」の認識論は多かれ少なかれ構成主義的たらざるをえないとも言える。しかし、日本語で「構築」と訳されるような今日的な construction (Konstruktion) の用法は 20 世紀後半になって確立されたものであり、発端は 20 世紀転換期の新カント派の認識論にある。

「社会的なものの構成」に関して言えば、他の何ものかに拠らずに社会的なものそれ自体が独自の様式で成立していることを追求するという点で、ある意味では社会学という分野が成立するとき以来の課題でもある¹。

特にゲオルク・ジンメルは『社会学』(1908) 所収の論考「社会はいかにして可能かの問題についての補説」のなかで、他ならぬカントの「自然はいかにして可能か」の問いに続けて「社会」がいかに可能となっているかを論じている。カントの問いでは、自然の統一は表象における統一として観察を行なう主体に属するとされている一方で、ジンメルは社会の統一がそこに関与しない外部の観察者や主体を必要としないいわば「客観的」な統一であると言う (Simmel 1992: 43-44=1994: 39)。ただしもちろんジンメルも、個人にとっては社会が表象として現われること、またその「客観的な統一」といっても何か空間的な形象であったりするのではなくあくまで心的なものであるということを描いている。ジンメルは「社会」(Gesellschaft) を「社会化 (Vergesellschaftung) の過程」(また「相互作用」(Wechselwirkung) の過程) と捉え、この社会化の過程の担い手である「社会化したり社会化されたりする意識」がもつ「知識」(Wissen) が社会化の条件であるとしている (Simmel 1992: 47=1994: 42-43)。そのうえで、この「知識の事実としての社会」(die Gesellschaft als eine Wissenstatsache) という意識が生じるためのいわば社会化の「アプリアリ」な「条件」ないし「形式」として、諸個人の (社会的な) 「一般性」と「個別性」の双方、および諸個人と社会との関係としての「召命=職業」を挙げている (Simmel 1992: 47-60=1994: 43-56)²。

構成主義は後に見るように、科学論および社会科学論と密接に関わってくるが、ジンメルの「社会はいかにして可能か」の論考もまた、社会の可能性の条件を問うかたちで社会学の可能性の条件をも問うている³。このことは、ジンメル以降、「秩序問題」を問うパーソ

¹ 現代の構築主義・構成主義と、ジンメルやヴェーバーの議論とのつながりと相違に関しては、廳 (2004) 参照。またここでは省略したが、当然ながらデュルケームの社会理論もまた、この点で言えばすぐれて「社会的なものの構成」について論じた先駆とも言える。

² ジンメルが宗教のアナロジーで個人が社会に占める位置としての「召命=職業」について論じていることに関しては、廳 (2010; 2011) を参照。

³ 例えば、『社会学』の「社会はいかにして可能か」論文直前の記述を参照 (Simmel 1992: 39-41=1994: 35-37)。

ンズやルーマンも共有している⁴。つまり、社会がいかにかに成立するかの問いとしての秩序問題が、そのまま社会学が成立するための問いとなっている⁵。

しかし以上の「社会（秩序）はいかにして可能か」へのアプローチは、のちの「構成主義」の議論で言われることの反面しか表していない。特に「構築」（construction）という用語自体が浮上してくるのは、ジンメルが「アприオリな条件」といった概念で、あるいはパーソンズが「分析的リアリズム」といった言葉を用いて避けた（少なくとも一定の問題関心のもとで限定した）「観察者」の問題に関わってのことである。なぜ「構成」「構築」という概念が社会学のなかで浮上してくるに至ったのかに関しては、社会学における学的な観察者と対象との関係についての問いが背景にある。

本稿では以下で、その過程をシュッツからルーマンに至る流れのなかで捉えていくこととしたい。シュッツは社会科学における「構成」の問題化を承けて、この問題を社会学の基礎づけに導入しようと試みた。ルーマンは隣接諸分野における「構成主義」の流れを撰取して、社会学における構成主義の社会理論を展開した。本章では、社会学における構成主義の前史として、シュッツによる社会的な「構成」に関する議論を見ていく。

⁴ パーソンズによる「秩序問題」（the problem of order）の提起については、『社会的行為の構造』第一部・第三章「行為理論における個人主義的実証主義の歴史的発展の諸段階」の第一節「ホップズと秩序の問題」（Parsons 1968(1): 89-94=1976: 148-156）を参照。

⁵ 特に Luhmann（1981: 195-200=2013: 211-218）を参照。ルーマンは、問題となるのは「社会的秩序はいかにして可能か」という問いに対して正しい答えを与えることではなく、「社会的秩序はいかにして可能か」という問いがいかにしてそのつど「再特定化」されるのかということであるとしている（Luhmann 1981: 273-274=2013: 311-312）。そのうえで、かつての社会理論のように社会を政治や経済の領域に縮減して回答を与える試みは社会学の確立によってすでに過去のものとなったとし、ルーマン自身はこの根本問題に対して複数の理論的視点から「意味」「社会的システムの形成」「社会文化的進化」によって、と答えている（Luhmann 1981: 284-285=2013: 326-327）。またルーマンによるジンメルの「社会はいかにして可能か」の評については Luhmann（1981: 252-258=2013: 286-293）、パーソンズの『社会的行為の構造』の「秩序問題」の評については Luhmann（1981: 258-265=2013: 293-300）を参照。

2. A・シュッツの『社会的世界の意味構成』における多元的な構成

アルフレート・シュッツは生前唯一の単著として『社会的世界の意味構成』(*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, 1932〔以下、『意味構成』])を刊行し、フッサールから取り入れた「自然的態度の構成的現象学」を展開した。そして日常生活を生きる人びとの行為を扱うものとして、人文諸学や社会科学が用いる枠組がいかにか「二次の構成」たらざるをえないかを説いた。ここですべて「構成」と訳した語は、ドイツ語で言えば *Aufbau*, *Konstitution*, *Konstruktion* と原語を異にしている。しかし、これは単に邦訳の問題ではない。シュッツ自身、それぞれ少しずつ意味合いを重ねながら、ときには置き換え可能なものとして、しかし区別されることを前提として用いている。ここには、社会(科)学における多元的な「構成」の議論が含まれている。そしてシュッツがアメリカに渡り英語で活動を続けるなかでもその含意は維持され、社会学ののちの世代における「社会的な構成」に関する議論にも受け継がれている。

そこで本章では『意味構成』に遡り、シュッツが論じた社会的世界と社会科学における「構成」の多元性を明らかにすることを目指す。各概念を適切に理解するため、シュッツの立論の背景をなしている論者の議論も参照する。その論者たちは、いずれも社会科学あるいは人文諸学における「構成」の問題化に関わっている。そしてシュッツの「構成」から、その後の「構築主義」や「構成主義」と呼ばれる立場において用いられる「構成」や「構築」にも含まれる複数の契機を明らかにする。

2-1. 手がかりとしてのシュッツ以後の「構成」——バーガーとルックマン『現実の社会的構成』と、ルックマンによる *Konstitution*/*Konstruktion* の区別

まずシュッツの議論に入るまえに、その後のシュッツ受容にも大きく寄与したピーター・バーガーとトマス・ルックマンの『現実の社会的構成』(*The Social Construction of Reality*, 1966〔以下、『現実構成』])から話を始めたい。この著作はシュッツの社会的世界や生活世界、社会的知識の考察から多くを取り入れており⁶、タイトルもまたシュッツの『意味構成』を倣ったものである⁷。両者を比較するとシュッツが *Aufbau* を用いているのに対して、バー

⁶ 例えば、Berger/Luckmann (1966: vii, 16, 194-195 (Note.1)=2003: iv, 22, 293-294 (註 1)) を参照。

⁷ この著作の独訳版にヘルムート・プレスナーが序文を寄せているが、そのなかでプレスナーはバーガーとルックマンが『『社会的現実』の構成』ではなく「現実の『社会的構成』」としたところに意義がある、と評している。つまり「現実」一般が社会的な性格を帯びていることを主張するものである、と (Plessner 1969: IX)。シュッツの『社会的世界の意味構成』における「意味構成」と、バーガーたちの「社会的構成」、さらにはのちの「構築主義」の議論における社会性の位置づけの違いが想起される。

ガーたちは *construction* を当てている。またバーガーたちのみならず、『意味構成』の英訳版においても、*Aufbau* の訳語として *construction* が用いられている⁸。

このように、邦訳の「構成」のみならず、英語でも *construction* に収斂する傾向がある⁹。『現実構成』はのちの構築主義 (*constructivism* [「構成主義」とも]) の礎のひとつともなった。しかしバーガーと Luckmann は、自分たちもそのきっかけの一端となった構築主義の流行のあと、自分たち自身の立場はあくまでいわゆる構築主義とは異なるものである、と繰り返している¹⁰。さらに、『現実構成』での試みを回顧して、「知識社会学論考という仮面のもとで、人間の世界についてのある古い視角を当時の社会学にあらためて導入すること」と述べ、そこで問うたのは「ある現実が、長きにわたり、世代を超えて広がる人間的な諸活動のなかで生じ、あたかも客観性のようなものを達成するのはいかにしてか」、つまり「何ものが本来は人間的な意識活動と集合的行為をとおして生じたものでありながら、社会上で確立された歴史的な現実として、人間の『第二の自然』となりうるのはいかにしてか」であった、と言う (Luckmann 1999: 17-18)¹¹。そして Luckmann は『現実構成』以降に発展した知見として、「構成」に関する *Konstitution*/*Konstruktion* の区別を提示する¹²。

Luckmann はこの区別を「社会科学とその科学的・哲学的な基礎づけ」にとって重要なものとし、それぞれ (1)「デカルト的な方法」によって「唯一の直接的な明証 (*Evidenz*)」である「自身の意識」へと立ち戻る「現象学的な構成分析 (*Konstitutionsanalyse*) と、(2)「社会での行為によって構築された (*im gesellschaftlichen Handeln konstruiert*) 歴史的・人間的な世界」へと向かう「社会学的な再構築 (*Rekonstruktion*)」が扱うものとする (Luckmann 1999: 17-18)。つまり意識における *Konstitution* と社会的歴史的世界における *Konstruktion*、

⁸ Schutz (1967: xxxv) の訳語表参照。ただし、本文では時折 *structure* や *building up* も用いられている。註 7 も参照。

⁹ *construction* の多義性に関しては、イアン・ハッキングの『何が社会的に構成されるのか』(Hacking 1999=2006) を参照。ハッキングはバーガーと Luckmann の『現実構成』や、そのルーツとしてシュッツに言及しており、さらに論理実証主義の一員としてのカルナップの『論理構成』への言及もある (Hacking 1999: 24-25, 42=2006: 56-58, 102)。また論理的な *construction* に関して、ハッキングも言及しているルイス・W・ベックの「構築と推定的実体」(Beck 1950) を参照。ベックはその論文で、*construction* には *process* 「過程」と *result* 「結果」の二重の含意があることを指摘する (Beck 1950: 74)。ハッキングはそれを承けて、*construction* には *process* と *product* の二つの含意があり、その双方が不可欠の契機をなしている、としている (Hacking 1999: 36-37=2006: 89-92)。「過程」と「結果」の二つの契機という観点では、シュッツによる行為に関する *Handeln* と *Handlung* の区別も想起されるが、シュッツの *Aufbau* に関してもこの両者の契機が不可分に含まれている。

¹⁰ 例えば Luckmann は、「私は構築主義者 (*Konstruktivist*) ではない。少なくとも、構築主義という名で呼ばれるある科学的な流派に属しているという意味での構築主義者ではない」と述べている (Luckmann 1999: 17)。

¹¹ ここで Luckmann は近代科学のなかにこの視角が導入された始まりをヴィーコにあるとし、自分たちがその視角に馴染むようになったのはカール・マルクスの人間学的な著作と、ヘルムート・プレスナーの哲学的人間学をとおしてである、としている。

¹² Luckmann によるこの区別については、Luckmann (2008) も参照。

そしてそれぞれに対する視角を区別する。ルックマン自身が「構築主義」ではないと言うとき、この二つの視角を取り入れていることも一因となっている¹³。

しかしむしろ、ルックマンもこの両者が容易に峻別できるとしているわけではなく、どちらも「歴史的に限定された人間的な構築物 (Konstruktionen)」に向かう別方向からのアプローチであるとし、両者の関係を示すことを試みている¹⁴。本稿ではその点も考慮しつつ、Konstitution と Konstruktion の区別をシュッツの多面的な構成を理解する手がかりとする。

2-2. シュッツにおける三つの「構成」——Aufbau (構層)、Konstitution (構成)、Konstruktion (構築)

ルックマンが『現実構成』以後に取り入れるようになった Konstitution と Konstruktion の区別は、もとを辿ればシュッツにも見出される。しかしシュッツはこの両者に関して、もう少し錯綜しながら、かつ明確に弁別できないところに社会的世界の特性を想定しながら構成について論じている。そこには、人文諸学・社会科学あるいは「精神科学」の対象としての社会的世界の Aufbau の問題がかかわってくる。

『意味構成』で使われているシュッツの用語で、「構成」と訳される語には Aufbau, Konstitution, Konstruktion の三つがある。必ずしも明確に定義されているわけではないが、それぞれ一定の文脈で用いられている。またそれらの相違と関係は、『意味構成』以降のシュッツの諸論考の背後にも見出される。

この章では三つの「構成」を区別するために、さしあたり、Aufbau を「構層」、Konstitution を「構成」、Konstruktion を「構築」と訳す（ただし、シュッツ『社会的世界の意味構成』等、特に著作の邦題が定着している場合は除く）。詳細については各節で記述するが、理由としては Aufbau に「層を重ねること」「複数の層が重なりあってできているもの」の含意があり、また Konstitution と Konstruktion を対比すると、前者のほうがより「本質的」で一次的、後者のほうがより「作為的」で二次的なものと想定されていることに基づく。以下の各節では、それぞれの前提となる他の論者の用法を踏まえ、『意味構成』での三者の内容を追う。

¹³ Schnettler (2003) による解説も参照。

¹⁴ 『現実構成』のなかで彼らが援用しているヘーゲル＝マルクスの言葉を借りれば、バーガーとルックマンは「人びとが社会を作る」という「物象化」の側面のみならず、「社会が人びとを作る」という「疎外」の側面にも注目している。のちの構築主義が強調するのは、前者の「人びとが社会を作る」という「物象化」の側面であり、それへの批判である、と言いうるかもしれない。他面で、構築主義の議論に比べてバーガーたちの議論が社会的な「構成」の面でラディカルさを欠く点はよく指摘されている。例えば、『現実構成』邦訳の訳者あとがき (Berger/Luckmann 1966=2003: 320) を参照。

2-3. Aufbau (構層)

2-3-1. デイルタイの「歴史的世界の構層」とカルナップの「世界の論理的構層」

『意味構成』のタイトルに示されているように、シュッツは「社会的世界」の「意味的」な Aufbau について論じた。こうした何らかの「世界」についての Aufbau という立論を行なった先駆けが、ヴィルヘルム・デイルタイの『精神科学における歴史的世界の構成』(*Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*, 1910〔以下、『歴史構成』〕)である。

デイルタイはこの研究のなかで自然科学と精神科学 (Geisteswissenschaften) を対置させ、両者の「構層」が根幹で異なっていると説く。デイルタイによれば、両者の「構層」は、それぞれの対象である「自然」と「精神」とに応じた仕方で規定される。一方の自然は、これを扱う人間を超越しており、自然科学にとってあくまで「補助的な構築物」(Hilfskonstruktionen) として諸概念を用い、対象として「構築」(konstruieren) することができるにすぎない。よって、自然科学が自然の背後に想定する連関はあくまで「抽象的」である。他方の精神科学の対象である歴史的世界・精神的世界は「理解」(Verstehen) をとおして「体験」(Erleben) することができる。したがって精神科学は「精神的世界」とのあいだに「生の関係」(Lebensverhältnis) をもち、そこで把握される「心的 (seelisch) で歴史的な連関」は、「生き生きとして」(lebendig) いる (Dilthey 1979: 83, 89-90, 118-119=1981: 18, 27, 61-63)。

Aufbau は、直訳すれば auf 「上に」+bauen 「築く」=aufbauen 「積み上げる、築く」の名詞形で、「築くこと (積み重ねる、築き上げること)」「築き上げられたもの (積み重ねられたもの)」を意味する¹⁵。よって Aufbau には「層を重ねること」「複数の層から成るもの」の意味合いがあり本章では「構層」と訳した¹⁶。デイルタイも歴史的世界の Aufbau に関して次のように述べている。

ところで歴史的世界の構層 (Aufbau der geschichtlichen Welt) が行なわれるのは精神諸科学においてである。歴史的世界についての客観的知識 (objektives Wissen) が存在する基礎は、段階をなして (in der Stufenfolge) 自己を拡大する能作としての体験 (Erleben) と理解 (Verstehen) とにあるが、そう存在させる理念的な連関を、私は歴史的世界の構成という比喩的 (bildlich) な表現であらわそう。(Dilthey 1979: 88=1981: 25)

¹⁵ 『意味構成』の訳者佐藤嘉一も、Aufbau のこの含意に注意を配っている (Schütz 2004=2006: 32 [訳者註記])。英訳版も、引用した箇所 “sich aufbauen” が “be built up” と訳されている (Schütz 2004: 89=1967: 9)。

¹⁶ 「構層」は Aufbau の訳語として一般的ではないが、本章では「構成」「構築」との差異化のため「層」を含むこの語を採用した。この語自体は、建築物や化学素材などに「複数の層からなる構造」の意味で使われている (例、「多構層」「二段構層」)。またマルクスの Überbau (「上部構造」) の訳語に、古くは「上層建築」や「上構」の他、「上部構層」とされた例もある (例、杉山 1925: 20)。

ここでは精神科学の対象である歴史的世界の「構層」が、直接的に自身によって「体験」される領域から概念的に把握される対象物に至るまでのさまざまな層からなる連関として示されている。「体験」と「理解」とをこの構成の基層とし、そこから遠近さまざまな精神的ないし歴史的・文化的対象が接続する。その全体を比喩的に指すのが *Aufbau* の語である。

加えて、「世界」の *Aufbau* について論じたものとして、ルドルフ・カルナップの『世界の論理的構成』(*Der logische Aufbau der Welt*, 1928) がある。カルナップは同書の目的を「諸対象と諸概念からなる、認識にとって適切で論理的なひとつ体系 (System)、つまり『構成系』(Konstitutionssystem) を定立すること」とし、この「構成系」によって世界を記述することを試みている。この体系においては、一定の「基礎概念」(Grundbegriffen) が土台となり、他のあらゆる概念がそこから「段階的に導出つまり『構成』(konstituieren)」される、「概念の系統樹」が成り立つ。その意味で、「あらゆる概念が若干の基礎概念からそのように導出することが可能であること」が、ここでカルナップが説く「構成理論 (Konstitutionstheorie) の主要テーゼ」になる (Carnap 1961: 1)。

われわれが「構成系」(Konstitutionssystem) のもとで理解しているのは、あらゆる階層 (Stufe) の対象がそれより低次の階層の対象から構成 (konstituieren) される、そうした諸対象からなる階層的な秩序 (stufenweise Ordnung) である。そのため還元可能性の遷移性ゆえに、構成系のあらゆる対象が間接的に第一階 (erste Stufe) の諸対象から構成 (konstituieren) される。それらの「基礎対象」(Grundgegenstände) が体系の「土台」(Basis) を形成している。(Carnap 1961: 2)

カルナップも *Aufbau* を複数の層からなる構成として捉えており、「論理的構層」は、一定の基礎概念を土台とし、そこへの還元可能性をもつ諸概念との連関をとおして成り立つ論理(学)的な体系を指している¹⁷。カルナップは普通(英語で言えば) construction (constructs)

¹⁷ カルナップは続きで「あらゆる認識の主観的な出発点は体験の内容とそれらの組み合わせのなかにあるにもかかわらず、構成系の構層が示すように、抽象的にかつあらゆる主観にとって同一のものとして把握することのできる、間主観的で客観的な世界へ到達することはなお可能である」と記す (Carnap 1961: 3)。これはカルナップからすればデイルタイ流の「構層」への批判でもあり、反対にシュッツからカルナップに向けて批判される点でもある。

で表される論理的な概念の体系を「構成」(Konstitution)の系として捉えているが¹⁸、心的なものにおける第一次的な構成を Konstitution として、それに対する概念による第二次的な構築を Konstruktion として論じる新カント派の用法に沿っていると思われる¹⁹。カルナップ自身は他方の Konstruktion を、ある構成に対する「虚構的(仮設的)構築」(fiktive Konstruktion)や「追構築」(Nachkonstruktion)として扱っている(Carnap 1961: 137-139)。また、詳細は省略するが、シュッツたちに関わるもうひとつの重要な試みとして、エルンスト・カッシーラーの『シンボル形式の哲学』(1923-1929)の研究がある。本稿の表現で言えば、カッシーラーはシンボル形式による世界の「構層」について、「構築」を交えながら論じている²⁰。

¹⁸ 現にこの著作の英訳では、construction (<konstituieren), construction system, construction theory と訳されている(Carnap 1961=1967: 5)。またカルナップ自身がこの著作の扉書きに、『プリンキピア・マテマティカ』のバートランド・ラッセルのこの一文を引いている。”The supreme maxim in scientific philosophizing is this: Whatever possible, logical constructions are to be substituted for inferred entities” (Carnap: 1961: 1)。

¹⁹ その一員にパウル・ナトルプがいるが、『批判的方法による心理学入門』(1888)のなかでナトルプは、心理学本来の課題を「主観性の再構築(Rekonstruktion)」とし、物理学のような「客観科学」が概念によって統一を創り出す「構築的(konstruktiv)なもの」の対し、心理学は先だってすでに心的に構成されたもの(「カテゴリー構成」(kategoriale Konstitution)とも言う)へと「再構築」によって接近するとする(Natorp 1888: 96-97)。さらにナトルプはフッサールの『イデー』評のなかで、フッサールの「現象学的還元」を自身の「再構築」に類するものと見ている(Natorp 1918: 224ff.)。またカッシーラーは、ディルタイによる精神科学の自律性を体系的に基礎づける試みの先駆に、ナトルプの一般心理学を位置づけている(Cassirer 1925: 281-282)。このように Konstitution と Konstruktion の背後には新カント派の伝統が見出される。当然ながら、それぞれの論者で含意や力点は多かれ少なかれ異なっている。

²⁰ シュッツもカッシーラーのシンボルの研究を踏まえている。「シンボル・現実・社会」(Schutz 1962e=1985b, 特に 1962e: 289-290, 333-334=1985b: 115-116, 169-170)を参照。以下で、『シンボル形式の哲学』のカッシーラーが「構層」と「構築」について論じている箇所をいくつか挙げておく。

ある精神的形式(irgendeine geistige Form)の独自性を確実に規定するためには、何よりもまずその形式をそれに固有の尺度で計ることが必要である。この形式を測定し、その成果を評価するための視点は、外側からその形式に押しつけられてはならないのであり、その形式を形成する働きそのものの独自の基本的法則性から引き出されなければならない。〈中略〉このような意味において、すべての新たな形式はそれぞれ新たな世界「構層」(ein neuer »Aufbau« der Welt)を示している。そしてこの世界「構層」は、特殊な、ただそれだけに妥当する規準によって行なわれる。

(Cassirer 2001: 122=1989: 209)

むしろ、与えられた確固たる統一点としての世界の存在 (Sein) から出発する独断論的考察は、精神の自発性のこうした内的な区別をすべて世界の「本質」(Wesen) についての何らかの普遍的概念に解消し、そうすることによってその区別を消滅させてしまう傾向がある。それは存在の画然とした分割を行なう、——たとえば存在を「内的」現実と「外的」現実分割したり、「心理的」現実と「物理的」現実分割したり、「物」の世界と「表象」の世界とに分割したりする。(中略) 認識批判の進展によって初めて、このような区分と分離を、物そのもののうちに確実に内在している絶対的な規定と考えるべきではなく、認識そのものによって媒介されたものとして理解すべきことが教えられる。認識批判は、特に「主観」と「客観」、「自我」と「世界」という対立概念が認識にとって単純に受け容れられるべきものではなく、認識の前提によって根拠づけられ、その意味が初めて規定されねばならないものだということを教えている。そして知の世界の構層 (Aufbau der Welt des Wissens) においてと同じことが、真に自立的な精神のすべての根本機能についても、何らかの意味で言えるのである。

(Cassirer 2001: 122-123=1989: 209-210)

問いはむしろ次のようなかたちで立てられねばならないのだ——つまり、こうした分け方 [上で見たさまざまな区別] はすべて、まさしく芸術によって、言語によって、また神話によってそのつど共に定められているものなのではないのか、そしてこれらの諸形式のそれぞれが区別の設定に際して異なった観点に立っており、したがって境界線もそれぞれ違ったところに引かねばならないのではないかと。

(Cassirer 2001: 123=1989: 210-211)

いまや思考は、直観の世界 (die Welt der Anschauung) が思考 (der Gedanke) にいわばできあがったものとして対置する諸形象 (Gestaltungen) のもとにとどまっていることはもはやできないのであり、まったく自由に、つまり純粋に自発的に、シンボルの国 (ein Reich der Symbole) を構層 (aufbauen) しなければならない。思考は、おのれの世界の総体を定位し方向づけるための図式を、構築的に (konstruktiv [建築家のように]) 設計するのである。むしろこの図式もまた、単なる思考、つまりまったく「抽象的」な思考の空虚な空間のうちにとどまりうるものではない。つまり、この図式もある足場、ある支えを必要とする——とはいえそれは、この足場や支えをもはや経験的な事物の世界 (die empirischen Dingwelt) から借りてくるのではなく、みずから創り出す (schaffen) のである。(Cassirer 2002: 123=1997:14)

また『シンボル形式の哲学』刊行後、カッシーラーがアメリカに渡って以後に英語で記した『人間』(1944) のなかでも、「想起」や「歴史」、さらには「科学」に関して、それらが人間による「構築的」な作業であり産物であることを述べている。

人間において、われわれは想起 (recollection) を単なる [過去の] 出来事の復帰 (a simple return of an event) や、以前の印象のかすかな像または模写 (a faint image or copy of former impressions) と考えることはできない。それは、単なる反復 (repetition) ではなくて、むしろ過去の再誕生 (a rebirth of the past) であり、創造的および構築的過程 (a creative and constructive process) を含んでいるのである。われわれの過去の経験の個々の素材を取り上げるだけでは十分ではない。われわれはそれを本当に再び集め (re-collect) しなければならず、それらを組織し総合し、また思考の焦点に集合せしめなければならない。このような種類の「想起」(recollection)こそ、記憶に、人間独特の型を与え、動物や有機的生命におけるあらゆる他の現象から区別するのである。

以上のディルタイとカルナップに見たように、彼らにおける何らかの世界の *Aufbau* とは、ある学の体系とその対象となる世界との、基本的な層を土台としたさまざまな層からなる全体としての「構層」であった。そして彼ら以後、何がしかの「世界」の何らかの「構層」を説く著作がいくつも登場していくが²¹、そのうちのひとつがシュッツの「社会的世界」の「意味構層」の試みであった。

(Cassirer 2006: 58=1982: 71-72)

歴史学者の思考が対象に対してもつ関係は、物理学者や博物学者の場合とは全く異なっている。物的対象 (*material objects*) は、科学者の仕事 (*the work of the scientist*) とは独立して存在しているが、歴史的対象 (*historical objects*) は、それらが回想 (*remember*) される限りにおいてのみ、真の存在を示すのである——そして、回想の行為 (*the act of remembrance*) は、不断で連続的なものでなくてはならない。〈中略〉文化の世界をもつために、我々は絶えず歴史的想起によってこれを征服しなおさねばならぬ。しかし、想起はただ再生産の行為 (*the act of reproduction*) だけを意味するものではない。それは新しい知的総合——構築的行為 (*a constructive act*) ——である。

(Cassirer 2006: 199=1982: 265-266)

科学者は自然の諸事実に厳格に服従せずしては、自己の目的に到達することはできない。しかし、この服従は受動的な屈服ではない。すべての偉大な自然科学者たちの仕事——ガリレイ及びニュートン、マックスウェル及びヘルムホルツ、プランク及びアインシュタインの業績——は単なる事実の蒐集 (*fact collecting*) ではなかった。それは理論的な——つまりそれは構築的 (*constructive* [建設的]) なものであることを意味する——仕事であった。この自発性と生産性は、あらゆる人間活動の真の核心をなすものである。それは人間の最高の力であり、同時にそれはわれわれ人間世界の自然の境界 (*the natural boundary of our human world*) を示す。言語において、宗教において、芸術において、科学において、人間はただ自分自身の宇宙を築き (*build up*) うるにすぎぬ。——それは、人間が自己の人間の経験を理解し解釈すること、分節し組織すること、総合し普遍化することを可能ならしめるシンボリックな宇宙 (*a symbolic universe*) である。(Cassirer 2006: 237=1982: 316-317)

²¹ “X *Aufbau* Y *Welt*” と冠された著作はディルタイ以降、複数公刊されている。一例として、心理学の分野ではダーフィット・カツの『触覚的世界の構成』(Katz 1925)、論理学の分野ではカルナップ以降にもニコライ・ハルトマンの『実在的世界の構成——一般カテゴリー提要』(Hartmann 1940) がある。

また、シュッツに先だって「社会的世界」の *Aufbau* について記したものとして、「文化行為」(*Kulturakt*) 論のダーフィット・コイゲンの『科学の時代における社会的世界の構成』(Koigen 1929) がある。コイゲンはこの著作での試みを、「構造社会学」(*Struktursoziologie*) による「社会学的な場の理論」(*soziologische Feldtheorie*) と称し、行為や行為の産物から社会的な作用場 (*soziales Wirkungsfeld*) が成り立つさまを捉えるための、いわば「理念型」的な「社会学的世界像」(*soziologisches Weltbild*) の「構層」を試みている (Koigen 1929: VI)。ちなみにコイゲンは、ここで挙げた語彙にも見られるようにヴェーバーとジンメルの諸概念を踏まえているが、特にジンメルの影響を受けて「文化行為」論を展開した研究として『文化哲学のための諸構想』(Koigen 1910) がある。

2-3-2. シュッツの「社会的世界の意味構層」

ディルタイは「精神科学」における「歴史的」な「世界」の「構層」を、カルナップは「世界」の「論理（学）的」な「構層」を論じたわけであったが、シュッツが論じたのは「社会的」（sozial）な「世界」の「意味的」（sinnhaft）な「構層」である。シュッツが『意味構成』の第一章で述べたこの「構層」についての記述を見ていこう。

社会的世界の構層（Aufbau der Sozialwelt）は、まず社会的世界に生きる者たちにとってひとつの意味的（sinnhaft）な構層である。しかしまた、あらかじめ与えられた社会的世界を解釈する、社会科学にとってもひとつの意味的な構層である。

（Schütz 2004: 89=2006: 31）

シュッツは「構層」に寄せて、まず（1）社会的世界が「意味的」な「構層」をもち、かつ（2）社会的世界が社会学者にとって意味をもつ構層であると同時に、あるいはそれ以前に、社会的世界に生きる人びとにとって意味をもつ構層であることを説く。そして（3）この構層は「さまざまな程度の匿名性」、「体験の遠近」、「たがいに交叉しあう多様な統握の視角（Auffassungsperspektiven）」に応じて「構層されている（sich aufbauen）」とする。『意味構成』では、「われわれ関係」を基層とし、「同時代」や「先代」「後代」の世界までも含めたさまざまな層から成る「構層」が展開される²²。重ねて、われわれが「意味的な世界」として体験する「社会的世界」は、われわれにとってのみならず、「社会科学による解釈の対象としても意味をもつ世界（sinnhafte Welt）」であるが、

科学的な解釈方法は、生き生きとした体験（lebendiges Erleben）のもつ意味連関にではなく、秩序づけを行なう観察（ordnende Betrachtung）のもつ意味連関へこの世界を組み入れる。他ならぬ社会的世界は、私たちと他者との日常生活のなかで構層かつ構成（sich aufbauen und konstituieren）され、社会科学の対象としてはすでに構層かつ構成（aufgebaut und konstituiert sein）されたものである。したがって社会的世界の意味についてのあらゆる科学は、社会的世界における生の意味的な諸作用（sinnhafte Akte des Lebens）へ、私たちのもつ他の人間についての日常的な経験、あらかじめ与えられた意味についての理解、そして新しい有意味な行動の措定へと遡って参照している。（Schütz 2004: 89-90=2006: 32）

²² シュッツの表現を用いれば、「社会的世界」（Sozialwelt）は対面する我と汝の「われわれ関係」からなる「環境世界」（Umwelt）を基層とし、そこから派生する「同時代世界」（Mitwelt）、「前代世界」（Vorwelt）、「後代世界」（Nachwelt）すべてを含めて成り立っている。いわば人格的な階層構造が措定されており、マックス・シェーラーや哲学的人間学の系譜の環境論と人格論が想起される。シェーラーによる社会的世界の階層構造の想定に関しては、例えば『知識形態と社会』（1926）所収「知の社会学の諸問題」（Scheler 1980: 57=2002: 79-80）を参照。

社会的世界を研究する観察者は、あくまで観察者たちの意味連関に即し、直接に体験するわけではないながら、社会的世界における生き生きとした体験の理解へと遡らなければならない、とシュッツは主張する。このような社会的世界の「意味構層」とそれを扱う社会科学のあり方が『社会的世界の意味構成』の骨子となっている。

シュッツは『意味構成』のなかで『歴史構成』を参照指示はしているが、積極的にディルタイの構想とのつながりを述べているわけではない (Schütz 2004: 91 (Anm.6)=2006: 33 (註6))。しかし、シュッツにも精神科学与自然科学のそれぞれの構層の違い、その要としての「体験」の理解は踏まえられており、社会科学とその対象としての社会的世界の構層の特殊性を論じている。この対象は社会学者たち以前に社会的世界に生きる人びとにとって意味をもっており、その体験への遡行が必要である、と。他方でシュッツは、ディルタイが精神科学における体験の「理解」を合理的な科学の手続きとは相反する非合理的なものと論じたのとは異なり、ヴェーバーが示したような社会科学における「理解」はこれもまたひとつの合理的な手続きでありうると批判する (Schütz 2004: 428-429=2006: 358)。ここがシュッツとディルタイの分かれる点となる。シュッツは社会的世界における直接的な体験と社会科学における観察には一定の差があり、その反面で自然科学と社会科学とのあいだには方法の合理性を目指す点では必ずしも違いがないと説く。そこでまさに導入されるのが、ヴェーバーらによって発展された社会科学における概念の「構築」(Konstruktion)であった²³。しかしその前に、意味の「構層」に関わるもうひとつの構成が Konstitution である。

2-4. Konstitution (構成)

2-4-1. フッサールの「意味の構成」とその分析

『意味構成』はまずヴェーバーの「社会的行為」の概念に定位することから論を始め、そこで曖昧となっている「意味」概念を基礎づけるためにフッサールの現象学で提起された意味の「構成」分析を導入する (Schütz 2004: 93-94=2006: 35-36)²⁴。『意味構成』は特に

²³ 『意味構成』のシュッツは、カルナップが外的事象たる物理的・身体的現象が所与である一方他者の心理的内容は知りえない——その手の「本質問題」(Wesensproblem)を立てるのは科学ではなく形而上学である、とシュッツが参照指示した箇所では述べている (Carnap 1961: 25-26) ——とするのに対し、そう説くカルナップの形式論理自体が他者の心の領域を前提とした間主観的妥当性を想定していると批判する (Schütz 2004: 102-103 (32)=2006: 45 (註32))。

²⁴ シュッツは「意味」の基礎づけのために、フッサールの他にベルクソンに負うところも大きいのであるが、本稿では「構成」(Konstitution) という用語系に関わるものとしてフッ

フッサールの『内的時間意識の現象学』講義 (Husserl 1966=1967) における時間意識の分析を参照しているが、本稿では併せてより広く「意味」の構成を扱っているフッサール後期の著作にも注目する。

フッサールにおける「構成」は、さしあたり意味的な「何らかの志向的対象の構成 (Konstitution)」を示す (Husserl 1950b: 91=2001: 105)²⁵。フッサールの構成分析は、世界を「意味の統一」として扱い、そこでさまざまな志向的対象がいかに構成されているかを問う²⁶。そのうちに、「意味の統一」を可能にしている「意味付与を行なう意識」(sinngabendes Bewußtsein) が見出される (Husserl 1950a: 106=1979: 238)。そして意識は、内部で時間を構成する²⁷。一般に「時間」は、「構成する流れ」としての意識の流れのもとで「構成された統一体」である (Husserl 1966: 73-74=1967: 96-98)。

しかし現象学的な分析を続行し、「現象学的還元」のもとで「世界」を「構成された意味 (konstituierter Sinn)」として眺めると、志向的対象のみならずそれを構成する自己もまた構成されたものであること、つまり対象を構成する自我の構成を「超越論的主観性」が可能にしていることがわかる (Husserl 1950b: 165=2001: 245)。さらにフッサールはこの超越論的主観性を、孤独な自我としてではなく「世界を共に構成 (mitkonstituieren)」する「間主観性」のもとで捉える (Husserl 1954: 190=1995: 339)²⁸。フッサールはこうした「構成」を、ひとつの「アプリアリ」と述べる。

〔「超越論的還元」によって〕この超越論的な自我 (Ego) は、自らのうちで世界を経

サールに注目する。

²⁵ フッサールによる Konstitution の語の導入は、ナトルプに影響を受けたものとされる (Sokolowski 1964: 214-217)。

²⁶ 例えば、『イデー』の第2巻「構成についての現象学的研究」(Husserl 1952=2001-2009)を参照。

²⁷ 『内的時間意識の現象学』(Husserl 1966=1967)、特に第三章「時間および時間客観の構成の諸段階」(Husserl 1966: 73-98=1967: 96-128)を参照。加えて、1930年代のフッサールは——『デカルト的省察』の書き直し、ハイデガー『存在と時間』との対峙、「生き生きとした現在」の浮上などを背景として——心的対象としての時間ではなく、これを構成する側の意識にとって本質的な時間、いわば前時間的な時間について問う「時間の時間化」(Zeitigung der Zeit)に取り組んでいた。『間主観性の現象学について——遺稿集 第三巻 1929-1935年』に所収の諸草稿、例えばC草稿1「時間化——モナド」(Husserl 1973: 666-670)や、編者イゾ・ケルンによる序文 (Husserl 1973: XV-LXX)を参照。また、これらの草稿を早くから研究し、後期フッサールの時間論を論じているものとして、ゲルト・ブランド『世界・自我・時間』(Brand 1955=1982)やクラウス・ヘルト『生き生きとした現在』(Held 1966=1988)がある。

²⁸ ここでフッサールは「超越論的間主観性」や「超越論的共同化 (Vergemeinschaftung)」を持ち出しているが、この「間主観性」や「共同化」をより高次の統一的人格として捉えようとするフッサールの傾向に対してシュッツは度々批判する。Schutz (1966a: 36-39=1998a: 80-84; 1966b: 82=1998b: 136) のフッサール批判の項を参照。

験しつつ、世界を調和のうちに確認するものとして捉えられた。そのような構成 (Konstitution) の本質と自我論的段階を負いながら、まったく新しいアプリアリが、まさに構成 (Konstitution) というアプリアリがはっきり見えるようになった。一方で、自我について自分自身で、そしてその原初的で固有本質的なものなかで行なわれる自我の自己構成 (Selbstkonstitution des Ego) と、他方で、この固有で本質的なものという源泉からさまざまな段階で行なわれる、あらゆる他なるものの構成 (Konstitution aller Fremdheiten) という、これら二つのことが別のものであることを学んだ。そこから帰結したのは、私固有の自我において行なわれる構成の全体 (Gesamtkonstitution) が、その本質的形式においては普遍的な統一をもつということであった。そして、その構成全体の相関者として、客観的に存在する世界は、私にとっても自我一般にとっても、絶えずあらかじめ与えられたものであり、意味のさまざまな層をもって形成され続ける。と言っても、これは相関者でアプリアリな様式においての話だが。そして、この構成 (Konstitution) そのものが、ひとつのアプリアリなのである。

(Husserl 1950b: 164=2001: 243-244)

フッサールはこのように、意識と意味、そして意味における意識と志向的対象 (とその総体としての世界) の結びつきを「構成」として論じる。特に時間に関して、より根源的な意識は時間を「構成する流れ」であるとしている。しかしまた、フッサールのこの「構成」自体が問題含みともされる。のちにオイゲン・フィンクは、フッサールの「構成」をそれ自体が主題化されていない「操作的概念」であり、特に「産出」(Erzeugen) と「受容的な認知」(rezeptives Vernehmen) の二義のあいだを揺れ動いていると指摘した (Fink 1976: 201=1978: 41)²⁹。シュッツもこの「構成」の問題は認識しており、やがて特に「間主観性」の「構成」に関して反対するようになる。『意味構成』でもシュッツは、第一章の註記で「世界内的な社会性」(mundane Sozialität) の意味現象を分析するにはフッサールの言う「超越論的」な現象学的還元によって「超越論的」な主観性・間主観性に向かう必要はなく、あくまで「自然的態度の構成的現象学 (konstitutive Phänomenologie)」にとどまるとしている (Schütz 2004: 129-130=2006: 74-75)。しかしそう補足したうえで、フッサールが提起した「内の時間意識」と結びつく意味の「構成」分析を取り入れていく³⁰。

なお、シュッツと同じくフッサールから影響を受けたマックス・シェーラーは、「知の社会学の諸問題」(1924) のなかで「知 (Wissen) の形式」と「社会 (Gesellschaft) の構造」

²⁹ この提起があった「国際現象学会議」(ロワイヨモン、パリ、1957) にはシュッツも参加しており、自身の論文でフィンクの報告を紹介している (Schütz 1966c: 92=1998c: 157)。他にフィンクによる「構成」の問題の指摘を承けた研究としては、Landgrebe (1974=1978) も参照。またフッサールにおける「構成」概念の発展については、Sokolowski (1964)、Zahavi (2003: 72-77=2003: 109-117) を参照。

³⁰ シュッツにおけるフッサールの位置づけについては、Schütz (2011=1999) も参照。

とが「共に構成する」(mitkonstituieren) 関係にあることを説いている。

まずもって、知の社会学 (Soziologie des Wissens) をして、一方で認識論および論理学との、他方で発達心理学とのきわめて密接な関係の内に立たせるところの形式的問題群がある。これら諸問題はすべて、知 (Wissen) が社会 (Gesellschaft) に対して有するところの可能的な三つの根本的關係に基づいている。すなわち、第一に、何らかのある集団の成員のおたがいについての知、および成員の相互「理解」(Verstehen) の可能性は、ある社会集団に付け加わってくる何かあるものなのではなく、「人間社会」という対象を共に構成している (mitkonstituieren) 何かあるものなのである。〈中略〉第二に、あらゆる知、とりわけ同一対象についての共通な知はすべて、何らかの仕方での社会の相在を可能なあらゆる点において規定している。第三に、しかしながら、すべての知は逆にまた社会および社会の構造によって規定されてもいる。

(Scheler 1980: 52=2002: 71-72)

シェーラーによれば、社会の成員がもつ「知」や成員どうしの相互的な「理解」(Verstehen) は、社会にとって付随的なものではなくむしろ社会を構成するものである。ただし「知」が「社会」とその構造を規定する一方、反対に「知」もまた「社会」とその構造によって規定されているとシェーラーは言う。シェーラーは「共制約」(mitbedingt) という表現も用い、「社会」が一方向的に「知」を規定するとする立場を「社会学主義」、その正反対の立場を「心理学主義」としてどちらも斥けている (Scheler 1980: 58=2002: 80-82)。この視点はシュッツの知識論や、それを踏まえたバーガーとLuckmannの知識社会学にも受け継がれている。彼らはシェーラーの説く内容自体には批判を加えているが³¹、例えばバーガーとLuckmannの言う「知識」を介した「個人と社会の弁証法」(Berger/Luckmann 1966: 186=2003: 282) という発想にもシェーラーの議論とのつながりを見ることができる³²。

2-4-2. シュッツの「意味と行為の構成」

フッサールの論じた意識による意味の「構成」の鍵は、意識が時間を産み出す働きにある。シュッツがフッサールの「構成」分析から取り入れたのもこの観点である。シュッツはフッサールの内的時間意識についての現象学 (およびベルクソンの持続についての分析)

³¹ ただし『意味構成』はシェーラーのこの論文所収の『知識形態と社会』を参照しているが、全体社会とその構造の議論には触れていない。バーガーたちに関しては、『現実構成』の序論「知識社会学の問題」(Berger/Luckmann 1966: 1-18=2003: 1-26) でのシェーラーへの記述を参照。

³² シェーラーが上に引用した箇所「階級意識なき階級はありえない」(Scheler 1980: 52=2002: 72) と付しているように、ここには知識社会学における、マルクスの受容とマルクス主義的な経済的土台から上部構造への「反映」を説く立場への批判の双方がある (cf. Berger/Luckmann 1966: 6-7=2003: 8-9)。

を受け、意味と行為、さらには意識における体験と意味との関係を「構成」として扱っている。

いわゆる行為 (*das Handeln*) に結びつけられる意味 (*Sinn*) とは、自己の体験への注意の特殊な仕方に他ならず、これが最初に行為を構成 (*konstituieren*) するのである。

したがって意味的な行為 (*sinnhaftes Handeln*) についての私たちの分析は、内的時間意識における体験の意味の構成 (*Konstitution*) の問題へと還元される。

(Schütz 2004 : 128=2006: 72)

この前提をもとに、シュッツはヴェーバーの言う「主観的に思念された意味」(*subjektiv gemeinter Sinn*) の分析へと向かうのであるが、そこで示されるのは「思念された意味」が「本質的に主観的」で「原理的には体験者による自己解釈 (*Selbstausslegung*) に結びついて」おり、したがって「思念された意味」は「もっぱらそれぞれの私の意識流の内部で構成される (*sich konstituieren*)」ものであって「それぞれの汝には接近できない」ものである、ということであった (Schütz 2004: 222=2006: 158)。

シュッツは「意味」を「反省」によって付与されるものと捉え、「反省のまなざし」が「意味的な体験を構成する」とした (Schütz 2004 : 172-173=2006: 113-115)。間断ない意識流の持続のなかから反省が、ある体験を意味的な体験として際立たせる。そうしてシュッツは「意味」の問題を「時間」の問題と捉え、体験者による意味の「構成」、つまり体験者の意識と彼の体験の意味との本質的な結びつきを論じた。

このような意味と行為との「構成」の関係は、一見すると行為者自身にとっては積極的に、しかしそれを観察する社会学者にとっては否定的に働く。つまりヴェーバーの言う「主観的に思念された意味」は、自我の意識において「構成」されるものであるため、他者にとっては直接に接近することができないものではないか、と。つまり、

この結論からは、理解社会学の可能性のみならず、他者の心自体の理解可能性までもが否定されてしまうかのように見える。しかし決してそのとおりでない。「自我」(*ego*) にとって他我 (*alter ego*) の体験が原理的に接近できないものであり続けるということが主張されているわけでもなければ、他我の体験へと注意を向ける自我にとって他我の体験が無意味 (*sinnlos*) なものであるということが主張されているわけでもない。私たちのこれまでの考察で明らかになったことはむしろ、他者の体験に付与される意味は、他我の意識のなかで〔他我による〕自己解釈の過程をとおして構成される (*sich konstituieren*) 思念された意味ではありえない、ということのみである。

(Schütz 2004: 222=2006: 158-159)

ここからシュッツは、ひとつには「われわれ関係」、つまり対面関係にあって時間的かつ

空間的に共在（「同時」に「居合わせること」）する我と汝との関係と、そのもとでの他者の「付帯現前」（Appräsentation）の議論に移る³³。しかし本稿で注目するのは、そこから派生して他者の行為を「理解」するために特に導入される、もうひとつの構成である理念的・類型的な「構築」（Konstruktion）である。

2-5. Konstruktion（構築）

2-5-1. ヴェーバーの「理念型の構築」

シュッツは『意味構成』のなかで、もうひとつの構成としてマックス・ヴェーバーが社会科学方法論のなかで提起した概念「構築」の技術、理念型の「構築」を取り入れた。

ヴェーバーの「理念型」は、社会科学の諸概念の抽象性・観念性を指して「理念」（Ideal〔「理想」〕）³⁴と冠されているが、これは科学の目的のために「構築」されるものである。Konstruktionは数学や論理学では「作図」や「概念構築」の意味で使われており、Konstitutionと比べればより理念的で作為的な含意がある³⁵。

「社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』」（1904）でヴェーバーは理念型について規定しているが、これが現実そのものを写すものではなく「構築物」であるからこそ、文化科学ないし社会科学も客観的で合理的な科学たりうると主張する。この論文でヴェー

³³ シュッツはのちに「間主観性」が「構成」によるものではなく「所与」である、といったことを述べるが、『意味構成』の前半部にあたる自我論的な意味の構成分析（第二章）と、後半部にあたる他者論と社会的世界論（第三章、第四章）とのあいだに間隙があることはよく指摘されている。その分裂を理論的な面から指摘したものとして、例えば Waldenfels（1980: 210-211, 221 (Anm.14)=1987: 280-283, 296 (註 14)）、廣松（1991: 150-157, 184-192）を参照。ヴァルデンフェルスも廣松もともに、そのうえでシュッツがなお自我論的傾向を保っていることを批判する（Waldenfels 1980: 211-212=1987: 283；廣松 1991: 150-157, 184-192）。廣松はこの分裂に関して、『意味構成』が12年かけて成ったものであること、そのうちでヘルムート・R・ワグナーの言うシュッツの「ベルクソン時代」とフッサール時代に構築された部分に差があること、加えてその著作の校正中にフッサールの『デカルト的省察』仏語版（1931）が公刊されたこと、を一因として挙げている。『意味構成』の成立の契機に関しては、全集版の編者序文（Schütz 2004: 10-13）など、またその「ベルクソン時代」については、Wagner/Srubar（1984）、Langsdorf（1985）、森（1995）、Barber（2004: 31-39）を参照。

³⁴ カントによる「理念」（Idee）と「理想」（Ideal）の区別が踏まえられている。『純粹理性批判』第二部・第二冊「超越論的弁証論」の「純粹理性の理想」の章、特に第一節「理想一般について」（Kritik der reinen Vernunft, B 版, 595-599）を参照。そこでカントは例として、徳や知恵（Weisheit）が「理念」（Idee）だとすれば、それを備えた「賢者」（der Weise）は「理想」（Ideal）であるとしている。「理念」が人間の規定に対して「規則」（Regel）を与えるものであるとすれば、「理想」は「原型」（Urbild）を与えるものである、とも記している。

³⁵ カントも Konstruktion で幾何学的な「作図」や概念「構築」を指すが、「作為的」の含意は薄くむしろ認識のモデルとして数学を頂点に置いている。他方フッサールやカルナップでは Konstruktion がより作為的なものとして扱われている。

バーは、経済理論を例にとつてこう述べる。経済理論が提供するものは、自由競争・合理的取引のもとでの財貨市場のひとつの「理想像」(Idealbild)である。これは「歴史的な生活の特定の関係と事象とを結びつけ、考えられる連関の、それ自体として矛盾のない宇宙(コスモス)」をなす「思考像」(Gedankenbild)であり、「現実の特定の要素を、思考のうえで高められてえられる、ひとつのユートピア」である(Weber 1982a: 190=1998: 111-112)。わけても、

この構築物(Konstruktion)と経験的に与えられた生の事実(empirisch gegebene Tatsachen des Lebens)との関係は、もっぱら次の点にある。すなわち、その構築物(Konstruktion)において抽象的に描かれている種類の、つまり「市場」に依存する事象の連関が、現実のなかである程度働いていると確定または推定される場合、われわれはその連関の特性を、ひとつの理想型(ein Idealtypus)に照らして実践的に直観可能なものとし、理解可能なものとすることができる。この可能性は[そうした特性の]索出手段として(heuristisch)も、また価値の描出にとつても、なお不可欠なものでありうる。(Weber 1982a: 190=1998: 112)

つまり「理想型」(Idealtypus)は、そこで抽象的に描かれた事象の連関が「現実のなかである程度働いている」と推定される場合に、その特性を「実践的に直観可能」「理解可能」なものとし、そのかぎり「経験的に与えられた生の事実」と関係を保つ。そしてこうした「理想型的な概念」(idealtypischer Begriff)は、「仮説形成」(Hypothesenbildung)に方向を与え、現実の叙述に一義的な表現手段を与える。そのために、個々の現象を網羅するものでもなければそれらの平均でもなく、それらについての二、三の観点を一面的に高め、ひとつの思考像へと結合させたものが理想型である。そうしてヴェーバーは経験科学における「理想型」の意義を、「模範的」という意味での「理想」にではなく、「われわれの想像力にとつて、十分な動機を備えていると思われ、それゆえ『客観的に可能』で、われわれの法則的知識に照らして適合的(adäquat)と見える、そうした連関の構築(Konstruktion)」にあると強調する(Weber 1982a: 190-192=1998: 111-116)。つまり、

理想型は、ひとつの思考像であつて、この思考像は、そのまま歴史的な現実であるのでもなければ、まして「本来」(eigentlich)の現実であるわけでもなく、いわんや現実が具体例として編入されるべき、ひとつの図式として役立つものでもない。理想型はむしろ、純然たる理想上の極限概念(Grenzbegriff)であることに意義のあるものであり、われわれは、この極限概念を規準として、現実を測定し、比較し、それをもつて現実の経験的内容のうち、特定の意義ある構成部分を、明瞭に浮き彫りにするのである。こうした概念は、現実の依拠して訓練されたわれわれの想像力が適合的(adäquat)と判定する、客観的可能性のカテゴリーを用いて、われわれが連関として構築

(konstruieren) する形象 (Gebilde) に他ならない。(Weber 1982a : 194=1998: 119-120)

このように「理念型」は「構築物」として、経験的・歴史的な経過に対する「索出手段」(heuristisches Mittel) の役を果たす (Weber 1982a: 203=1998: 138)。

以上がヴェーバーの理念型の概要であったが、『意味構成』のシュッツは一方ではヴェーバーの「客観性」論文における理念型の仮設的性格を批判し、他方で「社会学の基礎概念」(1921) に範があるとする理念型の用法を採用する (Schütz 2004 : 432=2006: 362)。いわば、「主観的に思念された意味」と関わる理念型である³⁶。

2-5-2. シュッツの「二次の理念型の構築」と「意味の構成」との連携

ヴェーバーによれば、社会科学では他者の行為とその意味とを直接的に体験することが不可能であることから、「理念型」を「構築」することがひとつの合理的な手段となる。しかし他方で、この「構築物」が行為者の行為や意味と何らかのかたちで関わることがなければ、それでもって他者とその行為を「理解」することはできない、とシュッツは考える。

そこでシュッツが注目するのは、社会的世界に生きる行為者たち自身もその世界のなかで他者を観察するにあたって理念型を用いているということである。そうした事態は特に、対面関係にない同時代の人びとや、前代や後代の人びとに対するにあたってより顕著となる。例えばその理念型は、他者のある類型のなかで把握する「人格の理念型」(personaler Idealtypus) のかたちをとる。「人格の理念型の構築」(konstruieren) の技術は、「あらかじめ実質的 (material) な理念型として措定」され「不変的で一定なものとして経験される諸々の行為経過 (Handlungsabläufe) が動機の意味連関のなかで表している」「そうした主体を構築 (konstruieren)」することのうちにある。「観察を行なっている自我 (Ich)」に対して、「類

³⁶ 「客観性」論文に記されているようなヴェーバーの「理念型」の解説と分析としては、Schelting (1922=1977) の研究を参照。そして「客観性」論文以降、シュッツが参照する「主観的に思念された意味」と結びつく「構築」に関しては、「社会学の基礎概念」(1921) での「行為」概念の規定 (Weber 1982b: 542=1987: 7) を参照。またそれより前に、「客観性」論文以後に「理念型」とその構築について述べられているものとして、「理解社会学の若干のカテゴリーについて」(1913) がある。そこでは例えば、以下のように記されている。

合理的に解明しうる行動 (rational deutbares Verhalten) は、理解可能 (verständlich) な諸連関を社会的に分析するに際して、しばしばもっともふさわしい「理念型」を形成している。社会学は歴史学と同様に、さしあたっては「実践的」(pragmatisch) に、つまり行為 (Handeln) の合理的に理解可能な諸連関から、解明 (deuten) を行なう。例えば社会経済学は、そのような仕方では「経済人」(Wirtschaftsmenschen) という合理的な構築物 (rationale Konstruktion) を取り扱う。

しかし一般的には、理解社会学も同じである。というのは、われわれにとって理解社会学に特有の客体と見なされるのは、任意の種類の内面的状態 (innere Lage) や外的行動 (äußeres Verhalten) ではなく、行為 (Handeln) だからである。

(Weber 1982c: 429=1968: 15-16)

型的なものとして定められた他者 (fremd) の行為経過」は「客観的な意味連関」のなかで「統一として呈示される」が、この「人格の理想型の意識のなかで主観的な意味連関へと逆変換される」(Schütz 2004: 351=2006: 284-285)。

そして社会的世界の行為者たち自身が理想型を用いているとすれば、それを観察する者、ひいては社会学者たちが用いる理想型は、「行為者もまた同時代世界の観察者にとってはひとつの理想型」であるがゆえに、行為者の用いる理想型についての理想型、いわば「二次の理想型 (Idealtypus zweiter Ordnung)」となる (Schütz 2004: 374=2006: 309)。

社会学者もまた主観的な意味連関を把握するためには理想型を構築 (konstruieren) しなければならない。この理想型は科学的な経験の連関全体と両立しうるのみならず、さらにそれらの主観的な意味連関とともに、「動機づけられた」つまり十分に根拠づけられた意味連関のうち位置するものでなければならない。したがって社会的世界の理想型は、社会科学のなかで、一方ではこの科学の経験的な事実とつねに矛盾することがなく、他方では根拠づけられ十分に動機づけられた意味連関の導出について今しがた提起した公準を満たすように構築 (konstruieren) されなければならない。あるいは、ヴェーバーの言葉で述べれば、社会科学、とりわけ理解社会学が形成 (bilden) する理想型は、同時に因果適合的 (kausaladäquat) かつ意味適合的 (sinnadäquat) なものでなければならない、ということである。(Schütz 2004: 407=2006: 335-336)

そして「理想型の構築」(idealtypische Konstruktion) において、「環境世界 (Umwelt) のなかでは自己所有のかたちで経験可能な主観的な意味連関」が、同時代世界や先代世界へ移行するに従って「相互に段階づけられ相互に入り組んでいる客観的な意味連関からなる体系へと漸次的に置き換えられていく」。しかし、「こうした理想型の構築」こそが「意味測定を行なった者に対して意味内容が産出される構成過程 (Konstitutionprozesse) の把握」を可能にする。この過程の意味内容は「解釈者」や「社会科学」にとって「すでに構成 (konstituieren) されたある対象の客観的な意味としてあらかじめ与えられて」おり、「生き生きとした志向作用のなか」や「前述語的」、「生き生きとした持続」に基づいて行なわれるわけではないが、もっぱら「人格の理想型」に基づき、「述語的」に、そして「段階的な判断のなかで説明的に」行なわれる (Schütz 2004 : 430=2006: 359-360)。

つまりシュッツは、理想型「構築」による意味「構成」の把握を目指す。しかも社会的世界に生きる人びと自身が他者の把握において理想型を用いており、したがって社会科学における理想型「構築」が行為者が用いる構築に対する「二次の構築」であり、この「二次の構築」が行為者の意味「構成」と関係を保ち何らかの仕方でそこへと遡ることができるかぎり、初めて「理解」社会学たりえると説くのである。

3. 小結

以上、シュッツにおける三つの構成に関わる概念を見てきた。まず **Aufbau** 「構層」は、社会的世界の階層的な構造とその成り立ちを、**Konstitution** 「構成」は意識（とそこでの体験）と意味、そして意味と行為との関係を、そして **Konstruktion** 「構築」は社会科学における抽象的概念（理念型）とその形成を示すものであった。

しかしシュッツの主張の眼目はそこにとどまらない。そもそも行為者自身が「構築」を用いるということ、つまり行為者による意味「構成」のうちに、他者の理念型「構築」が含み込まれているということ、他方で社会学者から見れば、自身による「構築」の向こう側に、行為者自身による「構築」があり、それをとおしてのみそこに控える行為者の「構成」に近づくことができるということ、を説くものであった。これらすべてを含めて、社会的世界の意味的で多人格的な「構層」は成り立っている。かくしてシュッツは、社会科学とその対象たる社会的世界の意味的な **Aufbau** がもつ特性を、社会学者の **Konstruktion** による行為者の **Konstruktion** を介した **Konstitution** の理解という二重の「構築」と「構成」の関わりのうちに見る³⁷。別の角度から言えば、行為者における意味の「構成」を措定することで、社会学者による「構築」と行為者による「構築」とを距離化したうえで相互に関連づけている。

『意味構成』以後、そしてアメリカに渡ってからシュッツは、使用言語をドイツ語から英語に変えながら、とりわけ **Konstruktion** の項で扱った社会科学の方法論を継続的に研究し発展させている。しかしシュッツのアメリカ時代の著作を見ても、またタルコット・パーソンズとの往復書簡のうちでも、シュッツにおいてこれら三つの構成の入り組んだ規定関係は、背景として維持されている³⁸。それらにおいて展開されているシュッツの社会科学方法論を理解するためにも、『意味構成』で行なわれた **Aufbau**, **Konstitution**, **Konstruktion** の関係を把握しておくことは不可欠である。またバーガーたちの『現実構成』でも、シュッツの多元的な構成が **construction** へと収斂して受け継がれている。そして今日の「構築主義」における「構築」にも、社会的世界の成り立ち、人びとと意味との関係、社会科学方法論

³⁷ アーロン・ギルヴィッチはシュッツによる「二次の構築」の議論を、20世紀の世紀転換期にドイツ語圏で取り組まれた社会科学・人文諸学の哲学的基礎づけの試みの伝統のうねに置き、特にディルタイのそれと近づけている (Gurwitsch 1966: XXIX-XXXI=1998: 31-33)。また「間主観性」をめぐるギルヴィッチとシュッツの対話については、Schütz/Gurwitsch (1985=1996)、Vaitkus (1991=1996) を参照。

³⁸ 社会科学の「構築物」(constructs [構成概念]) と日常生活に生きる人びとの「常識的思考」の「構築物」との関係は、特に「人間的行為の常識的解釈と科学的解釈」(1953) (Schütz 1962a=1983a) を、また「社会科学における概念形成と理論形成」(1953) (Schütz 1962b=1983b) および「平等と社会的世界の構造」(1955) (Schütz 1964c=1991c) も参照。

ちなみにシュッツは、社会的世界の **Aufbau** に対応する英語としてもとより **structure** 「構造」の語も用いていたが、後年になると **structurize** 「構造化」の語も用いるようになる。後述の「社会的世界の意味構造」(1958) (Schütz 2010) やルックマン編の『生活世界の諸構造』(1975) (Schütz/Luckmann 2003) も参照のこと。

という複数の契機が入り込んでおり、また社会的な「構築」と科学者による「構築」との関わりがひとつの論点ともなっている³⁹。わけても「二次の構築」の議論は、ギデンズの言う「二重の解釈学」やルーマンの言う「二次の観察」とも連続性をもつ⁴⁰。シュッツが取り組んだ構成の問題は、なお考えられるべき問いであり続けている。

しかしまた、シュッツの多元的な「構成」において、のちの構成主義の社会理論から見ると、また他の社会学の理論から見ると、論じきられていない部分がある。それは、初めにジンメル「社会はいかにして可能か」の問題のところを示唆しておいた、「社会的なもの」それ自体の「構成」である。社会学がそれまで「社会」や「秩序」や「システム」として論じていたものを何らかの意味で「構成」されたものとして捉える視点は、シュッツよりも後の世代を待たねばならなかった。そこで次章では、シュッツの「意味的構成」の議論を受け継ぎながらも、あくまで社会理論の視点から「意味」や「構成」について論じているルーマンが、シュッツの「意味的構成」をどのように摂取したか批判しているのか、ということを見ていくこととする。

補 シュッツ「社会的世界の意味構造」(Alfred Schutz, “The Meaning Structure of the Social World”, 1958)

アメリカに渡ってからもシュッツは、使用言語をドイツ語から英語に変えながら、上記の *Konstruktion* の項で扱ったような社会科学の方法論を継続的に研究し発展させている。

本章を閉じるにあたって、シュッツが自身の研究について最晩年に書いた記述を見ておきたい。ここで取り上げるのは、「社会的世界の意味構造」(Alfred Schutz, “The Meaning Structure of the Social World”, 1958) と題された一文であるが、これはもともとシュッツがベルギーのルーヴァンにあるフッサール文庫を訪れるために研究休暇を申請した際のプロジェクト説明のために用意されたものである⁴¹。しかしながらこの短い一文のなかには、「シュッツが最も成熟してかつ簡潔に自身の研究について述べている」様子を見ることができ

³⁹ 例えば、構築主義における「オントロジカル・ゲリマンダリング」の議論がある。発端となった論文として、Woolgar/Pawluch (1985=2006) を、また解説として、中河 (2001) も参照。

⁴⁰ ギデンズやルーマンとの対比のなかでのシュッツの「二次の構築」については、Wittenbecher (1999: 168-170) を参照。

⁴¹ しかしながらこのプロジェクトは、シュッツの病気のために実現しなかった。シュッツはその研究休暇を療養に費やすこととなったが、そのなかで『意味構成』の新版、『生活世界の諸構造』の刊行、『著作集』第1巻「社会的現実の問題」の編集を計画していた (Schütz/Gurwitsch 1985: 450-470=1996: 473-493 ; Barber 2004: 214-215, 219, 275 (Note 41))。周知のようにいずれも彼の存命中には完成せず、彼の死後に弟子たちの手によって刊行された。

る⁴²。特にルックマン編の『生活世界の諸構造』(Schütz/Luckmann 2003)にまとめられているようなシュッツ後期の研究の主題と、またルーマンやギデンズといったのちの論者が参照する諸概念も登場している。そうした理由により、本章の終わりにシュッツ自身による「構成」の議論の要約として取り上げる。短いものであるため、以下に全文訳を挙げておく。

*

「社会的世界の意味構造 (The Meaning Structure of the Social World)」

筆者〔シュッツ〕はこれまでに自分が行ってきた社会科学の哲学的基礎づけについての研究を継続することを計画している。この主題は『社会的世界の意味構成』(Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt) (1932)の公刊以来、筆者の関心の中心にある。この著作の中で、社会科学の領域におけるマックス・ヴェーバーの理論的発見と、現象学の創始者であるエドムント・フッサールの哲学的示唆とを結びつけることを試みた。この著作の公刊後、筆者はフッサールから彼の個人助手になるように依頼されている。筆者はアメリカ合州国への移住後、同じ中心的主題へアプローチするいくつかのテーマを扱った30ほどの論文を発表した。筆者の考えでは、筆者のこの思想はもはやモノグラフ的論文を認めず、体系的な提示を必要とする地点まで到達している。

取り組むべき主題は、簡略に言えば以下ようになる。社会科学の目的は、社会科学が他のあらゆる経験科学と共有している、科学的方法によって社会的現実 (social reality) の説明をすることにある、と。それゆえ社会科学は、日常生活の観点から人間的現実 (human reality) を扱う、諸概念と理論からなる一定の体系 (a system of concepts and theory) を発展させなければならない。しかしこの点で、社会科学の問題と自然科学の問題とは本質的な点で異なるものである。自然科学は、自身の観察領域から意図的かつ体系的に人間行為者を除外する。他方で社会科学の主題となるのは、人間的現実 (human world) である。しかしこの人間的現実、自然科学者によって研究されるような自然の領域とは異なるものである。人間的現実とは、そのなかで日常を生きる人間たちにとって初めから意味 (meaningful) な世界である。というのも、われわれの常識的思考 (common-sense thinking) が世界をあらかじめ解釈 (pre-interpret) し、あらかじめ構造化 (pre-structurize) しているからである。もちろん、この世界の意味構造 (its meaning structure) はただ自明のものと思われている。この世界の意味構造は疑われないものであるが、しかし単にいつか気づかれるまで疑われない、というだけのことである。やがて疑われることになるかもしれない。こうした社会的現実、

⁴² Schutz (2010: ix) の編者註を参照。シュッツによるこの文章は、レスター・エンブリー編の論文集『シュッツ派の社会科学』(Embree ed. 2010) の扉書きとして利用されている。

フッサールの「生活世界」(Lebenswelt)の概念と一致する。現象学的手法による生活世界についての記述と評価は、フッサール後期の哲学の中心的なテーマであり、ルーヴアのフッサール^{アルヒーフ}文庫に保存されている未公刊の草稿のなかで主に論じられている。

社会的現実を把握することを望む人間条件についてのあらゆる科学は、生活世界で生きる人びとによる、生活世界についての解釈に基づけられなければならない。筆者はそう確信している。こうした生活世界についての科学的解釈は、いわば二次の解釈(an interpretation to the second degree)であり、常識的な解釈についての科学的な解釈である。われわれはこの常識的な解釈の観点から、われわれ自身がそのなかで暮らし活動する社会的世界を経験する。

生活世界の構造化(the structurization of the Lebenswelt)についての詳細な現象学的分析は、著者のプロジェクトの第一部となる予定である。この分析に基づき、社会科学における概念形成と理論形成の問題が、そこで生きる人びとによって経験されるものとしての社会的世界の意味と、社会科学の主題としての社会的世界の意味との間に連続性を打ちたてるという観点から、検討される。

アルフレッド・シュッツ

哲学・社会学教授

政治科学・社会科学大学院、ニュースクール・フォア・ソーシャルリサーチ

(Schutz 2010: ix-x)

第三章 現象学的な行為理論とシステム理論的な社会理論 における「構成」

前章では、シュッツの『社会的世界の意味構成』における、社会科学に関わる多元的な「構成」の試みを見た。シュッツは現象学的な意味の「構成」(Konstitution)分析を基礎に、社会的世界の「構成」(Aufbau)を、社会科学的な理念型「構成」(Konstruktion)を介して論じた。

シュッツによるこうした「社会的世界」の「意味的構成」に関する多元的な「構成」論は、現代の社会学における構成主義的な社会理論に対して、大きな影響を与えている。しかしまた同時に、シュッツのこうした「意味的構成」や「社会的世界の構成」の議論から、現代の社会学における「構成主義」の社会理論までは一定の距離がある。

そこで本章では、ルーマンによるシュッツの継承と批判のなかに、現象学的な行為論における「意味的構成」の議論から、「構成主義」の社会理論への連続性と変化を見ていきたい。

1. ルーマンの社会理論への現象学的な意味の構成分析の導入——ルーマン前期におけるシュッツの受容について

初めに、シュッツとルーマンの理論的關係について述べておきたい。シュッツとルーマンは、自身の行為理論ないし社会理論に何らかのかたちでエドムント・フッサールに由来する現象学的な意味分析の知見を導入していることで共通する。のみならず、ルーマン前期の方法論的な著作を見ていくと、ルーマンが社会理論に現象学的な意味分析を接合するにあたってシュッツを手がかりのひとつとしていることがわかる。両者において共通の概念や用語系が用いられており、またルーマンは後々まで個々の評価は変われど一貫してシュッツへ関心を注いでいる。従来のルーマン研究では、シュッツとのつながりが軽視されてきた。フッサールの現象学との関わりはよく論じられているが、ルーマンがシュッツをいかに取り入れ、またいかに論じてきたかについて積極的に扱っている文献は少ない¹。本章では、シュッツの「意味構成」論からルーマンの「構成主義」の社会理論への変化を、ルーマンが自身の社会理論にいかにかシュッツの意味分析を導入し応用しており、またどの

¹ フッサールとルーマンの対比については、Knudsen (2006)、Nassehi (2012)などを参照。またルーマンの意味の理論におけるフッサールの位置づけについては、Schützeichel (2003: 32-33 (Anm.1))も参照。クヌーセンはシュッツにも言及しているが、シュッツや彼の弟子たちはルーマンと異なりあくまで「主観主義的」な社会学のためにフッサールを導入していると批判し (Knudsen 2006: 13)、またシュッツによるフッサールの「間主観性」批判はどちらかといえば「古典」に属しており、フッサール後期においてさらなる修正が見られ、それに応じてフッサール批判にも次の段階がある、と指摘している (Knudsen 2006: 57)。Nassehi (2008) はルーマンの時間論をもとに社会的な時間論を展開しているが、そのなかでシュッツの時間論を取り上げそれが最終的には主体ないし意識に回収されていると批判している (Nassehi 2008: 110)。また Jahraus ほか (2012) では、ルーマンと知識社会学との関わりの一部としてのみシュッツの「類型化」(Typisierung) に言及している (Jahraus et al 2012: 318)。シュッツとルーマンの理論比較を行なっているものとしては、Srubar (1989 ; 1994)、Wittenbecher (1999)、吉澤 (2002) を参照。ズルバルはルーマンのシステム理論をシュッツらの現象学と重ねて理解するうえで、ハロルド・ガーフィンケルやアーヴィング・ゴッフマンによる社会的な秩序の生成の議論を参照している。ヴィッテンベッヒャーはヴェーバーやシュッツの社会的な解釈学とルーマンの社会的なシステム理論との比較を、「理解」(Verstehen) を中心に行なっている。吉澤 (2002) は社会理論にフッサール現象学の成果を導入する一連の流れの上にシュッツとルーマンの両者を位置づけているが、ルーマンによるシュッツへの言及は参照されておらず、両者のつながりが見えにくいものとなっている。また大黒屋 (2002 ; 2011) は、それぞれ「同時性」概念と、パーソンズの「行為」概念に対する批判とをトピックとしてシュッツとルーマンの説を比較している。加えて、ルーマンのコミュニケーションの理論としてのシステム理論と、理解の理論としてのシュッツとルックマンらの社会現象学の理論とを比較しているものとして、Dallinger (1999) も参照。ダリンガーはそこで、「意味の創発」(Emergenz von Bedeutung) と、「閉じた自己言及的なシステムどうし、あるいは自己の意識による解釈を参照する主体どうしのあいだでの裂孔が、それぞれ〔の理論〕においていかにして乗り越えられているのか」という、二つの問題のもとで両者を比較している (Dallinger 1999: 237-238)。

点で両者が別れるのかを、ルーマンが直接シュッツに言及しているところを参照しながら検討する。

ところでルーマンは研究活動のなかで自身の社会理論を発展させているが、その発展をいくつかの段階に区分することができる。特に『社会システム理論』(1984)がひとつの劃期をなしている。例えばクニールとナセヒ (Kneer et al 1993: 34=1995: 39) はルーマンによる「社会的システムの理論」(Theorie der soziale Systeme) の試みを、『社会システム理論』(1984)を境に、1960年代からその著作までを第一段階、1984年以降を第二段階と区分している。また馬場(2001: 2-3)はルーマンの理論展開を三段階に分け、「等価機能主義」や「機能-構造主義」、「複雑性」概念を説き、ハーバーマスとの理論論争書『批判理論と社会システム理論』(1971)に代表される1960年代~70年代半ばまでを初期、「自己言及」概念を導入した1970年代半ば~80年代前半までを中期(移行期)とし、さらに「オートポイエーシス」概念を導入した『社会システム理論』刊行以降を後期(完成期)としている。長岡(2007: 31)の説明を借りれば、『社会システム理論』で確立されたルーマンの社会的システムの理論の転換は、第一に社会的システムの要素を「行為」から「コミュニケーション」へ転じたこと、第二にシステムの自己選択的な働きを指して据える概念が「自己言及」(馬場の言う「移行期」の頃)から「オートポイエーシス」に変更されていることで、二重の転換がある。

そしてルーマンのシュッツに対する評価関しても、『批判理論と社会システム理論』所収の「社会学の基礎概念としての意味」(1971)論文(以下、「意味」論文)と、『社会システム理論』を代表される時期を前後して、ルーマンの理論発展のうちで少なからぬ変化が見られる²。そこで以下では、ルーマンがシュッツの理論を導入していく経緯を踏まえたうえで、「意味」論文と『社会システム理論』に代表される二つの時期におけるルーマンのシュッツ論の変化を検討する。さしあたり、前者の時期をルーマン前期、後者の時期をルーマン後期としておく。ルーマンによるシュッツの受容の変化は、現代の「構成主義」の社会理論の視角から見るとどの点がシュッツの「意味的構成」の議論に欠けているか、あるいはどこに相違があるのか、ということがよくわかるようになっている。

まず初めに、ルーマンがシュッツの議論をどのように導入していったのかを踏まえておくこととする。

² 長岡(2006: 209)はルーマンの意味理論に関して、システム理論の発展に対応した三つのバージョンがあるとし、「意味」論文を第一、『社会システム理論』を第二、『社会の社会』(1997)を第三のバージョンとしている。

1-1. ルーマンによるシュッツ導入の経緯

アルフレート・シュッツの名が社会学界隈で広く知られるようになったのは、彼の死後にアメリカで著作集 (Alfred Schütz, *Collected Papers*, I~III, 1962/1964/1966) が刊行され、彼の弟子達や彼の講義を受けた者たちが活躍するようになりシュッツの名を広めたことによる³。そしてルーマンがシュッツに言及するようになるのも、この『著作集』の公刊以降のことになる。

ルーマンの著作のなかでのシュッツへの言及は、まず「機能的な方法とシステム理論」(1964)に見られる。この論文でルーマンは、自身がそれ以前から説いている、因果を問うのではなく比較の方法としての機能主義という等価機能法と、社会的システムの理論とを接合する試みを行なっている⁴。そこでは「問題解決」を、ある問題に対する因果の確定としてではなく、その問題に対する可能なさまざまな代替選択肢を「比較」する試みとして読み替えることを提起するが、その際にフッサールによる「開かれた可能性」と「問題的な可能

³ 例えば、Wagner (1983: 239-259)、森 (2001: 124-142)、Barber (2004: 219-229) を参照。

⁴ この論文冒頭の問題提起の箇所 (Luhmann 1964b: 1-3=1983a: 14-17) を参照。また結論部では、こうも述べられている。

われわれの最終的なテーゼは、以下のとおりである。つまり、比較の方法 (vergleichende Methode) とシステム/環境理論 (System/Umwelt-Theorie) とは、行為についてのひとつの解釈 (eine Interpretation des Handelns) を機能的に等価な代替選択肢たち (funktional äquivalente Alternativen) の視点のもとで得ようと努めるものであり、行為者たちを彼ら自身にとって可能なひとつの合理性という光のもとで理解し、そうすることをとおして理論と実践の世界の統一をよりよく描きうるようにするものである、と。(Luhmann 1964b: 23=1983a: 54)

この箇所がシュッツに依拠しているかどうかはわからないが、「行為者たち自身にとって可能な合理性」とはまさしくシュッツが追求したものであり、またルーマンが等価機能法の準拠点としてシステム理論を採用する理由、またのちにいわゆる「システムはある」——つまり、「システム」をもって単なる学術的な抽象物を指すのではない、という仮定——から出発する理由とつながっている。

この視点は、『公式組織の機能とその派生的問題』(1964) では以下のように活かされている。

したがって、公式性 (Formalität) の問題に対する基準として成員役割 (Mitgliedsrolle) を選んだのは恣意的なことではない。成員役割は、社会的な行為連関をシステムとして観察 (betrachten) することを可能とする視点を提供する。また成員役割は、行為連関をシステムとして観察することが可能となりかつそう観察することが適切であるような状況を定義する。かくして公式組織 (formale Organisationen) とは、科学 (Wissenschaft) によってのみならず、組織の成員たちによっても日常生活のなかでシステムとして体験され取り扱われる社会的秩序 (soziale Ordnungen) である、ということが示される。(Luhmann 1964a: 41=1992: 51)

性」の区別を参照し、その解説としてシュッツの『著作集』第I巻所収の「行為の企図の選択」(1951)の一節を示している(Luhmann 1964b: 6=1983a: 24, 61(註16))⁵。また、ルーマンのこの論文は「システム構造」を形成するために必要なものとして「時間的」(zeitlich)・「事象的」(sachlich)・「社会的」(sozial)な「行動予期の一般化」(Generalisierung von Verhaltenserwartungen)を挙げるが、これらの三つはのちに「意味の三次元」として定式化されることとなる⁶。加えて、「反省的メカニズム」(1966)では、「反省」が単一の作用ではなく、時間経過のなかで自身を同一的なものとして維持しうるシステムにおいてのみ可能になるとし、その前提となる、ある作用は他の何かに対して志向的に向けられるのであってさしあたり自分自身に向けられるのではない、という学説を、現象学、生の哲学、プラグマティズムに帰している。そこでフッサールやシェーラー、ウィリアム・ジェームズなどの他に、シュッツの『意味構成』を参照指示している(Luhmann 1966: 10-11)。

そして「社会学的啓蒙」(1967)では、現象学への言及が増加し、特にフッサール後期の研究とシュッツを含めた彼の後継者たちが取り組んだ「意味の間主観的構成」(intersubjektive Konstitution von Sinn)の問題へ注目するようになっていく。この論文では、初めにパーソンズが「二重の偶有性」(double contingency)として定式化した他者の予測不可能性の問題を社会的な「複雑性」として論じ、この複雑性を記述するために「意味の間主観的な構成」の理論を参照すべきとしている(Luhmann 1967a: 105-106=1983: 87-88, 118(註15, 16))⁷。た

⁵ 参照されているのは、Husserl (1948: 105ff.=1975: 83 以下「c) 問題的可能性と開かれた可能性) および Schutz (1962b: 79ff.=1983b: 150 以下、第七節「フッサールによる問題的可能性と開かれた可能性」)。

⁶ この三つの一般化を、この論文では「持続」(Dauer)、「一貫性」(Konsistenz)、「合意」(Konsens)とも呼んでいる(Luhmann 1964b: 16-17=1983a: 43-44)。これらの「行動予期の一般化」を公式組織と社会的制度のもとで論じたものとして、Luhmann (1964a=1992-1996; 1965a=1989)がある。前者では、行動予期が時間次元で一般化したものを「規範」(Norm)、事象次元で一般化したものを「役割」(Rolle)、社会的次元で一般化したものを「制度」(Institution)としている(それぞれ、個々の逸脱や期待外れに対する保障(Sicherung)、無関連性と矛盾に対する保障、不合意(Dissens)に対する保障、とも言う)。三者は相補うものであるが、たがいに干渉しあうこともあるとし、公式組織における「公式化」(Formalisierung)の機能とはこれら三つの最大限の一般化を一度に可能にすることにある、と定義している(Luhmann 1964a: 55-59=1992: 74-78)。後者の著作は、Luhmann (1965a: 84-93=1989: 144-152)、また時間的一般化としての「法の脱時間化」に関してはLuhmann (1965a: 165-166=1989: 277-278)を参照。前者ではシュッツへの言及はないが、フッサールの「現象学的還元」のフレーズと、フッサールの体験の地平と体験の主題の区別およびこの区別についてのアロン・ギユルヴィッチ(Aron Gruwitsch, *Théorie du champs de la conscience*, 1957)による発展に言及している(Luhmann 1964a: 19, 40=1992: 19, 50)。後者では、行為の意味が他者による知覚や自身による反省によって初めて得られるものであるということを示したものとして、シュッツの『社会的世界の意味構成』(*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, 1932)をG・H・ミードの『精神・自我・社会』(G. H. Mead, *Mind, Self, and Society*, 1934)とともに文献指示し、また上述の「開かれた可能性と問題的可能性」についての二文献を挙げている(Luhmann 1965a: 65, 215-216=1989: 97, 129(註35), 357, 364(註21))。

⁷ パーソンズの「二重の偶有性」の他には、組織論における「合理的な未規定性」の問題を

だしこの時点ですでに、「間主観的な構成」はあくまでひとつの「問題」であるとし、フッサールのように超越論的なより高次の人格を招来したり、他方シュッツのようにひとつの「事実」として不問に付すことはできない、と注意している（Luhmann 1967a: 111-112, 119=1983: 96-97, 108, 119-120 (註 27-29), 122-123 (註 44, 45))⁸。さらに「社会的システムの理論としての社会学」(1967)では、システム／環境の区別に基づくシステム理論によって、区別される外部をもたない「世界」はシステム足りえない、ということを読くに当たってフッサールの「地平」概念を参照している（Luhmann 1967b: 617-618, 639 (Anm.4-6)=1983: 130-131, 168 (註 4-6))、また「行為論的な基礎に基づいて構想された構造 - 機能理論」の欠点のひとつが「熟慮されずに前提とされている意味概念」にあるとし、「他の可能性からの選択」であると同時に「他の可能性への参照」でもあるとする意味概念を提起している。ここでルーマンは、意味がいわば地平を伴うことをフッサールの論に負っているが、この点をヴェーバー、パーソンズ、さらにはシュッツもまた捉え損なっている、と指摘する。しかし、社会理論ないし行為理論に伴う意味概念の不明瞭さを批判し、フッサールの意味概念を導入することは、他ならぬシュッツが『意味構成』で行なった立論であった（Luhmann 1967b: 618-619, 639 (Anm.10)=1983: 132-133, 169 (註 10))。

『目的概念とシステム合理性』(1968)では、「機能的な方法とシステム理論」でもすでに扱われていた、比較と合理性という問題をより発展させている。このなかでルーマンは、いわゆる「合理性」を単独の行為に対してではなくシステムと結びつけて理解することを提起し、その発想の端緒をパーソンズの『社会的行為の構造』に見出しているが、さらにそれより進んだ定式化として、シュッツの「社会的世界における合理性の問題」を参照指示している（Luhmann 1968b: 6-7=1990: 8, 273 (註 7, 8))。そして目的／手段図式は単なる事態の記述ではなく、行為分析のための索出的な図式、比較の技術であるとし、その場合の比較の視点の決定的な根拠づけのなさをフッサール、シュッツの論考を示しながら論じている。ただし、彼らによってシステムの機能という視角が見落とされていた、ということも付け加えている（Luhmann 1968b: 30-31=1990: 31-32 (註 50))⁹。併せて、目的と手段の分

扱うものとしてハーバート・A・サイモン（Simon 1947=2009; 1957=1970）ほかの組織論、またフォン・ノイマンとモルゲンシュテルンのゲーム理論（Neumann/Morgenstern 1944=2009）を挙げている。また現象学の文献では、フッサールの『フッサリアーナ』初期の諸巻に加えて、シュッツの「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」ほか『著作集』全3巻（Schutz 1962; 1964; 1966）、およびメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』（Merleau-Ponty 1945=1974）などが参照指示されている。

⁸ 間主観性の統一的な人格化批判は、シュッツの「エドムント・フッサールの『イデー』第II巻」（Schutz 1966a=1998a）と「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」（Schutz 1966b=1998b）を参照していると思われる。本章 1-2-3.を参照のこと。

⁹ 以下に引いておく。

ここでわれわれの思考の歩みをもう一度要約してみよう。行為を結果の実現として解釈することは、現に存在する事態の記述というよりも、行為分析のための索出的な図式なのであり、代替選択肢を発見するのに役立つのだ。そこで働いているのは知覚

離が時間の差異、延期を可能にし、よって体験の「事象次元」を「時間次元」と分離することが可能になると述べる段で、事物の構成の社会的前提としての『同時』に生きる他我の存在」(Existenz eines „gleichzeitig“ lebenden alter ego) を論じたものとしてフッサールの『デカルト的省察』と『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の一節、さらにシュッツの『意味構成』の一節、また『著作集』全体を参照指示している (Luhmann 1968b: 208-209=1990: 230-231, 323-324 (註 47, 48))。これはあとで「同時性」として扱うものに関わってくる。

加えて『信頼』(1968)では、「つねにすでに間主観的に構成された世界に他我がいるという事実」を哲学が、さらにフッサールの超越論的現象学も適切に捉えられなかったとし、むしろ他者の予測不可能性からの秩序化を説く実証科学にその可能性があるとし、パーソンズの「二重の偶有性」の議論と併せて、シュッツによる「類型化」もまた他我の存在による「予測不可能な複雑性」にこそ基づいていると述べている (Luhmann 1968a: 4-5 (Anm.10)=1988: 13-14, 161-162 (註 10))。そしてさしあたり「意味と世界」が「匿名的に構成される」という見解にシュッツの貢献を見ている (Luhmann 1968a: 15-16 (Anm.1-3)=1988: 29-30, 165-166 (註 1-3)) また「共同的な人間生活に不可避の同時性」として、シュッツによる「共に年をとる」を参照しながら「あらゆる人間はつねに現在的・共同的な持続のなかで共に生き、共に年をとる」(alle Menschen leben und altern zusammen in stets gegenwärtig-gemeinsamen Dauern) ことを挙げている。このことは、現在から(未来や過去に)

(Vernehmen) を行なう旧来の理性 (Vernunft) ではなく、比較 (Vergleichen) を行なう新しい理性なのである。この理性は、比較の技術 (vergleichstechnisch) という理由からしてすでに、境界設定 (Begrenzung) を前提とする。しかし「視点」(Gesichtspunkte) (例えば、価値) だけによっては境界を引き得ない。ましてや境界を安定化することなどではしない。ここにおいてシステム形成 (Systembildung) が必要になるのである⁽⁵⁰⁾。目的設定 (Zwecksetzung) とは、このような境界を引く手続きなのだ。(Luhmann 1968b: 30-31=1990: 31-32)

比較の論理を扱う研究においては、一般に比較の「視点」(ein Gesichtspunkt) が必要だと見なされてはいる。それによって、多様なものを同じものと見なしたり扱ったりするための「視点」が固定されるのだ、と。しかしこの視点を選択するための視点に関しては決定的な基礎づけは存在しないのだ。例えば Husserl, E. (1922, *Logische Untersuchungen*, Bd.II, 1, S.112ff. [=1970: 125 以下、第一章・第三節「スペチエスの単一性 (Einheit) は非本来的単一性と解されうるか。同一性 (Identität) と相等性 (Gleichheit)」以下]) を、さらには Luhmann, N. (1965b, *Öffentlich-rechtliche Entschädigung rechtspolitisch betrachtet*, S.54, Anm. 16) での議論を見よ。ここでも、視点から考えることとシステムから考えることを隔てる例の敷居が越えられねばならないのだ。これまでも確かに比較パースペクティブの主観性が、またその意味でのシステム相対性が、注意を引いてきた。例えば Schutz, A. (1956, “Equality and the Meaning Structure of the Social World” [1964c=1991c]) を参照。しかしシステムの機能は無視されてきた。同じ/同じでない (Gleich/Ungleich) という図式としてのシステムの機能を明らかにしなければならない。それによって初めて、システム相対性から視点の選択の恣意性が帰結するわけではないということが認識されうるのである。(Luhmann 1968b: 31 (Anm.50)=1990: 251 (註 50))

逃れ出ることの不可能性として論じられている (Luhmann 1968a: 11-12 (Anm.10)=1988: 23, 165 (註 10))。

このようにルーマンは、社会理論における比較の準拠点の問題を提起し、そこに「合理性」を位置づけるうえで、シュッツを参照していた。比較の準拠点に関する議論は、機能主義をたがいに等価な代替選択肢を比較する方法としての「等価機能主義」と見なし、同じ考えからパーソンズの「構造－機能主義」を「機能－構造主義」と読み替えたルーマンの読みの延長にある。また当初は「行為者自身にとって可能な合理性」という表現も用いているが、合理性を単独の行為とその行為者に結びつけるのではなく、システムの連関のうちに位置づけることを主張している。社会科学者の視点にとどまるのではなく、行為者自身の主観的な意味に接近するというシュッツの狙いとは、前提の部分を共有するが、後段の部分で離反する。

さらにルーマンが現象学の知見を取り入れるようになるのは、社会理論における「意味」の問題、当初の表現で言えば「意味の間主観的構成」の問題に関してであった。そしてルーマンが社会理論に現象学的な意味分析を導入する試みは、「社会学の基礎概念としての意味」(1971 [以下、「意味」論文])で一応の完成を見る。以上の諸論文での流れも踏まえて、この論文でルーマンは社会という複雑な現象を扱うに十分なほど複雑な社会理論を構築するために必要な意味概念の彫琢を目指し、フッサール由来の現象学的な意味の構成の分析をその礎石とする。

では次に、「意味」論文のなかでのルーマンによる現象学的な意味の構成分析の導入と、そこでシュッツの議論をどのように取り入れているのかを見ていく。

1-2. 社会理論への現象学的な意味の構成分析の導入——前期ルーマンのシュッツ論

以上に見てきたように、「社会的システムの理論としての社会学」でルーマンはすでに「行為論的な基礎にもとづいて構想された構造－機能理論の欠点のひとつ」が「熟慮されずに前提とされている」とし、「社会学的啓蒙」で「社会学」が「機能分析の中心問題として社会的複雑性」を描くために「意味の間主観的構成」の理論に立ち戻る必要があるとしていた。そしてそのために、フッサールおよびシュッツの意味分析が示唆されていた。

「意味」論文でも同様の立論を背景に、意味概念の規定を行なっている。ルーマンがそこで取り入れるのは、「現象学」と「解釈学」の伝統のなかで「意味形象の分析のために展開されてきた」、「目の前にある意味 (vorhandener) を抽象化によって把握したり思考によって変更したりし、さらに他の諸可能性のための代替選択肢として構築 (Konstruktion) する技術」である (Luhmann 1971: 29-30=1987: 34-35)。

そのときルーマンは意味を「主体」に準拠させるのではなく、システムと結びつけ「意味を構成するシステム」(sinnkonstituierendes System) のもとで扱う。つまり「意味の機能分

析」から出発し、意味の機能の実現には「意味を構成するシステム」が前提とされることを明らかにすることを、この論文の課題としている。ルーマンはこの「意味を構成するシステム」には、心的システム（意識）と社会的システム（社会）の双方が含まれ、両者はたがいに分化しているとする（Luhmann 1971: 28-29=1987: 33-34）。

そして「意味構成的システム」の「構成」（Konstitution）は「意味とシステムの関係」を指すとし¹⁰、フッサールの「意識内在的超越」（die bewußtseinsimmanente Transtendenz）のテーゼに基づく意味理論から、「意味はつねに限定可能な諸連関のなかで現れ」、かつ「意味は自身が属する連関を越えて参照を行なう」という知見を取り入れている。そのうえでルーマンは、「こうした意味的（sinnhaft）な体験と行為とにとって典型的な構成関係（Konstitutionsverhältnis）」を、「システムの概念と世界（Welt）ないし環境（Umwelt）の概念を用いて」、「意味を構成するシステムとしての意味システム（Sinnsystemen als Sinnkonstituierenden Systemen）」について論じている（Luhmann 1971: 29-31=1987: 34-35）。

以上のように「意味」論文でのルーマンは、後期フッサールに由来するとする現象学的な意味の構成分析を基礎としたうえで、それに合わせて意味概念の詳細を記述する段でシュッツを参照している。

1-2-1. 意味の間主観的構成の問題と意味の三次元

ルーマンは意味の機能について、顕在性／潜在性の分化、複雑性の縮減と保持、また体験処理の機能としての否定作用による一般化について述べたあとで、意味の同一性のためには事象的次元、社会的次元、時間的次元という三つの次元の分化が必要である、と述べている。この三次元は以前に「行動予期の一般化」の三次元としてルーマンが挙げているものと同じであるが¹¹、そこで述べていたのと同様にそれぞれの次元の非同一性がたがいの同一性を支えているとしている。

そこでルーマンはまず、意味の事象的次元の同一性は、他在（Anderssein）の否定による事象の同一化によるものとしたうえで、事象的な同一化が社会的な次元（つまり、自我と他我の差異）を可能にし、また社会的な次元における非同一性が、事象的な次元での同一性を可能にしている、と主張する（Luhmann 1971: 48-51=1987: 52-55）。そして社会的次元の構成に関しては、意味の事象的次元における同一性と社会的次元における非同一性の関わ

¹⁰ 「構成」（Konstitution）という語自体の曖昧さをルーマンは下記の箇所の前で註記しているが、そこで言われる「直接的な明証把持」（Evidenzhaben）と「能作」（Leistung）、「受容的な解明」（rezeptives Klären）と「創造的な制作」（kreative Herstellung）の二義性に関して、ルーマンは文献指示していないがオイゲン・フィンク「フッサール現象学における操作的概念」（Fink 1976=1978）およびシュッツ「フッサール後期哲学における類型と形相」（Schutz 1966c=1998c）参照。

¹¹ 本章 1-1. を参照。また Schützeichel（2003: 42-48）も参照のこと。シュツアイヒェルの説明を借りれば、ルーマンが当初システムの境界を示すものとしていた時間的・事象的・社会的な観点から一般化された行動予期が、複雑性理論のなかで統合され、それぞれ否定をとおした同一性によって規定される意味の三次元となっている（Schützeichel 2003: 43-44）。

りとして、以下のように論じている。

体験の社会的な次元は、事象的な同一化 (sachliche Identifikation) との関連のなかで以下のようにして構成される (sich konstituieren)。つまり、ある非自我 (Nicht-Ich) が他の自我 (anderes Ich [他我]) として認識され、固有の体験と世界視角の担い手として、しかし [自我とは] 異なる固有の体験と世界視角の担い手として体験される、ということによってである。体験している者はある他の自我と向き合うことにより、その他我の視角自体を顕在化したり、その他我の体験を追体験したりすることを学ぶことができる。他者の固有の視角 (die eigene Perspektive des anderen) が、[自我のそれとは異なる] もうひとつの固有の視角 (die andere eigene Perspektive) となる。

他者の固有の視角が顕在化することは、自我 (mich) に対してもこの視角が顕在化されうる可能性を保証する。複数の視角は、位置の交換によって取り替え可能なものとなる。そうした視角はある対象の同一的に保たれた意味 (つまり、事象上の非他性 [sachliche Nicht-Andersheit]) に支えられ、また交換を遂行するなかでその対象の同一性を保証することによって、移送可能なものとなる。このようにしてはじめて、意識における選択性は構成される (sich konstituieren) のである。

(Luhmann 1971: 51=1987: 55)

他方で、社会的次元の側から事象的次元について考えると、「こうした意味的・対象的世界の間主観的構成 (intersubjektive Konstitution einer sinnhaft-gegenständlichen Welt) の過程にとって、体験する諸主観の非同一性は根本的な前提である」とルーマンは言う。ルーマンによれば、「この非同一性がはじめて、自身の体験のなかに生きておりそこから解放されることのない主観と、自身の体験内容との距離化を可能」にし、その対象が「すべての主観に対して接近可能なもの」となり「当の対象の意味のなかで自立性を持つ」ようになる。翻って、それらの対象から「世界についての視角上の補整が生じ、その結果として、他のありうべき諸視角のうちのひとつとしての固有の視角」についての「反省的意識」が生じる。かくして、

共に機能する他の諸主観が、個々の主観の顕在的意識から、ただもっぱら自身に与えられる内容からのみ世界のあらゆる可能性を可能にするという負担を免除 (entlasten) し、つまりひとりだけで可能性の条件として機能するという負担を免除するのである。このようにしてはじめてある複雑な世界が、^{アクチュアル} 顕在的意識の ^{ポテンシリティ} 潜在性の地平 (Horizont der Potentialitäten des aktuellen Bewußtseins) として、つまり過剰な要求をおこなう、あらゆる選択の出所として構成 (konstituieren) される。

(Luhmann 1971: 51-52=1987: 55-56)

ルーマンは以上のように、立場の相互交換の可能性と対象の同一性とのあいだの連関を、社会的次元における非同一性と事象的次元における同一性の支え合いと見なしている。さらに、社会的次元における非同一性（自我／他我の非同一性）によって初めて、「顕在的な体験の潜在性の地平」としての複雑な世界が構成されるということ、つまり「意味的・対象的世界の間主観的構成」が可能になる、ということを示している。

上記の箇所ではルーマンは、立場の相互交換の可能性と対象の同一性とのあいだの連関を説き、そこでミードの諸文献とシュッツの『意味構成』を参照指示している。ただし、ミードに関しては役割概念の不明瞭さを、シュッツに関しては依然として「本質的に『主観』と結びついた、反省を特徴とする意味概念」を用いていることを批判している（Luhmann 1971: 51-52=1987: 112-113）。

しかしいずれにせよルーマンは間主観性の構成の問題を、とりわけパーソンズの「二重の偶有性」やミードのアイデンティティ論などとの関連で論じることが多いが、以上で論じられている意味の間主観的な構成のために必要な「視角の相補性」と「立場の相互交換可能性」とは、シュッツが間主観性の前提として挙げているトピックであった。ルーマンがここで意味の事象的次元（ないし対象）での同一性と社会的次元での自我／他我の非同一性を対比させているのに対し、シュッツは対象の同一性と私（自我）／私の仲間（Mitmensch, fellow-man）の非同一性を対比し、それを前提として視角の相補性や有意性の一致が成立することを説いている。

シュッツは「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」（1953）の「視角の相補性」（The Reciprocity of Perspectives）の項（第二章・第二節「常識的知識の間主観的な特性とその含意」内）で、以下のように述べている。

日常生活の常識的な思考による自然的態度において、私は知性をもつ仲間たち（intelligent fellow-men）が存在していることを自明視している。このことが含意するのは、世界の諸対象は原則として、彼らの知識にとって接近可能であるということ、つまり彼らによって知られているか、それとも彼らにとって知ることができるかのどちらかである、ということである。私はそのことを知っており、しかも疑問の余地なく自明視している。しかしまた私は、「同一」の対象（the “same” object）といえども、私に対してと私の仲間のうちの誰かに対してとでは、厳密に言えば異なった何ものかを意味しているに違いない、ということも知っており、しかもそのことを自明視している。（Schutz 1962c: 11=1983c: 59）

シュッツはこうした「個人間の視角の差異」を、私がある「ここ」と彼らがいる「そこ」という立ち位置の違い、また各人の生活史的に規定された状況、当面の目的、その目的に端を発する有意性の体系の違いに由来するとしているが、この差異は「常識的な思考」による「立場の相互交換可能性の理念化」（the idealization of the interchangeability of the

standpoints) と「有意性の体系の一致の理念化」(the idealization of the congruency of the system of relevances) という二つの基本的な理念化によって乗り越えている、と説く。

立場の相互交換可能性の理念化と有意性の体系の一致の理念化という二つの理念化——それらは共に相補的視角の一般定立 (the general thesis of reciprocal perspectives) を構成 (constitute) する——は明らかに、私の私的な経験の思考対象や私の仲間の私的な経験の思考対象を超える、思考の対象からなる構成物 (constructs of objects of thought) を類型化している。常識的思考 (common-sense thinking) によるこうした構成物 (constructs) の働き (operation) によって、私によって自明視された世界の一部分があなたによっても、つまり私の仲間である個人 (my individual fellow-man) によっても自明視されているということ、さらに言えば「われわれ」によっても自明視されているということが想定される。しかもこの「われわれ」には単にあなたと私だけが含まれるのではなく、「われわれの一員であるすべての人」、つまりあなたや私の有意性の体系と実質的に (十分に) 一致する有意性の体系 (system of relevances) をもつすべての人が含まれる。(Schutz 1962c: 11-12=1983c: 60-61)

シュッツは「常識的思考」による「立場の相互交換可能性の理念化」と「有意性の体系の一致の理念化」が「相補的視角の一般定立」を可能にし、そのもとでわれわれは仲間たちの存在と、その仲間たちにとって接近可能な「同一」な対象を自明視している、と主張している。つまり、私とあなた、ないしは「われわれ」と仲間たちのあいだにある差異と対象の同一性との関わりを論じている。その中間に、「理念化」による「相補的視角の一般化」と、そのもとでの「類型化」を置いている。

ルーマンは「意味の間主観的構成」に関して、社会的次元と事象的次元の関係、特に社会的次元での非同一性と事象的次元での同一性がたがいの前提となり、また社会的次元が成立して初めて意味の十分に複雑な世界が選択の出所として構成されることを説いている¹²。そのなかでルーマンは、社会的次元での非同一性と事象的次元での同一性の絡み合いを説明するために、シュッツによる「相補的視角の一般定立」の議論を参照している。シュッツにおいては、共通の視角、「有意性の体系」を可能にするものとして、一方の我と汝、「われわれ」と「仲間たち」、他方の対象との関わりが記されている。以上のようなシュッツの記述のなかで語られていることを、ルーマンは意味の社会的次元／事象的次元の区別に基づくことでより明確化し分析的に論じている。シュッツ自身は、フッサールによる他

¹² ルーマンは「意味の間主観的な構成」についての研究の例として、バーガーとルックマンの『現実構成』や、バーガーとハンスフリート・ケルナーの「結婚そして現実の構成」(Berger/Kellner 1965) を挙げる (Luhmann 1967: 633=1983: 158, 176 (52); 1971: 52-53=1987: 56-57, 113 (註 27))。またルーマンによる応用としては、例えば親密圏とコミュニケーション・メディアとしての「愛」についての研究 (Luhmann 2008) がある。そこでもバーガーとケルナーの「結婚と現実の構成」が参照されている (Luhmann 2008: 22, 77-78 (Anm.6))。

私の構成についての議論や、マックス・シェラーの人格論に依拠している。

1-2-2. 社会的次元の非同一性の前提としての「同時性」——時間次元での縮減として

さらにルーマンは、事象的次元と社会的次元に加えて意味のもうひとつの次元である時間的次元に関して、社会的な次元での非同一性を可能にするための時間的次元での縮減として、体験を行なう諸主観のあいだの「同時性」について論じている。

事象的な意味を構成することについての社会的な条件は、意味構成をおこなう体験 (sinnkonstituierendes Erleben) のこの水準で、時間次元の諸可能性の重要な縮減を前提としている。つまり、体験をおこなう諸主観のあいだにいかなる時間的な相違もあってはならない、ということである。(Luhmann 1971: 54=1987: 58)

そしてそのためには、それらの「諸主観の顕在的な体験」が「時間的に同期化 (synchronisieren)」され、「同時」(gleichzeitig) に経過しなければならない、とする。さらに、時間の流れが遅くなったり早くなったりすることは、「純粹に主観的な視角に帰属され、錯覚として差し引かれなければならない」。そして、

なぜ他者の前途ある展望が私の未来であることにはならないのか。なぜ他者の厄介な催促を単に私の過去として定義によって除外してしまうわけにはいかないのか。こうしたことを「それ自体 an sich」で理解することはできない。しかしこうしたことは、時間におけるそうした個別的な放浪は、事象次元と社会的次元に対して負担しきれない複雑性と否定の強制とによって過負荷をかけることなしには貫徹されえない、という理由によって排除されている。かくして時間的な複雑性と社会的な複雑性との掛け合わせによる法外な可能性は、同期化 (Synchronisation) によって効果的に排除される。それゆえ誰も他者の未来へと先に飛び込んだり、自分の過去に留まり続けたりする必要はない。あらゆる人間は共に等しく年をとる (Alle Menschen altern gemeinsam und gleichmäßig)。このようにして、間主観的に構成された時間という単位 (Einheit der intersubjektiv konstituierten Zeit) によって、体験視角の移送可能性が保証されると同時に、またそれによって世界への共通の接近可能性 (gemeinsame Zugänglichkeit) も保証される。(Luhmann 1971: 54-55=1987: 58-59) ¹³

¹³ ちなみに、この時点では、のちにルーマンが区別する「同期 (化)」(Synchronisation) と「同時性」(Gleichzeitigkeit) とが区別されずに用いられている。『社会システム理論』以降のルーマンのオートポイエーシスの用語を用いれば、「同期化」は作動のレベルでのつながりを示すもので、「同時性」は構造のレベルでのつながりを示すものである。含意としては、システムと環境の「同時性」は、システム自身による遂行ではあずかり知ることのできないレベルでつながっている (と、システム自身の遂行が判断する) ものであり、複数のシステムどうしの作動がつながる「同期化」では決してない、ということを示している。特

ルーマンはここで、意味の社会的次元における自我と他我の非同一性とそれらの共存が成立するためには、時間的次元での同一性、つまり同時性が前提となる、としている。そしてここでシュッツの「共に年をとること」の議論を引き、『意味構成』の第二十節「他者の体験流の同時性」を参照指示している（Luhmann 1971: 54-55=1987: 113-114（註 31））。

シュッツは『意味構成』のその節で、対面関係にある我と汝の話として以下のように記している。

したがって私は私自身の体験をただ経過し投企され終わった体験としてのみ眺めうるにすぎないのに対し、他者の体験（*fremde Erlebnisse*）は当の体験が経過するなかで眺めることができる。しかしこのことは、汝（*das Du*）と自我（*das Ich*）とが特殊な意味で「同時的」（*gleichzeitig*）であることを意味するに他ならず、つまりは汝と自我とが「共存」（*koexistieren*）し、自我の持続と汝の持続とが「交差」することを意味するに他ならない。（Schütz 2004: 226=2006: 162）

シュッツはそこから「同時性」（*Gleichzeitigkeit*）を、アンリ・ベルクソンが『持続と同時性』（*Henri Bergson, Durée et simultanéité*, 1923 [第二版]）のなかで、「私の意識からみれば一つであっても二つであっても違いのない二つの流れを、私は『同時的』（*contemporain*）と呼ぶ」（Bergson 1972: 105=1965: 209）とした意味で用いている（Schütz 2004: 226=2006: 163）。そして初めに、こうした「他者と自身との両者の経過を包括する統一的な作用」のなかにあるわれわれの「持続経過」の「同時性」は、「数量化」したり「空間的に計測」したりできる「物理（学）的な時間の同時性」ではない、と断っている。そのうえで、「同時性」をこのように説明する。

先に同時的（*gleichzeitig*）と呼んだ両者の持続の共存（*Koexistenz der beider Dauern*）はむしろ、私の持続の構造と汝の持続の構造とが同種（*gleichartig*）である、という本質的に必然的な仮定を示す表現である。汝は物（*das Ding*）とは異なる仕方で持続する。なぜなら、汝は自身が年をとること（*sein Altern*）を体験し、この事実から彼の他のあらゆる体験が構成される（*sich konstituieren*）からである。物の持続はいかなる持続でもなく、まさにその反対のこと、つまり客観的な時間の経過のなかで不動であることである。他方で汝の持続は、私の持続と同様に真の持続であり、つまりは自分自身を体験する連続的で多様、そして不可逆的な持続である。自我（*das Ich*）が自我自身の持続を（ベルクソンの言う意味での）絶対的リアリティとして体験したり、汝が汝自身の持続を絶対的リアリティとして体験したりするのみならず、むしろ自我に対しても汝の持続が絶対的リアリティとして与えられ、汝に対しても自我の持

に「同時性と同期化」（Luhmann 1990b）を参照。

続が絶対的リアリティとして与えられている。われわれが二つの持続の同時性 (die Gleichzeitigkeit zweier Dauern) ということと理解しているのは、このこと——共に年をとること (Zusammenaltern) という現象——に他ならない。

(Schütz 2004: 226-227=2006: 163-164)。

また、『意味構成』の十年後に英語で書かれたシュッツによるマックス・シェーラーの間主観性論「シェーラーによる間主観性の理論と他我の一般定立」(1942)の第五節「他我の一般定立とその時間構造」では、同時性を体験することで他我の存在が定立される、ということについてより詳しく述べられている。

私が他者 (the Other) の思考の流れ (stream of thought) を把握することができ、つまり他我 (the alter ego) の主観性を他我の生き生きとした現在 (vivid present) において把握することができる一方で、私自身の自己についてはその過去に対する反省によってのみ把握することができる、という事実は、われわれをひとつの他我の定義へと導いていく。つまり他我とは、その生き生きとした現在において体験することのできるそうした主観的な思考の流れのことである、と。われわれは、そうした他我を視野に収めるために、彼の思惟の流れを想像のうえで止める必要はないし、その流れの「いま」を「たうたいま」に変換する必要もまたない。他我の思考の流れはわれわれ自身の意識の流れと同時的 (simultaneous) であり、つまりわれわれは同じ生き生きとした現在を共有している——ひと言でいえば、われわれは共に年をとっている (we grow old together) のである。したがって他我とは、私とその諸々の活動を、それと同時的な私自身の諸活動によってその現在において捉えることのできる意識の流れのことである。(Schutz (1962a: 174=1983a: 266-267)

シュッツはここで「生き生きとした現在」(lebendige Gegenwart, vivid present) の共有、「生き生きとした同時性」(lebendige Gleichzeitigkeit, vivid simultaneity)のもとで他者の意識の流れを体験することを、「他我存在の一般定立」と呼んでいる。この一般定立は、「私のものではない思考の流れが、私自身の意識と同じ基本構造を示していること」、つまり「同じ時間構造を示していること」を含意する (Schutz 1962a: 174=1983a: 266)。そして、

私と他者の両者に共通するこの生き生きとした現在こそが、「われわれ」(We) の純粹領域である。そしてわれわれがこの定義を受け入れるのであれば、われわれは「われわれ」の領域が自己の領域に対してあらかじめ与えられているというシェーラーの見解——シェーラーは、われわれが今しがた概略した理論を念頭においてはなかったけれども——に同意することができる。われわれは反省という作用なしに「われわれ

れ」の生き生きとした同時性に参加することができる一方で、自我 (the I) は反省的な転回 (the reflective turning) が行なわれて初めて姿を現すものである。そしてまたわれわれの理論は、行為 (acts) とは対象化されえない (not objectifiable) ものであり、他者の行為はそれを共に遂行することによって初めて体験されうるというシェーラーの言明にも、(確かにレベルは異にしているが) 接近する。なぜなら、われわれはわれわれ自身が行為していること (our own acting) を、当の行為の顕在的な現在においては把握することができないからである。われわれは、すでに過去のものである自分たちの行為 (our acts which are past) しか捉えることができない。しかしわれわれは、他者の行為 (the Other's acts) は当の行為の生き生きとした遂行において体験しているのである。(Schutz 1962a: 175=1983a: 267-268)

シュッツはベルクソンの「持続」と「同時性」の議論に基づきながら、またフッサールの内的時間意識も取り入れながら、「同時性」を対面するものどうし、我 (Ich) と汝 (Du) のあいだでの持続の交差として捉えている。つまり自我は他者を、他者独自の持続を持つ者として体験しうるということ、しかも自分自身は反省によってしか近づくことができないにもかかわらず他者には「生き生きとした現在」のうちで対面できるということ、それは自我と他者の意識の流れが交差するということ、つまり「共に年をとること」を説いている。自我と他者の共在が認識されるとは、自我と他者の持続の「同時性」が、しかもその同時性のみが認識されるということを示している。しかしその同時性とは、あくまでいわば「共に年をとる」ということ、持続の流れをもっていることを認識するのみであり、それ以上にたがいの意識やその時間に関与したり、内容について認識したりすることができることを意味するわけではない。そのうえで、シェーラーの言う「われわれ」の先与性、つまり自我や他我が現われる前に「われわれ」の関係が存在するということは、こうした同時性の体験によって可能になっている、とシュッツは述べている。

このようにシュッツは、「他我存在の一般定立」を、自我と他我の意識の流れが「同時的」になり、両者が「生き生きとした現在を共有すること」のうちで可能になると見ている。そしてルーマンはシュッツのこの「同時性」を、意味の社会的次元での非同一性の前提としての「時間的次元」での縮減として捉えている。

したがってルーマンは、「意味」論文において意味概念を規定するなかで、意味の同一性が可能になるために必要な三次元の分化として事象的次元、社会的次元、時間的次元を挙げ、とりわけ社会的次元における非同一性（つまり、社会的次元の存立自体）を支える事象的次元での同一性と時間的次元での同一性に関して、シュッツによる「視角の相補性」の議論と「同時性」の議論を参照していたのであった。

しかしルーマンは、シュッツの説をそのまま受け容れているわけではない。とりわけルーマンの活動の後期になると、その違いをより鮮明にさせるようになっている。次節では、後期のルーマンがどの点でシュッツから離れるに至っているかを検討する。

1-2-3. 間主観性の主観化——フッサールの超越論的主観主義批判

後期のルーマンによるシュッツの評価に移るまえに、ルーマンによるシュッツの参照として挙げておきたいことが一点ある。それはルーマンによるフッサール批判であり、この点に関しては、多くの箇所ではシュッツの見解を明示的にあるいは暗示的に受け入れて論じている。詳細は省略するが、主題ごとに示しておく、日常的思考と科学的思考の区別に関しては「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」(Schutz 1962c=1983c)、フッサールによる間主観性の問題から超越論的主観性への飛躍に対する批判は「エドムント・フッサールの『イデー』第 II 巻」(Schutz 1966a=1998a) や「フッサールにおける超越論の間主観性の問題」(Schutz 1966b=1998b)、フッサールにおける「構成」(Konstitution) 概念の曖昧さ・両義性については「フッサール後期哲学における類型と形相」(Schutz 1966c=1998c) およびそこで引用されているオイゲン・フィンク「フッサールの現象学における操作的概念」(Fink 1976=1978) を参照していると考えられる。

ルーマンによるシュッツとフッサールの対比には交錯が見られるが、間主観性を問題として提起したフッサールを評価する一方、この間主観性を可能にするものとして超越論的主観性を導出する点についてはシュッツによる批判を受け入れる。しかしまた、シュッツが間主観性を問題ではなく所与と見なし、これを前提として生活世界の分析へ向かう点に関してはむしろシュッツの側を批判する。

フッサールにおける間主観性から超越論的主観性への飛躍に関してシュッツを参照していると考えられる箇所を引用しておこう。

世界構成の間主観性 (Intersubjektivität der Weltkonstitution) とはつまり、さまざまな主観が持つ意味体験の志向的な視角が一致することを示すものに他ならない。この世界構成の間主観性自体を人格化することはできない (nicht personifizierbar)。フッサール自身がしばしば間主観性の保証という事態から、より高次の人格性という意味での社会的な生の共同体 (Lebensgemeinschaften) の仮定へと滑り込んでいる。

(Luhmann 1967a: 112=1983a: 120 (註 29))

この部分に関しては、シュッツの「エドムント・フッサールの『イデー』第 II 巻」の以下の記述が下敷きとされていると思われる。

[フッサールによる] コミュニケーションを行なう諸主体が、より高次の人格的統一体、つまり社会的・文化的な諸客体からなる世界を自身の環境としてもつ社会的な主観性 (集合体) を構成 (constitute) する、という仮定はまったく不明瞭なものである。この理論はヘーゲルやデュルケーム、あるいは今世紀 [20 世紀] 初頭のドイツで支配的だった社会科学の「有機体」学派 (例えばヴェント) に起源をもつのだろうか。それとも、オットー・フォ

ン・ギールケ¹⁴による「社会団体 (sozialer Verband)」(フッサールにもしばしば登場する概念である)についての法理論に起源をもつのだろうか。[しかし]ジンメル、ヴェーバー、シェーラーによる、社会的集合体を諸個人の社会的相互行為^{インタラクション}に還元する試みのほうが、この現象学の創始者による〔社会的な領域に〕関連する言明よりも、現象学の精神により近いように思われる。フッサールによる本書『イデー』第II巻]での研究には疑いもなく、社会科学の基礎づけに関わる最も深遠な洞察がふんだんに含まれている。しかしそうした洞察は、コミュニケーションや社会集団の分析に取り組みられたところ以外の部分に求められなければならない。(Schutz 1966a: 38-39=1998: 84)

これと関連する「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」の結論部で書かれていることも参照しておこう。

この考察の結果としてわれわれは、フッサールが超越論的自我の意識による働き (operation) という観点から超越論的な間主観性の構成 (constitution) を説明しようとした試みは、成功しなかったと結論しなければならない。間主観性は超越論的な領域の内部で解決しうる構成の問題ではなく、むしろ生活世界の与件^{Gegebenheit} (Gegebenheit) であると考えられる。間主観性とは世界における人間存在の根本的に存在論的なカテゴリー (the fundamental ontological category of human existence) であり、つまりは哲学的人間学の根本的に存在論的なカテゴリーである。(Schutz 1966b: 82=1998b: 136)

おそらくシュッツによるこの結論に関して、ルーマンは前半部に対しては賛同するであろうものの、後半部分に関しては懐疑的であっただろう。上記の引用の前段では、「おそらくシュッツは、やはりこの所見〔世界の間主観的構成〕をひとつの事実 (Faktum) として受け入れていると思われるが、もちろんこれはいつかあるときに生じた事実ではなく、ひとつの問題 (Problem) である」と註記している (Luhmann 1967a: 112=1983a: 120 (註 28))。さきほど引用した箇所続きで、ルーマンはフッサールが陥った点をこう結論づけている。

フッサールは〈体験の間主観性〉から〈社会的システムの理論〉への移行の問題を、〈一般的なもの〉から〈特殊的なもの〉への演繹的な移行によって解消しようと試み、そうすることでこの問題を著しく過小評価した。(Luhmann 1967a: 112=1983a: 120)

遡って『信頼』の註記では、フッサールの間主観性が行き詰ったのは、「現象学的還元」によっていわば「作為的に孤立化」させた「超越論的主観性」の視角を絶対化したことにあり、これは「絶対化された機能主義」と同じジレンマに陥っていると述べていた (Luhmann

¹⁴ 本文では Rudolf Gierke (ルドルフ・ギールケ) とあるが、「社会団体」について述べたのは Otto Friedrich von Gierke であると考え、こう修正した。

1968a: 4-5 (Anm.10)=1988 : 161-162 (註 10))。かつて「機能的な方法とシステム理論」では、比較の視点の無根拠さに対して最終的な根拠を与えることを批判し、その代わりに準拠枠としてシステムを据えていた。この無根拠さを露わにする点にフッサールの貢献を見出し、他方でそれに最終的な根拠を与えようとするフッサール自身や、またその無根拠さを不問にするシュッツを批判する。ルーマンが以降で「間主観性」の用語を避け、あくまで「社会的システム」と「コミュニケーション」にこだわるに至る一端がここにもある。

2. 間主観性論と社会理論の疎隔——ルーマン後期におけるシュッツの批判と評価について

ルーマンは自身の社会理論を発展させるなかで、当初は社会的システムを行為システムと捉え、その要素を行為としていたが、やがてコミュニケーションの連鎖からなるコミュニケーション・システムとして捉えるようになる。その試みは、『社会システム理論』(1984)で体系化される。システム／環境の区別に基づくシステム理論のもとで社会的システムを扱うという点や、社会的な現象を単独の行為のもとにおいてではなくシステムのなかで論じるという点では変わりがないが、その社会的システムの単位を行為ではなくコミュニケーションに改め、システムをオートポイエティックなシステムとして規定し直している。

そのなかで、シュッツとの差異もよりはっきりとさせるようになっている。

2-1. 間主観性かコミュニケーションか

まず変化が見られるのが、「間主観性」や「意味の間主観的な構成」の位置づけである。『社会システム理論』では、より批判的な視点から「間主観性」について論じている。

『社会システム理論』においてもルーマンは、意味概念を規定するにあたって意味の三次元に言及しているが、「意味の社会的次元」について述べている段で、以下のように記している。

したがって社会的次元もまた、二重の地平によって構成 (konstituieren) されている。つまり社会的次元は、あるシステムに関わる統握の視角が他のシステムによっては共有されない、ということが体験と行為のなかで際だってくるにつれて重要なものとなる。そしてここでもまた、自我 (Ego) と他我 (Alter) が地平を保持しているということは、[どれだけ検証しても]さらなる検証を排除できないということの意味している。その際この点においても二重の地平がある意味次元 [社会的次元] の自立性にとって構成的 (konstitutiv) であるのであり、社会的なもの (Soziales) をあるモナド的な主体の意識の能作 (Leistung) に還元することはやはりできない。それゆえに、「間主観性」の主観的な構成 (subjektive Konstitution von „Intersubjektivität“) の理論の試みはすべて挫折したのである。(Luhmann 1984: 120=1993: 124-125)。¹⁵

¹⁵ この箇所の註では、ハーバーマスの「討議」の理念における時間的制約の欠如を指摘し、「間主観性」の主観的な構成の挫折として、フッサールの『デカルト的省察』第五省察 (Husserl 1950: 122ff.=2001: 161 以下)、遺稿集『間主観性の現象学』(Husserl 1973)、またシュッツの「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」(Schutz 1966b=1998b)を参照指示している (Luhmann 1984: 120=1993: 449 (註 48, 49))。

ルーマンは「間主観性」(Intersubjektivität)があくまで「主観」(Subjekt)に依拠してのみ立てられる問題であり、そうであるがゆえに挫折せざるをえなかった、ということを描く。より詳しい説明が、「間主観性かコミュニケーションか」(1986)のなかで行なわれている。

フッサールは『デカルト的省察』第五省察で努力を尽くしたにもかかわらず間主観性の問題を解決することができなかった、として非難された。解決することができなかつたのも当然である。フッサールはきわめて厳密な思想家であり、超越論的主観主義という立場に伴う種々の難点を見過ごすことができなかった。「間主観性の問題」はもっぱら主観理論 (Subjekttheorie) の文脈と用語でのみ提起されているが、しかしながらこの間主観性の問題は、主観理論自体の撤回を暗に求めるものである。この問題は、主観の理論が受け入れざるをえず、しかも自己放棄することなしには受け入れることのできない修正の必要を示している。つまり、「間 Inter」と「主観 Subjekt」は矛盾するのである。より正確に言えば、あらゆる主観が自身に固有の間主観性をもつ。

(Luhmann 1986b: 42=2007a: 168) ¹⁶

間主観性の統一についての問いをこれ以上追究しても望みは薄く、社会的なもの (das Soziale) それ自体が統一的なものとして実現されている (sich realisieren)、ということから出発するほうが見込みはあると思われる。意識の自己言及的な閉じを、独自の様式をもつ主観性として受け入れなければならないならば、このこと〔統一的なものとしての社会的なものの実現〕は意識の外側でのみ生じうることである。マッ

¹⁶ この註記ではシュッツの「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」が文献指示されており、またその後の現象学の諸文献は「この問題性の深さをますます見失っていった」と評している (Luhmann 1986b: 42 (Anm.2)=2007a: 194 (註 2))。また、引用箇所最後に付された註 (3) ではこう記している。

このことは少なくとも、「各行為者は自分自身と他者との両方に対して、行為の担い手 (agent) かつ志向 (orientation) の対象の両方である」という、パーソンズによる二重の「二重の偶有性(ダブル・コンティンジェンシー)」(doppelte „doppelte Kontingenz“) の定理のなかで認められている (Talcott Parsons, “Interaction: Social Interaction”, *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol.7, New York 1968, pp.429-441 (引用は p.436))。しかしながら行為理論的な基礎見解の枠内では、この問題に対して価値理論的な解決しか提示できなかった。パーソンズがこの立場からはシュッツに答えることができなかったというのは、理解しやすいことである。この点については、Richard Grathoff (ed.), *The Theory of Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Bloomington, Indiana. 1978 [=1980, 佐藤嘉一訳『A.シュッツ=T.パーソンズ往復書簡 社会理論の構成——社会的行為の理論をめぐって』木鐸社]を見よ。ただし、この往復書簡の時点では、パーソンズの二重の「二重の偶有性」という定理は、まだ展開されていなかった。(Luhmann 1986b: 42 (Anm.3)=2007a: 194-195 (註 3))

クス・アドラーの概念的直観がすでに同様の方向へ進んでいたが、その直観は「社会的アプリアリ」(Sozialapriori)という表現に嵌まり込んで出られなかった。筆者の提案は、複数の主観性の「間」という関係的な手法を、はるかに豊かな分析可能性を提供するシステム理論的な手法によって置き換える、というものである。

(Luhmann 1986b: 49-50=2007a: 178)

後期のルーマンにおいても、自我と他我が異なる視角と地平を有しており、そのことが意味の社会的次元の前提をなしている、と論じる点では変わりがないが、そのことを表すのには、あくまで主観理論の文脈で立てられている、諸主観の統一としての間主観性の概念は妥当でなく、社会的なもの、つまりコミュニケーションそれ自体が統一を示している、と説く¹⁷。最晩年の『社会の社会』(1997)では、このように総括している。

しばしば想定されているのとは異なって、社会的諸関係が機能していくことは、つまりわれわれの言い方をすれば社会のオートポイエーシスは、「間主観性」に依存しているわけではなく、ましてや「合意」(Konsens)に依存しているのでもない。間主観性はいつもすでに与えられているというわけではないし、おのずと産み出されるというわけでもない(もしそうだとしたら、間主観性が達成されているか否かを確認でき

¹⁷ オートポイエーシス論や「ラディカル構成主義」の視角からフッサールの現象学を読み替える試みとしては、他に『近代科学と現象学』(Luhmann 1996a=2007)を参照。ここでは「意味を構成する作動」(sinikonstituierende Operationen)を「心的システム」と「社会的システム」の双方に属するものとするという従来の主張をなぞったうえで、フッサールの理論型を「主体」ではなく「社会的システムとしての社会」(Sozialesystem Gesellschaft)に移植することを提起している(Luhmann 1996a: 52-53=2007: 41-42)。その続きでは、以下のように記されている。

確かに社会学には、目下のところそうした読解に対する心構えがなかった。おまけに、振り返ってみればフッサールや、ついでに言えばハイデガーも、社会学を顧慮しないままであったという点が注目される。おそらくは自然科学と精神科学の区別が認識の可能性の領域をきわめて強く構造化しており、そのため第三の候補には機会が恵まれなかったのであろう。このこと〔現象学者たちが社会学を顧慮しなかったこと〕がなおさら驚くべきことであるのは、アルフレート・シュッツがこうした視野の制限について注意を促し、マックス・ヴェーバーの行為理論を組み込むによって現象学(これがシュッツにとっていかなるものであったにせよ)をより豊かにしようと試みていることによる。しかし、そのことが行為(Handlung)の概念から行なわれたのは、よい着想ではなかったように思われる。行為の合理性がヴェーバーとともにいよいよ疑問に付されており、行為の社会性(Sozialität)がまたしても主観的に思念された意味への立ち返りによってのみ規定されえたからである。それゆえシュッツの試みは、もっぱら間主観性の主観性(Subjektivität von Intersubjektivität)という問題、つまりすでにフッサールが躓いた問題へと至るにとどまった。さもなければこの試みは、「現象学」という名前を名乗るだけで、現象学に結びけられてきた問題意識を継承しない、科学的な客観主義へと転落せざるをえなかったに違いない。(Luhmann 1996a: 54-55=2007: 43)

るということが前提とされるだろう)。その代りに決定的であるのは、コミュニケーションが継続されていくということである——そのことに必要な意識がいかなる仕方に関わるように動員されるのかということにかかわらず、である。[そもそも] その際に意識システムが「本格的」(authentic)に関わっているのか、それとも[コミュニケーションの] 進行に必要なことだけに貢献しているのかを、コミュニケーションのなかで確認することなど決してできない。ガーフィンケルによる有名な実験が明らかにしたのは、他ならぬこのことであった。したがって「間主観性」や合意といった前提は、端的に放棄しうる。コミュニケーションは主体にも社会的アプリアリにも「生活世界」にも、あるいはそれら以外の何かにも帰すことができない。つまり、あらゆるコミュニケーションの前提としてつねにすでに与えられていなければならないとされる何かへ還元する、という意味でコミュニケーションをそれらへと帰すことはできないのである。(Luhmann 1997: 874-875=2009: 1172, 1561 (註 15-18))

ルーマンは「社会的システム」の要素を考えるにあたって、なお「主体」との結びつきが強い「行為」を避け、あくまで社会的な差異としての情報/伝達に基づく「コミュニケーション」概念に依拠するようになったのであったが、それと同時にやはり主体と結びついた「間主観性」も避けるに至っている。

2-2. 「生活世界」批判と、差異の統一としての「世界」

ルーマンは自身のシステム理論を発展させるなかで、「世界」概念についてもより明確な規定を与えるようになり、「生活世界」の概念に対する評価も、それに合わせて下している。

ルーマンは「社会的システムの理論としての社会学」ですでに、システムは環境から区別されるものとして初めて成り立つのであって、「世界は自身から区切られるいかなる『外部』ももたない」がゆえに「世界をシステムとして把握することはできない」と記していた(Luhmann 1967b: 617=1983b: 130)。

そして『社会システム理論』でのルーマンは、「世界」を「システムと環境の統一」として扱うようになる。世界は差異を超えた統一として、しかしある差異に基づいてのみ(差異を超えた統一として)把握されるものとして、パラドキシカルに規定している。

世界という概念は、当然ながらきわめてさまざまなかたちで見積もられており、例えば、自分たちの集団の外部にある救済を脅かすものの総体として、あるいは主体(この場合、必然的に世界外的な主体エクストラムンダーン)に対峙するものとして、見積もられている。世界の「間主観的」な構成(eine „intersubjektive“ Konstitution von Welt)という(社会学者にとって他よりも魅力的な)考えも、論を先へと進めることにさほど役に立つわ

けではない。こうした世界の間主観的な構成という考えはきわめて自明のものであり、理論的に十分な成果を生み出すものではない。われわれは本書で世界概念を、システムと環境との差異の意味統一 (*Sinneinheit*) を示すための概念として取り入れており、差異のない極限概念 (*Letztbegriff*) として用いている。このように考えられた世界概念は (いかに包括的で全体的なものであれ) 事象の総体を指し示すものではなく、つまりは物ノ宇宙 (*universitas rerum* [事物の総体]) を指し示すものではない。そうした事物の総体を、差異なしに考えることはできないのである。根源的にそして現象学的に把握されるならば、世界は把握不可能な統一として与えられている。システム形成をとおして、またシステム形成に相関して、世界は差異の統一として規定可能なものとなる。どちらの見方にもあてはまるのは、世界概念が意味システムにとってのみ顕在的となりうる統一を指し示しているということである。意味システムは自身を環境から区別することができ、そうすることでこうした [システムと環境の] 差異の統一を二つの無限なるもの、つまり内部と外部とを包括する統一として反省 (*reflektieren*) している。したがってこの意味での世界とは、意味システムの分出によって、つまりシステムと環境の差異によって構成 (*konstituieren*) されるものである。そのかぎりでの世界は (現象として与えられている世界とは異なり) 根源的なものでもなければ原型的なものでもなく、ある差異に付随する表象としての最終統一なのである。そうした世界とは、原罪以降の世界である。(Luhmann 1984: 283-284=1993: 329)

ここでルーマンは「世界」を「差異なしに考えることはできない」一方で「把握不可能な統一」として与えられるものとして、意味システムの分出に相関するものとして論じながら、世界を「世界外的 (*extramundan*) な主体」と対峙するものや「意識の相関物」として捉えること (フッサール) や、間主観的に構成されるもの (シュッツほか) として把握することを斥けている (Luhmann 1984: 283=1993: 328, 417 (註 66-68))¹⁸。

また「生活世界」に関しても、こうした「世界」を差異やシステム形成との相関で捉えるという観点から論じている。「生活世界——現象学者との対話のために」(1986) では、「生活世界」概念の曖昧さと、他方でこの概念を用いるフッサール以降の論者が「超越論的前提」を受け入れていない点、例えば「シュッツが超越論的反省を打ち切ったこと」が「進歩」と見なされる傾向をむしろ批判している (Luhmann 1986: 176=1998: 101, 120 (註 1, 2))。そこで「生活世界」自体を問題化すると、「生活世界はひとつの世界であるように見える」が、「その場合、多くの世界のうちのひとつなのであるだろうか。そうだとすると、他の世界はどこにあるのだろうか。生活世界の内側か外側にあるのだろうか」という疑問が生じる。「多数の世界」、「複数の世界の入れ子構造」を認める「世界」とはいかなるものか、と。フッサールはこの問いに対して「地平」(*Horizont*) と「地盤」(*Boden*) という二つの異なるメ

¹⁸ ルーマンが批判するフッサール以後の現象学的な「世界」概念については他に、Landgrebe (1963=1980) も参照。

タファーを与えたが、そもそもこの二つのメタファーがたがいに矛盾しており、「生活世界についての従来の言明は、こうした矛盾によって打ち碎かれる」とルーマンは評している (Luhmann 1986: 177=1998: 102-103, 121 (註 3, 4))。こうした矛盾を前提としてルーマンは、「世界」に対して、現象学的な「本質的な相における記述」ではなく、「操作的 (operativ [作動的]) な接近」を試みることを提案する。しかも、「あらゆる操作 (*Operation* [作動]) はある区別によって始められなければならない」とする (Luhmann 1986: 180=1998: 106) ¹⁹。

したがって、フッサールの意図とは異なり、生活世界の問題はひとつの『統一根拠』 (Einheitsgrund) にではなく、いかなる区別が生活世界を構成 (konstituieren) するか、という問いへと立ち戻る。 (Luhmann 1986: 194=1998: 120)

そしてルーマン自身は、スペンサー＝ブラウンの論理学における、区別によって「マークされない空間」 (unmarked space) の概念を参照しながら、「世界」のうちの「生活世界」を、「慣れ親しまれた／慣れ親しまれていない」 (vertraut/unvertraut) の区別によって、慣れ親しまれたものが「凝縮」されたもの、「あらゆる慣れ親しまれた意味凝縮物の指示連関」としている (Luhmann 1986: 180-182=1998: 106-108)。

以上のように、ルーマンは自身の社会理論を差異や区別に基づく理論として特徴づけるなかで、「間主観性」や「生活世界」を批判的に論じている²⁰。あるいは少なくとも、何らかの区別に基づくものとして読み替えている。

2-3. 我と汝の「同時性」と、システムと環境の「同時性」

「同時性」と「共に年をとること」に関しては、ルーマンはひき続きシュッツを参照して

¹⁹ この箇所の註でルーマンは、ここで「操作」[作動] (*Operation*) の語を使う理由を、意識による思考的な作動と社会的システムのコミュニケーション的な作動の両者を扱おうとするためにある、としている。特に現象学の立場と異なり、社会的現象を前者に還元することは避ける、とも付け加える (Luhmann 1986: 180 (Anm.15)=1998: 122 (註 15))。

²⁰ ルーマンはフッサールに加えてハーバーマスの名前を挙げて、「生活世界」の概念が批判という意図のもとで用いられてきたことを指摘し、彼らが行なっているとする区別の一方の側に生活世界を置き他方の側に批判の対象 (フッサールであれば近代科学、ハーバーマスであれば近代の諸システム) を置くというやり方を斥けている (Luhmann 1986a: 188=1998: 114-115)。ハーバーマスによる「生活世界」の概念については、『コミュニケーション的行為の理論』(1981) 第二巻「機能主義的理性批判」第六章「第二中間考察——システムと生活世界」(Habermas 1981(2): 171-293=1987 (下): 9-129) を参照。またハーバーマスの生活世界とシステムの分断という観点から見るルーマンの「生活世界」理解については、Habermas (1981(2): 461-462=1987 (下): 299-300) を参照。反対に、ハーバーマスによるルーマンの「世界」概念の難点についての指摘は、Habermas (1971: 229-232=1987: 278-282) を参照。ハーバーマスとルーマンの論争については、Füllsack (2010) も参照のこと。

いる。しかしルーマンのシステム理論の深化に併せて、この「同時性」に関してもシステム理論での規定があらためて与えられるようになっている。『社会システム理論』から引いておこう。

基本的に、[システムの] 時間的な分出はシステム固有の要素の分出から把握されなければならない。システムの諸要素^{エレメント}が時間との関係によって定義されるにしたがい、つまり出来事の性格 (Ereignischarakter) を帯びるにしたがって、二重の効果が生じてくる。ひとつには、ここでもそれ以外の場合と同様に、要素 (Elemente) という基礎にもとづくことでシステムと環境のあいだには一対一の対応がまったく存在しえない、ということがあてはまる。もうひとつには、まさにそれゆえに、システムと環境のなかでの [諸要素の] 各時点 (Zeitpunkte) の同一性およびそれらの時点間の関係の同一性、要するに等しい時間の流れ (gleichmäßiges Fließen der Zeit) が必要とされるのである。アルフレート・シュッツは、共に年をとること (gemeinsames Altern) について論じていた。いかなるシステムも他のシステムよりも速く未来へと進むことはできず、それゆえ環境との接触のために必要な同時性 (Gleichzeitigkeit) を失うことはできない。仮にアインシュタインにしたがって「時間」がこのこと [システムと環境の速度の違い、同時性の喪失] を認めるとしても、システムは自身の環境と固着したままであるだろう。環境とシステムの差異は、もっぱら同時的なもの (gleichzeitige) としてのみ確立されうる。したがって環境とシステムとの継続的な結びつきは、共通 (gemeinsam) の時系列^{クロノロジー}を前提としている。

(Luhmann 1984: 254=1993: 293-294, 423 (註 23, 24))

ただしこの箇所の註記で、「環境それ自体は体験の能力も行為の能力も持たないがゆえに、このことが意味するのは当然ながら、システムは環境にも当のシステム自身にもあてはまる統一的な時系列^{クロノロジー}を用いなければならない、ということだけである」とも付け加えている (Luhmann 1984: 254=1993: 423 (註 24))。

以上のようにシステムと環境の接触の問題として「同時性」を論じることは、「社会学的概念としてのオートポイエーシス」(1987) でより詳しく述べられている。

この問題 [システムと環境の接触の問題] にさらに取り組むためには、オートポイエティック・システムの時間性 (Zeitlichkeit) にこれまで以上に注目しなければならないだろう。さらに、カントが「観念論に対する論駁」で用いた論法に立ち返るならば、物によって刺激を受ける意識に対して、意識の外側にある物の現存 (Dasein) を証明するのは物の不変性ではなく、オートポイエティックなシステムの作動が出来事のかたちをとっていること自体が物の現存を証明するのである、と言える。ある出来事の統一もまた、環境には対応するものが存在しないひとつの内的な構成物 (ein

inneres Konstrukt) であるが、それにもかかわらずシステムにとって環境は、こうした [出来事の] 形式のなかで同時性 (Simultaneität) によって把握することができるのである。つまり、ある瞬間にシステム内で顕在的であるものと環境内で顕在的であるものとの同時性 (Gleichzeitigkeit) として、把握されうるのである。しかもまさにシステム自身のオートポイエーシスが出来事をただちに非顕在化し、それらの出来事との結びつきから離れることから、環境内の何らかのリアリティはシステム自体の内部とは異なった仕方で経過し出来事に異なった接続を与える、ということを読み取りうる。出来事に限定され、ただちに [現れては] ふたたび消え去る顕在性がはっきりと明らかにするのは、システムは継続的に環境と統合されるものの、同時に特殊な選択の地平の点では分出しており、ひとたび環境と関係を結んでも、永遠にそこから離れないというわけではない、ということである。(Luhmann 1987: 314=1993b: 115-116)

ここで明確に、システムと環境の「同時性」はシステムが「出来事」の要素をもつことに由来すると説いている。さらに註記で、「同時性」の機能をシステムが環境ともつ接触のリアリティに見出すことに関して、ルーマンはまず生物学の研究に、そして社会学ではシュッツの研究に萌芽が見られる知見としている。さらに、「間主観性」の議論を、あらためて意識システムとコミュニケーション・システム (社会的システム) との同時的な関係 (システムどうしとの関係としての「相互浸透」) とし捉えなおすことを示唆している (Luhmann 1987: 323 (Anm.18, 19)=1993b: 123-124 (註 23, 24))。

さらに「構成主義の認識プログラムと未知のままのリアリティ」(1990) では、構成主義的な観点のもとで認識 (を行なうシステム) について考える場合、いかにしてリアリティが担保されるのか、という問いに対して (システムと環境の) 「同時性」という回答を与えている。脳、意識、さらにコミュニケーション・システムとしての社会まで含む「認知的システム」は、「瞬間的な顕在性だけをもつ」「出来事 (Ereignisse) という基礎の上で作動する」が、そうした「現われるやいなやふたたび消滅し」絶えず「他の出来事によって置き換えられなければならない出来事」に基づくシステムは、環境といかなる「時間関係」をもつと考えられるか、という問いを立てたうえでこう続ける。

その答えは、同時性 (Gleichzeitigkeit) として、としか言うことができない。システムのリアリティの基礎とは、つねにそのシステム自身による観察の意味的な輪郭でありうるのだが、そのリアリティの基礎とは自身の作動とその作動を支えるリアリティの条件との同時性である。システムが非顕在的な未来や非顕在的な過去、つまりさまざまな区別について何を追加しようと、システムの顕在的な現前のなかでの環境の同時性は、依然として取り消すことのできない条件である。ところで環境とは、区別のない他者と同様、特徴づけることのできない所与である。同時に存在するものは影響を受けることもなければ、システムの因果連関 (Kausalkonstellation) のなかには含

められることもなく、そして同期 (synchronisieren) されることもない。しかしそうであるにもかかわらず、それは時間の区別 (Zeitunterscheidung) が導入されるための条件である。システムは自分自身を未来から過去までの時間との関係で位置づけたり、瞬間を持続ないし永続との関係で位置づけたりする。そしてそこから何が生じるにしても、システムに関わるかぎりでの時間を構成している。任意に処理できないままであるのは、システムのあらゆる作動のなかでそのつど瞬間的に再生産される同時性であり、アルフレート・シュッツの言う「共に年をとること」(das „gemeinsame Altern“) や、[ジャン=ジャック・ルソーが独白する] サン・ピエール島の湖畔の波音——あの「絶え間ない、しかしときに大きく聞こえてくる音」、内的な運動によって収斂しつつ、「私が考える苦しみを負わずとも、[ただこうしているだけで] 存在することの喜びを感じ」させてくれる、あの波音である。(Luhmann 1990a: 42)

この箇所の註 (Luhmann 1990a: 42 (Anm.25)) で参照指示している「同時性と同期化」(1990) では、本編をこのように始めている。

われわれは些細だが刺激的なテーゼから始めることにしよう。そのテーゼとはつまり、生起するものはすべて、同時に生起する (*alles, was geschieht, gleichzeitig geschieht*)、というものである。(Luhmann 1990b: 94)

ここでルーマンは、「同時性」(Gleichzeitigkeit) が「あらゆる時間性にあらかじめ与えられている根本的な事実」(aller Zeitlichkeit vorgegebene Elementartatsache) であって、「いかなる出来事」(Geschehen) ないし「システム」から出発しようとも、「他のものが過去にとどまる仕方」で「より早く生起する」ことはできず、また「他の出来事の未来へと先回りすること」もできない、としている。そして「アルフレート・シュッツが、時間はあらゆるものに対して等しく流れる (*die Zeit für alle gleichmäßig fließt*)、あるいは別の言葉では、われわれは共に年をとる (*wir gemeinsam altern*)、と強調したことは、まさにこの事態を別様に表現したものである」と続けている (Luhmann 1990b: 94)。

さらにルーマンは、意味の三次元において、社会的次元、事象的次元と時間的次元の分化と相互関係として「同時性」を論じていたものを、システムと環境の「同時性」として、さらに抽象化して扱っている。システムは環境と同時にあり、そのかぎりでシステムのリアリティとは環境との「同時性」のうちにある。しかし、当のシステムを離れて環境があるわけではなく、そのかぎりで同時性もまたシステムによって捉えられたものにすぎない。つまり、システムと環境の分化によって初めてシステムと環境との同時性が与えられるのであり、ある差異によって初めて同時にシステムと環境とが与えられている。観察者という観点から見れば、この同時性とは、ある観察者による区別をとおして区別されたものたちのあいだの同時性である。

ルーマンとシュッツの「同時性」の違いについて考えると、シュッツが「われわれ」の同時性、「われわれ」における「我と汝」の同時性について論じているのに対し、ルーマンはいわば我と我ならざるもの、もしくは「われわれ」と「われわれ」ならざるものとの同時性について論じている。両者における「社会的なもの」の位置づけの違い、また「環境」(Umwelt [シュッツの場合、「直接世界」とも訳される])を外的なものとするか内的なものとするかの違いに起因している。

シュッツの「意味構成」とルーマンの「構成主義」の「社会理論」との関係と相違は、この社会的な「同時性」の議論にも現れている。この点については、章をあらためて論じることとする。

3. 小結

本章ではルーマンがアルフレート・シュッツをいかに論じ、取り入れているかについて、特に三つの段階に分けて検討した。初期のルーマンは、機能主義における「機能」を因果的なものとしてではなく比較の軸として読み替える「等価機能主義」を説いていたが、そこで比較の技術のひとつとしてシュッツとフッサールを参照していた。その際には特に、比較と「合理性」の問題が注目されていた。とりわけシュッツが取り組んだ「行為者自身にとって可能な合理性」を、ルーマンはシステム理論と接合しようと目論んでいた。そして社会理論にとって十分に複雑で明確な「意味」概念を規定するにあたり、シュッツを手がかりとして後期フッサールに由来する意味の間主観的構成の問題へのアプローチに取り組んだ。

「意味」論文では、意味の間主観的構成における事象的次元と社会的次元の相互支持の関係を見るために、シュッツの「立場の相互交換可能性」と「視角の相補性」の議論が参照されている。ルーマンはこれを、意味の社会的次元における非同一性と事象的次元における同一性がたがいを前提としていることと見た。さらにルーマンの言う意味の三次元のもうひとつの次元としての時間的次元に関して、シュッツの「体験流の同時性」、「共に年をとること」を参照しながら、社会的次元が成立する前提としての時間的次元での同一性として扱った。また間主観性に関して、これを「超越論的主観」といったさらなる統一的な人格に還元するフッサールのような試みは、シュッツによる批判にも基づいて斥けた。他方、シュッツのように、これを単なる「所与」と認めることもできない、と留保している。

そしてルーマンが自身の社会理論に、自己言及性さらにオートポイエーシスの概念を導入し、また社会的システムの要素を「行為」ではなく「コミュニケーション」であると述べるようになって以来、シュッツに対する距離も変化する。『社会システム理論』では、社会的次元に関して、間主観性のもとで統一を求めるのではなく（そうすると不可避免的に主体のもとでの統一、主体どうしての統一に至る、として）、社会的なものそれ自体、コミュニケーションのもとに統一がある、としている。「間主観的構成」といった表現も避けるに至る。併せて、システム／環境の区別を用いたシステム論という図式をより明確化するに従い、「世界」はそれらの差異の統一として、しかもその差異以降の統一として捉えられる。その点からルーマンは世界をシステム相対的かつシステム以後的なものとして考えるわけであるが、その際に現象学的な「世界」概念や「生活世界」概念における主体と対峙するものとしての世界、また間主観的に構成されるものとしての生活世界という見解を批判している。しかし、シュッツの知見に関していえば、ルーマンがシステム／環境の区別に基づく自己言及的なシステム論を展開するにあたって、特に「同時性」の議論に関してはなお参照している。ただし、単に「われわれ」のなかでの「我と汝」の同時性ではなく、あくまでシステムと環境が、いわば内と外が区別されるなかで初めて生じる同時性として論じている。

結論として、ルーマンは自身の社会理論における「意味」概念を明確化するために、シュッツによる意味分析の成果を援用していた。特に事象的次元、社会的次元、時間的次元という多元的に成り立つ意味について論じるために、シュッツの諸概念を参照した。しかし、システム理論をさらに発展させるなかで、フッサールはもちろんのこと、シュッツにおいてもなお主体と結びつけられていた諸概念からは離れていく。さらにそのうえで、抽象化されたかたちで活用はされ続けていく。ルーマンとシュッツが分かれうるのは、「社会的なもの」の位置づけにおいてである。しかし他方で、ルーマンが「社会的なもの」として扱っているコミュニケーションの規定に遡ると、シュッツが間主観性のもとで論じたものが残っている。したがってルーマンは、社会科学における「意味」の問題や「観察者」の問題をシュッツから受け継ぐが、「観察者」の位置に「個人」や「主体」ではなく、「社会」を置く点、また「同時性」も個人と他者の同時性としてではなく、社会（社会的システム）とその環境とのあいだの同時性として置く点に違いがある。

次の章では、シュッツとルーマンの双方で論じられている社会的な「同時性」に関する議論を見ていくことにする。この「同時性」は、社会的な「構成」においてもひとつの問題となる。

第四章 社会的な構成の時間としての「同時性」

1. シュッツの「同時性」論——「われわれ関係」の前提としての「同時性」

シュッツの多元的な「構成」には、その根底に意味と時間の関係が横たわっていた。そしてシュッツを承けて意味的なシステムについて論じたルーマンでも、意味のもつ時間次元が前提とされており、かつシュッツの「同時性」の議論を摂取していた。

シュッツは、社会的世界の最も根源的な層をなす「われわれ関係」、対面する我と汝との関係の前提には「同時性」があると述べた。本章では、この「同時性」がいかなるものであるのかを検討する。シュッツは「同時性」を「共に年をとること」や「共に音楽を作ること」とも表現する。ただしシュッツは同時性を必ずしも自身で体系立てて論じているわけではなく、そのためシュッツの同時性を扱った先行研究もそれぞれ異なった点に注目し異なった内容を引き出している。そこで本章では、まずシュッツによる「同時性」の議論を網羅し、それに対する批判と応用を踏まえて問題点と可能性を追求する。

1-1. シュッツの時間論と「同時性」

シュッツは初めに『意味構成』のなかで「同時性」の「同時」が指す意味を、対面関係のなかでの我と汝の関係として以下のように規定している。

したがって私は、私自身の体験をただ経過し投企され終わった体験として眺めうるにすぎないのに対し、他者の体験 (*fremde Erlebnisse*) は当の体験が経過するなかで眺めることができる。しかしこのことは、汝 (*das Du*) と自我 (*das Ich*) とが特殊な意味で「同時的」(*gleichzeitig*) であることを意味するに他ならず、つまり汝と自我とが「共存」(*koexistieren*) し、自我の持続と汝の持続とが「交差」することを意味するに他ならない。(Schütz 2004: 226=2006: 162)

シュッツはこの「同時性」(*Gleichzeitigkeit*) を、ベルクソンが『持続と同時性』のなかで「私の意識からみれば一つであっても二つであっても違いのない二つの流れを『共時的』(*contemporain*) と呼ぶ」(Bergson 1972: 105=1965: 209)¹とした意味で用いている (Schütz

¹ ベルクソンは併せて「単一かつ同一の精神作用のなかで把握される二つの瞬間的知覚を『同時的』(*simultané*) と呼ぶ」(Bergson 1972: 105=1965: 209) とし、「流れの共時性」と「瞬間の同時性」を分けるが、シュッツの「同時性」は両者を混合している。ただしベルクソン自身もこの区別を貫徹せず「二つの流れの同時性 (*simultanéité*)」(Bergson 1972: 106=1965: 210) とも記し、同時性自体に「流れの同時性」と「瞬間の同時性」の二つがあるとしている。シュッツが必ずしもベルクソンの前提を共有しない点は、Masuda (2009: 82-86) も参

2004: 226=2006: 163)。この「他者と自身との両者の経過を包括する統一的な作用」のなかにあるわれわれの「持続経過」の「同時性」は、数量化したり「空間的に計測」したりできる「物理的な時間の同時性」ではなく、「両者の持続の共在 (Koexistenz)」つまり「自我の持続の構造と汝の持続の構造が同種 (gleichartig) である」という本質的に必然的な仮定を示す (Schütz 2004: 226-227=2006: 163)。シュッツの「同時性」の礎には、まずベルクソンの「持続」やフッサールの「内的時間意識」に依拠して構想された時間論がある。

1-1-1. 「年をとること」としての内的時間の持続——持続の継起性と不可逆性

『意味構成』でシュッツは社会的世界の分析にあたり、ヴェーバーの「主観的に思念された意味」と結びつけられた行為概念に定位し、そこで不明瞭となっている「意味」概念を基礎づけるために「意味問題 (das Sinnproblem) はひとつの時間問題 (ein Zeitproblem) である」(Schütz 2004: 93=2006: 35)²としてまず「内的時間意識」や「持続」の分析へ向かった。「持続」は意識における体験の流れを指す概念であり、この持続の特性をシュッツは「年をとること」と言い表す。「年をとること」(vieillir, altern) もまたベルクソンが持続概念とともに用いている表現であり、測定ないし空間化されうる量的な時間ではなく「質的」な時間のもつ性質を示し、「生きること」(vivre) の同一線上に位置づけられている (Bergson 1972: 215=1965: 348 ; Bergson 1959: 86=2002: 145-146)³。ベルクソンはさらに、自分が「年をとり」時間が経って変化するなかで、自分が知覚した対象もまた同様に「年をとっている」と捉えられるとした⁴。

シュッツは『意味構成』以前の草稿でベルクソンの「持続」と「記憶」の対比を用い、「われわれは一義的にそして継続的にわれわれの持続を経過し、そしてわれわれは年をとる (wir altern)」がゆえに「持続の可逆性」を前提とする「体験と記憶像との同一性」は不可能であ

照。

² 「その性質上、シュッツ理論はつねに時間に関わる」(鳥越 2013: 75) ため、シュッツの時間論を扱った研究は多く存在する。本稿も一部取り上げるが、詳しくは同論文参照。

³ 『持続と同時性』では、「年をとること (vieillessement) と持続 (durée) とは質の次元 (l'ordre de la qualité) に属する。いかなる分析の努力もそれを純粋な量には解消しないであろう」と記している (Bergson 1972: 215=1965: 348)。

⁴ 例えばある都市に住むことになったとして、私はそこで毎日見る家々が「同じ対象」であるのを知っており、「同じ名前」で指示し「つねに同じ仕方で現われると思い込んでみる」。しかし、長い時間が経ってからかつての印象を回想すると、そこに「変化」が生じていることに気づく。というのも、「これらの対象は、私によって連続的に知覚されて、私の精神のうちで絶えず描かれるので、ついには私の意識の現存の幾許かを私から借り受けるに至ったように思われる。つまり、それらの対象は私と同じように生き (avoir vécu)、そして私と同じように年をとった (avoir vieilli) ののである。これはまったくの錯覚というわけではない。というのも、今日の印象が昨日のそれと絶対的に同一であるとしたら、知覚することと再認すること、学ぶことと想起することのあいだにいかなる差異がありうるであろうか」(Bergson 1959: 86=2002: 145-146)。

ると記していた (Schütz 2006: 67)。そして『意味構成』では、以下のように述べている。

実際に、私が持続の経過のうちに沈潜しているとき、私は相互に境界づけられた体験をまったく見出さない。今が今へと接続し、ある体験が生成 (werden) し生成し去り (entwerden)、その間に新しいもの (ein Neues) が以前のもの (ein Frühes) から成り出て、そして以後のもの (ein Spätes) へと道を譲る。そのため私は、何が今を以前から区切るのか、そして以後の今がたったいま存在した今を区切るのか、ということを示すことができない。とはいえ、過ぎ去ったもの (Verganges)、たったいま存在したもの (soeben Gewesenes)、今生成し生成し去りつつあるもの (jetzt Werdend-entwerdendes) が、そのつどの今このように (das jeweilige Jetzt und So) とはそれぞれ異なった種類のものである、ということは確かである。つまり私は、私の持続を一方向的で不可逆的な経過として体験し、たったいま存在したものと今生成しつつあるものとのあいだで、したがって移行に次ぐ移行のなかで、私は年をとっている (ich bin gealtert)。

(Schütz 2004: 141=2006: 79)

シュッツはここで、意識の持続における体験の継起性と不可逆性について語っている。「持続」はそのつどの今が現われては過ぎ去り、その流れが不可逆的であるものとされている。それを象徴的に表すのが、「年をとること」である。さらにこの箇所の続きでシュッツは、自分が「年をとること」や「今このようにあること」(Jetzt und Sosein) をたったいま存在したことから区切り体験することは「一方向的で不可逆的な経過」の内部では可能でなく、その把握は「反省」(Reflexion) を必要とすると記す。反省との対比も踏まえ、シュッツの「年をとること」とは意識の持続の流れにおける体験の、そのつどの「今このように」が生成しては生成し去る「継起性」と、その流れの「不可逆性」を指している。

1-1-2. 「われわれ関係」の前提としての「生き生きとした現在の共有」における「共に年をとること」

意識の持続の継起性と不可逆性を踏まえ、『意味構成』でシュッツは我と汝の持続が交差する「二つの持続の同時性」つまり「共に年をとること」(Zusammenaltern) のなかで他者の持続の同種性が把握される、と論じた (Schütz 2004: 226-227=2006: 163-164)。その後のシェーラー論でも、自我自身の自己は「反省」によってしか捉えられないのに対し、対面関係では他者の思考の流れつまり「他我 (alter ego) の主観性」を「他我の生き生きとした現在 (vivid present)」のもとで把握することができる、と述べている。したがってこの関係のもとでは、

他我の思考の流れはわれわれ自身の意識の流れと同時的 (simultaneous) であり、つまりわれわれは同じ生き生きとした現在を共有している——ひと言でいえば、われわ

れは共に年をとっている (we grow old together)。 (Schutz 1962a: 174=1983a: 266-267)。

シュッツはこの「生き生きとした同時性」のもとで「他者の意識の流れ」を（自分と同じ「時間構造」を有すものとして）体験することを「他我存在の一般定立」 (the general thesis of the alter ego's existence) と呼んでいる。この共有された「生き生きとした現在」が、「われわれの純粹領域」であるとされる (Schutz 1962a: 175=1983a: 267-268)。

シュッツは以降の論文で、「生き生きとした現在」の共有としての「同時性」が外的な出来事を介して成立する様を記述している。「多元的現実について」(1945)では「生き生きとした現在」を「持続」(内的時間)と「宇宙的時間」(外的時間)が「交差するところ」と説明し、両者の時間に「同時」に属する「身体の動き」(bodily movements)特に「労働的行為」(working actions)⁵によって両者の時間が単一の「生き生きとした現在」へ統一されるとしている (Schutz 1962b: 215-216=1983b: 19-20)。なかでも「社会的行為」には「コミュニケーション」が、さらにコミュニケーションには相手に解釈されるための「外的な行為産物」(overt acts)が必要であるとして、例えば会話では、外的世界で生じる話し手の発話が話し手の「生き生きとした現在」と聞き手である「私の生き生きとした現在」に共通する要素となり、そうすることで二人の「生き生きとした現在」が「同時」(simultaneous)となって私は他者の経過中のコミュニケーション過程に参加し、われわれが「生き生きとした現在」を共有するに至る、とされる。このように確立される「われわれ関係」のもとで「われわれは共に年をとる」、と。シュッツは特に「他者の自己の総体性を、時間と空間の共同のなかで原的に体験すること」が可能な対面関係を社会的な「環境」(environment, Umwelt)の「基礎構造」とし、この「パートナーたちの共現前 (co-presence)」に基づいた「われわれ関係」での「生き生きとした現在の共有」から他のあらゆる社会的関係が派生する、と見ている (Schutz 1962b: 219-221=1983b: 25-27)。別の論文では私とあなたが「飛んでいる鳥」を見ることを例に、このとき「外的 (公的) 時間におけるひとつの出来事」としての「鳥が飛んでいることの発生」が「われわれの内的 (私的時間) におけるひとつの出来事である、鳥が飛んでいるのを知覚すること」と「同時」(simultaneous)であり、ここで各人の内的時間の流れが外的時間の出来事 (鳥が飛んでいること) と「同期」(synchronous)し、そのことによって「たがいと同期する」としている。ただし「われわれ関係」にあっても他者の思考は私を超越し、この関係自体も私とあなたの各人を超越するため、他者やわれわれの把握はもっぱら「付帯現前的」に「シンボル」を介して行なわれる、と付け加えている (Schutz 1962c: 319=1983c: 149-151)。

シュッツによれば我と汝の体験流が「同時的」となって「共に年をとること」は「生き生きとした現在」を共有するなかで成立し、その「生き生きとした現在」が私にとっては

⁵ 狭義の「仕事」を意味するものではなく、外的世界に働きかける行為を指す。「作用的行為」とも訳しうる。ドイツ語 Wirken の訳としての working という含意がある (cf. Schütz/Gurwitsch 1985: 351-353=1996: 373-375)。

内的時間と外的時間とが身体の動きを介して交差するところであり、われわれにとっては外的出来事を介してたがいの内的時間が同期されるところである。そしてこの「生き生きとした現在」のなかで、他者や「われわれ」が「付帯現前的」に体験される⁶。

1-1-3. 「相互に波長を合わせる関係」としての「共に音楽を作ること」

シュッツは「共に音楽を作る」(1951)で音楽作品を「内的時間における音調の有意味な配列」(meaningful arrangement of tones in inner time)である「持続における出来事(occurrence)」とし、複数の持続における「同時性」が典型的に現われる例として論じている(Schutz 1964a: 170=1991a: 233)。音楽を演奏する過程が継続するなかで作曲者、演奏者、共演者、聴き手の間に「同時性」が創り出され、「たがいに『波長が合わせられ』(tuned-in)」「同じ流れを生き(are living together through the same flux)、共に年をとっている(are growing older together)」とする(Schutz 1964a: 174-175=1991a: 237)。特に共演者たちの間では、真の対面関係での共同の演奏活動により「生き生きとした現在」の共有が可能になるとされる⁷。また別の論文では、モーツァルトのオーケストラは舞台上の登場人物たちと観客の間に「同時性」をもたらし「間主観的な共同性」(an intersubjective situation of a community)を打ち立てると記している(Schutz 1964b: 198-199=1991b: 268-269)。

前掲論文は序でコミュニケーションに含まれる「非概念的な局面」を音楽の例で示したが(Schutz 1964a: 162=1991a: 224)、以上の分析を踏まえ「可能なコミュニケーション」はすべて「相互に波長を合わせる関係」(mutual tuning-in relationship)を前提にしていると結論づける。シュッツによればこの関係は「他者の内的時間における経験の流れを相互的に共有」し「生き生きとした現在を共に生きること」、つまり「この共同性をひとつの『われわれ』として経験すること」によって確立される。「コミュニケーション過程」は本来「外的世界における事象(an occurrence in the outer world)と結びつけられ」、「外的時間のなかで複定立的に築き上げられた出来事列(a series of events polythetically built up in outer time)の構造」をもつため、この出来事列をコミュニケーションの発信者は表現図式として意図し、受信者に対しては解釈の可能性が開かれる。そしてこの「出来事列がもつまさに複定立的な性格」が一方で「発信者の内的時間における諸経験が進行する流れと外的世界における諸事象との同時性」を、他方で「諸事象と受信者の内的時間における解釈を行なう経験との同時性」を保証する。ゆえに「外的時間と内的時間のさまざまな次元をパートナーたちが同時的に分有すること(simultaneous partaking)」つまり「共に年をとること」をコミュニ

⁶ ただし対面関係での「真の同時性」と、共現前しない他者との文化的客体・人工物を介した「疑似同時性」は区別される(Schütz 2004: 228, 270-271=2006: 165, 210ほか)。例として、会話と読書の対比が行なわれている。また他方フッサールは『内的時間意識の現象学』で、意識における知覚と知覚されたものとの「同時性」を論じている(Husserl 1966: 109-110=1967: 148-149)。

⁷ レコードのような装置を介した「疑似同時性」もある、と付け加えている。

ケーションは前提とする、と (Schutz 1964a: 177-178=1991a: 240-241)。

シュッツは音楽の例で「同時性」と「共に年をとること」を、外的事象や活動を介して「相互に波長を合わせる関係」として示す。特に外的事象の「出来事列」の構造、出来事がただちに現れては消え去る「複定立的な性格」に依拠して各人の内的時間と外的時間が結びつき、それを介してたがいの内的時間の「波長が合わせられる」と主張している⁸。

1-2. シュッツの「同時性」における問題点

シュッツの「同時性」には、先行研究でいくつかの問題点が指摘されている。シュッツの社会的世界の間主観的な構成の分析にはそれが意識分析にとどまり主観性の範囲を超えていないという批判がしばしばなされているが⁹、「同時性」への指摘もそれを含みつつそこにとどまらない。以下で取り上げる。

1-2-1. 間主観性の主観性

シュッツの「同時性」についての問題として、第一には前述のように、「同時性」のもとでの「われわれ関係」の確立という議論の出発点に、そもそも自我とその意識、我と汝の区別があることが指摘されている。

廣松渉はシュッツの『意味構成』を仔細にわたって検討するなかで、シュッツが「同時性」¹⁰のもとでの「意識流」を「非人称的または超人称的」なものとしてではなく、あくまで「自・他という人称的な体験流」、「体験流の Jemeinigkeit [各自性]」として捉え (廣松 1991: 156-157)、他我の一般定立が「外界の出来事たる眼前の身体的変化与件」の「知覚」を機縁とした「自己回釈」(Auslegung) によって説明され「同時性」には基礎づけられておらず、「われわれ」は唐突に前提とされるのであってそこから汝がいかに構成されるかに応えていない、と批判する (廣松 1991: 187, 190-191)¹¹。

⁸ シュッツの音楽論については、西原 (1998: 95-111)、寺前 (2009) なども参照。

⁹ 例えば、Habermas (1967: 123=1991: 220-222)、Waldenfels (1980: 211-212=1987: 283) を参照。後者のヴァルデンフェルスはシュッツが「われわれ」以前に暗に「我」を前提とし、「我」からの「社会的世界の自我中心的構成」に留まる点を批判している。そのうえで「我」に依拠する「理解」(verstehen) ではなく、「相互了解」(wechselseitige Verständigung) から「われわれの一般定立」を捉えるべき、とヴァルデンフェルスは提起している (Waldenfels 1980: 215=1987: 287-288)。

¹⁰ 廣松は「共に年をとる」に「偕同老化」の訳語を与えている (例えば、廣松 1991: 148)。

¹¹ 廣松は「論点先取」とも評する (廣松 1991: 192)。併せて西原 (2003: 95-97) も参照。廣松は『意味構成』における「他我の一般定立」と「同時性」の乖離を、12年かかったこの著作の成立過程に推測する (廣松 1991: 196)。『意味構成』成立過程の一端は全集版『意味

同様に斎藤慶典も、シュッツが「私の体験流と他者の体験流」の「同時性」を論じるにあたり一方で「二つの流れの人称上の区別に関する無記性を記述」するが、他方でそれをあくまで「二つの流れの共在」と見なし「実際には私と他者との人称的区別が暗黙の内に前提されてしまっている」と指摘する。つまり暗に我と汝の区別が前提とされることで「二つの流れ」の記述が可能になっており、仮に真に単一の流れであれば我と汝の区別を前提とする我と汝の同時性は導かれない。そしてシュッツの立場が「私と他者の存在とその区別をすでに前提としているものであるかぎり、以上の事態は実際にはすべて私の意識（体験流）における出来事とならざるを」えず、いわば「主観性のドグマが突破されるにはいたらない」（斎藤 2000: 259-260）。

加えてルイジ・ミュゼットは、シュッツが「共通の時間の構築」(the construction of a common time) が「社会的なもの」や「われわれ」の「構築」(construction) であるとしながら、主体からの社会的なものの「再構成」(reconstitute) を論じるばかりで社会的なものから主体への影響には僅かしか言及しない、という非対称性を指摘している (Muzetto 2006: 26)¹²。

また以上の三者とは別の重要な批判として、リヒャルト・ゼイナーはシュッツが「共に音楽を作る」や「相互に波長を合わせる関係」という表現のもとで論じた「生き生きとした現在」を共有するなかでの他者の「付帯現前」について、例えば話し手の発話という外的世界での複定立的な出来事の連続を介した話し手と聞き手の関係を考えると、そこに「同時性」があるとしてもそれは端的に各人の内的持続と外的知覚との間の同時性にすぎず、話し手にとっては話し手の持続と身体的呈示とが、また聞き手にとっては聞き手の持続と聞き手の知覚とが同時的であるにすぎないと批判する。そこで二つの主観的な生の流れの同時性を確かめることはできず、「各個人のノエシスは、厳密にはもっぱら同じ個人のノエマとのみ同期化 (synchronize) される」としか言いえない (Zaner 2002: 9)。

ここで挙げられた問題は、シュッツの「われわれ関係」から「我」と「汝」の分化およびそれを前提とした両者の「同時性」に至るには飛躍があり、「われわれ関係」を論じる以前に我ないし我と汝との区別が前提とされ、さらに外的事象や身体的呈示を介した付帯現前でも各人における内的持続と外的知覚との「同時性」が示されるに留まることにある。

1-2-2. 内的時間／外的時間の区別

もうひとつの批判は、内的時間（持続）と外的時間（宇宙的時間）の区別に寄せられている。このベルクソン由来の区別に関して守永直幹は「共に音楽を作る」論文のシュッツ

構成』の編者序文 (Schütz 2004: 10-21) を参照。

¹² ただしミュゼットは、もし「主体」にとって「存在すること」(being [存在]) とは「時間のなかで存在すること」(being in time [時間内存在]) であり、「社会的世界の基礎」が「共有された生きられた時間」であるとするならば、シュッツは社会的なものを過小評価していたのではなく、「主体」と「社会的なもの」(the social) とは徹頭徹尾単一の問題の二つの側面であると捉えていたと確証できる、と付け加えている (Muzetto 2006: 26)。

とベルクソンを比べ¹³、シュッツの生き生きとした現在が「物理的で計測可能な外的時間」と「意識の内的時間」との「身体における交叉」である一方、ベルクソンの「純粹持続」は単に外的時間と区別される各人の内的時間ではなく「むしろ誰のものでもない普遍的で宇宙的な時間」「潜在的で質的な時間」であり、したがってベルクソンの「同時性理論」はシュッツのような内的時間／外的時間の区別に基づく外的時間としての物理的時間を媒介とする「内的持続の相互浸透」ではなく「もっと深い潜在性の次元にある純粹持続に到達すること」を意図している、と指摘する（守永 2006: 118-119）。

守永の批判はシュッツがベルクソンのようにさまざまな時間の流れを分離せずに統合する「同時性」ではなく、内／外の区別に依拠した「同時性」に留まる点に向けられていた¹⁴。しかしこれはベルクソンの問題でもある。ベルクソンは物理学的な「同時性」が、本来は流れる時間を複数の瞬間に切り取り空間に並置する「時間の空間化」であり、時間の測定にはそうした「二つの瞬間の同時性」が必要である一方、これを「時間」の測定とするには持続との結びつきが、つまり単なる瞬間の並置ではなくそこに「継起」(succession)を見出すには持続との同時性が必要になると説いていた。ここにはリアルな持続と空間化された時間の相補的な関係がある。つまり時間の測定は「瞬間性」(instantanéité)としての「同時性」に基づき時間の本性である持続を空虚にするため、そこに「時間」が見出されるのは「われわれの意識」が「空間となった時間」に再び「生き生きとした持続」(durée vivante)を吹き入れるからである、とベルクソンは主張する (Bergson 1972: 107-113=1965: 212-220)。ここに見るかぎり、ベルクソンもまた持続と空間化された時間を区別し、時間の本性は前者にあるとしながら両者の相補的な関係を想定した。では内的時間と外的時間の区分と相補性を前提とするなかで、いかにそれらが未分化である「純粹持続」に到達しうるのか。まさにシュッツと同じ問題に至る。シュッツのベルクソン受容を論じたヘルムート・R・ワーグナーはこの問題を「ベルクソンのパラドクス」と呼び、いわばカントの「物自体」にあたるベルクソンの「純粹持続」をシュッツは「理念型」的に「極限概念」として扱ったとする (Wagner/Srubar 1984: 63-64)¹⁵。

¹³ 「対面的コミュニケーションの音楽的構造——ベルクソンとシュッツ」(守永 2006: 116-119)を参照。

¹⁴ 別の批判としてアルミン・ナセヒはシュッツの時間論が社会的時間の理論的説明を欠き、一足飛びに宇宙時間を導入していると指摘する (Nassehi 2008: 108-109)。ナセヒもシュッツが内的持続の構成に留まっているとし (Nassehi 2008: 110)、自身は後で見るルーマンのシステム論に依拠し社会的システムの産物としての社会的時間を別に立てている (Nassehi 2008: 345-346)。

¹⁵ 詳細は、同書『「ベルクソンのパラドクス」への取り組み』と「純粹持続——ひとつの問題として」の節 (Wagner/Srubar 1984: 58-62, 62-65) 全体を参照。併せて、前掲バーバー書の「ベルクソンからフッサールへ」の節 (Barber 2004: 31-39) も参照。バーバーはこの問題に関して、それゆえにシュッツはベルクソンの持続の観念を、間主観的な解釈のもとで論じるように転じた、としている (Barber 2004: 35)。加えてバーバーは、我と汝の、もっとい

また渡辺慧や金子務によるベルクソンの相対性理論解釈についての研究では、少なくとも（ベルクソンもそうしたように）アインシュタインの相対性理論の前提を踏まえるならばベルクソンの想定した「絶対的同時性」や「唯一普遍時間」は認められない、と批判している（渡辺 1974: 293-296；金子 1993: 184）。しかしそれ以外でベルクソンの貢献に、(1) 相対性理論が明らかにした時間の相対性は地球上の生命にはほぼ無意味であり、「生物に固定した座標空間では、(ニュートン・カント的) 唯一にして一様な時間が支配している」（渡辺 1974: 296）、(2) ベルクソンの言う「持続」の「質」が「継起性」や「前後関係」を指すとすれば、相対性理論も同様に時間の「不可逆性」を前提としている（渡辺 1974: 296-297；金子 1993: 186-187）、(3) 「何か不変なるものが変化の蔭にある」とする洞察は「変化の群に対する不変量の研究」という幾何学の本質に対応し、相対性理論や量子力学の中核にも見られる（渡辺 1974: 252）、特に「一つの事件をある観測者が観測したということ」により「他の観測者」による観測が排除されるという暗黙の仮定を示した（渡辺 1974: 298）、などの点を挙げている。特に最後の点は、結果的に「量子力学の観測問題」と一致する（金子 1993: 187-188）。

シュッツとベルクソンに共通する問題は、内的時間と外的時間、また持続と空間化された時間の区別に基づきながら両者が交差するか未分化な状態へ向かう点にあった。一方ベルクソンは「絶対的同時性」や「普遍時間」を想定することで、図らずも「同時性」の観察者被拘束性を露呈している。この問題にシュッツは、正面からは取り組んでいない。

1-2-3. 「生き生きとした現在」の問題

シュッツが「持続と宇宙的時間の交差するところ」であり同時性の現われる場であるとした「生き生きとした現在」は、フッサールが後期にしばしば用いている表現である¹⁶。晩年のフッサールはこの「生き生きとした現在」で言い表されているような根源的な時間に

えば各人の意識の体験流の独自性を説く点で、ベルクソンの「持続」の特に倫理的な側面を受け取った、と付け加えている（Barber 2004: 38）。

¹⁶ 例えば『デカルト的省察』「第五省察」で、「私の生き生きとした現在」での「付帯現前」とおした「異なる自我」（fremdes Ego）の構成として記されている。

私の生き生きとした現在（meine lebendige Gegenwart）において、すなわち「内的知覚」の範囲において、私の過去が、この生き生きとした現在のうちに現われてくる調和的な想起によって構成されるのと同様に、私の原初的な領域において、この原初的な領域のうちに現われその内容によって動機づけられた付帯現前（Appräsentationen）をとおして、異なる自我（fremdes Ego）が私の自我（meines Ego）のうちに構成されることが可能となる。（Husserl 1950: 145=2001: 207）

ついでの研究をひとつの主題として取り組んでいる¹⁷。フッサールの草稿群にいち早く取り組んだゲルト・ブランドの解説によれば、「反省」が「今」と「たったいま」の差異、つまり存在物や自我の「時間性」(Zeitlichkeit)を露呈しそれらを「時間的様相において明示」する「原時間化」(Urzeitigung)であるのに対し、それらの反省が行なわれる場でもある「機能する自我の時間的様相」としての「生き生きとした現在」は「先時間化」(Vorzeitigung)であり、唯一の「現実化の場所」(Verwirklichungsstätte)、「絶対的現実性」(die absolute Wirklichkeit)である (Brand 1955: 68-71, 75-76, 139=1982: 117-123, 129-131, 220)。つまりブランドによれば、フッサールは「生き生きとした現在」のもとで、時間を構成する自我の根源的な時間性と、そこで構成される「時間」との違いを論じている (Brand 1955: 96-101=1982: 159-166)。

これに対してフッサールの「生き生きとした現在」の概念を一躍有名なものとしたクラウス・ヘルトの研究 (Held 1966=1988) が提起した問題と、そのヘルトが提示したフッサールの想定とは異なる別の可能性は、シュッツの「同時性」にも示唆を与える¹⁸。ヘルトは「生き生きとした現在」に、フッサールの言葉で「流れつつ立ちとどまる」(strömend-stehend)の両義性を指摘する。ヘルトによればフッサールは「超越論的な対象構成」を「時間化」と捉え、その「原様態」としての「現在化」を行なう場を「生き生きとした現在」としたが、この「生き生きとした現在」は自己反省のもとで「時間的 (zeitlich) に流れつつある」か「遍時間的 (allzeitlich) に立ちとどまる」かの「どちらか一方の仕方」で構成されたもの (Konstituiertes) としてしか現出せず、決して「最終的な構成者」(das Letztkonstituierende) としては現出しない (Held 1966: VIII-X=1988: 2-5)。それゆえ「生き生きとした現在」は「立ちとどまること」と「流れること」の統一、立ちとどまる今 (nunc stans) と流レル今 (nunc fluens) を考察しないかぎり解明しえない (Held 1966: 135=1988: 190)。この問題に対するヘルトの回答は、この著作では「自己共同化」(Selbstgemeinschaftung) とするが (Held 1966: 171-172=1988: 235-238)、のちの論文では「生き生きとした現在」が「再構築」されたものであって「現象学的に明示されたものでない」と断じ (Held 1981: 193=1980: 8-9)、ハイデガールの『存在と時間』における「気分性」(Gestimmtheit) の分析を借りて、「生き生きとした現在」を『『生き生きとした』(lebendig) の文字どおりの意味』で、「生まれていること」と「死すべきこと」の統一である「誕生と死の間の生の内的広がり」、つまり「誕生」から「死」までの人間存在の時間性としての「現存在」における「開現と脱去の対向牽引」

¹⁷ 『フッサリアーナ』所収の『間主観性の現象学』全3巻の編者イゾ・ケルンは、その『間主観性の現象学』第3巻に付した編者序文のなかで、フッサールにおいて「流れる生き生きとした現在」(strömend lebendige Gegenwart) が特に1930年前後に浮上してくる経緯を記している (Husserl 1973: XXXIV-LI)。ケルンの見解では、その背景に『存在と時間』(1927) 公刊以後のハイデガーとの理論的対峙や、ディルタイの生の哲学の摂取がある。また、『デカルト的省察』の訳者浜渦辰二による解説も参照 (Husserl 1950=2001: 351-359)。

¹⁸ ヘルトによるフッサールの「間主観性」の問題性についての研究は、Held (1971) も参照。

(Gegenzügigkeit von Aufgang und Entzug) と読み替えることを提起する (Held 1981: 215-217=1980: 29-30) ¹⁹。

ヘルトが反省のもとでは「流れる」と「立ちとどまる」に分化し、両者が未分化の状態として「生き生きとした現在」それ自体を捉えることはできないとした問題は、シュッツが持続と宇宙的時間の交差するところとした「生き生きとした現在」にも当てはまる²⁰。

1-3. シュッツ以後の「同時性」の展開

シュッツの「同時性」に含まれる以上の問題を承けて、シュッツ以後にはこの「同時性」を読み替える試みがいくつか存在する。まず「相互に波長を合わせる関係」を意識流の同時性としてではなく、「間身体的世界における社会的相互行為の前述語的な発生過程」(西原 2003: 135) や「プラグマティックな相互行為」(Renn 2006: 6) の観点から捉える試みがある²¹。ここには「われわれ」と「我と汝」の溝が「日常生活」では「自明視」や「相互行為」によって克服されるとする考えがある。しかし別の試みも存在する。

1-3-1. 「人間条件」としての「生まれ出でて死に逝くこと」の共有という「同時性」

前述のゼイナーはシュッツの「同時性」に関して「付帯現前」の限界と「生き生きとした現在」の不明瞭さを指摘し、「シュッツ自身の観点では、二つの主観的な体験流の間に同時性はない」と結論づけた。そのうえで「共に年をとる」や「相互に波長を合わせる関係」で意図された「真の間主観性」を複数の意識流の同時性としてではなく、シュッツが述べた「日常生活」におけるある「自明視」と読み替える (Zaner 2002: 10-12)。

ゼイナーが行なうのは先のヘルトと相同の試みである。まずゼイナー編のレリヴァンス論でシュッツは「不可逆性と継続性のなかでの内的時間の体験」のうち最も根本的な体験

¹⁹ ヘルトは誕生の側をより重視し、単なる「生まれていること」を「生まれていることとして反省すること」が「人間である」ために必要であるとする (Held 1981: 218-220=1980: 32-33)。

²⁰ 他の「生き生きとした現在」批判として、Derida (1967=2005) も参照。

²¹ ヨアヒム・レンはシュッツの生活世界論に現象学とプラグマティズムの間の動揺があり、意味の「構成」(constitution) という概念には自我論的で「本来的に主観的な構成」とプラグマティックで「相互行為論的な意味の構成」の二つが含まれ、「付帯現前」や「同時性」も後者のプラグマティックな観点から捉え直しようとしている (Renn 2006: 1-12)。併せて、バーバーによるレンの上記論文評 (Barber 2006) も参照。バーバーはレンによるシュッツ解釈には同意していないが、レンが指摘した問題点と可能性については支持している (Barber 2006: 280-281)。

を「年をとること」(growing older)とし、「私が生まれたこと、年をとること、そして死すべきこと」という三つの表現は「この世界のうちにわれわれが存在するという体験 (the experience of our existence within this world) を規定する単一の形而上学的事実を示す」と記していた (Schutz 1970: 197=1996: 246)。自身の「誕生」も「死」も経験はできないが疑問視しえない事実として「人間生活」のなかで「自明視」され「至高のレリヴァンス」をもち、われわれは「自分たちが作り上げたのではない世界と状況のなかに生み落とされて」おり「不可避免的に共に年をとる」こと、そして「われわれの未来が本質的に未規定的であるという事実のなかでただひとつ確実なこと」つまり「いついかにしてかはわからないがわれわれは死すべきものである」ことは「われわれの人間条件 (human condition) によって賦課されたレリヴァンス」であるとシュッツは言う (Schutz 1970: 197-198=1996: 247-248)²²。ゼイナーはそこに「人が女から生まれるかぎり、間主観性とわれわれ関係は人間存在の他のあらゆるカテゴリーにとっての基礎であるだろう」(Schutz 1966b: 82=1998b: 136) という一文を繋げ、シュッツは明文化していないが「われわれ関係という第一の体験」は「女から生まれている」(being born of woman)²³という体験に基づくと解釈している (Zaner 2002: 12)。そして「生まれていること」は「私とは何」であり「誰であるのか」ということにとって「構成的」で、「ラディカルに不公平」な「負債」と「責任」であるとした上で、「死に臨む存在」(being-toward-death)であるのみならず「誕生からの存在」(being-from-birth)であることを「共に年をとる」つながりのなかで知ることこそが「私の存在を他者に負っている」ことの初めの責任であると説く (Zaner 2002: 17)。ゼイナーの解釈は「われわれ関係」の前提としての「共に年をとること」を、「人間条件」としての「生まれており、やがて死すべきこと」を引き受け共有することと捉え直している。

1-3-2. システム／環境の同時性

上記の相互行為論的解釈や存在論的解釈はシュッツの「同時性」を一定の方向へ限定し、そうすることでシュッツが抱えた矛盾の克服を目指した。他方でこの矛盾をむしろ引き受

²² この箇所の編者註でゼイナーは「共に年をとること」に関して「共に音楽を作る」論文とともに、「死すべきもの」に関してハイデガー『存在と時間』(Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927)の「死へ臨む存在」(Sein-zum-Tode)を参照指示している (Schutz 1970: 179-180 (14, 15)=1996: 252 (14, 15))。シュッツの理論的営為をハイデガーに近づけて解釈する試みについては、Weiss (2009: 45)、Renn (2009)も参照。レンはシュッツの「同時性」を「自明視」されるものというよりも、「相互行為の実践的な達成物」(a pragmatic achievement of interaction)と捉えることを提起し、その点でハイデガーの「暗黙知」(tacit knowledge)に近づくものとしている (Renn 2009: 172-173)。

²³ 旧約聖書ヨブ記一四章一節「人は女から生まれ、人生は短く、苦しみは絶えない」。「人が女から生まれるかぎり」はここに端を発する慣用句で、「人間であるかぎり」の意。

けるのが、ルーマンによるシステム理論の試みである²⁴。ルーマンはシュッツの「同時性」を、「システム／環境の同時性」として読み替える。それは、あるシステムにとっての当のシステム自身とその環境との同時性である²⁵。したがってその「同時性」はシステム相対的なものであり、個々のシステムを超えたところにあるのではない。ここにはベルクソンに見た観察者問題が現われる。同時性はある観察者のもとで不可避免的に浮上するが、その観察者を超えてあらゆる観察者に通用はしない。ルーマンはシュッツの「自明視」の位置に「観察者のパラドックス」を据える²⁶。

加えてルーマンは「心的システム」（意識）と「社会的システム」（社会）の区別を導入する。この視角から見ると、シュッツは「われわれ」の下での「我」と「汝」の「同時性」を想定したが、「我」から出発すれば「我」と「我ならざるもの」の同時性があるにすぎない。もし「われわれ」自体が社会的システムとして成立していると捉えれば、「われわれ」と「われわれならざるもの」の同時性こそ問題としなければならない。シュッツ自身も「われわれ」は「我」や「汝」を超越しておりシンボル化によってしか把握できないとしていたが（Schutz 1962c: 318-319=1983c: 150-151）、心的システムと社会的システムの区別を前提とすれば「われわれ」にとって「我」はもはや「われわれならざるもの」のうちに属する²⁷。「共に音楽を作る」過程に寄せて言えば、ここには「共に音楽を作る」というコミュニケーションに参加するもの（ある社会的システム）と参与せざるもの（そのシステムの環境）との区別と同時性が生じている、と捉えることができる。

ただしルーマンのアプローチは、シュッツの抱えた矛盾を克服するものではなく、観察者問題を問題として前提し、システム／環境の区別や心的システム／社会的システムの区別を用いてなおいかにしてそこに同時性があるのかを説いている²⁸。

²⁴ 大黒屋（2002）のシュッツとルーマンの「同時性」比較の試みも参照。大黒屋はルーマンの「同時性」に、システムによって「産出される〈環境〉との同時性」とそのなかで「観察される《環境》との同時性」の相互前提関係を見る（大黒屋 2002: 91-94）。それを踏まえて言えば、シュッツは端緒の区別や「システム準拠」を特定しないため前者の同時性を主題化せず、同時性に伴う観察者の問題を捉えていない、と見るのが本稿の立場である。

²⁵ システム／環境の同時性に関しては、特に Luhmann（1984: 254=1993: 293, 294（23, 24））参照。ただしルーマンも当初はシュッツの「同時性」を意味の「社会的次元」が成立する前提としての「時間的次元」での縮減と捉えて導入している。例えば、Luhmann（1971: 54-55=1987: 58-59, 113-114（註 30, 31））を参照。また本稿第三章 1-2-2.も参照のこと。

²⁶ 「パラドックス」を「観察」の前提であり条件であるとするルーマンの見解については、例えば Luhmann（1990a: 48-50）を参照。

²⁷ ルーマンは「自我」と「他我」の区別つまり「他の観察者を観察すること」もまた、「コミュニケーションによって強いられている」と述べている（Luhmann 1990a: 56）。

²⁸ 他方シュッツが「同時性」で論じた二つの持続の「同種性」の議論は、システムと（環境一般ではなく）別のシステムの同時性に示唆を与える。ルーマンものちに「相互浸透」や「構造的カップリング」の概念でシステム間の同時性を扱い、特にシュッツの「間主観性」を「心的システム」と「社会的システム」の「相互浸透」に読み替えることを提案し

1-4. 小結

シュッツにとって「われわれ関係」の前提としての「同時性」とは、「生き生きとした現在」を共有するなかで「共に年をとること」、つまり継起性と不可逆性という性質をもつ我と汝の体験流が対面関係のもとで「同時的」となることであった。「生き生きとした現在」とは持続（内的時間）と宇宙的時間（外的時間）とが身体上の動きを介して交差するところであり、「われわれ」はそこで外的出来事を介してたがいの内的時間が「同期」され、ただちに現れては消え去る出来事の「複定立的な性格」に依拠して「相互に波長が合わせられる」。つまり外的時間における出来事をとおして、おたがいの内的持続の継起性と不可逆性が捉えられ「同時的」となる。ただし、我にとって汝の体験はただ「付帯現前的」に、そこに自身と「同種」の持続があるものとして把握されるにとどまる。こうしたシュッツの「同時性」には三つの問題点があり、まず(1)「われわれ関係」から「我」と「汝」の区別を前提とした両者の「同時性」に至るには飛躍があり、「われわれ関係」以前に「我」（と「汝」の区別）が前提とされていること、(2) 身体的呈示や外的出来事を介した「付帯現前」は各人の「内的持続」と「外的知覚」の「同時性」を示すにとどまること、(3) 内的時間／外的時間の区別や「生き生きとした現在」がそれ以上深められることなく前提とされていること、であった。この難点に対して、「日常生活」においては相互行為や存在論的な「自明視」によって乗り越えられているとする解釈や、システム／環境の区別と心的システム（意識）と社会的システム（社会）の区別によって分化させる試みがのちの論者たちによって展開されている。しかしそれらの解釈においても、何らかの「同時性」が社会的なものの存立を支えているという点は共有されている。彼らが指摘した「同時性」の準拠先と「自明視」をどの水準で捉えるかを明らかにするということを前提にして、なおシュッツが提起した「同時性」は応用の可能性に開かれている。

ている（Luhmann 1987: 314, 323 (18, 19)=1993: 115-116. 123-124 (18, 19)）。

2. ルーマンの「同時性」論——システム相対的な時間と「システム／環境」の「同時性」

前節で見たようにシュッツは、社会的世界のもっとも根源的な層をなす「われわれ関係」の前提には「同時性」があると説いた。それを承けてルーマンは、意味の社会的次元の前提には時間的次元での縮減つまり「同時性」が必要とされると主張した。ルーマンはそこからさらに同時性の議論を発展させ、構成主義的なシステムのリアリティは、そのシステムにとっての環境との「同時性」のうちにある、と説いた。

本節では、ルーマンがシステム理論のもとで発展させた「同時性」の概念を検討する。まずシュッツが行なった「同時性」の議論と、それに対して寄せられた批判を踏まえ、ルーマンがシュッツの「同時性」を当初はどのように導入し、そして自身の社会的システムの理論を彫琢するなかでどのように発展させていったのかを追う。シュッツとルーマンの理論比較を行なっているこれまでの研究では、例えば「社会的世界」を論じるなかでも主観性に偏っている前者と、意識と区別されるものとして社会を規定している後者、といったように両者の違いが強調されることが多かった²⁹。しかしルーマン自身の記述を見ると明らかのように、一貫してシュッツによる研究、とりわけ「同時性」の議論に注目していたことがわかる³⁰。そこで「同時性」についての両者の一致点と相違点、また「同時性」をめぐる問題圏全体を明らかにするためには、ルーマンがシュッツを直接引いているところを丁寧に追いかける必要がある。順に見ていこう。

2-1. ルーマンによるシュッツの「同時性」の導入

ルーマンは自身の社会理論を構築するにあたって、「意味」概念を適切に位置づけるためにエトムント・フッサールに由来する現象学的な意味の構成分析を導入しているが、そのときに手がかりとしてシュッツの議論を参照している。ルーマンによる意味概念の基礎づけの成果は「社会学の基礎概念としての意味」（1971）（以下、「意味」論文と記す）において一応の完成を見せるが、ここにシュッツ由来の「同時性」（*Gleichzeitigkeit* [以下、断りが無い限り同様]）が登場する³¹。そこでまず、当初ルーマンがシュッツの「同時性」をどのように取り入れているのかを見ておこう。

²⁹ 第三章・第一節の註1に挙げた諸文献を参照。

³⁰ シュッツとルーマンの「同時性」を論じたものとして後述の大黒屋（2002）も参照。

³¹ フッサールとシュッツの現象学的な意味の構成分析を社会理論に導入する試みは、すでにLuhmann（1967=1983b）などで着手されている。またシュッツの「同時性」も、Luhmann（1968: 208-209=1990: 230-231, 323-324（註47, 48））ほかで登場している。

2-1-1. 意味の時間的次元での縮減としての「同時性」

「意味」論文でルーマンは、「意味」概念を〈他の可能性からの選択かつ他の可能性への参照〉、〈顕在性／潜在性の分化をとおして顕在的なもののなかで潜在的なものを参照すること〉と形式的に規定する（Luhmann 1971: 30-31=1987: 34-35）。さらに、その「意味」の同一性を成り立たせているのは意味の三つの次元の分化、つまり事象的（sachlich）、社会的（sozial）、時間的（zeitlich）な次元の分化であるとする³²。しかも単に分化しているのではなく、それぞれの次元の同一性が他の次元の非同一性によって支えられており、例えば意味の事象的次元、対象ないし事物の同一性は、社会的次元における非同一性、つまり自我／他我の区別を前提とし、他方で社会的次元における非同一性、自我／他我の区別は、この事象的次元での同一性によって支えられている、と見る（Luhmann 1971: 48-52=1987: 52-56）。

そしてルーマンは、「事象的な意味を構成することについての社会的な条件」は、「時間次元での諸可能性の重要な縮減」つまり「体験を行なう諸主観の間にいかなる時間的な相違もあってはならないということ」を前提としており、それらの「諸主観の顕在的な体験は時間的に同期化（synchronisieren）」され、「諸主観自身の理解にしたがって同時（gleichzeitig）に経過しなければなら」ず「時間の流れの遅延や加速は純粹に主観的な視角に帰属され、錯覚として差し引かれなければならない」、とする（Luhmann 1971: 54-55=1987: 58-59）。かくして「時間的な複雑性」と「社会的な複雑性」の掛け合わせによる「法外な可能性」は「同期化」（Synchronisation）によって排除されており、したがって、

誰しも他者の未来へと先に飛び込んだり、自分の過去に留まり続けたりする必要はない。あらゆる人間は共に等しく年をとる（gemeinsam und gleichmäßig altern）。このことをとおして、間主観的に構成された時間という単位によって体験視角の移送可能が保証されると共に、またそれによって世界への共通の接近可能性も保証される。

（Luhmann 1971: 55=1987: 59）

ここでは意味の社会的次元が成立するためには時間的次元での同一性、つまり「同時性」が前提となるとされている。引用部の「共に等しく年をとる」は、シュッツの『意味構成』の「他者の体験流の同時性」の節を参照しているが（Luhmann 1971: 55 (Anm.31)=1987: 114 (註31))、この「共に年をとる」は時間的次元での縮減としての同時性を象徴的に表したものである。

³² ルーマンは以前この三次元を「行為システム」の構造形成に必要な「行動予期の一般化」と言い、そのうち時間的一般化を「持続」（Dauer）、事象的一般化を「一貫性」（Konsistenz）、社会的な一般化を「合意」（Konsens）、さらに「公式組織」におけるそれぞれを「規範」「役割」「制度」としている（Luhmann 1964a: 55-59=1992: 74-78 ; 1964b: 16-17=1983a: 43-44）。

ここで参照されたシュッツの「同時性」は対面関係のもとで「我」と「汝」の意識の流れが交差することを指し、シュッツはこの「同時性」をもとに「われわれ」という関係が成立すると考えた。ルーマンは必ずしもシュッツのように「対面関係」を前提としないが、この「同時性」を社会的次元の非同一性ないし分化の前提としての時間的次元での同一性と一般化して論じている。ただし、ルーマンによる「同時性」の議論はこの段階にとどまらず、後に発展を見せることになる。その前にまず、前節で見たシュッツの「同時性」の要点と、それに対しどのような問題点や可能性が指摘されているのかを踏まえておく。

2-1-2. シュッツの「われわれ」関係の前提としての「同時性」とその問題点

シュッツは『意味構成』で、社会的世界の分析にあたり「意味」概念を基礎づけるために、ベルクソンの「持続」やフッサールの「内的時間意識」の分析を参照し、「意味」を時間の観点から検討した（Schütz 2004: 93=2006: 35）。意識の流れの「持続」がもつ質的な特性をシュッツはベルクソンに借りて「年をとること」（altern [vieillir]）と表現し、特に意識における体験の継起性と不可逆性を指している（cf. Bergson 1959: 86=2002: 145-146 ; Bergson 1972: 215=1965: 348 ; Schütz 2004: 141=2006: 79 ; Schütz 2006: 67）。さらにシュッツは、この持続の流れを把握することは体験のただなかには可能とならず、この流れに対する「反省」を必要とするとしている。しかしそこから、私は私自身の体験を経過し終わった体験としてのみ眺めうるにすぎないのに対し、対面関係にある他者に関しては当の体験が経過するなかで眺めることができ、そこでは我と汝の意識の持続が交差して「同時的」となる、と述べる（Schütz 2004: 226-227=2006: 162-163）。『意味構成』以後の諸論文も含めて、シュッツが「同時性」に関して説いていることの要点をあらためて以下に示す。

(1) 「われわれ関係」は対面する我と汝の「同時性」、つまり両者の「持続の構造が同種」であり同じ「時間構造」をもつことが体験されること、つまり「共に年をとること」を基に成り立っている。そこでは同じ「生き生きとした現在」が共有されており、「他我存在の一般定立」はこのなかで可能になる（Schutz 1962a : 174-175=1983a: 266-268）。

(2) 「生き生きとした現在」の下では意識の内的時間である「持続」と、外的時間である「宇宙的時間」が、われわれの身体上の動きと行為とによって結びつけられている。この外的行為を介して、われわれの間で「生き生きとした現在」が共有されて「われわれ関係」が確立される（Schutz 1962b : 215-216, 219-221=1985a: 19-20, 25-27）。

(3) 外的出来事を介した他者や「われわれ関係」の把握は、シンボル化をとおして「付帯現前的」に行なわれる。音楽の例では、作品の演奏と鑑賞をとおして「相互に波長を合わせる関係」が生じている。このことは外的事象の「出来事列」の「複定立的な性格」に依拠し、それぞれの内的時間と外的時間が結びつくことで双方の内的時間の波長が合わせられる（Schutz 1962e : 317-319=1985b: 149-151 ; 1964b : 170, 174-175=1991b: 233, 237）。

(4) 「われわれ関係」は時間的・空間的な「共在」つまり対面関係を前提としており、他の社会的関係はここから派生している。対面関係が社会的環境の基礎構造を成す。

他方でシュッツの「同時性」に関して指摘されている問題点には、以下のものがある。

(1) 「われわれ関係」から我と汝の分化ないし我と汝から「われわれ関係」の成立に飛躍があり、「われわれ関係」以前に我の存在もしくは我と汝の区別を前提している (Waldenfels 1980: 211-212=1987: 283 ; 廣松 1991: 156-157, 190-191 ; 斎藤 2002: 259-260)。

(2) 「付帯現前」や「相互に波長を合わせる関係」のもとでの「同時性」は、あくまで各人の内的持続と外的知覚との間の「同時性」であり、それを超えて我と汝の内的持続が「同時的」となっているかどうかを確かめることはできない (Zaner 2002: 9)。

(3) 「内的時間」と「外的時間」の区別が無前提的に導入されており、この境界が恣意的である。また、このような分化した時間をとおしていかにしてそれらを超えた「同時性」に到達することができるのか。ベルクソンの「絶対的同時性」や「純粹持続」に対して寄せられているのと同じように (cf. 渡辺 1974: 293-296 ; 金子 1993: 184)、シュッツの「同時性」にも観察者の相対性の問題がある³³。

(4) 「反省」や「シンボル化」をとおす以上、「生き生きとした現在」それ自体を統一的に捉えることはできない³⁴。

これらの難点を受け、シュッツの「同時性」を意識の流れの同時性という原理的なレベルではなく、むしろ「自明視」された水準での同時性として、いわゆる「間身体的」で「プラグマティック」な「相互行為」のレベルや (西原 2003: 135 ; Renn 2006: 6)、またハイデガーの存在論に倣って「共に年をとること」を「人間条件」としての「生まれ出でて死に逝くこと」を共有することと捉える提案も存在する (Zaner 2002: 12-17)。ルーマンはそれらを取り入れてはいないが、異なった仕方で以上の問題点に対応している。次節では、ルーマンがどのようにシュッツの「同時性」を取り入れ発展させているのかを見る。

2-2. ルーマンのシステム理論と「同時性」

ルーマンによる「同時性」概念の発展は、ルーマンのシステム理論と、それに基づく時間論の展開に基づいている。ルーマンは「時間」をシステムに相対的なものとして、そして特に社会的システムに関してもこのシステムにとって独自の社会的な時間が存することを論じている。そこでまずルーマンのシステム理論による「同時性」の議論を見る前に、ルーマンのシステム論的な時間論を踏まえておこう。

³³ シュッツの「外的時間」が社会的時間を欠く点は、Nassehi (2008: 108-109) を参照。

³⁴ フッサールの「生き生きとした現在」の問題点については、Held (1966: VIII-X, 135=1988: 2-5, 190 ; 1981: 193=1980: 8-9) を、またこの概念自体については Brand (1955: 68-71=1982: 117-123) を参照。また前節 1-2-3.も参照のこと。

2-2-1. ルーマンの時間論——システムと時間、システムの時間

「意味」論文以後にルーマンが社会の水準でシステムと時間の関係を論じている「世界時間とシステム史」(1973)は、特に「歴史」に代表される過去の地平に注目して意味の時間的次元と社会的次元の関係を扱っている。冒頭でこの論文の目的を「社会的システムが時間、時間地平、そして時間的な有意性の特定の配列を構成するということ、さらにその場合それをいかに構成するかということ」と述べる。またこの「構成」(konstituieren)は「制作」(herstellen)や「無カラノ創造」(ab nihilo kreieren)ではなく、「複雑性の構築 (Aufbau) と縮減 (Reduktion) との条件として意味的に利用可能なものとするを意味する」と補っている (Luhmann 1973: 82=1986: 106)。

ルーマンは初めに、意味のもとでの様相化と同時性をシステム理論の観点で記述する。そのシステム理論は選択性の帰属先をシステムと環境に分けることで体験と行為を区別するが、その選択性の帰属と体験と行為の構成のために「安定化された差異」、したがって「二つの水準」の「同時的な現前」(simultane Präsenz)を必要とする。ルーマンはここで例として可能的／現実的、現在的／非現在的、慣れ親しまれた／慣れ親しまれていないの組を挙げ、選択性の帰属のために用いられる、区別によって生じた二つの水準がともに現前することを「同時性」(Simultaneität)と呼び、さらにそれを「選択過程の様相化」(Modalisierung des Selektionsprozesses)や「選択過程に選択としての性格を付与する二つの水準の現前保持 (Präsenzhalten)」と言い換えている (Luhmann 1973: 82=1986: 106-107)。この箇所ではルーマンは Simultaneität の語を用い、必ずしも時間的な「同時性」(特に Gleichzeitigkeit で表現される)について述べているわけではないが、区別によって二つの水準の共在が産み出されること、またそれらの二つの水準の共在が何らかの区別によって産み出されることは、後で見る「同時性」と「区別」の議論でより明らかとなる。

そしてルーマンは、時間的様相化を様相化一般のなかで論じるために必要な手がかりを、タルコット・パーソンズのシステム問題図式 (適応、目的達成、統合、潜在的パターン維持の AGIL 図式)に見出している。ルーマンによればこの図式は二つの軸の交差から成っており、一方の軸はシステムと環境の差異を、他方の軸は現在と未来の達成に二元化される時間軸を示し、この背後には「システムと環境との分化が時間性 (Zeitlichkeit) を産出する」という基本テーゼがある。その理由は「システムと環境の分化は、瞬間的な時点と時点とを一対一で相関させる差異の保持を排除する」ことにあり、差異の「保持は時間を必要とし、時間をもっている」(Luhmann 1973: 83=1986: 108)。つまりルーマンは「システムと環境の分化」が「時間性」を産出するという点を、パーソンズを引きながらシステム理論の見解として提示する³⁵。このことは、ルーマンの時間論そして「同時性」に関しても中

³⁵ ルーマンはこの箇所ではパーソンズに加えて、心的システムについて同様の見解をもつものとしてジャン・ピアジェによる子供における時間概念の発達に関する研究 (Piaget 1946=1955) を挙げている (Luhmann 1973: 106 (Anm.9)=1986: 154 (註9))。またシステムの

心的な主張となる³⁶。

また「行為システムの時間的構造」(1980)では、「システムの分出」は「時間次元」を含み、(環境にも時間があるとしても)システムの時間を変化させ、したがって「時間形式」(Zeitformen)は「ア prioriに妥当」するのではなく「つねにシステムの発展と相対的に妥当する」としている。心的システムと社会的システムに関して言えば、個々人の成長や社会の進化のなかでそのシステムの時間構造も変化する(Luhmann 1980b: 33-34)³⁷。そのうえでルーマンは、「環境とシステムとの連関にとっての鍵」は「時間の不可逆性」のうちにあり、「不可逆性が存在するや否や、そして不可逆性が存在するかぎりで、痕跡の形式をとって時間が存在」し、システムにとって自身の「外部」にある「インフラストラクチャー」である「環境の時間性(Temporalitäten)」と結びつけられることが「システム内の十分に複雑な時間的構造(Temporalstruktur)の可能性の条件」とであると説く(Luhmann 1980b: 33-34)。

ルーマンのシステム理論で捉えられる時間は、システムと環境の分化にともなって、つまりシステムの形成とともに産出される何らかのシステムの「時間」である³⁸。その点で「時間形式」はそれぞれのシステム(とその発展)に相対的である。そしてシステムと環境の分化が時間性を産み出し、そして分化されたなかでもシステムと環境とが関わりをもつことを、この分化をとおして両者の間に瞬間どうしの対応がなく、時間の不可逆性のみが両

要素が「出来事」(Ereignis)であるがゆえにシステムと環境の一対一の対応が排除され、「出来事」をとおして「つねに時間も構成される」、そしてすでに「心的システム」が「自身を自身の環境から区別し、自身の環境に対して二つ以上の状態を仮定しうるかぎりで、時間を構成している」と述べている(Luhmann 1973: 88=1986: 117-118)。

³⁶ この論文では「同時性」(Gleichzeitigkeit)について、「神学上の伝統も、またキルケゴール、ベルクソン、シュッツの論考も等しく、この概念を、最終的には社会的次元を用いることによってのみ、つまりコミュニケーション上での到達可能性としてのみ規定することができて」おり、「同時性という表象は、社会的次元においてはコミュニケーションの前提」とであると記している。そしてこのことは「同時性という表象の適用についての規則」が「現在(Gegenwart)という概念」のなかに埋め込まれており、したがって同時性の問題は、「諸出来事(Ereignissen)の同時性」のうちにはではなく、「時間を利用する、選択的な諸過程(selektive Prozessen)の同時性」のうちに存している、と説いている(Luhmann 1973: 94, 110 (Anm.41)=1986: 129, 161 (註 41))。

³⁷ ちなみにルーマンは、時間そのものに反省を加えて過去/現在/未来の時間地平を明確に分離し、直線的な時系列という表象をより抽象的なかたちで定着させたこと自体が、特に近代社会のなかで生じたものと考えている(Luhmann 1973: 89-90=1986: 122)。

³⁸ ルーマンの他の時間論としては、それぞれシステムにとっての「未来」や「記憶」について論じた「未来は始まらない」(Luhmann 1976b)と「時間と記憶」(Luhmann 1996b)を参照。

者ともに前提とされていることに依拠している、とルーマンは見なしている。ここでは明示化されていないが、それがやがてシステム／環境の「同時性」として主題化される。

2-2-2. システム／環境の区別と同時性——システムのリアリティ

前節ではルーマンのシステム理論による時間論を参照したが、のちにそこへ「オートポイエーシス理論」を導入し社会的システムの要素として「コミュニケーション」を据えた『社会システム理論』（1984）ではシステム／環境の「同時性」が明示的に論じられ、シュッツの「共に年をとる」もそこに位置づけられている。そこでも同様に、「システムの諸要素」が「出来事」の性格を帯びるにしたいが「システムと環境との間には一対一の対応がまったく存在」しえなくなり、だからこそシステムと環境のなかに「等しい時間の流れ」が必要とされるに至るとして、シュッツの「共に年をとること」（*gemeinsames Altern*）を重ねている。「いかなるシステムも他のシステムより速く未来へと進むことはできず、それゆえ環境との接触のために必要な同時性を失うことはできない」のであり、「環境とシステムの差異は、もっぱら同時的なものとしてのみ確立され」、システムと環境の間での「等しい時間の流れ」の共有、つまり「共通の時系列」（*gemeinsame Chronologie*）が前提されることになる、と。ただし留保として、ここで「共通の時系列」が前提とされるというのは、あくまで「システム」が「環境にもシステム自身にもあてはまる統一的な時系列を用いなければならない」ということだけであり（つまり、環境の側自体は不問）、しかも「共通の時系列」にしてもシステムの分出が強化されるにしたがって稀薄となってゆく、と付け加えている（Luhmann 1984: 254=1993: 293-294, 423（註 24））³⁹。

この『社会システム理論』以後の論文で、環境における何ものかの「現存」（*Dasein*）やリアリティは、システムの作動が出来事のかたちをとっていることに基づき、あくまでシステムによって「ある瞬間にシステム内で顕在的であるものと環境内で顕在的であるものとの同時性」として把握される、とあらためて主張している（Luhmann 1987: 314=1993: 115-116）⁴⁰。また「構成主義」に関する論文では、「瞬間的な顕在性」だけをもつ「出来事

³⁹ 中略した箇所では、仮にアインシュタインに従い「時間そのもの」には速度の違いが見出されるとしても、依然として「システムは環境と固着したままであるだろう」と記している（Luhmann 1984: 254=1993: 294）。この主張は「同時性」がシステムごとに相対的であり、しかし個々のシステムにとっては絶対的なものであることを含意する。ベルクソンのアインシュタイン論（Bergson 1972=1965）も想起される。一方でアインシュタインはベルクソンのような個々の観察者たちを超えた「絶対的同時性」を否定するが、他方でベルクソンは時間を見出すためには何らかの観察者と彼のもとでの同時性が必要であることを暗示している。金子（1993）、また本節次項も参照。

⁴⁰ ルーマンはここでカントの『純粋理性批判』における「観念論論駁」の一節も引きつつ、「同時性」によるリアリティ付与という見解を生物学とシュッツの議論に帰している。さらに「問主観性」の問題を心的システムと社会的システムとの同時性の問題に読み替える

という基礎のうえで作動」する「認知的システム」（ここでは脳、意識、コミュニケーション・システムとしての社会までも含めてそう呼んでいる）にとって、同じ速度と同じリズムをもつわけではなく対応物があるわけでもない「環境」との時間関係は「同時性」（Gleichzeitigkeit）のうちにのみ存し、したがって「システムのリアリティの基礎」とは「システム自身の作動とその作動を支えるリアリティの条件との同時性」である、と述べている。つまり、

システムは自分自身を未来から過去までの時間との関係で位置づけたり、瞬間を持続ないし永続との関係で位置づけたりする。そしてそこから何が生じるにしても、システムに関わるかぎりでの時間を構成している。任意に処理できないままであるのは、システムのあらゆる作動のなかでそのつど瞬間的に再生産される同時性であり、アルフレート・シュッツの言う「共に年をとること」や、[ルソーが独白する]サン・ピエール島の湖畔の波音（中略）、「私が考える苦しみを負わずとも、こうしているだけで存在することの喜びを感じ」させてくれる、あの波音である。（Luhmann 1990a: 42）

ここでの主眼は、システムは自身で時間を構成するが、そのつどの作動には不可避的に環境との「同時性」が付随し、それがシステムにとってのリアリティを保証していることにある。そのことに合わせてシュッツの「共に年をとること」とルソーの「湖畔の波音」を引いている⁴¹。総じてルーマンはシステム理論のもとで、瞬間的な顕在性しかもたない出来事を要素としているシステムにとってのシステムと環境の関わりとして、ひいてはシステムにとってのリアリティの保証として、「同時性」を位置づけている⁴²。そしてまた心的

ことを提起し、『社会的システム』で用いられたシステムどうしの関わりを指す「相互浸透」をそうした異なるシステムどうしの同時性の問題と捉えている（Luhmann 1987: 314, 323（Ann.18, 19）=1993: 115-116, 123-124（註 18, 19））。

⁴¹ さまざまな論者の時間論でたびたび取り上げられるルソーの『孤独な散歩者の夢想』のこのエピソードであるが（Rousseau 1959: 1045=2012: 113）、ルーマンはこれを「時間と行為」（1979）のなかで、「現在を圧迫し、現在の境界を設定」する「未来と過去との時間地平」を除去し、「現在」が「純粋な持続」へと戻され「安息」ないし「魂が純粋な実存の状態へ戻される」ことと捉えている。ただしルソーが「幸福を求める試み」として行なったこの営みは、時間地平を放棄するゆえに「行為の可能性」のみならず「行為の必要性」も除去する、と付け加えている（Luhmann 1979: 68-69）。いずれにせよ上の引用と対比すれば、区別の放棄による実存的な安息と、むしろ区別に依拠した実存の把握という、異なった文脈でルソーの「湖畔の波音」に言及している。

⁴² ルーマンは「構成としての認識」（1988）で、「システムと環境」の差異の統一を示すのが「世界」、「認識と対象」の差異の統一を示すのが「リアリティ」、「顕在性（Aktualität）と可能性（Possibilität）」の差異の統一を示すのが「意味」（Sinn）であると定めている。さらに、かつての神学であればこのように区別から向かわれる区別されざる統一を「神」と呼んだ、と付言している（Luhmann 2001: 229, 234=1996: 240, 246-247）。そして前掲の「構成主義」論文で強調しているのは、これらの「区別の統一」もまたあくまで「区別」をとおして「構成」（konstituieren）されているものである、ということであった（Luhmann 1990a:

システムとしての意識のみならず、社会的システムにもこの議論が適用される。

2-2-3. 同時性と観察者

ルーマンが記すシステムと環境の同時性には、システムと環境の区別によって時間と同時性が産み出されているという前提がある。そしてルーマンの「同時性」においては、何らかの「区別」とその区別を用いる「観察者」の問題が重要な論点として扱われている。

「同時性と同期化」(1990)はこの「同時性」(Gleichzeitigkeit)を、「観察者」の関わりと「同期化」(Synchronisation)との対比で論じている。この論文は「生起するものはすべて、同時に生起する」というテーゼから論を始め、「同時性」は「あらゆる時間性にあらかじめ与えられている根本的な事実のひとつ」であるとして、いかなる「出来事」(Geschehen)や「システム」から出発しても、他の出来事とその出来事の未来や過去で生起することはできず、もっぱら「同時的」にのみ生起しうる、つまりシュッツの言うように「時間はあらゆるものにとって等しく流れる」ないし「われわれは共に年をとる」、とこれまでと同様に続けている(Luhmann 1990b: 98-99)。しかしこの「同時性」は単なる未分化の状態ではなく、「時間の区別」を放棄するためには「事象の区別」つまり「生起するものの事象的な相違」が前提とされるとして、

システム理論的に表現すればこのことは、同時性がシステムと環境の分化のひとつの側面であり、その分化によって生じるものである、ということの意味している。そのような差異が開けることで初めて、システムと環境が同時(gleichzeitig)に世界の中に置かれることになる。(Luhmann 1990b: 99)

さらにルーマンは、システムと環境の分化以前の世界は「いかなるものも観察されえない」、ジョージ・スペンサー＝ブラウンの言う「マークされない状態」(unmarked state)であり、以上の考察から「ひとつの循環」、つまり「われわれが『観察者』と呼ぶことのできるもの」へと戻っていくと言う。つまり、

あらゆる観察者は、ひとつの区別(Unterscheiden)と、区別されたもの(Unterscheidung)の一方の(そして他方のではない)側の指し示し(Bezeichnen)を必要とする。したがって例えば、この物であって他の何かではない、といったように。その際、区別の両方の側はひとつの境界をとおして分離されなければならない、その境界をとおして同時に与えられなければならない。他方で、一方の側から他方の側への移動、つまり境界の横断(Kreuzen der Grenze)はひとつの操作(Operation)を必要とし、したがって時

41)。特に「社会的ナリアリティ」は、多数の観察者によるさまざまな観察のなかで、それらの差異にもかかわらず一致するものとして与えられているもののことを指す(Luhmann 1990a: 41)。

間を必要とする。区別の両方の側は同時に与えられているが、同時に利用可能であるのではない。(Luhmann 1990b: 100)

このようにルーマンは、ある「観察者」による「区別」のもとで「区別されたもの」の両側が「同時」に与えられ、その一方で区別の「一方の側から他方の側への移動」つまり「境界の横断」は「ひとつの操作 (Operation)」を必要とし、「したがって時間を必要とする」のであり、「区別の両方の側は同時に与えられているが、同時に利用可能であるのではない」としている。その点で、同時性が現われる場である「現在」は「区別自体の統一」であり、「時間の観察に関して盲点として働く」(Luhmann 1990b: 129)。加えて、「同時性」はシステムにとってあくまでつねに存在するものであるが、システムの働きによる「同期化」(Synchronisation)は「同時性の制作」ではなく、意味の「事象次元」と「社会的次元」の領域で用いられる時間形式であるとされる(Luhmann 1990b: 117-118)。つまりシステムの内部で任意に処理される「同期化」とは違い、システム自身に不可避に伴うのが「同時性」である。

そしてルーマンは後ろで、ひとつの社会的システムとしての組織のなかで行なわれる同期化や、社会の機能分化に伴って機能システムの間で同期化が消失する一方そこにも同時性が付随することを論じている(Luhmann 1990b: 118-119)。『社会の社会』(1997)では、コミュニケーションにおいてはシュッツの言うように「誰もが共に年をとる」として、社会的システムとしての「社会」(Gesellschaft)と「相互作用」(Interaktion)もまたシステムと環境の關係に立ち、「同時性」に基づき両者にとって「同期化」はあくまで「欠落したもの」つまり「問題」として生じてくる、と記している(Luhmann 1997: 819-820=2009: 1115-1116)。

まとめると、システムと環境の同時性として論じられてきたものが、ある「観察者」による観察が何らかの「区別」を用いることにより、そこで区別されたものの中に不可避的に「同時性」が付与されていることとして表現されている。ここでの意味での「同時性」には、つねに何らかの「観察」による「区別」が前提とされる。その区別がまさしく、これまでのシステム/環境の区別と重なる。ただしこの「同時性」はシステムが任意に導入したり処理したりできるものではない、という点が繰り返し強調されている。

2-3. 小結

ルーマンのシステム理論による「同時性」は、まずシステムが環境との分化をとおして自身に独自の時間を構成し、かつシステムの要素が「出来事」という瞬間的な顕在性しかもたないものであることからもたらされる、システム/環境の同時性であった。この「同時性」が何らかのシステムとその環境との分化を俟って現われるものである以上、それぞれのシステムに相対的なものである。加えてシステム/環境の区別も含めて、ある「観察

者」が何らかの「区別」によって「観察」を行なうとき、そこで「区別されたもの」たちとの間に現われる「同時性」がある。ルーマンのこうした「同時性」では、何らかのシステムにとっての自身の内外の、あるいは何らかの観察者にとっての自身が用いた区別のもとで区別されたものの「同時性」が描かれている⁴³。

ルーマンはシステム一般を論じるが、基本的には心的システムと社会的システムが念頭にある。そのとき「同時性」は、あくまで個々の心的システムや社会的システムのなかにある。例えば「我」という心的システムから出発すれば、ここに現われるのは我と我ならざるものとの同時性、もしくは我という観察者の視点で区別されたものの同時性である。他方で「われわれ」を社会的システムと捉えれば、そこには「われわれ」と「われわれならざるもの」の同時性、そしてわれわれによる観察のもとで区別されたものの同時性がある。したがってシュッツが「我と汝の同時性」と「われわれ関係」の間で陥っていた問題は、シュッツがあくまで意識（心的システム）から出発しているせいでもありうるが（cf. Nassehi 2008: 110）、少なくとも社会的システムの創発や心的システムと社会的システムの区別を想定していないことに起因する。シュッツによる音楽の例は、むしろ音楽を共に作る過程へ関与するもの（音楽を共に作る「われわれ」）と、その過程に関与しないもの（この過程に参加しない「我」と「汝」の部分も含む）との「同時性」と読み替えることができる。

今の問題にも現れているシュッツの「同時性」の難点は、シュッツがこれを論じるにあたって「誰（何）にとっての同時性か」、「誰（何）がこの同時性の観察者か」ということを明示化していないこと、つまり「観察者」を主題化しておらず、ルーマンの言う「システム準拠」が不明瞭であることに関わる。ルーマンはシュッツが「われわれ関係」ないし「間主観性」を「所与」であって「自明視」されるものであるとしたことを批判的に捉えているが⁴⁴、その批判はシュッツがそういった未分化の状態を意図した概念によってその根底にある区別を覆い隠している点に向けられている。ただし、ルーマンもまた個々の観察者やシステムを超越した「同時性」は論じえず、その点でシュッツの「同時性」の主張を超え出るものではない。むしろそこに孕まれている問題性を先鋭化している。

しかし他方で社会的システムの「同時性」に関しても、まさにシュッツの言う「自明視」

⁴³ ここで「観察者」を「システム」として捉え（あるいは同じことだが、「システム」が「観察」を行なうものであると捉え）、「システム」自身が「システム／環境」の区別を用いて「観察」を行なっていると考えると、ルーマンの言う「再参入」（スペンサー＝ブラウン）という事態が想定される。前掲の大黒屋による「地平的同时性」と「志向的同时性」の相互前提としての「再参入」「観察者は循環する」の議論も参照（大黒屋 2002: 91-94）。ただし本稿ではシステム／環境の分化で生じる「同時性」と観察によって区別されたものの「同時性」の両者を、さしあたり別個のものとしておく。

⁴⁴ Luhmann (1986a: 176=1998: 101 ; 1986b: 42, 48-49=2007: 168, 176-178, 194 (註 2), 197 (註 19)) など参照。

が問題となる。シュッツの「同時性」を応用したいくつかの試みは、仮に異なる意識の流れの同時性は把握しえないとしても、相互行為や実存的な観点からは「同時性」がありうるとしていた⁴⁵。社会のなかでも「同時性」が現われるとすれば、それもまた何らかの仕方で「自明視」された同時性であると考えられる。またルーマンはシステム／環境の区別一般の同時性を論じているが、シュッツの「我と汝の体験流の同時性」とは両者の意識の流れが「同種」であることであり、そこでは「心的システム」（我）の環境全体ではなく、その環境に見出される別の心的システム（汝）との同時性が問題となっている。したがっていかに何かが他のものを単なる外的なものとしてではなく、自身と同類のものとして捉えるのかを考えると、シュッツの議論が一助となりうる。ルーマンは後に「相互浸透」や「構造的カップリング」といった概念でシステム間の関係に迫っているが、そのなかでシュッツの「間主観性」を「心的システム」と「社会的システム」の「相互浸透」に重ねている。

シュッツとルーマン両者の「同時性」に共通するのは、内部に時間の流れをもつ何ものが、「環境」との「同時性」に結びつけられていることによってリアリティを得ている、とする知見である。この知見は、生物学、人間学、広い意味での生の哲学の伝統によってもたらされている。ただしここでもシュッツとルーマンは、「環境」を内的なものとして捉えるか外的なものとして捉えるかで違いを見せている。特にルーマンは、何らかの社会的なシステムがその環境と分化し、独自の時間の流れをもつ、ということを説く。社会的時間と社会的な「同時性」の可能性が、そこでは提示されている。

⁴⁵ 渡辺慧は、仮にミクロのレベルで量子力学が光を分割するとしてもマクロのレベルでは光速度一定の法則を前提とする相対性理論が成り立ち、さらに重力が働く地球上の生物にはニュートン力学でもほぼ相違なくベルクソンの「普遍的同時性」も成り立ちうると指摘した（渡辺 1974: 296-298）。シュッツやルーマンの「同時性」に関しても、それが相当する水準が問題となる。

第五章 構成主義の社会理論

この章では、ニクラス・ルーマンによる「構成主義」の社会理論を取り上げて分析する。そのことをとおして、とりわけ社会学における「構成主義」や「構築主義」、およびそこにおける「構成」「構築」の含意について理解する。

その前に、ルーマン以外の他の社会学的な構成主義の理論と、またルーマンが参照している社会学以外の構成主義の議論について踏まえておく。

1. 構成主義の諸理論と社会理論との関わり

「構成主義」(constructivism) という立場を初めて標榜したのは、20 世紀初頭のロシアにおける芸術家の集団であった¹。「構成」(construction [建築、作図、概念構築]) の語に含まれる意味合いからも伺えるように、幾何学的なデザインで知られているが、その思想的な背景にはマルクス主義があり²、特に芸術革命の意図があった³。

¹ 1920 年代におけるロシアの構成主義の活動と、1930 年代におけるヨーロッパへの波及に関しては、Bann 編 (1974) を参照。バンによれば、ロシアの構成主義の活動は彫刻家のナウム・ガボ (Наум Габо [Naum Gabo]) と画家のアントワーヌ・ペブスナー (Антуан Певзнер [Antoine Pevsner]) の兄弟による『リアリズム宣言』(Реалистический Манифест [Realisticheskii Manifest], 1920) に始まるという (Bann ed. 1974: 3)。オランダのデ・ステイル (De Stijl) やドイツのバウハウス (Bauhaus) の活動と影響関係にあるとされており、広く言えばモダニズム芸術やモダニズム建築のひとつに数えられる。

ところで、ガボらの『リアリズム宣言』は以下の句で締めくくられている (引用は、前掲書所収の英訳より)。ガボらはここで、近代的な時間観のひとつを提示している。

明日のことで今日忙しい者は、何もしないことに忙しい。
そして今日したことから明日何ももたらさない者は、未来のために役立たない。
為すは今日。
今日のことは明日説明しよう。
過去は死肉のように捨て去るのだ。
未来のことは占い師に任せよう。
われわれは今日という日を引き受ける。(Bann ed. 1974: 11)

² ところで、日本で社会的なものに対して「構成」の語が最初に用いられたのはおそらくマルクス主義の社会科学においてである。ただしマルクスの social formation (soziale Formation) の訳語としての「社会構成体」というかたちで。当初のこの語の文脈は、「福本イズム」で著名であった福本和夫の『社会の構成＝並に變革の過程』(福本 1925) というタイトルによく現れている。その著作の冒頭はこのように始められている。

社会は、いかにして構成されてゐるか。またいかにして變革されてゆくか。この構成の過程並に變革の過程を考察すること。これ私が、諸君と共にこゝに考へてみたいと思ふ所の問題であります。(福本 1925: 1)

³ この構成主義の運動のさなかに書かれた綱領的な著作のひとつとして、例えばアレクセイ・ガン『構成主義』(Ган 1922=1927)、また日本での受容に関して滝沢恭二編 (2007) を参照。ガンの邦訳から「構成」に関して一文だけ引いておく。

「コンストルクツィヤ」[構成] は、構成主義の集合的な機能として理解すべきである。
(中略) コンストルクツィヤは、建造のプロセスそのものを展開するところのものである。

斯くて、第三のディスプリン [第一はテクトニカ (技術)、第二はファクターラ (材料) に関する] は、——作成されてゆく材料の適用をとおしての計画の形態化のディスプリンである。(Ган 1922=1927: 123-124)

他にも社会学的な構成主義以前に現れたものとして、数学の構成主義がある。これは「直観主義」とも呼ばれ、また近い立場に「操作主義」と言われるものもある⁴。これらの視角は教育科学や心理学への影響をとおして⁵、社会学の構成主義とも関係がある。またサイバネティクスの後期に現れてきたものとして、生物学や神経生理学、そして心理学に関わる「ラディカル構成主義」がある。ここにはルーマンも連なっている⁶。

背景にあるのは、第二章で見た、新カント派が用意した「構成」「構築」に関する用語系である。例えばヴェーバーはそこから理念型の構築について論じ、フッサールは意味の「構成」(constitution)を探究した。シュッツや他の現象学者、また社会科学論者への影響をとおして、今日の社会学的な構築主義者につながっている。また他方で、カルナップを初めとする論理実証主義者たちがさまざまな論理的な概念構築の議論を展開し、これを受けてサイバネティクスの流れのなかから数学、教育学、心理学や社会学への応用が図られ、「社会構成主義」や「ラディカル構成主義」に発展した。

社会学に目を向ければ、シュッツや現象学の影響を受けたバーガーとルックマンの『現実の社会的構成』がひとつのきっかけとなった。それとも一部関係しながら、スペクターとキツセの『社会問題の構築』に始まる社会問題の構築主義が登場する。またフォーナーなどの影響も受けた、言説分析の構築主義があり、さらにブリュノ・ラトゥールらの行なっている科学的知識(実験室)の構築主義がある⁷。

ルーマンの構成主義の立ち位置について考えるために、まずこれらの構成主義のなかで、「社会問題の構築主義」の主張を簡単に取り上げておく。

⁴ 例えば、数学史のアントニー・F・モンナの解説 (Monna 1986: 115-134=1993: 156-182, 第三部・第一章「構成と存在」(construction and existence))を参照。

⁵ 一例として、教育学の構成主義に関しては Larochelle ほか編 (1998)、心理学の社会構成主義に関しては Gergen (1999=2004)を参照。またさらに、政治学の国際関係論においても国際関係のシステムを「社会的構成物」(social construction)と捉える構成主義の立場が存在する (cf. Wendt 1999)。

⁶ 本章の第三節を参照。

⁷ 社会問題の構築主義に関しては、次節を参照。また構築主義の解説については、上野編 (2001)、中河ほか編 (2001)を参照のこと。ラトゥールらの科学的知識の構築主義については、『実験室の生活——科学的事実の構築』(Latour/Woolgar 1986)にまとめられている。また Latour (1987=1999)も参照。

2. 社会問題の構築主義

「社会問題の構築主義」の劃期的研究となったジョン・I・キツセとマルコム・B・スペクターの『社会問題の構築』(1977)は、「社会問題」に対して以下のような定義を与えている。

われわれは、社会問題 (social problems) を定義するにあたって、ある社会のメンバーたち (members of a society) が、ある想定された状態 (a putative condition) を社会問題 (a social problem) と定義する過程に焦点を合わせる。したがって、社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動 (*the activities of individuals or groups making assertions of grievances and claims with respect to some putative conditions*) であると定義される。ある状態を根絶し、改善し、あるいはそれ以外のかたちで改変する必要があると主張する活動の組織化が、社会問題の発生を条件づける。社会問題の理論の中心課題は、クレイム申し立て活動とそれに反応する活動の発生や性質、持続について説明すること (*to account for the emergence, nature, and maintenance of claims-making and responding activities*) である。

(Spector/Kitsuse 1977: 75-76=1990: 119)

キツセらは、「社会問題」を「クレイム申し立て活動」(claim-making activities) に焦点を当てて捉えることを提起した。そのために、「ある想定された状態」自体と、その「ある想定された状態に対するクレイム活動」とを区別し、前者を括弧に入れて後者の活動に注目することのうちに、社会問題研究の可能性を見出している。

その結果、社会問題がある種の状態 (a kind of condition) であるという考え方は、放棄されることになった。代わりに、われわれは、研究対象の定義として、特定の種類の活動 (a class of activities) を提示した。この戦略によって、その種の活動がたとえ一つでも同定されれば、経験的分析を行なうことができる。

(Spector/Kitsuse 1977: 95-96=1990: 150)

この定義を精緻化する過程で、状態についてのクレイムとその状態自体とを、はっきりと区別した。その妥当性については考慮せずに、メンバーのクレイムに関心を集中するというを示すために、想定された状態という語が用いられた。さらに、われわれは、状態の定義を構築すること (*the construction of definitions of conditions*)、クレイムを表現すること、そして、動機と価値を想定することは、当のメンバーによる活動なのであり、そのすべてが、研究すべき社会問題という現象の一部であると強調した。(Spector/Kitsuse 1977: 96=1990: 150)

つまりキツセらは「社会問題」を、その活動を行なっている「メンバー」たち自身によって「構築」されるものとして捉えるために、「クレイム申し立て活動」に注目している。

社会学者は、動機を同定し、測定し、分析しようとするうちに、しばしば、自分が構築したもの（their own constructions）と参加者が構築したものと混同してしまうのだ。社会学者は、実際のところ、当のメンバーたちが構築した動機と価値（the members' constructions of motives and values）を、まったく無視してしまうことさえある。

(Spector/Kitsuse 1977: 96=1990: 150)

シュッツの言葉を借りれば、社会科学の概念構築は「二次の構築」たらざるをえないがゆえに、この概念を行為者たち自身による「一次の構築」と混同してはならない。もしも社会的なものそれ自体を捉えようと試みるならば、何らかのかたちでこの社会における人びと自身による「一次の構築」へアプローチする手法を見出す必要がある。そこでキツセらが注目したのが「クレイム申し立て活動」である。この活動に注目することをとおして、「社会問題の構築」（constructing social problems）の過程を追求する。

ここで彼らの具体的な研究内容を取り上げることはできないので省略するが、方法にだけ注目すれば、では一体その「ある社会のメンバーたち」自身による「クレイム申し立て活動」をいかにして捉えることができるのか、ということが問われうる。シュッツにおいてすでに問題とされていたように、学的観察者による行ないが二次の構築にすぎないとすれば、どのようにして人びとによる一次の構築にアプローチすることができるのか。両者を架橋するものは一体何か、ということが問題となる。

構築主義の文脈でまさにこのことを問うたのが、スティーヴ・ウールガーとドロシー・ポーラッチによる「オントロジカル・ゲリマンダリング」（ontological gerrymandering [存在論的に恣意的な境界設定]）の指摘であった（Woolgar/Pawluch 1985=2006）。

ウールガーたちは自分たちの手法を「議論（argument）のエスノグラフィー」と呼び、その視点から「構築主義的」あるいは彼らの言う「定義主義的」（definitional）な視角による社会問題研究を検討し、それらの立場での社会問題の議論を特徴づける「指し手の中心的な戦略」を「オントロジカル・ゲリマンダリング」と命名した（Woolgar/Pawluch 1985: 214=2006: 184-185）。

しかし、著者たちは、状態や行動についての陳述を客観的なものとしても描きえているのだろうか。オントロジカル・ゲリマンダリングというメタファーが、この指し手を達成する中心的な戦略を示唆している。うまくいった社会問題についての説明は、分析や説明のために選択されたある事態について真の状態を問題視することに依拠しているのであるが、そのいっぽうで、分析が依拠する前提にも同じ問題が当てはまる

という可能性を背景化したり最小化しているのである。オントロジカル・ゲリマンダリングという手段を用いて、定義主義的な説明の支持者たちは、(明らかに)問題であると理解されるべき前提とそうでない前提との間に境界線を設けるのである。この「境界線を引く作業」(boundary work)は、現象ごとに存在論的な不確実性(ontological uncertainty)について異なった感受性を生み出し、維持する。ある領域は存在論的な疑い(ontological doubt)に適うものとして描かれ、別の領域は(少なくとも一時的には)疑いを免れるものとして描かれる。(Woolgar/Pawluch 1985: 216=2006: 188)

ウールガーたちはこのように、「クレーム申し立て活動」に注目する社会問題研究においても、何がクレーム申し立て活動であるのかに関して、つまり問題とされるべき活動と、問題とされざる状態、あるいはクレーム申し立て活動後の状態と、その活動がなかった場合の状態との境界線引きが密輸されているというのである。

状態に名前をつけ、同定し、記述するうちに、これらの著者は、自分たちが論じている想定された行動や状態について必然的に定義を下しているのだ。クレームメーカーたち(claims makers)のクレームは説明を必要とする社会-歴史的構築物(socio-historical constructions)(定義)として描かれるいっぽうで、著者たちのクレームや構築の作業(constructive work)は隠されたままであり、所与であるとみなされるのである。(Woolgar/Pawluch 1985: 217=2006: 190-191)

いわば「クレームメーカーたち」の構築を描くということ自体がその著者たち自身によるクレームであって構築の作業であり、そのことが不問にされている、ということを彼らは指摘している。

つまり、クレームの一方のカテゴリーは、存在論的に見て不確実なままにされ、さらに、クレームを生み出した社会的環境という観点から行なわれる説明の標的にされている。同時に、読者はクレームの他方のカテゴリーを信頼して受け入れるよう要請される。後者のクレームのいくつか、特にある状態の広がりや論拠に関するものは避けることができるかもしれない。しかし、社会問題についての議論(argument)を「行なう」ために、著者たちは、問題に関連する少なくとも一つの状態が存在することについて、そして/あるいは状態が不変であることについてクレームを申し立てることを避けられないのである。(Woolgar/Pawluch 1985: 218=2006: 194)

ウールガーたち自身の提案は、こうした非一貫性への対応の一つとして、「社会問題の説明を成り立たせるレトリック上の戦略を詳しく検討する」ことであった（Woolgar/Pawluch 1985: 225=2006: 208）⁸。

ウールガーたちが切り開いた「オントロジカル・ゲリマンダリング」の論争に関しては、さまざまな立場からのいくつかの応答があるが、総じて構築主義者の側からの対応は「厳格派」（あるいは、「分析的構築主義」や「再帰性の社会学」とそれ以外の「コンテクスト派」に分かれ、さらに前者に対するエスノメソドロジーからの批判がある（参照、中河 2001；岡田 2001；田中 2006；平・中河 2006）⁹。要点だけを挙げると、社会の人びとによる一次的構築／社会学者による二次的構築の区別を維持するかどうか、維持するとすればどのように対処するか、維持しないとすればいかにして（かつて実証主義や実在論、客観主義として批判された立場に戻ることなく）社会的なものを扱うか、という選択に尽きる。「厳格派」は最初の区別を維持し、特に社会のメンバーたち自身の言説に注目するかたちで一次的な構築と二次的な構築との再帰的な関係を考慮する（参照、田中 2006: 220-225）。エスノメソドロジーの立場からは、この区別を否定し「日常言語の基底性」から始めることが提起されている（参照、岡田 2001: 41）。

社会問題の構築主義をめぐる繰り広げられた方法論争の要点は、原理的な面では先にシュッツの「構成」の問題で見たことのなかにすでに現れている¹⁰。社会科学が社会的世界に生きる人びとと自身の行為や意味を扱うものであるとすれば、同じ問題がつねに現われる¹¹。「理念型」（ヴェーバー）や「分析的リアリズム」（パーソンズ）を用いざるをえないことは社会学のなかでも早くから自覚されているが、「構成」「構築」の時代になるとそうした立場に安住することができなくなっている。

ルーマンもまた、「社会的システムが存在する」という立論から出発することで、単なる学的観察者の構築にとどまらない対象を志向している。上に見た構築主義の諸理論と同様に、一次的な構築も、二次的な構築も、そして一次的構築／二次的構築の区別もやはり学的観察者によって構築されたものであることも、認める。

⁸ ウールガーはまた、上述のブリュノ・ラトゥールとの共著『実験室の生活』（Latour/Woolgar 1986）のなかで、実験室のなかでいかに科学者たちによって科学的事実が「構築」されていくかの過程についての研究を提示している。ラトゥールは他にも科学社会学的な研究をいくつか行なっている（ex. Latour 1987=1999）。

⁹ 中河（2001）と田中（2006）のまとめを借りると、この論争のなかでウールガーとポーラッチの批判以降に一定の役割を演じた研究として、「厳格派」とされる Ibara/Kitsuse（1993=2000）、その延長線上にある「分析的構築主義」の Pollner（1993）、また「コンテクスト派」の Best（1993；1995）それらへのエスノメソドロジーからの批判として Bogen/Lynch（1993）がある。

¹⁰ イバラとキツセによる厳格化の試みが参照するドン・ジンマーマンとメルヴィン・ポルナーの論文がまさに、シュッツの一次的構築／二次的構築の区別を社会学的研究の主題／資源として再定式化している（Zimmerman/Pollner 1971: 80-83；田中 2006: 220-222）。

¹¹ ただし原理的な問題が、研究実践上の妨げになるとは限らない。批判可能性に開かれているだけ、と言うこともできる。

ルーマンの「構成主義」がいわゆる構築主義の立場と、あるいは遡ってシュッツやバーガーとルックマンと異なるのは、むしろ社会学の伝統に則って個人（ルーマンの視角では心的システム）と区別される社会ないし社会的なものの創発を明示的に認める点にある。そしてその点を主張するために、構築主義の論者であれば余計なものとして避けるであろうような、認識論からの視角を導入する。

3. ルーマンのラディカル構成主義

本節では社会学における「構成主義」ないし「構築主義」の「構成」（「構築」）概念の含意について理解するために、ニクラス・ルーマンによる「構成主義」の理論を取り上げて分析する。ルーマンが構成主義を論じたものには、「構成としての認識」（1988）、『社会の科学』（1990）、「構成主義の認識プログラムと未知のままのリアリティ」（1990）がある。このうち、最後の「構成主義」論文が特に構成主義の視角を主題として扱い、自身の主張を明確にしている。よって本節では、この論文を参照してルーマンの「構成主義」について検討することとする¹²。

3-1. ルーマンの「ラディカル構成主義」の周辺

ルーマンが言及する「ラディカル構成主義」に関しては、『発明された現実』（Watzlawick ed. 1985）、『構成主義入門』（Foerster et al 1992）、『ラディカル構成主義の言説』（Schmidt ed. 1987）などの論文集がある。加えて「ラディカル構成主義」の名付け親エルンスト・フォン・グラザースフェルトの論文集『知識の構成』（Glaserfeld 1988）と自伝的作品『ラディカル構成主義』（Glaserfeld 1995=2010）がある。

『発明された現実』の冒頭にグラザースフェルトが寄せている論文「ラディカル構成主義入門」（Glaserfeld 1985）では、「ラディカル構成主義」についてこう紹介している。

したがってラディカル構成主義は何より、慣習と手を切り、認識をもはや「客観的」で存在論的な現実 (eine „objektive“, ontologische Wirklichkeit) に関係づけるのではなく、もっぱらわれわれの体験の世界における諸経験の秩序化と組織化に関係づける認識理論を展開するがゆえにラディカルなのである。ラディカル構成主義者は断固として「形而上学的リアリズム」と関係を断つのであり、「知能は〈中略〉世界を、自身を組織化するものそれ自体のなかへと組織化する」〔Jean Peaget, 1937, *La construction du réel chez l'enfant*, 311〕と言うピアジェの考えと完全に一致する。（Glaserfeld 1985: 23）

¹² ルーマンの「構成主義」を構築主義の理解のために応用した先行研究として、馬場（2001）と渡會（2004）がある。両研究ともに、特に構築主義における「オントロジカル・ゲリマンダリング」（＝「存在論上の境界の恣意的設定」（中河 2001: 16））の論争に焦点を当てている。これらはルーマンの「観察の観察」、「二次の観察」の視点をもとに、構築主義における構築／構築されざる現実の線引きが不可避であり、むしろその前提として機能しているという点を指摘するものである。長岡（2006）はルーマンによる「構成主義的認識論」に一章を割き、ルーマンの「構成主義」を「操作的閉じ（operative Schließung〔作動上の閉鎖性〕）」の主張に沿って詳述している（長岡 2006: 579-622, 第十六章「構成主義的認識論」）。

グラザースフェルトは上に名前の出ている発達心理学者のピアジェの理論から多くを得ているのであるが、『ラディカル構成主義』ではこのようにラディカル構成主義の主張をまとめている。

ピアジェの認知的発達理論の助けを借りて、ラディカル構成主義はその根本原理を以下のように定式化する。

- 一 ・知識 (knowledge) は感覚やコミュニケーションを経由して受動的に受けとられるものではない。
 - ・知識とは認知主体 (cognizing subject) によって能動的に築き上げ (build up) られるものである。
- 二 ・認知 (cognition) の機能は、生物学的な意味で適応的 (adaptive) なものであり、適合 (fit) や実行可能性 (viability) への傾向性を有している。
 - ・認知は主体による経験世界の組織化の役目を果たすのであって、客観的で存在論的なリアリティ (an objective ontological reality) を発見しているのではない。

(Glaserfeld 1995: 51=2010: 124)

ここで「適合」(fit) という言葉が使われているのは、認知によって得ることができるのは知識と(その知識から独立した)現実との「一致」(match)ではなく、知識と(これまでにわれわれが組織化した)経験世界との「適合」にすぎない、という含意がある。いずれにせよグラザースフェルトの構成主義は、心理学的な視角からの主観主義的なヴァージョンである。

『ラディカル構成主義の言説』の編者ジークフリート・J・シュミットは、ラディカル構成主義は学際的な言説の新しいパラダイムとして、神経生理学に始まり、生物学、心理学、精神医学、社会学、経営学、文学などに応用されていると述べているが、ラディカル構成主義の認知理論の原型となっているのは神経生理学的な脳の機能についての研究である (Schmidt 1987)。しかしさらに、シュミットがその論文集の冒頭でラディカル構成主義の出発点には「サイバネティクスの精神」があると述べ、特にその発端のひとりに後期サイバネティクスの研究者である電子工学者のハインツ・フォン・フェルスターがいる (Schmidt 1987: 12)¹³。フェルスターは「二次のサイバネティクス」(second-order cybernetics)の提唱

¹³「サイバネティクス」は数学者ノーバート・ウィーナーの命名によるもので (Wiener 1961=2011)、特にフィードバック機構の研究で知られる。この学際的な研究領域は 1946 年から 1953 年にかけて全 10 回開催された通称「メイシー会議」での研究者たちの討議によって生み出された。メイシー会議に関しては、Heims (1991=2001)、赤堀 (2009) を参照。第 1 回の会議が「生物学および社会科学におけるフィードバック機構と循環的因果律システムに関する会議」(The Feedback Mechanisms and Circular Causal Systems in Biology and the Social Sciences Meeting)と題されているように、当初から数学や電子工学での知見の人間科学ないし社会科学への応用が目指されたものであった。全 10 回の会議の議長を務めたウォレン・マカラックの誘いで、1946 年に開かれた第 6 回の会議からフェルスターは参加して

者として知られるが¹⁴、この「二次のサイバネティクス」または「サイバネティクスのサイバネティクス」は、対象となるシステムを、単なる客体として観察するのではなく、そのシステム自体を「観察するシステムとして観察する」試みである（赤堀 2006: 68-69）。

ルーマンはフェルスターの「二次のサイバネティクス」や、マトゥラーナたちの「オートポイエーシス」から多くを取り入れているが、グラザースフェルトとも併せて視角の違いは重要である。論者によって工学、生物学、神経生理学、社会学と立場が違うので、構成主義に関してどこまで一般化や応用が可能かはルーマンも留保するように問題となっている。

加えて、さまざまな「社会的構成」の論争に関しては、科学哲学者イアン・ハッキングが整理を行っている（Hacking 1999=2006）。ハッキングは「社会的構成」がさしあたり問

おり、議事録の編集も担当している（Heims 1991: 72-74=2001: 105-107 ; Müller 2000: 10-13）。公刊されたこの議事録のタイトルは、『サイバネティクス——生物学的システムと社会的システムにおける循環的因果律とフィードバック機構』（Cybernetics, Circular Causal, and Feedback Mechanisms in Biological and Social Systems）と言う。ちなみに、この「メイシー会議」に参加した社会学者には、グレゴリー・ベイトソンやマーガレット・ミード、クルト・レヴィン、ポール・ラザーズフェルトなどがある。ラザーズフェルトは第 1 回の会合時に社会科学に関する特別会議を提案し、1946 年 9 月に「社会における目的論的メカニズム会議」を開催した。そこにはタルコット・パーソンズやロバート・K・マートンも招待されており、サイバネティクスの知見がアメリカ社会学に波及するきっかけとなった（Heims 1991: 183-184=2001: 259）。

¹⁴ フェルスターはサイバネティクス研究の発信地であった「メイシー会議」の終了後、1958 年（～1975 年）にイリノイ大学電子工学科に人工知能研究を目的に「バイオロジカル・コンピューター・ラボラトリ [生物学的コンピューター研究室]」（Biological Computer Laboratory, 通称 BCL）を設立した。BCL の活動に関しては、Müller (2001)、赤堀 (2006) 参照。フェルスターは BCL にさまざまな分野の研究者を客員教授として招聘し、メイシー会議に倣うかのように学際的な研究を推進していた（Müller 2001: 15-22 ; Heims 1991: 283-284=2001: 392-393 ; 赤堀 2006: 67-68）。そのなかに「オートポイエーシス」論を立ち上げた神経生理学者のウンベルト・R・マトゥラーナとフランシスコ・ヴァレラもいる。フェルスターとヴァレラが主催した 1978 年の『現実の構成』という会議にはグラザースフェルトも参加するなど（Glaserfeld 1995: 8-9, 18-19=2010: 32-33, 52-54）、フェルスターを代表としてサイバネティクスから構成主義への関わりを見ることができる。フェルスターとメイシー会議、および BCL との関わりに関しては、後年に行なわれたフェルスターへのインタビューも参照（Franchi et al 1995）。そしてルーマンのシステム理論もまたフェルスターの概念をいくつか取り入れており（Müller 2001: 28）、さらに BCL に所属していたマトゥラーナ、ヴァレラその他、論理学者ゴットハルト・ギュンター、精神病理学者・脳科学者のウィリアム・ロス・アシュビー、会話研究のゴードン・パスクなどの名前はルーマンの著作のなかで幾度も見出される（赤堀 2006: 63-64）。

題意識の喚起として用いられる語であること、また社会科学における観念・分類と対象との相互作用ないし「ループ効果」について論じている。

以上の先行研究で指摘された点も踏まえ、本節ではルーマンの「構成主義」論文 (Luhmann 1990a) を検討する。

3-2. システム／環境の区別に基づくシステム理論による「構成主義」——出発点としての「いかなる区別によって問題が表されるか」

「構成主義」的な「認識」について論じるにあたり、この論文は「認識はいかにして可能か」(Wie ist Erkennen möglich?) というカント型の問いではなく、「いかなる区別によって問題が表されているか」(durch welche Unterscheidung wird das Problem artikuliert?) という問いから始めている。上で見た「社会的秩序はいかにして可能か」の時と同様に、まず「いかにして」を問うことから議論を始めているが、違っているのは可能性の条件を初めに問うというカント型のやり方を避けていることである。ルーマンは、仮に「認識はいかにして可能か」という問いから始めるとしても、その答えはさしあたり「ある区別を導入することによって」(Einführung einer Unterscheidung) となり、そして結局のところその「ある区別」を別の何かから区別する必要が生じる、としている (Luhmann 1990a: 33-34)。

そしてここでの「構成主義」は、「認識するシステム」を「主体」や「客体」として定めるのではなく、「主体／客体」(Subjekt/Objekt) の区別を、「システム／環境」(System/Umwelt) の区別によって置き換える (Luhmann 1990a: 34-35)¹⁵。このシステム理論は、認識論的な成果を、超越論に基づいてではなく、例えば神経生理学や科学史といった経験的な研究の派生物として産み出している (生物学から社会学への過剰な外挿は避けなければならないにしても、と付け加えつつ)。そこで得られたのは、「認識することができるのは、閉じたシステムだけである」という知見である¹⁶。つまり「システム／環境の区別」は、「リアリティの脱存在論化 (De-ontologisierung)」をもたらす。それはリアリティ自体の否定を意味するのではなく、リアリティを語る際に用いられてきた存在論的な「存在／非存在」(Sein/Nichtsein) の区別を疑い、これもまたシステム／環境の区別に置き換えることを指す (Luhmann 1990a: 35-37)。

以上のようにルーマンは、「システム／環境の区別」に基づくシステム理論という自身の

¹⁵ 社会 (Gesellschaft) というシステムに寄せてこのことを述べているものとしては、『社会の社会』第5章「自己記述」第2節「主体でも客体でもなく」(Luhmann 1997: 868-879=2009: 1166-1177) を参照。

¹⁶ ルーマンが「閉じたシステム」のもとで論じている「自己言及性」と「反省」については、『社会システム理論』第11章「自己言及と合理性」(Luhmann 1984: 593-646=1995: 797-870) を参照。

枠組を、「構成主義」における「認識」にも重ねている¹⁷。ルーマンはシステム／環境の区別を前提として、あらためて「認識はいかにして可能か」へ答えるとする、その回答は「自身の環境から切り離されたあるシステムによる作動 (Operation eines von seiner Umwelt abgekoppelten Systems) として」となる、としている。ルーマンはその種のシステムを「作動上閉じたシステム」(operational geschlossenes System) であると続けたうえで、その次に問題となるのがこのシステムの「自己言及」(Selbstreferenz) と「回帰性」(Rekursivität) であるとし、ジョージ・スペンサー＝ブラウンの『形式の法則』(Spencer-Brown 1969=1987) の論理学を借りて「何かを指し示す (bezeichnen) ために区別を用いる作動」を「観察」(Beobachten) と呼び、「認識」(Erkennen) を「システムのなかで再適用しうる結果をもたらす」観察、「冗長性を利用し産み出す」かぎりでの観察、と定めている (Luhmann 1990a: 38-40)。

3-3. 認識とリアリティの「同時性」、観察と認識の「回帰性」

ルーマンのシステム／環境の区別に基づくシステム理論から出発すると、システムの環境には「観察」の対応物は存在せず、観察によるあらゆる派生的な獲得物 (特に「情報」) は「純粋に内部の獲得物」である。「というのも、情報が選択となりうる (つまり、情報が情報となりうる) 際の基盤となるさまざまな可能性の差異と地平とがすでに、環境のうちには存在しない、システム内的な構築物 (Konstrukt) だからである」(Luhmann 1990a: 40)。ここで、外部世界が現存すること、外部世界との現実的な接触がシステムの条件であることが疑われているわけではない。しかしルーマンによれば観察者は区別に依拠し、「観察に用いられる区別の統一は、システム内的に構成 (konstituieren)」されており、システムにとっての「世界」やシステムにとっての「リアリティ」(Realität) は、やはり区別をとおして「構成」(konstituieren) されている。つまりそれぞれのシステムにとっての「世界」とは、「システムと環境」(自己言及と他者言及) という差異の統一を示す。また「社会的なリアリティ」は、多数の観察者によるさまざまな観察のなかで、それらの差異にもかかわらず一致するものとして与えられるものを指す (Luhmann 1990a: 41)¹⁸。

ルーマンはこの認識と「リアリティ」の関係について、構成主義の分析にとって刺激となるのは両者の「事象的」(sachlich) な関係ではなく、「時間」の問題であると主張してい

¹⁷ 特に「システムは存在する」([さまざまシステムがある (所与である)] es gibt Systeme) (Luhmann 1984: 30=1993: 17) という前提から論を始める『社会システム理論』での「システム／環境の差異」の節 (Luhmann 1984: 34-70=1993: 23-63)、また『社会の社会』の「システム／環境の区別」の節 (Luhmann 1997: 60-78=2009: 52-74) を参照。

¹⁸ 「構成としての認識」(1988) でルーマンは、「システムと環境」の差異の統一を示すのが「世界」、「認識と対象」の差異の統一を示すのが「リアリティ」、「顕在性 (Aktualität) と可能性 (Possibilität)」の差異の統一を示すのが「意味」(Sinn) である、としている。さらに、かつての神学であればこうした区別から区別されざる統一へ向かう場合、その統一が「神」として言及されたと加えている (Luhmann 2001: 229, 234=1996: 240, 246-247)。

る。「認知的システム（少なくとも、脳、意識、コミュニケーション・システムとしての社会）は出来事（Ereignissen）という基礎のうえで作動する。そして出来事とは瞬間的な顕在性だけをもつものであり、現われるやいなやふたたび消滅する」。そうであるとしたら、システムと環境の時間関係はいかなるものと考えられるか。その関係は「同時性」（Gleichzeitigkeit）である、とルーマンは答える。ルーマンによれば、システムのリアリティの基礎とは、システム自身の作動と、その作動を支えるリアリティの条件との「同時性」である¹⁹。ただしこの同時性は「同期化」（Synchronisation）ではなく、影響関係や因果関係のうちにあるということではない。システムは固有の時間を構成しているが、システムにとって任意に処理することができない時間は、「あらゆる作動のなかでそのつど瞬間的に再生産される同時性」である。この「同時性」の例として、ルーマンはシュッツの「共に年をとること」と、ルソーの「湖畔の波音」の話を出している（Luhmann 1990a: 42）。

ルーマンはそこから、システムと環境の同時性が不可避であるために「瞬間的に顕在的な時間投企」が生じ、動物や植物において「予期反応」（anticipatory reactions）が、さらに高度に発達した認識を行なうシステムでは「予測」（prognostizieren）が可能になる、としている。しかし「予想」とは未来に現前するものを現在に認識できるということではなく、未来との差異を「構成（Konstruktionen）によって架橋」することであり、いわば自身の可能性の過剰、自身の「想像の産物」（Produkt eigener Imagination）である、とも付け加える。そしてルーマンがたびたび主張するように、ここでも構成主義的な認識論は、「存在（Sein）と思考（Denken）」という古い合理性の連続体と、超越論的な「認識の可能性の条件をアプリアリに保証する主観的な意識の能力」という仮定を解消する、と強調する。その代わりに問題として残るとされるのが、観察と認識の「回帰性」である（Luhmann 1990a: 42-44）。

「回帰的」（rekursiv）とは、自身の結果を次の作動の基礎として利用する過程（Prozeß）を示す。そして回帰性が必要とするのは、「一貫性のテスト」（Konsistenzprüfungen）を継続的に実行することであり、そのために受け入れ／拒否の可能性を備えた「二項図式化」（binäre Schematisierung）である。ルーマンは知覚と記憶の働きに関する研究から脳の水準ですでに二項図式化が必要となっていることを引き出し、同じことは心的システムと社会的システムにもあてはまる（例、科学における真／非真のコード）としている。そして「観察」においては、この二項図式の構造がひとたび「観察されたもの」の継続的な観察を可能にし、つまり作動の結果の検証のために同じ作動が繰り返され、そこから「意味単位」の「圧縮」（Kondensierung）が生じる、と続ける。異なった時間、状況、観点のもとで観察されるなかで圧縮された意味がさらに濃縮され、異なった観察のなかで同じものとして現われるものについての記号が抽象化される、と。ここでルーマンは、ヒルベルトの「回帰関数」、マトゥラーナの「適応保存」、ドナルド・キャンベルの「末端知識」といった表現を引いている（Luhmann 1990a: 44-46）。

¹⁹ 「同時性」については、前章を参照。

一般的な理解では、観察の観察 (das Beobachten des Beobachtens) はまず (主体と客体を区別し、しかもまず客体のほうに注目することで) 観察者が何を観察したか (was ein Beobachter beobachtet) に向けられる。他方で構成主義は、観察された観察者がいかに観察をしているか (wie der beobachtete Beobachter beobachtet)、に注目する観察の観察を記述する。(Luhmann 1990a: 46)

したがって構成主義的な「観察の観察」は、観察された観察者が何を／いかに観察できないのか (社会学で言う、観察された観察者にとっての「潜在的な構造と機能」) をも観察する、とルーマンは言う。「潜在性の観察」自体は、これまでも特に超越論主義に沿って発展し、反啓蒙主義やイデオロギー批判のなかで実践されてきたが、ここでの構成主義の「回帰的な観察」という概念は「潜在性の観察」を含みつつも、「潜在的な構造によって現実のままの世界を直視することが妨げられている」とする先入見は排除する。というのも、「区別を行っている際に用いている区別を区別することの不可能性」は「認識自体の根本条件」だからである。そして「区別の選択が潜在的な利害関心と相関しているかどうか」は「二次の観察」(Beobachtung zweiter Ordnung) の水準で現われる問題であり、例えばその「二次の観察」を行なう者自身に対しても、イデオロギー的歪曲の主張は行いうる (Luhmann 1990a: 46-47)。ルーマンはこの後で、「構成主義」の視角から見た「パラドックス」の位置づけについて論じているが、そのなかで「あらゆる観察者は、自身が行なう観察の根底に区別を置くことでパラドックスに巻き込まれている」と強調している。併せて、「回帰的な観察」はパラドックスの除去を可能にはしないが、「異なった諸作動上での時間的・社会的分割」を可能にするとしており、他方で「合意 (Konsens) による統合」の追求は、パラドックスを不可視化するままにとどまる、と付言している (Luhmann 1990a: 49)²⁰。

3-4. 構成主義のリアリティ——区別による構成としてのリアリティ

ルーマンは以上で記してきたような前提と踏まえて、あらためて構成主義のリアリティ観を、従来のいわゆる客観主義的な立場や主観主義的な立場との対比、また旧来の観念論との比較のなかで提示している。

ルーマンによれば古典的なリアリティ理解として、客観主義は〈リアリティは多面的であり、個々の観察地点からは完全に見通すことができない〉と説き、主観主義は〈パースペクティブは多数あり、それぞれが条件づけられた視界を可能にするが、自身のパースペクティブを見ることは妨げられる〉と説く。構成主義はこうした立場を、認識とリアリテ

²⁰ 上記でルーマンは自身の法社会学関係の論文を参照指示しているが、暗にハーバーマス／ルーマン論争や、両者における「法の妥当性」についての見解の違いが示唆されている。

ィの関係をラディカル化することで克服し、〈側面の複数性〉も〈パースペクティブの複数性〉も区別による認知の産物と捉える。

つまり認知的 (kognitiv) には、あらゆるリアリティは区別をとおして構成され (über Unterscheidungen konstruiert werden) なければならず、そのためリアリティは構成されたもの (Konstruktion) として残る。(Luhmann 1990a: 50)

このリアリティは認識可能であるが、一方でこうした区別によってのみ認識可能となる。認識にとってはそのつどの区別として機能するものだけがリアリティの保証 (eine Realitätsgarantie) であり、またリアリティの等価物 (ein Realitätsäquivalent) である。より正確にはこうも言う。観察がリアリティを保証するという事は、自身の作動上の統一 (ihre eigene operative Einheit) のなかに存在する。しかしまさにこうした統一として、区別は自身の側で観察可能なものではない。言い換えると、作動は世界と同時に遂行される (Die Operation vollzieht sich gleichzeitig mit der Welt)。それゆえ作動にとって世界は依然として認知的には接近できない (kognitiv unzugänglich) ものである、と。(Luhmann 1990a: 51)

したがって、認識と外部世界のリアリティとの関係は、認識作動の盲点によって創造されるものであり、「リアリティとは、リアリティを認識する際には認識されないものである」ため、かくして「認識が意味を必要とし、意味が区別を必要とするならば、最終的なリアリティ (die letzte Realität) というものは無意味 (sinnlos) である」とルーマンは結論づける (Luhmann 1990a: 51)。

またルーマンの見るところでは、旧来の観念論は、認識と対象の区別から出発し、(当の認識／対象の区別によっては応えられない)「認識はいかにして自身の対象に至るのか」という問題を抱えていた。ここで問題は認識と対象という差異の統一のうちにある、例えば弁証法的な理論によって回答が与えられてきた。しかし構成主義の議論から見れば、認識と対象の区別もひとつの区別、ひとつの「構成」(eine Konstruktion) であり、「こうした区別の統一とは、盲点に他ならない」(Luhmann 1990a: 51)。構成主義にとってなお問題となるのは「いかにしてそうした制限を複雑性の増大の条件へ変形することができるのか」ということである。この場合の認識の「非恣意性」とは、この変形過程についての「進化的にコントロールされた選択性 [淘汰性]」のうちにある (Luhmann 1990a: 52)。

総じて構成主義的な認識が反映するのは、「統一から差異への世界志向の転換」であり、「この認識は区別とともに始まり区別とともに終わる」。さらに区別を遂行する単位として、自分自身を「象徴的過程」(symbolisches Prozessieren) として理解する。「象徴」(Symbol) として役立つのは、「分離されたものの統一」「区別されたものの相互調和」である。反面から言えば、『区別』はただ『指し示し』によってのみ、象徴 (Symbol) はただ悪魔的

(diabolisch) にのみ扱われうる。ただ区別されたものだけが接続能力をもつ」(Luhmann 1990a: 51)。

3-5. コミュニケーション・システムとしての社会——およびそのなかでの科学システムの反省としての構成主義

この論文でルーマンは構成主義の認識一般に大部分を割り、それらを前提として最後に社会と、社会における科学のなかでの構成主義について記している。

ルーマンはこの論文で「観察」を「区別を行なう指し示し」(unterscheidende Bezeichnung)としてきわめて形式的に規定しているが、そうすることできわめて異なった経験的なシステムが「観察」という作動を実行しうる可能性を開く(例、生命システム=細胞・免疫システム・脳等々、心的システム=意識、社会的システム)、としている(Luhmann 1990a: 52-53)。

このようにさまざまな「観察」を考慮すると、構成主義では認識を「人間」(Mensch)へと帰責する伝統ではなく、「ポスト人間的」(post-humanistisch)な理論が問題となる。ここで考えられているのは「何か悪魔的なことではなく、ただ『人間』(しかも単数の)という概念像が認識の担い手の帰責あるいは認識の単位の保証としては放棄されなければならない」ということだけである。ルーマンは「認識連関の統一」は、「オートポイエティックなシステムの統一」のなかにもみ存在するということから、かくして心理学的な認識論の射程は限定され、さらにこうした「言葉や概念によって区別を組織化するシステムを問題とするならば、コミュニケーション・システムとしての社会へ行き当たるだろう」と説くに至っている(Luhmann 1990a: 53-54)。

ルーマンは構成主義を社会に適用するに当たり、知識社会学(ルーマンの言葉でいえば「ゼマンティック」論)の見解と近づいている。ルーマンは、構成主義はこれまで生物学、神経生理学、心理学(マトゥラーナ、ヴァレラ、ピアジェ、グラザースフェルト)で用いられてきたが、効果の面ではむしろ社会学に有利なものであると言う。というのも、

われわれが認識として知っているものは、コミュニケーション・システムとしての社会の産物である。このシステムに対して意識は、確かにそのつど実際に参加しているが、しかしつねに極小の部分でしか参加していない。(Luhmann 1990a: 54)

近代社会の知識在庫(Wissensbestand der modernen Gesellschaft)は、自身の妥当性要求のなかでも自身の発展可能性の評価のなかでも、意識過程への関係づけによって把握されることはできない。この知識在庫はコミュニケーションの産物である。

(Luhmann 1990a: 54)

こうした条件のもとでコミュニケーションが継続できているということは、印刷と電子的数据処理が明らかにした「中間記憶装置」の可能性が示しており、また例えば「日常世界的な認識」と「科学的な認識」の違いを考えても、両者の区別は異なった種類の心的な知識からではなく、ある社会的システム（科学）の分出から生じているものであり、システム準拠として社会を選ぶことは不可避である、とあらためてルーマンは繰り返している²¹。この点の強調は、同じ「構成主義」の立場であっても、生物学のそれや心理学のそれとは見解を異にする分岐点である。そのうえで「回帰的な観察」、「二次の観察」、つまり「観察の観察」にしても、社会学的な文脈のなかでより十分な射程を得るのであり、共通のリアリティに向けられた他の観察者による観察を観察することに一定の認識利得があるとしている（Luhmann 1990a: 54-55）。

ここでルーマンはこれまでに社会学や他のさまざまな学問で考えられてきた他者論に対するひとつの回答を提示する。一体に、他の観察者を「観察者」あるいは他の「心的システム」として観察することはいかにして可能なのか。一般的には、他者を自我のアナロジー（＝「他我」[alter ego]）として体験するがゆえに、と回答される。しかしこれは問題を別様に定式化したにすぎず、そのアナロジーがいかにして可能となるかを論じていない²²。ルーマンはここで、「他の観察者の構成（Konstruktion eines anderen Beobachters）はコミュニケーションによって強いられている」ということから出発することを提起する。「というのもコミュニケーションは、観察者が自身の知覚領域の中で伝達（Mitteilung）と情報（Information）を区別することができる場合にのみ、生じるからである」、と。コミュニケーション・システムのもとでは、情報／伝達の区別の「進化上の貫徹力」が示されており、この区別に基づく第二の区別として主体／客体の区別や、派生物として自我／他我の区別が生じている（Luhmann 1990a: 55-57）²³。

これまでの見解をまとめると、「構成主義は世界の現存やリアリティを否定するのではなく、むしろただ構成するもの」（*der Konstruktivismus die Existenz und die Realität der Welt nicht bestreitet – sondern eben nur konstruiert*）である。ルーマンはこの論文の最終段で、自身の社会理論から「構成主義」という視角の社会での位置づけを記している。ルーマンは「変異と選択」といったダーウィンの図式で構成される「社会上での知識の進化についての理論」を採用しているが、そうすると「構成主義」は「分化した科学システ

²¹ 以上の「知識在庫」、「日常的構成／科学的構成」の区別、「二次の構成」は言うまでもなくシュッツ後期およびバーガーとルックマンの『現実構成』のテーマでもある。

²² ルーマンは例えばグラザースフェルトのような構成主義者においてさえ同じ主張が見られる、と付している（Luhmann 1990a: 55）。構成主義において社会ないし社会的なものを立てるか否かという点で、社会学的な構成主義と心理学的な構成主義の違いが垣間見える。

²³ ここでルーマンは、「情報／伝達」の区別およびその「理解」からなるという「コミュニケーション」に関して、『社会システム理論』の第四章「コミュニケーションと行為」（Luhmann 1984: 191-241=1993: 214-278）を参照指示している。

ムを伴う社会についての認識論」として捉えられる。その視点から見ると、社会が近代的な意味での科学を遂行する場合に、構成主義的にのみ解消される「反省の問題」が立てられる(57)。「科学の進歩」が「より大胆な区別に結びつけられている」ということを認めるとすれば、今日の「認知科学」と「自己言及的なシステムの理論」が新しく提示したのは、「自己言及的なシステムの作動上の閉じ」という観点である。いわば「構成主義は科学システムの反省が自身の極端さに直面して流れ出てくる際の形式であり、よりいっそう蓋然性の低い区別を最終的には認識固有の遂行として認識する際の形式である」。したがって社会は部分システムとして分出させた科学のなかで、「高度に蓋然性の低いもののなかで自身の認識の遂行を昂進している」(Luhmann 1990a: 57-58)。

この論文では最後に、認識論が科学にもたらすものをこう規定している。

つまり認識論は科学を基礎づけるのでもなければ、科学に基礎や論拠や確実性をもたらすものでもない。もはやこれまでどおり認識論を、知識を基礎づける理論として捉えることはできない。むしろ反対のことがあてはまる。認識論は認識の不確実性を反省し、そのことについて根拠を提供する。(Luhmann 1990a: 58)。

4. 小結

社会学における「構成主義」や「構築主義」の理解に光を当てるものとして、ルーマンの「構成主義」論文の要点は、以下のようにまとめることができる。

(1)「構成としての認識」:「認識」はひとつの「構成」である。つまり認識は何らかの「区別」に基づいており、認識を行なうシステムはシステム/環境の区別に基づく自己言及的に閉じたシステムである(ルーマンないし学的観察者はシステム/環境の区別から始める、というのも同じことである)。そして「認識」は何らかの「区別」によって始まるというかぎりで恣意的であるが、「回帰的な観察」が続けられるなかで端緒の恣意性は失われていく。特に回帰性に資する「二項図式化」が働いていく。

さらにあらゆる「観察」は「区別」に基づくという点で、自己適用した際にはパラドックスに至る。これを排除することはできず、「観察の観察」によって別の角度から観察したり、「回帰的な観察」のなかで時間的・社会的に分割したりすることができるのみである。

(2)「構成されたものとしてのリアリティ」:区別による認識にとってのリアリティは、この区別の統一に、しかもこの区別をとおして至ることにある。そのかぎりでは、リアリティもまた「構成されたもの」である。ただし「盲点」として。したがって、「構成主義」はリアリティを否定するものではなく、その位置づけを変えるものである。そしてここでのリアリティは、システムにとっては環境との「同時性」として与えられている。

(3)「社会的構成」:ここで扱われる「認識」や「観察」は意識のみならず、生命システムや、社会的システムによってもなされるものであり、認識や観察を意識に関係づけることを避けるならば、社会的・コミュニケーション的な観察について論じることができる。

(4)「科学論・科学社会学としての構成主義」:「構成主義」は社会学的に見れば、「分化した科学システムを伴う社会についての認識論」であり、科学システムが自身の極端さを反省するときの形式である。この認識論は科学を基礎づけるのではなく、認識の不確実性を反省し、そのことについての根拠を提供する²⁴。

²⁴ このことについて詳しく論じているのが、『社会の科学』(1990)である。特に第9章「科学と社会」を参照。その章の結論部はこのように締めくくられている(Luhmann 1990c: 700-701=2009: 733-734)。

もちろん構成主義的な認識論は、日常生活で役に立ついかなる指針も提供しない。いかなる政治家も、対立図式が一つの構成物であり、国家は政治システムの自己記述

以上の要点を踏まえて、本稿で問題としてきた社会理論における「構成」や「構成主義」について、ルーマンのこの論文から得られた見解を示していこう。

第一に、構成主義は二元論批判の側面をもつ。とりわけ社会理論における「構成」の概念には、従来の理論の二元論（例、主体／客体、行為／構造）を批判し、その対立を置き換えたり媒介したりする過程に注目する狙いがある。この点は、第一章で確認したとおりであった。次に、認識の不確実化を遂行している。「構成」は、何らかの認識が端緒の区別に依存すると説く点では必ずしも新しい主張ではなく（ルーマンの言う「潜在性の観察」の伝統）、近代の科学論・社会科学論のなかで提起された諸構想とともに発展してきた知見である。そのうえで「構成主義」は、認識の根拠づけではなく、認識の不確実性についての反省に力点がある。

しかし他方で、構成主義の社会理論の分析が注目するのは、いかにして端緒の恣意性が喪失するか、という点にある。そして「構成主義」は当の現象の端緒の恣意性を指摘するよりも（あるいはそれとともに）、その端緒の恣意性がいかに奪われていくのかという過程を追求する点に貢献がありうる。ルーマンであれば、二項図式化、コード、メディアがそれに当たる。

また「構成」には「時間」についての特有の視角、特に「同時性」の観点が含まれており、「社会的構成」の内容には、現代に特有の時間性があるという含意がある。その点で、知識社会学的に見れば、「構成主義」はアンソニー・ギデンズなどの言う「再帰的近代」に親和的な観点である。別の角度から言えば、「構成主義」、「再帰的近代」論、「ポストモダン」などと呼ばれる言説は同時代に現れてきた。他方で、ルーマンならずともポストモダンとモダンとのあいだの差異よりは一貫性を見る立場からすれば、近代ないしモダンに特有の時間性の問題となる。いわば「同時性」としての「構成」、「同時代性」ないし「近代

のための一つの定式であるという洞察をもちいて、政治は行えない。愛する男は誰しも、いかにして自分がある有機体の表面の曲線をかかも繊細に微細な相違まで区別できるようになったのか、反省することはないだろう。構成主義は、社会全体に対しても個々の人間に対しても、世界についての情報を与えることはない（たとえ構成主義がみずからの指針をも構成として記述しなければならないとしても）。

しかしまた構成主義は、社会に対して外部から要求されたものでもなければ、社会の無関心にぶつかってはね返されるものでもない。あらゆる反省理論（Reflexionstheorie）と同様、構成主義の場合にも、問題となるのは社会そのものの産物である。あらゆる機能システムの反省は、それぞれの仕方^{モダン}で近代社会の自己記述に貢献している。認識を構成として構成することによって、社会は、科学のために分出した機能システムを遂行するときに、みずからに何が起こっていて、その後何が起こるのか、気付かされる。そのような指摘は、合理性の基準や倫理的な規定の観点のもとで現在見られているすべてのことよりも、はるかに刺激的で影響力があるかもしれないのである。

性」としての「構成主義」と言うこともできる。

そして最後に、ルーマンの構成主義が示しているのは、「社会的構成」や「社会の構成」という視点が構成主義の社会理論にとっては肝要ということである。「構成」に関して、ルーマンは社会的（コミュニケーション的）な構成、社会による構成を認める。この点は、社会学と他の分野の「構成主義」で、あるいはまた論者ごとに異なりうる点である。例えば、「社会的構成」を論じたバーガーとルックマンとも、さらに遡ってシュッツの「構成」とも、この位置づけの点でルーマンには微妙な距離がある。むしろパーソンズに代表される社会システム理論や構造主義・機能主義との近さが見られる。

今後の可能性として示唆したいのは、社会的な構成ないし社会の構成としての「同時性」の議論である。ルーマンの社会理論に沿って言えば、近代社会はさまざまに社会分化を遂げ、多元化しているにもかかわらず、「同時性」から脱却することはできない。他方で同時性に縛られながらも、それぞれの部分システムがそれぞれの時間軸で動いている。あるいはまた、それぞれの領域が見る「同時性」も、それぞれにおいて異なっている。社会のさまざまな領域のあいだに時間的な拘束と時間的な差異とが同時に存していることは、人びとに一体いかなる影響を及ぼしているのであろうか。このように、社会における時間的な拘束と時間の流れの差異との双方を視野に入れるという点に、構成主義が時間の社会学に対して寄与する点がある。

終章 社会的な構成の時間性——現代社会の時間と「時間の社会学」について

1. まとめ

本稿ではニクラス・ルーマンの「ラディカル構成主義」の社会理論を中心として、同時代の社会学の諸理論や、隣接他分野の「構成主義」の理論、また先駆となるアルフレート・シュッツの「意味構成」の議論を参照しながら、現代の社会学における「構成主義」がどのような内実をもっているのか、ということを検討してきた。

この「構成主義」に関して、シュッツとルーマンの対比から説明をすれば、シュッツは『社会的世界の意味構成』において多元的な「構成」の議論を展開するなかで、「構成」に寄せて社会的世界の成り立ち（Aufbau）、意味に伴う時間性（Konstitution）、社会科学における観察者の問題（Konstruktion）を提示したが、ルーマンはこれらの担い手を「社会」に帰属させた。つまり個人やその意識による「構成」ではなく、社会的なものそれ自体による「構成」を説く。ここには、社会的なものに関する時間性的問題と観察者の問題の双方が含まれている。したがってルーマンの構成主義はあくまで社会理論のひとつとしての試みであり、その点で社会学の伝統に属し、他の分野の「構成主義」と一線を画す点でもある。

あらためてここで、本稿で行なってきたことのまとめを記す。

第一章「構成主義の時代と社会理論」では、本稿で取り上げる構成主義の社会理論と同時代の言説を背景として確認したうえで、社会的な「構成」について論じている現代の社会理論から特に代表的なものとしてバーガーとルックマンの『現実の社会的構成』、ブルデューの『実戦感覚』、ギデンズの『社会の構成』、ルーマンの『社会の社会』における「構成」の用法について検討した。そのなかで、第一には方法論的含意として旧来の二元論の超克が目指されており、彼らが前代の諸理論に見出した主観主義的傾向、客観主義的傾向、主観／客観二元論に対する批判の意図があるということ、第二にはそのための方策として、社会的な媒介となる知識やメディアの概念が構想されている、ということが明らかになった。とりわけ彼らは機能主義や構造主義、行為論や実存主義における行為／構造、個人／社会といった二分法に対して、「知識在庫」、「構造化」、「ハビトゥス」、「コミュニケーション・メディア」といったそれらの分断を架橋する第三項的な媒介概念を提起している。また「構築主義」の研究も、社会問題の研究や言説分析を行なうにあたって、旧来の研究者と対象との分断を克服するために、両者をつなぎ合わせる可能性をもつものとして言説や闘争の場、それらにおけるレトリックの記述を分析の対象としている。

第二章「構成主義の社会理論の前史」では、「構成」概念を用いた社会理論の構想の先駆として、シュッツの「構成」概念を検討した。特に『社会的世界の意味構成』におけるシュッツの Aufbau, Konstitution, Konstruktion という構成に関する三つの概念を、シュッツが参照しているヴェーバー、フッサール、シェーラー、ディルタイ、カルナップといっ

た論者における「構成」に遡って踏まえながら検討とした。そのなかで明らかになったのは、シュッツは社会科学とその対象である社会的世界の意味的な「構築」(Aufbau)の特性を、行為者による意味の「構成」(Konstitution)を、社会学者の理念的な「構築」(Konstruktion)から行為者自身による理念的構築を介して追求することのうちに見たということであった。「構成」が多元的に成り立っているということは、現代の社会理論における「構成」概念の多様さにも反映されている。

第三章「現象学的な行為理論とシステム理論的な社会理論における〈構成〉」では、社会システム理論を論じ、また方法論として「ラディカル構成主義」を採用した現代の社会理論家であるニクラス・ルーマンがシュッツの理論をいかに取り入れ、また批判しているのかを参照することをとおして、シュッツに現れている社会科学における「構成」の問題化の前史から、ルーマンによる「構成主義」としての社会理論への継承と発展を見た。ルーマンは現象学的な意味分析においてシュッツの「意味構成」の議論を参照しており、意味のもつ「社会性」と「時間性」、「類型性」の構想を取り入れている。他方で、社会的な次元を何らかの次元に還元したり、また隠蔽したりしようとする主張に対しては批判し、社会的なものそれ自体の存立を説いている。「間主観性」と「コミュニケーション」の概念に、両者の立場の違いが現れている。しかしとりわけルーマンの「構成主義」とシュッツの「意味構成」の両者において、社会的なものの成立の前提として時間的な「同時性」があると説かれている点で共通する。

第四章「社会的な構成な場としての〈同時性〉」では、以上で明らかになった「構成」の内容的含意に「時間性」があるということをもとに、シュッツとルーマンにおける「同時性」の概念を検討した。シュッツの時間論の背景には、エトムント・フッサールの内的時間意識とアンリ・ベルグソンの持続の議論がある。そのうえでシュッツは、行為者たちの意識の流れの同時性が彼らのあいだでの共同を可能にし、彼らのあいだでの共同が行為者たちの意識の流れの同時性を感じさせる、ということを実説した。他方でルーマンは、あるシステムが創発するとき、そこにそのシステムの内側と外側とのあいだでの同時性が立ち上がり、システム独自の時間が流れるようになる、と説いた。つまり個人ならぬ社会的なシステムが立ち上がる時、そこに社会的なるものを社会的ならざるものから区別する境界が生じ、そこに同時性が、そして社会的な時間が産み出される、と。ここに、シュッツからルーマンへの変化として、行為理論から社会理論への、また **Konstitution** から **Konstruktion** への舵が切られていることが見て取れる。また社会学的な時間論という観点から、社会の諸領域についてのルーマンの諸義論を見直すことができる。

第五章「構成主義の社会理論」では、ニクラス・ルーマンの構成主義の社会理論を分析するために、他の構成主義・構築主義での要点を踏まえ、「構成主義の認識プログラム」論文を中心に検討を行なった。そこであらためて判明したのは、「構成主義」には二元論批判や認識の不確実化の意図があるということ、他方で端緒の恣意性がいかに喪失しているのかを示すためにコミュニケーション・メディアの分析のような別の理論を要するというこ

と、また「構成」概念には「時間」についての特有の視角が含まれており、「同時性」としての「構成」や「同時代性」「近代性」としての「構成主義」について捉える必要があるということ、であった。とりわけ他分野や他の論者の「構成」と比べると、ルーマンは「社会の構成」を認める点で際立っている。そのかぎり、社会学の伝統の上に立っている。

結論

ルーマンの構成主義と同時代の社会理論を見ていく中でまず明らかになったことは、社会的な「構成」や「構造化」に注目した同時代の社会理論は、いずれも社会学における従来の二元論的な傾向を批判し、それに対する媒介となる過程や代替となる概念を提示する意図をもつものであった。バーガーとルックマンは、個人と社会をつなぐものとして「知識」を想定した。彼ら以降、個人と社会を素朴につなぐ構想はあまり立てられていないが、特に行為と構造といったミクロな概念とマクロな概念をつなぐものとして、ギデンズはより抽象的な「構造化」の過程を想定し、ブルデューは個人のうちに身体化された実践の論理として「ハビトゥス」の概念を提起した。その中でルーマンは、必ずしもそうした媒介概念を提示しているわけではないが、旧来の二元論批判という視点は共有している。個人と社会、行為と構造といった二分法で論を立てる代わりに、コミュニケーションの連鎖が社会を構成している、と述べる。社会とその部分領域にとって肝心なのはコミュニケーションの連鎖であり、その手がかりとなるのがコミュニケーション・メディアである、と。

さらに、シュッツに遡って見てきたように、社会学における社会的な「構成」の概念と構成主義の社会理論は、現代社会学の中で突如現れたものではなく、これまでの社会科学と社会学の方法論の中で提起された「構成」に関わる諸構想を受け継ぎ発展させたものであった。シュッツによる『社会的世界の意味構成』における「構成」の議論を繙くと、社会科学や人文諸学とその対象としての社会的世界の独自性、意味の時間性、社会的世界とその世界に生きる人びとの理解における理論負荷性・類型拘束性の問題が含まれていた。シュッツの言葉でいえば、社会的世界に生きる人びとが用いる類型を、学的な類型によってアプローチするという、「二次の構築」の問題が社会科学のうちにはある。

ルーマンの構成主義の試みも、シュッツが取り組んだ意味の構成と社会科学の構成の問題を踏まえている。しかしルーマンは現代の社会学者として、学的観察者もまた社会的世界に生きる者であり、学的営為もまた社会の産物に他ならないという、社会学にとっての対象の社会とのあいだの再帰性・自己言及性を考慮しなければならなかった。さらに、シュッツは意味の問題に取り組むにあたり、主体の意識とそれがもつ反省の能力に依拠していたが、ルーマンはあくまで個人の意識と社会とは区別されるべきものであり、意味は社会の操作にも属するものとして、主体の反省の能力に還元することを避けるという社会学の伝統的な思想からも離れなかった。これら二点を踏まえて、ルーマンは社会的なもの、社会それ自体による「構成」を説く、「ラディカル構成主義」の社会理論を提起した。ただしその社会理論の端緒には、当然ながらルーマンが措定した区別が据えられている。した

がってルーマンは、「認識」や「観察」が「構成」の営みであり、「現実（リアリティ）」もまた「構成」の産物であるという、同時代の他分野の「構成主義」と共有する視角を取り入れつつ、社会もまた認識や観察をとおして構成を行なうものであること、そして社会の中ではあらゆる構成がコミュニケーションをとおしてなされるということ、を主張している。そのなかで「構成主義」を、近代社会において分出した科学が、自己の不確実性を反省する認識論として規定している。そのかぎりでは社会学における構成主義とは、社会の中で社会を記述するという社会学の営みの不確実性を反省するものである。

しかし構成主義の社会理論は、端緒の恣意性や認識の不確実性を指摘するにとどまるものではない。むしろそうしたことを前提として、端緒の恣意性がいかに喪失していくかの過程を記述することを目指すものでもある。ルーマンがそのとき手がかりとするのは、コミュニケーション・メディアの理論である。さらに、「社会的構成」の概念には、現代の社会に特有の時間性がある、という含意がある。強調されているのは、同時性である。この考えは、近代社会はそれまでの時代・社会と異なる時間性をもつと説いた従来の社会理論の流れの上に立つ。この点は、他の構成主義や構築主義、構造化理論なども暗に共有されている。構成主義という視角のもつ同時代性が想起される。

結論として、「社会的構成」「構成主義」の構想は、単に社会現象の自明性を疑ったり、「脱構築」したりする点のみならず、社会学における方法論的意識と、社会現象における時間の要素の重要性、そして現代社会に特有の時間性について考えなければならないということをも喚起させる点に、今日的な意義を有している。

本稿の最後に、現代社会学における「時間の社会学」の可能性について考えておきたい。

2. 時間の社会学序説

「時間」についての探求は、古今さまざまな人びとによって行なわれてきた¹。

ルーマンの時間論にあった「システムと環境との分化が時間性を産出する」(Luhmann 1973: 83=1986: 108) というシステム相対的な観点から時間を捉えると、システムの数だけ、あるいは少なくともシステムの種類の数だけ時間が存在することになる。また構成主義的な考え方をとれば、学問分野の数だけ異なった仕方で時間が捉えられるとも言える。特に、哲学、宗教、神学、物理学、生物学、心理学、社会学、人類学、文学といった分野の違いは、そのままそれぞれが扱う対象の違いも含めて異なった仕方で時間を捉えている。物理的時間、生物的時間、心的時間、社会的時間、神話の時間や宗教の時間、物語の時間、等々。さらに言えば、個々の研究領域においても時間の捉え方の移り変わりがある。物理学を例にとれば、ニュートン力学、相対性理論、量子力学の間で絶対時間の否定と時間の相対化が後になるほど強くなっている。他方で社会学には、『時間と社会理論』のバーバラ・アダムがルーマンも引き合いに出しながら指摘しているように、自然科学においては 19 世紀以

¹ 時間論と言えば必ず出てくるアウグスティヌス『告白』(Aurelius Augustinus Hipponensis, Confessionum, 397-400?) 第 11 卷 14 章-31 章の、これまた有名な冒頭の部分にはこう書かれている。

では、時間 (tempus) とは一体何でしょうか。

誰が時間を簡潔に説明できるでしょうか。誰が時間について説得的な言葉で、または思索に基づき、表現できるでしょうか。ところで、私たちが会話の中で、時間ほど馴染み深く、またよく承知しているものとして言及するものがあるでしょうか。時間を話題にするとき、私は確かにそれを理解していますし、また他のひとが時間を話題にするのを聞くとき、私たちはそれを理解します。

では、時間とは一体何でしょうか。

もし、誰も私に質問しなければ、私は知っています。質問者に説明しようとする、わからなくなります。(Augustine 1981=2007 下: 227)

アウグスティヌスはこの直前で、「すべての時間をあなた〔神〕は創りました。そして、あなたはすべての時間の前にいます。時間がなかったときには、時間は存在しませんでした」(Augustine 1981=2007 下: 226) と記しているが、何らかの時間を生み出すものそれ以前には時間は存在しない、という時間のシステム相対性の主張を、神学の観点から示したものとして捉えうる。同型の議論を意識哲学の観点からしているのが、フッサールの「時間の時間化」の議論である (cf. Husserl 1973)。当然ながら、神学や意識哲学の前提を受け入れなければ、また別の時間論が展開されることになる。

来時間概念が発展し続けているのに対し、社会学の側が旧来の自然的時間の概念を維持し、それとは違うものとしての社会的時間という、古いヴァージョンの自然的時間／社会的時間の区別に安住してはいないか、という問題がある (Adam 1990: 152-153=1997: 246-248)。

社会学的な時間研究も社会学の古典のうちから存在する。カルロ・アントーニが『歴史主義から社会学へ』(Antoni 1940=1959) のなかで、20世紀初頭のとりわけドイツで、相対主義的な考えが自明となるなかで、思想の主流が正当性を歴史のうちに求める歴史主義から、正当性を相対化する社会学へと変容していかざるを得なかったと記しているが、まさに社会学は成立当初から時間軸で言えば現在の審級から、そして諸現象の社会的な側面から、過去の歴史であれ未来の計画であれ相対化する傾向にあった。その点で、「社会はいかにして可能か」の節で述べたように、社会学が根本的ににおいて社会構成主義的な側面を、とりわけ時間に関して持っていると言える²。

時間の社会性について研究した第一の古典は³、デュルケームの『宗教生活の原初形態』(1912)である。デュルケームはまさしく社会的な審級から時間を論じた先駆であり、以降の社会学的な時間論の原型がここに見出される。

² アダムは「社会科学の時間論はたいていが時間を社会的事実として認定している」として、その命題を「すべての時間は社会的時間である」と称している (Adam 1990: 42=1997: 71)。ただしアダム自身は、この主張につきまとう単純化に注意を払っている。

社会学者たちは、時間が、秩序づけの原理として、あるいは協同作業、方向づけ、規制のための社会的道具として、あるいは自然的な出来事と社会的な出来事の概念的組織化のための象徴として、社会的活動によって構成 (constitute) されると見なしている。言い換えれば、彼らの理論の相互の差異、不一致、矛盾に関わりなく、時間が根本的にひとつの社会的構築物 (a social construction) であるという信念で彼らは一致している。しかし、もしもそんなに簡単なことならば、時間がいつの時代の思想家にとってもあれほどの謎であったのは何故だろうか。(Adam 1990: 42=1997: 71)

そして「既存のアプローチを基盤にしては、社会的時間のこれら多様な側面の連関を概念化することが可能とは思われない」(Adam 1990: 46=1997: 78) と指摘し、そうした多様な時間の側面の間に連関を示すことをミード、エリアス、ギデンズの分析に依拠して試みている。

³ 先に挙げたアダムの著作では、先駆的研究としてデュルケーム『宗教生活の原初形態』(Durkheim 1968=1975)、オスヴァルト・シュペングラー『西洋の没落』(Spengler 1924=2001)、ピティリム・A・ソローキン『社会文化的因果律、空間、時間』(Sorokin 1964)、ジョージ・H・ミード『現在の哲学』(1980)、シュッツ『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題』(Schutz 1962)、ジョルジュ・ギュルヴィッチ『社会的時間の多元性』(Gurvitch 1958=1964) を挙げ、総括的研究としてソローキンとマーティンの「社会的時間」(Sorokin/Merton 1937)、ウィルバート・E・ムーア『人間、時間、社会』(Moore 1963=1974)、エビエタ・ゼルバベル『かくれたリズム——社会生活におけるスケジュールとカレンダー』(Zerubavel 1981=1984) ほか、ヴェルナー・ベルクマン『社会的システムの時間構造』(Bergmann 1981) ほか、を挙げている (Adam 1990: 152-153=1997: 22-23)。そこではエリアス、ルーマン、ギデンズ他の個別の時間論についても参照されている。

デュルケームはモースとの「分類の未開形態」(1901)とも併せて、この著作でいわゆる未開社会において用いられているさまざまなカテゴリーが、その社会の社会構造と密接に関わっているということを主張した。そして時間のカテゴリーも、そのうちのひとつである。

われわれの判断の根本にはいくつかの基本的概念があって、あらゆる知的生活を支配している。それはアリストテレス以来の哲学者たちが悟性のカテゴリー (*les catégories de l'entendement*) と呼んでいるもの、すなわち時間 (*temps*)・空間 (*espace*)・類 (*genre*)・数 (*nombre*)・原因 (*cause*)・実体 (*substance*)・人格性 (*personnalité*) などの概念である。(Durkheim 1968: 12-13=1975 上: 30)

時間のカテゴリー (*la catégorie de temps*) が表すものは集団に共通の時間 (*un temps commun au groupe*) であり、言うなれば社会的な時間 (*le temps social*) である。それ自体がまさにひとつの社会的制度 (*une véritable institution sociale*) なのである。したがってそうした時間のカテゴリーは人間に特有である。(Durkheim 1968: 14-15=1975 上: 32)

デュルケームはこの著作の中心的な主張として、カテゴリーが「本質上は集合的表象であるとすれば、それは何にもまして集合体の状態を表現」し、「集合体が構成 (*constituée*) され組織 (*organisée*) されている様式、その形態、その宗教的・道徳的・経済的な諸制度などに拠る」ものであるとしているが (Durkheim 1968: 22=1975 上: 40-41)、時間のカテゴリーはそのなかで「社会生活のリズム」を表していると記す。

時間のカテゴリーは、〈中略〉われわれの個人的な存在だけでなく、人類の存在をも含む抽象的で非人格的な枠組である。それはあたかも、精神の視点から見ればあらゆる持続 (*la durée*) が展開される、あるいはまた、あらゆる可能な出来事 (*les événements possibles*) が固定し確定された標準点との対比をとおして位置づけられる、無際限の図面のようなものである。こうして組織されるのは私の時間ではなく、同一文明のあらゆる人びとから客観的に思考される時間である。これだけでも、このような組織立てが集合的でなければならないことを瞥見させるに十分である。また実際に、観察が明らかにしたのは、あらゆる事物を時間的に分類 (*classer temporellement*) するための対比に不可欠のそうした標準点は、社会生活 (*la vie sociale*) から借りたものである、ということであった。日・週・月・年などの分割は、公的な儀礼・祝祭・祭儀の周期律に対応している。^{カレンダー} 暦 は集合的活動の規則性を保証する機能を果たすと同時に、そうした集合的活動のリズムを表現するものである。(Durkheim 1968:14-15=1975 上: 31-32)

時間のカテゴリーの基盤 (la base) は社会生活のリズム (le rythme de la vie sociale) である。(Durkheim 1968: 26=1975 上: 47)

もちろんデュルケームも、個人の生活リズムや、宇宙のリズムが存在することは否定しない。しかしカテゴリー自体のもつ社会性のゆえに、そのカテゴリーが表す事物もまた社会的に規定される。そのかぎり、時間の範疇もすべからず社会的なものであるとされる。

カテゴリーが社会 (la société) に由来するというのみならず、そのカテゴリーが表現する事物 (les choses) 自体が社会的なもの (sociales) である。カテゴリーを制定したのが社会であるというにとどまらず、カテゴリーに対して内容として役立つものは社会的な存在 (l'être social) の別の諸側面である。類のカテゴリーは人間集団の概念と無差別であるところから始まったのである。時間のカテゴリーの基盤にあるのは、社会生活のリズム (le rythme de la vie sociale) である。空間のカテゴリーの材料を提供したのは、社会によって占められた空間である。因果律 (causalité) のカテゴリーの本質的な要素である有効力 (force efficace) の概念の原型であったのは、集合力 (force collective) である。にもかかわらずカテゴリーは、ただ社会的な領域 (règne social) だけに適用されるように作られたのではない。カテゴリーは現実全体 (la réalité tout entière) に及んでいるのである。(Durkheim 1968: 628=1975 下: 364)

ジョージ・H・ミードは「現在の哲学」講義 (1930) の中で、アンリ・ベルクソンの時間論に影響を受けながら、社会心理学的な視点から時間の社会性と、現実の現在性について論じている。ミードはこの講義の第一節を「現実の在処としての現在」(The Present as the Locus of Reality) と題し、「この講義の主題は、現実^{リアリティ}はひとつの現在のなかに存在する (reality exists in a present) という命題のうちに見出される」(Mead 1980: 1=2001: 9) として議論を始め、その節を「私が述べたことの結論は、すべての歴史の評価と含意が、現在の解釈の統制のなかにあるということである」(Mead 1980: 28=2001: 39) と結んだうえで、この講義自体の結論部では以下のように述べている。

われわれはつねにひとつの現在に生きている (we live always in a present)。その現在の過去と未来とは、現在の企てが行なわれている領域の延長である。この現在はずねに新たな天上と新たな地上を与える創発の場面 (the scene of that emergence) であり、この現在の社会性 (its sociality) はわれわれの心の構造 (the structure of our minds) に他ならない。社会 (society) がわれわれに自己意識 (self-consciousness) を授けたがゆえに、理性的な自己たちの交わり (the intercourse of rational selves) がわれわれの目の前にまで広げている最大の企てに、われわれは個人的 (personally) に参入することができるのである。われわれは他者ととともに生きていくことができるのと同様に、自分自

身とともに生きていくこともできる。それゆえにわれわれは自分自身を批判することができ、そしてわれわれ自身のものを、すべての理性的な存在からなる共同体 (the community of all rational beings) が関わっている企てをとおして、われわれが巻き込まれている諸価値として捉えることができる。(Mead 1980: 90=2001: 105)

現在性と社会性とを結ぶミードの主張は、ミード自身は意識や心の問題として論じているが、ここに相互行為やコミュニケーションを読み込めばそのまま社会学的な時間視角となっている⁴。

ピイティリム・A・ソローキンとロバート・K・マーソンの「社会的時間——方法論的・機能的分析」(1937)は、デュルケームとモースの研究も踏まえて機能主義的な観点から時間論をまとめた随一の論文であるが、そこでは「時間の体系は社会構造に応じて異なる」(The system of time varies with the social structure) (Sorokin/Merton 1937: 621) というきわめて社会学的な時間論が提示されている。

以上の社会学的な時間論の古典は、デュルケームやソローキンとマーソンは時間概念と社会構造の関係を、ミードは時間の社会性に関する原理論を説いたものであった。しかしヴェーバーやデュルケームに倣って社会学が意味を扱う学問であるとし、またシュッツが言ったように「意味の問題」が「時間の問題」であるとし、あるいはルーマンが言ったように「意味」が「時間」の三次元からなるとするならば、社会学の問題にはつねに時間の問題が含まれる⁵。

そしてルーマンの理論プログラムに併せて、時間の社会学的研究に関しても分類を行なうことができる。

(1) 意味論 (Semantik)

意味論のうちには、概念史的方向(ルーマンの言う「社会文化的進化論」)と社会類型論的方向(あるいは人類学方向)の二つが含まれる。時間概念や時間表象が、ある時代のある社会において、どのように扱われているかを追求する。とりわけ社会学的な視点では、その時代その社会の社会構造との関わりが注視される。デュルケームの古典はまさにここに含まれる。その後、人類学的な神話の時間研究も数多く存在している。

そして構成主義的な視角をとるならば、時間概念の概念史あるいは社会類型論的研究もまた、あくまで当今の時間カテゴリーからアプローチしているということを見落とすことができない。ルーマン自身の意味論で繰り返し主張されているように、過去/現在/未来を峻別する傾向がそもそも近代に特有であると考えうるのである。

⁴ ミードの時間論については、シュッツの『著作集』所収の文献ほか、Natanson (1956=1983)を参照。

⁵ 社会的な時間について論じた研究として、他には例えば Elias (1984=1996)、Dux (1989)、真木 (2003) を参照。

したがって、時間の意味論のなかには、「近代」のようないわば「大きな時間」としての「時代」(times, Zeit)もまた対象として含まれる。さらに、ジンメルらのモデルネ論から、バウマンの「液体的近代」、あるいは「再帰的近代」や「ポストモダン」に至るまで、その特徴として時間の加速化や時間の重要度の上昇が中心的な要素として挙げられているが、そうだとすると「大きな時間」としての時代が、時間の側面から規定されている。かくして、時間論は意味論をとおして近代(化)論と直結する。

(2) 時間の一般理論と社会的時間の一般理論

先の註でアダムによる、「時間」の問題が社会学者の言うように「すべての時間は社会的時間である」という「もしもそんなに簡単なことならば、時間がいつの時代の思想家にとってもあれほどの謎であったのは何故だろうか」(Adam 1990: 42=1997: 71)という発言を紹介しておいた。ルーマンの構成主義が前提としている差異論的な視角からすれば、「社会的時間」は他の時間と区別されて初めて意味をもつ。もし真に「すべての時間は社会的時間」であるのならば、反対から言うと「社会的時間」すなわち「時間」であって端的に「社会的」が余計である。したがって、社会的時間をきちんと性格づけるためにも、社会的時間と他の時間との対比を可能にする時間の一般理論が必要になる。

ここで言う「時間の一般理論」は、あらゆる領域を貫く単一の時間についての理論、という意味ではない。むしろ相対性理論や量子力学という物理学の時間論がすでに、時間の相対性を主張している。必要なのは、さまざまな領域に別様に現われる「時間」のための比較の視座である。

ルーマンの場合、システム理論によって時間一般について論じ、その一部としての社会的システム理論によって社会的時間一般について論じている。システムの作動やシステムの分出と時間との関係から、時間一般が論じられる。その視角からは、時間はあくまでシステム相対的なものである⁶。そして社会的システムの時間は、他のシステムの時間、例えば有機体システム(生物)、神経システム(脳)、心的システム(意識)の時間とは異なるものとして論じられる。社会的時間は、コミュニケーションの連鎖の中で生み出される。

あらためて構成主義の視点から言うと、確かに社会学の視角からは、あるいは社会の視角からは、物理的時間であれ個人的時間であれ、「すべての時間は社会的時間」である。社会のなかでは、物理的時間もまた社会的に構築される(コミュニケーションによる産物である)。しかしそれは、出発点に社会学ないし社会を置いているからにすぎない。出発点が物理学であれば、あるいは意識哲学であれば、時間は自ずと別様なものとして現れてくる———ということを前提とするために、時間の一般理論が必要となる⁷。

⁶ 『時間と物語』のリクールや、「差延」のデリダも、それぞれ「物語」や「記号」の場に依拠しながら同様のことを述べていると言える。

⁷ ベルクソンとアインシュタインの議論の帰結からも、個々のシステム(あるいは、ある個別の観察者)にとっては、時間は相対的なものではない(社会的システムにとっては、時間はすべて社会的時間である)、と導くことができる。

(3) 社会の分化と時間

デュルケームの時間論を摂取してソローキンとマートンは「時間の体系は社会構造に応じて異なる」と述べているが、ある社会と別の社会、前代の社会と当今の社会といった違いのみならず、社会における個別領域ごとの時間の違いも想定される。社会分業、社会分化、あるいは機能分化といったことが社会学の本題であるとするれば、それに伴って社会的時間の分化もまたつねにそこに不随する。

ルーマンの社会理論では、(全体)社会、組織、相互作用 (Interaktion) という分化と、システム分化としての機能分化の二つが扱われている。機能分化している領域には、経済 (資本、貨幣、所有権) / 司法 (法) / マスメディア (情報) / 教育 (子供 [被教育者]) / 科学 (真理) / 家族 (愛) / 芸術 (美) / 政治 (権力) / 宗教 (神、信仰)、などが挙げられている。

個別領域の社会的時間の研究は、さまざまな分野で数多く積み重ねられている。しかし、個別領域の知見を積み重ねるだけでは不十分である。今日誰もがひとつの領域にとどまることはありえず、多くの領域に参加し、影響を受けている。異なる領域どうしの時間のズレや関わり合いは、社会生活において重要な問題である。したがってそうした異なる社会的領域のあいだでの時間のズレや関わり合いを捉えるために、さまざまな社会的時間の比較を行なう社会的時間の一般理論が求められている。

文献

- Adam, Barbara, 1990, *Time and Social Theory*, Cambridge: Polity Press. (=1997, 伊藤誓・磯山甚一訳, 『時間と社会理論』, 東京, 法政大学出版局)
- Alexander, Jeffrey C., 1982-1983, *Theoretical Logic in Sociology*, Vol.1-4, Berkeley/Los Angeles, California: University of California Press.
- Alexander, Jeffrey C., 1987, “Action and Its Environments”, in: Alexander, Jeffrey C, Bernhard Giesen, Richard Münch and Neil J. Smelser (eds.), 1987, *The Micro-Macro Link*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press, 289-318. (=1998, 若狭清紀訳, 「行為とその環境」, 石井幸夫・内田健・木戸功・圓岡偉男・間淵領吾・若狭清紀訳, 『マイクロ・マクロ・リンクの社会理論』(部分訳), 東京, 新泉社, 180-221.)
- Alexander, Jeffrey C, Bernhard Giesen, Richard Münch and Neil J. Smelser (eds.), 1987, *The Micro-Macro Link*: Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press. (=1998, 石井幸夫・内田健・木戸功・圓岡偉男・間淵領吾・若狭清紀訳, 『マイクロ・マクロ・リンクの社会理論』(部分訳), 東京, 新泉社)
- Alexander, Jeffrey C. and Bernhard Giesen, 1987, “From Reduction to Linkage: The Long View of the Micro-Macro Debate“, in: Jeffrey C. Alexander, Bernhard Giesen, Richard Münch and Neil J. Smelser (eds.), 1987, *The Micro-Macro Link*, Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press, 1-42. (=1998, 内田健・圓岡偉男訳, 「還元からリンケージへ——マイクロ・マクロ論争史をふりかえって」, 石井幸夫・内田健・木戸功・圓岡偉男・間淵領吾・若狭清紀訳, 『マイクロ・マクロ・リンクの社会理論』, 東京, 新泉社, 9-66.)
- Antoni, Carlo, 1940, *Dallo storicismo alla sociologia*, Firenze: G. C. Sansoni. (=1959, 讚井鉄男訳, 『歴史主義から社会学へ』, 東京, 未來社)
- Augustine, 1981, “Sancti Augustini Confessionum libri XIII”, in: Martinus Skutella and Lucas Verheijen (ed.), *Corpus Christianorum, Series Latina 27*, Turnhout, Bergium: Typographi Brepols Editores Pontifici. (=2007, 宮谷宣史訳, 『アウグスティヌス著作集 第5巻II 告白録』(上・下), 東京, 教文館)
- Barber, Michael D., 2004, *The Participating Citizen: A Biography of Alfred Schutz*, Albany, New York: State University of New York Press.
- Barber, Michael D., 2006, “Phenomenology and Rigid Dualism: Joachim Renn’s Critique of Alfred Schutz”, *Human Studies*, 29: 269-282.
- Baudrillard, Jean, 1976, *L’échange symbolique et la mort*, Paris: Éditions Gallimard. (=1992, 今村仁司・塚原史訳, 『象徴交換と死』, 東京, 筑摩書房)
- Beck, Lewis White, 1950, “Constructions and Inferred Entities”, *Philosophy of Science*, 17(1):74-86.
- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳, 『危険社会——新しい近代への道』, 東京, 法政大学出版局)

- Beck, Ulrich, Anthony Giddens and Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge: Polity Press. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳, 『再帰的近代化——近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』, 東京、而立書房)
- Bell, Daniel, 1973, *The Coming of Post-industrial Society*, New York: Basic Books. (=1975, 内田忠夫・嘉治元郎・城塚登・馬場修一・村上泰亮・谷嶋喬四郎訳, 『脱工業社会の到来』(上・下), 東京, ダイヤモンド社)
- Berger, Peter L. und Hansfried Kellner, 1965, „Die Ehe und die Konstruktion der Wirklichkeit : Eine Abhandlung zur Mikrosoziologie des Wissens“, *Soziale Welt*, 16: 220-235.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Garden City, New York: Doubleday. (= [1977] 2003, 山口節郎訳 『現実の社会的構成——知識社会学論考』(新版), 東京, 新曜社)
- Berger, Peter L., 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Garden City, New York: Doubleday. (=1979, 藪田稔訳, 『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』, 東京, 新曜社)
- Berger, Peter L., Brigitte Berger and Hansfried Kellner, 1973, *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*, New York: Random House. (=1977, 高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳, 『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』, 東京, 新曜社)
- Bergmann, Werner, 1981, *Die Zeitstrukturen sozialer Systeme: Eine systemtheoretische Analyse*, Berlin: Duncker & Humblot.
- Bergmann, Werner, 1983, „Das Problem der Zeit in der Soziologie“, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 35(3): 462-504.
- Bergson, Henri, [1889]1959, « Essai sur les données immédiates de la conscience », *Œuvres*, Paris: Presses Universitaires de France, 1-157. (=2002, 合田正人・平井靖史訳, 『意識に直接与えられたものについての試論』, 東京, 筑摩書房)
- Bergson, Henri, [1922] 1972, « Durée et simultanéité: a propos de la théorie d'Einstein », *Mélanges*, Paris: Presses Universitaires de France, 57-244. (=1965, 花田圭介・加藤精司訳, 「持続と同時性——アインシュタインの理論について」, 花田圭介・仲沢紀雄・加藤精司・鈴木力衛訳, 『ベルクソン全集 (3) 笑い／持続と同時性』, 東京, 白水社, 153-382.)
- Best, Joel, [1989] 1995, “Constructionism in Context”, in: Joel Best (ed.), *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*, New York: Aldine de Gruyter, 337-354.
- Best, Joel, 1993, "But Seriously Folks: The Limitation of the Strict Constructionist Interpretation of Social Problems", in: James A. Holstein and Gale Miller (eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter, 129-147.
- Bogen, David and Michael Lynch, 1993, “Do We Need a General Theory of Social Problems?”, in: James A. Holstein and Gale Miller (eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in*

- Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter, 213-237.
- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid Modernity*, Cambridgeshire, Cambridge: Polity Press. (=2001, 森田典正訳, 『リキッド・モダニティ——液状化する社会』, 東京, 大月書店)
- Bourdieu, Pierre, 1980, *Le sens pratique*, Paris: Minuit. (= [1988] 2001, 今村仁司・港道隆訳, 『実践感覚』(1・2), 東京, みすず書房)
- Brand, Gerd, 1955, *Welt, Ich und Zeit. Nach unveröffentlichten Manuskripten Edmund Husserls*, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=1982, 新田義弘・小池稔訳, 『世界・自我・時間——フッサール未公開草稿による研究』, 東京, 国文社)
- Carnap, Rudolf, [1928] 1961, *Der logische Aufbau der Welt: Scheinprobleme in der Philosophie*, 2.Aufl., Hamburg: Felix Meiner. (1.Aufl, 1928, Berlin: Weltkreis-Verlag). (=1967, Rolf A. George (tr.), *The Logical Structure of the World: Pseudoproblems in Philosophy*, London: Routledge & Kegan Paul)
- Cassirer, Ernst, [1923] 2001, „Philosophie der symbolischen Formen, Erster Teil: Die Sprache“, *Gesammelte Werke Hamburger Ausgabe*, Band 11, Hamburg: Felix Meiner. (=1989, 生松敬三・木田元訳, 『シンボル形式の哲学(一) 第一巻 言語』, 東京, 岩波書店)
- Cassirer, Ernst, 1925, „Paul Natorp. 24. Januar 1854 – 17. August 1924“, *Kant-Studien*, 30: 273-298.
- Cassirer, Ernst, [1929] 2002, „Philosophie der symbolischen Formen, Dritter Teil: Phänomenologie der Erkenntnis“, *Gesammelte Werke Hamburger Ausgabe*, Band 13, Hamburg: Felix Meiner. (=1994-1997, 木田元・村岡晋一訳, 『シンボル形式の哲学(三・四) 第三巻(上・下) 認識の現象学』, 東京, 岩波書店)
- Cassirer, Ernst, [1944] 2006, “An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture“, Birgit Recki (Hg.), *Gesammelte Werke: Hamburger Ausgabe*, Band 23, Text und Anmerkungen bearbeitet von Maureen Lukay, Hamburg: Felix Meiner. (Originally published in: 1944, New Haven: Yale University Press.) (= [1953] 1982, 宮城音弥訳, 『人間——この象徴を操るもの』(改版), 東京, 岩波書店)
- Cox, Ronald R., 1978, *Schutz' Theory of Relevance: A Phenomenological Critique*. Den Haag: Martinus Nijhoff.
- Dallinger, Ursula, 1999, „Kommunikation, Verstehen, Verständigung: Divergenzen und Konvergenzen von Systemtheorie und Sozialphänomenologie“, in: Ronald Hitzler, Jo Reicherz und Norbert Schröder (Hg.), *Hermeneutische Wissenssoziologie: Standpunkte zur Theorie der Interpretation*, Konstanz: UVK, 237-266.
- Derrida, Jacques, [1967] 1998, *La voix et le phénomène: introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, 2e éd corrigée, Paris: Presses Universitaires de France. (=2005, 林好雄訳, 『声と現象——フッサールの現象学における記号の問題入門』, 東京, 筑摩書房)
- Dilthey, Wilhelm, [1910] 1979, *Gesammelte Schriften, VII Band, Der Aufbau der geschichtlichen*

- Welt in den Geisteswissenschaften*, 7.Aufl., Leipzig/Berlin: B.G.Teubner. (1. Aufl., 1927, Leipzig). (=1981, 尾形良助訳, 『精神科学における歴史的世界の構成』, 東京, 以文社)
- Durkheim, Émile, [1912] 1968, *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*, 5^e éd., Paris: Presses Universitaires de France. (= [1941-1942] 1975, 古野清人訳, 『宗教生活の原初形態』(上・下), 東京, 岩波書店)
- Dux, Günter, 1989, *Die Zeit in der Geschichte: Ihre Entwicklungslogik vom Mythos zur Weltzeit*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Elias, Norbert, 1984, *Über die Zeit*, Michael Schröter (Hg.), Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1996, 井本响二・青木誠之訳, 『時間について』, 東京, 法政大学出版局)
- Embree, Lester, 1991, “Notes on the Specification of ‘Meaning’ in Schutz”, *Human Studies*, 14: 201-218.
- Embree, Lester (ed.), 2010, *Schutzian Social Science*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Fink, Eugen, [1957] 1976, „Operative Begriffe in Husserls Phänomenologie“, in: *Nähe und Distanz*, Freiburg/München: Karl Alber, 180-204. (=1978, 新田義弘訳, 「フッサールの現象学における操作的な概念」, 新田義弘・小川侃編, 『現象学の根本問題』, 京都, 晃洋書房, 21-44.)
- Foerster, Heinz von, Ernst von Glasersfeld, Peter M. Hejl, Siegfried J. Schmidt und Paul Watzlawick, [1985] 1992, *Einführung in den Konstruktivismus*, München: Piper.
- Foucault, Michel, 1969, *L'archéologie du savoir*, Paris: Gallimard. (=1970, 中村雄二郎訳, 『知の考古学』, 東京, 河出書房新社)
- Franchi, Stefano, Güven Güzeldere and Eric Minch, 1995, "Interview with Heinz von Foerster", *Stanford Humanities Review*, 4(2): 288-307.
- Füllsack, Manfred, 2010, „Die Habermas-Luhmann-Debatte“, Georg Kneer und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologische Kontroversen: Beiträge zu einer anderen Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Berlin: Suhrkamp, 154-181.
- Ган, Алексей (Gan, Alexei), 1922, *Конструктивизм (Konstuktivizm)*, Тверь/Москва (Tver/Moscow). (=1927, 黒田辰男訳 『構成主義藝術論』, 東京, 金星堂)
- Gergen, Kenneth J., 1999, *An Invitation to Social Construction*, London: Sage Publication. (=2004, 東村知子訳, 『あなたへの社会構成主義』, 京都, ナカニシヤ出版)
- Giddens, Anthony, 1971a, “Durkheim’s Political Sociology”, in: *The Sociological Review*, 19(4): 477-519.
- Giddens, Anthony, 1971b, “The ‘Individual’ in the Writings of Émile Durkheim”, in: *European Journal of Sociology*, 12(2): 210-228.
- Giddens, Anthony, 1971c, *Capitalism and Modern Social Theory: An Analysis of the Writings of Marx, Durkheim and Max Weber*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1974, 犬塚先訳, 『資本主義と近代社会理論——マルクス、デュルケム、ウェーバーの研究』, 東京,

研究社出版)

- Giddens, Anthony, 1984, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Cambridge: Polity Press.
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳, 『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』, 東京, 而立書房)
- Giddens, Anthony, 1993, *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies*, 2nd, revised ed, Cambridge: Polity Press (1st ed., 1976, London: Hutchison). (= [1987] 2000, 松尾精文ほか訳, 『社会学の新しい方法基準——理解社会学の共感的批判 第二版』, 東京, 而立書房)
- Glaserfeld, Ernst von, [1981] 1985, „Einführung in den radikalen Konstruktivismus“, in: Paul Watzlawick (Hg.), *Die erfundene Wirklichkeit: Wie wissen wir, was wir zu wissen glauben?. Beiträge zum Konstruktivismus*, München: Piper, 16-38.
- Glaserfeld, Ernst von, 1988, *The Construction of Knowledge: Contribution to Conceptual Semantics*, Salinas, California: Intersystems Publications.
- Glaserfeld, Ernst von, 1995, *Radical Constructivism: A Way of Knowing and Learning*, London: Falmer Press. (=2010, 西垣通監修, 橋本渉訳, 『ラディカル構成主義』, 東京, NTT出版)
- Grathoff, Richard (ed.), 1978, *The Theory of Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Bloomington, Indiana: Indiana University Press. (=1980, 佐藤嘉一訳, 『A. シュッツ=T.パーソンズ往復書簡 社会理論の構成——社会的行為の理論をめぐって』, 東京, 木鐸社)
- Grathoff, Richard und Bernhard Waldenfels (Hg.), 1983, *Sozialität und Intersubjektivität: Phänomenologische Perspektiven der Sozialwissenschaften im Umkreis von Aron Gurwitsch und Alfred Schütz*, München: Fink.
- Grathoff, Richard, 1978, „Alltag und Lebenswelt als Gegenstand der phänomenologischen Sozialtheorie“, in: Kurt Hammerich und Michael Klein (Hg.), *Materialien zur Soziologie des Alltags*, Sonderheft 20 der *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Opladen: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 67-85.
- Grathoff, Richard, 1983, „Das Problem der Intersubjektivität bei Aron Gurwitsch und Alfred Schütz“, in: Richard Grathoff und Bernhard Waldenfels (Hg.), *Sozialität und Intersubjektivität: Phänomenologische Perspektiven der Sozialwissenschaften im Umkreis von Aron Gurwitsch und Alfred Schütz*, München: Fink, 87-120.
- Gurwitsch, Georges, 1958, *La multiplicité des temps sociaux*, Paris: Centre de Documentation Universitaire. (=1964, *The Spectrum of Social Time*, translated and edited by Myrtle Korenbaum, Dordrecht: D. Reidel Publishing.)

- Gurwitsch, Aron, [1962] 1966, “The Common-Sense World as Social Reality: A Discourse on Alfred Schutz”, in: Alfred Schutz, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, edited by Ilse Schutz, Den Haag: Martinus Nijhoff, XI-XXXI. (=1998, 那須壽訳, 「序」, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・著作集 第4巻 現象学的哲学の研究』, 東京, マルジュ社, 9-35.)
- Habermas, Jürgen, [1980] 1981, „Die Moderne: Ein unvollendetes Projekt”, in: *Kleine Politische Schriften* (I-IV), Frankfurt am Main: Suhrkamp, 444-467. (= [1982] 2000, 三島憲一訳, 「近代——未完のプロジェクト」, 三島憲一編訳, 『近代——未完のプロジェクト』, 東京, 岩波書店, 3-45.)
- Habermas, Jürgen, 1971, „Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie?: Eine Auseinandersetzung mit Niklas Luhmann“, in: Jürgen Habermas und Niklas Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 142-290. (=1987, 山口節郎・藤澤賢一郎訳, 「社会理論か社会テクノロジーか——ニクラス・ルーマンとの対決」, 佐藤嘉一・山口節郎・藤澤賢一郎ほか訳, 『批判理論と社会システムの理論——ハーバーマス＝ルーマン論争』, 東京, 木鐸社, 183-378.)
- Habermas, Jürgen, 1967, *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Philosophischen Rundschau, Beiheft 5, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck). (=1991, 清水多吉・木前利秋・波平恒男・西阪仰訳, 『社会科学の論理によせて』, 東京, 国文社)
- Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2 Bände, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1985-1987, 平井俊彦/M・フーブリヒト/河上倫逸/徳永恂/脇圭平ほか訳, 『コミュニケーション的行為の理論』(上・中・下), 東京, 未来社)
- Hacking, Ian, 1999, *The Social Construction of What?*, Cambridge, Massachusetts/London: Harvard University Press. (=2006, 出口康夫・久米暁訳, 『何が社会的に構成されるのか』, 東京, 岩波書店 [全8章中第5章までの訳])
- Hartmann, Nicolai, 1940, *Der Aufbau der realen Welt. Grundriß der allgemeinen Kategorielehre*, Berlin: de Gruyter.
- Harvey, David, 1989, *The Condition of Postmodernity*, Oxford: Basil Blackwell. (=1999, 吉原直樹監訳, 『ポストモダニティの条件』, 東京, 青木書店)
- Heidegger, Martin, 1916, „Der Zeitbegriff in der Geschichtswissenschaft“, *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, 160: 173-188.
- Heidegger, Martin, [1927] 1949, *Sein und Zeit*, 6.Aufl., Tübingen: Neomarius. (=2003, 原佑・渡邊二郎訳, 『存在と時間』(I-III), 東京, 中央公論新社)
- Heims, Steve Joshua, 1991, *Constructing a Social Science for Postwar America: The Cybernetics Group 1946-1953*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press. (=2001, 忠平美幸訳, 『サイバネティクス学者たち——アメリカ戦後科学の出発』, 東京, 朝日新聞社)

- Heiskala, Risto, 2011, “The Meaning of Meaning in Sociology: The Achievements and Shortcomings of Alfred Schutz's Phenomenological Sociology”, in: *Journal for the Theory of Social Behavior*, 41-43: 231-246.
- Held, Klaus, [1980] 1981, „Phänomenologie der Zeit nach Husserl”, *Perspektiven der Philosophie: Neues Jahrbuch*, Bd 7, hrsg. von Rudolf Berlinger, Eigen Fink, Friedrich Kaulbach und Wiebke Schrader, Hildesheim: Gerstenberg Verlag, 185-222. (=1980, 小川侃・梅原賢一郎訳, 「フッサール以後の(フッサールに拠る)時間の現象学」, 『理想』, 571: 2-34.)
- Held, Klaus, 1966, *Lebendige Gegenwart: Die Frage nach der Seinsweise des transzendentalen Ich bei Edmund Husserl, entwickelt am Leitfaden der Zeitproblematik*, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=1988, 新田義弘・小川侃・谷徹・斎藤慶典訳, 『生き生きした現在——時間の深淵への問い』, 東京, 北斗出版)
- Held, Klaus, 1972, „Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie“, in: Ulrich Claesges und Klaus Held (Hg.), *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung: Für Ludwig Landgrebe zum 70. Geburtstag von seinen Kölner Schülern*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 3-60.
- Hobsbawm, Eric and Terence Ranger (eds.), 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge, Cambridgeshire/London/New York: Cambridge University Press. (=1992, 前川啓治・梶原景昭ほか訳, 『創られた伝統』, 東京, 紀伊國屋書店)
- Husserl, Edmund, [1928] 1966, „Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893-1917)”, *Husserliana* Bd.X, Hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag: Martinus Nijhoff. (旧版 1928, *Edmund Husserls Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, hrsg. von Martin Heidegger, Sonderdruck aus Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, Bd.IX) (=1967, 立松弘孝訳, 『内的時間意識の現象学』, 東京, みすず書房)
- Husserl, Edmund, [1912-13] 1952, „Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 2.Buch, Phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution”, *Husserliana* Bd.IV, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=2001-2009, 立松弘孝・別所良美訳, 『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第二巻 構成についての現象学的研究諸研究』(全2冊), 東京, みすず書房)
- Husserl, Edmund, [1913] 1950a, „Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 1.Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie”, *Husserliana*, Band III, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=1979-1984, 渡辺二郎訳, 『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第一巻 純粹現象学への全般的序論』(全2冊), 東京, みすず書房)
- Husserl, Edmund, [1930] 1952b, „Nachwort zu meinen ‘Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie’”, *Husserliana*, Band V, Den Haag: Martinus Nijhoff, 138-162. (=1979, 渡辺二郎訳, 「あとがき」, 『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 第一巻 純粹現象学への全般的序論』, 第1冊, 東京, みすず書房, 11-45.)

- Husserl, Edmund, [1931] 1950b, „Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie“, *Husserliana*, Band I, herausgegeben und eingeleitet von Stephan Strasser, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=2001, 浜渦辰二訳, 『デカルト的省察』, 東京, 岩波書店)
- Husserl, Edmund, [1936] 1954, „Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie“, *Husserliana*, Band VI, Den Haag: Martinus Nijhoff. (= [1977] 1995, 細谷恒夫・木田元訳, 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』, 東京, 中央公論新社)
- Husserl, Edmund, [1939] 1948, *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, redigiert und herausgegeben von Ludwig Landgrebe, Hamburg: Meiner Verlag. (=1975, 長谷川宏訳, 『経験と判断』, 東京, 河出書房新社)
- Husserl, Edmund, 1973, „Zur Phänomenologie der Intersubjektivität: Texte aus dem Nachlass. Dritter Teil: 1929-1935“, Iso Kern (Hg.), *Husserliana*, Band. XV, Den Haag: Martinus Nijhoff.
- Ibara, Peter R. and John I. Kitsuse, 1993, “Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems”, in: James A. Holstein and Gale Miller (eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter, 25-58. (=2000, 中河伸俊訳, 「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」, 平英美・中河伸俊編, 『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』, 京都, 世界思想社, 46-104.)
- Jahraus, Oliver, Armin Nassehi, Mario Grizelj, Irmhild Saake, Christian Kirchmeier und Julian Müller (Hg.), 2012, *Luhmann Handbuch: Leben – Werk – Wirkung*, Stuttgart/Weimar: J.B.Metzler.
- Katz, David, 1925, *Der Aufbau der Tastwelt*, Leipzig: Johann Ambrosius Barth.
- Keller, Reiner, Hubert Knoblauch und Jo Reicherz (Hg.), 2013, *Kommunikativer Konstruktivismus: Theoretische und empirische Arbeiten zu einem neuen wissenssoziologischen Ansatz*, Wiesbaden: Springer VS.
- Kern, Iso, 1979, „Die Lebenswelt als Grundlagenproblem der objektiven Wissenschaften und als universales Wahrheits und Seinsproblem“, in: Elisabeth Ströker (Hrsg.), *Lebenswelt und Wissenschaft in der Philosophie Edmund Husserls*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 68-78.
- Kneer, Georg und Armin Nassehi, 1993, *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme: Eine Einführung*, München: Wilhelm Fink. (=1995, 館野受男・池田貞夫・野崎和義訳, 『ルーマン 社会システム理論』, 東京, 新泉社)
- Kneer, Georg und Stephan Moebius (Hg.), 2010, *Soziologische Kontroversen: Beiträge zu einer anderen Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Berlin: Suhrkamp.
- Koigen, David, 1910, *Ideen zur Philosophie der Kultur. Der Kulturakt*, München/Leipzig: G. Müller.
- Koigen, David, 1929, *Der Aufbau der sozialen Welt im Zeitalter der Wissenschaft: Umriss einer soziologischen Strukturlehre*, Berlin: Carl Heymanns Verlag.

- Kundsen, Sven-Eric, 2006, *Luhmann und Husserl: Systemtheorie im Verhältnis zur Phänomenologie*, Würzburg: Königshausen & Neumann.
- Künzler, Jan, 1987, „Grundlagenprobleme der Theorie symbolisch generalisierter Kommunikationsmedien bei Niklas Luhmann“, *Zeitschrift für Soziologie*, 16(5): 317-333.
- Künzler, Jan, 1989, *Medien und Gesellschaft: Die Medienkonzepte von Talcott Parsons, Jürgen Habermas und Niklas Luhmann*, Stuttgart: Ferdinand Enke.
- Landgrebe, Ludwig, 1963, „Welt als phänomenologisches Problem“, in: Ludwig Landgrebe, *Der Weg der Phänomenologie: Das Problem einer ursprünglichen Erfahrung*, Gütersloh: Mohn, 41-62. (=1980, 山崎庸佑・甲斐博見・高橋正和訳, 「現象学的問題としての世界」, 『現象学の道——根源的経験の問題』, 東京, 木鐸社, 61-98.)
- Landgrebe, Ludwig, 1974, „Reflexionen zu Husserls Konstitutionslehre“, in: *Tijdschrift voor Filosofie*, 36: 466-482. (=1978, 小川侃訳, 「フッサールの構成論についての反省」新田義弘・小川侃編『現象学の根本問題』, 京都, 晃洋書房, 57-80.)
- Langsdorf, Lenore, 1985, “Schutz’s Bergsonian Analysis of the Structure of Consciousness”, *Human Studies*, 8(4): 315-324.
- Larochelle, Marie, Nadine Bednarz and Jim Garrison (eds.), 1998, *Constructivism and Education*, Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Latour, Bruno and Steve Woolgar, [1979] 1986, *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts*, New ed., Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Latour, Bruno, 1987, *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=1999, 川崎勝・高田紀代志訳, 『科学が作られているとき——人類学的考察』, 東京, 産業図書)
- Latour, Bruno, 1991, *Nous n’avons jamais été modernes: essai d’anthropologie symétrique*, Paris: Editions La Découverte. (=2008, 川村久美子訳, 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』, 東京, 新評論)
- Leach, Edmund R., 1961, *Rethinking Anthropology*, London: The Athlone Press. (=1974, 青木保・井上兼行訳, 『人類学再考』, 東京, 思索社)
- Luckmann, Thomas, 1999, „Wirklichkeiten: Individuelle Konstitution und Gesellschaftliche Konstruktion“, Ronald Hitzler, Jo Reichertz und Norbert Schröer (Hg.), *Hermeneutische Wissenssoziologie: Standpunkte zur Theorie der Interpretation*, Konstanz: UVK, 17-28.
- Luckmann, Thomas, 2008, „Konstitution, Konstruktion: Phänomenologie, Sozialwissenschaft“, Raab, Jürgen, Michaela Pfadenhauer, Peter Stegmaier, Jochen Dreher und Bernt Schnettler (Hg.), *Phänomenologie und Soziologie: Theoretische Positionen, aktuelle Problemfelder und empirische Umsetzungen*, Wiesbaden: VS Verlag, 33-40.
- Luhmann, Niklas, 1962, „Funktion und Kausalität“, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 14(4): 617-644. (Neu gedruckt in: [1970] 2009, *Soziologische Aufklärung 1:*

- Aufsätze zur Theorie soziale Systeme*, 8.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 11-38.)
- Luhmann, Niklas, 1964a, *Funktionen und Folgen formaler Organisation*, Berlin: Duncker & Humblot. (=1992-1996, 沢谷豊・関口光春・長谷川幸一訳, 『公式組織の機能とその派生的問題』(上・下巻), 東京, 新泉社)
- Luhmann, Niklas, 1964b, „Funktionale Methode und Systemtheorie“, *Soziale Welt*, 15(1): 1-25. (Neu gedruckt in: [1970] 2009, *Soziologische Aufklärung 1: Aufsätze zur Theorie soziale Systeme*, 8.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 40-67.) (=1983a, 村中知子訳, 「機能的方法とシステム理論」, 土方昭監訳, 『ニクラス・ルーマン論文集 1 法と社会システム——社会学的啓蒙』, 東京, 新泉社, 13-70.)
- Luhmann, Niklas, 1965a, *Grundrechte als Institution*, Berlin: Duncker & Humblot. (=1989, 今井弘道・大野達司訳, 『制度としての基本権』, 東京, 木鐸社)
- Luhmann, Niklas, 1965b, *Öffentlich-rechtliche Entschädigung rechtspolitisch betrachtet*, Schriftenreihe der Hochschule Speyer Band 24, Berlin: Duncker & Humblot.
- Luhmann, Niklas, 1966, „Reflexive Mechanismen“, *Soziale Welt*, 17(1): 1-23. (Neu gedruckt in: [1970] 1990, *Soziologische Aufklärung 1: Aufsätze zur Theorie soziale Systeme*, 8.Aufl., Wiesbaden : VS Verlag für Sozialwissenschaften, 116-142.)
- Luhmann, Niklas, 1967a, „Soziologische Aufklärung“, *Soziale Welt*, 18(2): 97-123. (Neu gedruckt in: [1970] 2009, *Soziologische Aufklärung 1: Aufsätze zur Theorie soziale Systeme*, 8.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 83-115.) (=1983a, 土方昭訳, 「社会学的啓蒙」, 土方昭監訳, 『ニクラス・ルーマン論文集 1 法と社会システム——社会学的啓蒙』, 東京, 新泉社, 125-178.)
- Luhmann, Niklas, 1967b, „Soziologie als Theorie sozialer Systeme“, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 19(4): 615-644. (Neu gedruckt in: [1970] 2009, *Soziologische Aufklärung 1: Aufsätze zur Theorie soziale Systeme*, 8.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 143-172.) (=1983b, 大里巖訳, 「社会システム理論としての社会学」, 土方昭監訳, 『ニクラス・ルーマン論文集 1 法と社会システム——社会学的啓蒙』, 東京, 新泉社, 125-178.)
- Luhmann, Niklas, 1968a, *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*, Stuttgart: Ferdinand Enke. (=1988, 野崎和義・土方透訳, 『信頼——社会の複雑性とその縮減』, 東京, 未来社) (2.Aufl, 1973=1990, 大庭健・正村俊之訳, 『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』, 東京, 勁草書房)
- Luhmann, Niklas, 1968b, *Zweckbegriff und Systemrationalität: Über die Funktion von Zwecken in sozialen Systemen*, Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck). (=1990, 馬場靖雄・上村隆広訳, 『目的概念とシステム合理性——社会システムにおける目的の機能について』, 東京, 勁草書房)

- Luhmann, Niklas, [1969] 2008, *Liebe: Eine Übung*, herausgegeben von André Kieserling, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Luhmann, Niklas, 1971a, „Sinn als Grundbegriff der Soziologie“, in: Jürgen Habermas und Niklas Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 25-100. (=1987, 佐藤嘉一訳, 「社会学の基礎概念としての意味」, 佐藤嘉一監訳, 『批判理論と社会システムの理論——ハーバーマス＝ルーマン論争』, 東京, 木鐸社, 29-124.)
- Luhmann, Niklas, 1971b, „Systemtheoretische Argumentationen: Eine Entgegnung auf Jürgen Habermas“, in: Jürgen Habermas und Niklas Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 291-405. (=1987, 佐藤嘉一訳, 「システム理論の諸根拠——ユルゲン・ハーバーマスに対する私の回答」, 佐藤嘉一監訳 『批判理論と社会システムの理論——ハーバーマス＝ルーマン論争』, 東京, 木鐸社, 379-521.)
- Luhmann, Niklas, 1973, „Weltzeit und Systemgeschichte: Über Beziehungen zwischen Zeithorizonten und sozialen Strukturen gesellschaftlicher Systeme“, in: Peter Christian Ludz (Hg.), *Soziologie und Sozialgeschichte*, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Sonderheft 16, Opladen: Westdeutscher Verlag, 81-116. (=Neu gedruckt in: [1975] 2009, *Soziologische Aufklärung 2: Aufsätze zur Theorie der Gesellschaft*, 6.Aufl, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 128-166.) (=1986, 土方昭訳, 「世界時間とシステム史」, 土方昭監訳, 『ニクラス・ルーマン論文集 3 社会システムと時間論——社会学的啓蒙』, 東京, 新泉社, 103-170.)
- Luhmann, Niklas, 1974, „Einführende Bemerkungen zu einer Theorie symbolisch generalisierter Kommunikationsmedien“, *Zeitschrift für Soziologie* 3(3): 236-255. (New gedruckt in: [1975] 2009, *Soziologische Aufklärung 2: Aufsätze zur Theorie der Gesellschaft*, 6.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 212-240.)
- Luhmann, Niklas, 1976a, „Generalized Media and the Problem of Contingency“, in: Jan J.Louber, Rainer C.Baum, Andrew Effrat and Victor Meyer Litz (eds.), *Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcot Parsons*, New York: The Free Press, 507-532.
- Luhmann, Niklas, 1976b, “The Future Cannot Begin”, in: *Social Research*, 43(1): 130-152. (Reprinted in: 1982, *The Differentiation of Society*, translated by Stephen Holmes and Charles Larmore, New York: Columbia University Press, 271-288; Notes. 395-398.)
- Luhmann, Niklas, 1979, „Zeit und Handlung: Eine vergessene Theorie“, in: *Zeitschrift für Soziologie*, 8: 63-81. (Neu gedruckt in: [1981] 2009, *Soziologische Aufklärung 3: Soziales System, Gesellschaft, Organisation*, 5.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 115-142.)
- Luhmann, Niklas, 1980a, *Gesellschaftsstruktur und Semantik: Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, Band 1, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2011, 徳安彰訳, 『社会

構造とゼマンティック 1』, 東京, 法政大学出版局)

- Luhmann, Niklas, 1980b, „Temporalstrukturen des Handlungssystems: Zum Zusammenhang von Handlungs- und Systemtheorie“, in: Wolfgang Schluchter (Hg.), *Verhalten, Handeln und System: Talcott Parsons' Beitrag zur Entwicklung der Sozialwissenschaften*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 32-67. (New gedruckt in: [1981] 2009, *Soziologische Aufklärung 3: Soziales System, Gesellschaft, Organisation*, 5.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 143-171.)
- Luhmann, Niklas, 1981a, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Band 2, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2013, 馬場靖雄・赤堀三郎・毛利康俊・山名淳訳, 『社会構造とゼマンティック 2』, 東京, 法政大学出版局)
- Luhmann, Niklas, 1981b, „Die Unwahrscheinlichkeit der Kommunikation“, in: *Soziologische Aufklärung 3: Soziales System, Gesellschaft, Organisation*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 25-34.
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=1993-1995, 佐藤勉監訳, 『社会システム理論』(上・下), 東京, 恒星社厚生閣)
- Luhmann, Niklas, 1986a, „Die Lebenswelt : nach Rücksprache mit Phänomenologie“, *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*, 62(1): 176-194. (=1998, 青山治城訳, 「生活世界——現象学者との対話のために」, 『情況』, 第二期, 9(1): 101-131.)
- Luhmann, Niklas, 1986b, „Intersubjektivität oder Kommunikation: Unterschiedliche Ausgangspunkte soziologischer Theoriebildung“, in: *Archivio di Filosofia, Intersoggettività Socialità Religione*, 54(1): 41-60. (Neu gedruckt in: [1995] 2008, *Soziologische Aufklärung 6: Die Soziologie und der Mensch*, 3.Aufl., Opladen: Westdeutscher Verlag, 169-188.) (=2007, 村上淳一訳, 「間主観性かコミュニケーションか——社会科学理論の異なる出発点」, 村上淳一編訳, 『ポストヒューマンの人間論——後期ルーマン論集』, 東京, 東京大学出版会, 167-202.)
- Luhmann, Niklas, 1987, „Autopoiesis als soziologischer Begriff“, Hans Haferkamp und Michael Schmid (Hg.), *Sinn, Kommunikation und soziale Differenzierung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 307-324. (=1993, 馬場靖雄訳, 「社会学的概念としてのオートポイエーシス」, 『現代思想』, 21(10): 109-130.)
- Luhmann, Niklas, [1988] 2001, „Erkenntnis als Konstruktion“, in: *Aufsätze und Reden*, Stuttgart: Philipp Reclam, 218-242. (=1996, 土方透・松戸行雄訳, 「認識としての構成」, 土方透・松戸行雄編訳, 『ルーマン、学問と自身を語る』, 東京, 新泉社, 223-256.)
- Luhmann, Niklas, 1990a, „Das Erkenntnisprogramm des Konstruktivismus und die unbekannt bleibende Realität“, *Soziologische Aufklärung 5: Konstruktivistische Perspektiven*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 31-57.

- Luhmann, Niklas, 1990b, „Gleichzeitigkeit und Synchronisation“, *Soziologische Aufklärung 5: Konstruktivistische Perspektiven*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, 92-125.
- Luhmann, Niklas, 1990c, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 2009, 徳安彰訳, 『社会の科学』(1・2), 東京, 法政大学出版局)
- Luhmann, Niklas, [1995] 1996a, *Die neuzeitlichen Wissenschaften und die Phänomenologie*, Wiener Vorlesungen im Rathaus Band.46, Wien: Picus. (=2007, 村上淳一訳, 「近代科学と現象学」, 村上淳一編訳, 『ポストヒューマンの人間論 後期ルーマン論集』, 東京, 東京大学出版会, 1-54.)
- Luhmann, Niklas, 1996b, „Zeit und Gedächtnis“, in: *Soziale Systeme*, 2(2): 307-330.
- Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳, 『社会の社会』, 東京, 法政大学出版会)
- Liotard, Jean-François, 1979, *La condition postmoderne: rapport sur le savoir*, Paris: Édition de Minuit. (=1986, 小林康夫訳, 『ポスト・モダンの条件』, 東京, 水声社)
- Liotard, Jean-François, 1988, *L'inhumain: causeries sur le temps*, Paris: Éditions Galilée (=2002, 篠原資明・上村博・平芳幸浩訳, 『非人間的なもの——時間についての講話』, 東京, 法政大学出版局)
- Mannheim, Karl, 1925, *Das Problem einer Soziologie des Wissens*, Tübingen: JCB Mohr (P. Siebeck). (=1975, 樺俊雄訳, 「知識の社会学の問題」, 樺俊雄監修, 『マンハイム全集 2 知識社会学』, 東京, 潮出版社, 5-108.)
- Mannheim, Karl, [1931] 1965, „Wissenssoziologie“, in: *Ideologie und Utopie*, 5.Aufl., Frankfurt am Main: Verlag G. Schulte-Bulmke, 227-267. (=1975, 樺俊雄訳, 「知識社会学」, 樺俊雄監修, 『マンハイム全集 2 知識社会学』, 東京, 潮出版社, 291-364.)
- Marx, Karl, 1932, „Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844“, in: Vladimir Adoratskij (Hg.), *Karl Marx Friedrich Engels historisch-kritische Gesamtausgabe*, im Auftrage des Marx-Engels-Instituts, Moskau, Erste Abteilung, Band 3, Berlin: Marx-Engels-Verlag. (= 1964, 城塚登・田中吉六訳, 『経済学・哲学草稿』, 東京, 岩波書店)
- Marx, Karl, 1953, „Thesen über Feuerbach“, in: Karl Marx und Friedrich Engels, *Die deutsche Ideologie: Kritik der neuesten deutschen Philosophie in ihren Repräsentanten Feuerbach, B. Bauer und Stirner, und des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Propheten*, Bücherei des Marxismus-Leninismus, Band 29, Berlin: Diez. (=2002, 小林昌人訳, 「フォイエエルバッハに関するテーゼ」, 廣松渉編訳, 小林昌人補訳, 『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』, 東京, 岩波書店, 229-240.)
- Masuda, Yasuhiko, 2009, “Life, Memory and Simultaneity”, in: Nasu Hisashi, Lester Embree, George Psathas and Ilja Srubar (eds.), 2009, *Alfred Schutz and His Intellectual Partners*, Konstanz: UVK, 69-90.
- Mead, George Herbert, [1932] 1980, “The Philosophy of the Present”, in: Arthur E. Murphy (ed.),

- The Philosophy of the Present*, Chicago: The University of Chicago Press, 1-90. (=2001, 河村望訳, 「現在の哲学」, 『デューイ＝ミード著作集 14 現在の哲学 過去の本性』, 東京, 人間の科学新社, 8-105.)
- Mead, George H., 1934, *Mind, Self and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 『精神・自我・社会』, 東京, 青木書店)
- Merleau-Ponty, Maurice, 1945, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. (=1974, 竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳, 『知覚の現象学』(1・2), 東京, みすず書房)
- Moebius, Stephan, 2010, „Debatten um Moderne und Postmoderne“, Georg Kneer und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologische Kontroversen: Beiträge zu einer anderen Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Berlin: Suhrkamp, 254-290.
- Monna, Antonie Frans, 1986, “Methods, Concepts and Ideas in Mathematics: Aspects of an Evolution”, *CWI Tracts*, 23: 1-170. (=1993, 鶴見和之・新井理生訳, 『現代数学発展史：現代数学の進展——方法・概念・思想の変遷』, 東京, 東京電機大学出版局.)
- Moore, Wilbert E., 1963, *Man, Time and Society*, New York/London: John Wiley & Sons. (=1974, 丹下隆一・長田攻一訳, 『時間の社会学』, 東京, 新泉社)
- Müller, Albert, 2000, „Eine kurze Geschichte des BCL: Heinz von Foerster und das Biological Computer Laboratory“, *Österreichische Zeitschrift für Geschichtswissenschaften*, 11(1): 9-30.
- Muzzetto, Luigi, 2006, “Time and Meaning in Alfred Schutz“, *Time & Society*, 15 (1): 5-31.
- Nassehi, Armin, [1993] 2008, *Die Zeit der Gesellschaft: Auf dem Weg zu einer soziologischen Theorie der Zeit*, 2.Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Nassehi, Armin, 2012, „Luhmann und Husserl“, in: Oliver Jahraus, Armin Nassehi, Mario Grizelj, Irmhild Saake, Christian Kirchmeier und Julian Müller (Hg.), 2012, *Luhmann Handbuch: Leben – Werk – Wirkung*, Stuttgart/Weimar: J. B. Metzler.
- Nasu, Hisashi, Lester Embree, George Psathas and Ilja Srubar (eds.), 2009, *Alfred Schutz and His Intellectual Partners*, Konstanz: UVK.
- Natanson, Maurice, 1956, *The Social Dynamics of George H. Mead*, Washington, D.C.: Public Affairs Press. (=1983, 長田攻一・川越次郎訳, 『G・H・ミードの動的社會理論』, 東京, 新泉社)
- Natorp, Paul, 1888, *Einleitung in die Psychologie nach kritischer Methode*, Freiburg im Breisgau: J.C.B.Mohr.
- Natorp, Paul, 1918, „Husserls »Ideen zu einer reinen Phänomenologie«“, *Logos*, Band VII. 1917/18, Tübingen: J.C.B.Mohr, 224-246.
- Neumann, John von and Oskar Morgenstern, 1944, *Theory of Games and Economic Behavior*, New York: Willey. (=2009, 阿部修一・銀林浩・下島英忠・橋本和美・宮本敏雄訳, 『ゲームの理論と経済行動』, 東京, 筑摩書房)

- Parsons, Talcott, [1937] 1968, *The Structure of Social Action*, Vol.1-2, New York: Free Press. (= 1976-1989, 稲上毅・厚東洋輔訳, 『社会的行為の構造』(全5分冊), 東京, 木鐸社)
- Parsons, Talcott and Edward A. Shils (eds.), 1951, *Toward a General Theory of Action*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=1960, 永田道雄・作田啓一・橋本真訳, 『行為の総合理論をめざして』, 東京, 日本評論社)
- Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, Glencoe, Illinois: Free Press. (=1974, 佐藤勉訳, 『社会体系論』, 東京, 青木書店)
- Parsons, Talcott, 1970, “Some Problems of General Theory in Sociology”, in: John C. McKinney and Edward A. Tiryakan (eds.), *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, New York: Appleton-Century-Crofts.
- Piaget, Jean, 1955, *Die Bildung des Zeitbegriffs beim Kinde*, Zürich: Rascher. (=1946, *Le développement de la notion de temps chez l'enfant*, Paris: Presses Universitaires de France.)
- Plessner, Helmuth, 1969, „Zur deutschen Ausgabe“, in : Peter L. Berger und Thomas Luckmann, *Die gesellschaftliche Konstruktion der Wirklichkeit: Eine Theorie der Wissenssoziologie* (Berger/Luckmann 1966 訳), übersetzt von Monika Plessner, Frankfurt am Main: S.Fischer Verlag, IX-XVI.
- Pollner, Melvin, 1993, “The Reflexivity of Constructionism and the Construction of Reflexivity”, in: James A. Holstein and Gale Miller (eds.), *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York: Aldine de Gruyter, 199-212.
- Renn, Joachim, 2006, “Appresentation and Simultaneity: Alfred Schutz on Communication between Phenomenology and Pragmatics”, *Human Studies*, 29: 1-19.
- Renn, Joachim, 2009, “Time and Tacit Knowledge: Schutz and Heidegger”, in: Nasu Hisashi, Lester Embree, George Psathas and Ilja Srubar (eds.), 2009, *Alfred Schutz and His Intellectual Partners*, Konstanz: UVK, 151-176.
- Renn, Joachim, Christoph Ernst und Peter Isenboeck (Hg.), 2012, *Konstruktion und Geltung: Beiträge zu einer postkonstruktivistischen Sozial- und Medientheorie*, Wiesbaden: Springer.
- Robertson, Roland and Bryan S. Turner (eds.), 1991, *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*, London: Sage. (=1995, 中久郎・清野正義・進藤雄三訳, 『近代性の理論——パーソンズの射程』, 東京, 恒星社厚生閣)
- Robertson, Roland, 1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*, London: Sage. (=1997, 阿部美哉訳, 『グローバリゼーション——地球文化の社会理論』, 東京, 東京大学出版会)
- Rousseau, Jean-Jacques, 1959, « Les rêveries du promeneur solitaire », dans: *Œuvres complètes*, I, Paris: Gallimard, 995-1099. (=2012, 永田千奈訳『孤独な散歩者の夢想』, 東京, 光文社)
- Rusch, Gebhard und Siegfried J. Schmidt (Hg.), 1994, *Konstruktivismus und Sozialtheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

- Scheler, Max, [1924], 1980, „Probleme einer Soziologie des Wissens“, in: *Die Wissensformen und die Gesellschaft, Max Scheler Gesammelte Werke*, Band 8, 3.Aufl. (1926, 1.Aufl.), Bern/München: Francke, 15-190. (= [1987] 2002, 浜井修・佐藤康邦・星野勉・川本隆史訳, 『シェーラー著作集 11 知識形態と社会 (上)』(新版), 東京, 白水社)
- Schelting, Alexander von, 1922, „Die logische Theorie der historischen Kulturwissenschaft von Max Weber und im besonderen sein Begriff des Idealtypus“, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 49: 623-752. (=1977, 石坂巖訳, 『ウェーバー社会科学の方法論——理念型を中心に』, 東京, れんが書房)
- Schmidt, Siegfried J. (Hg.), 1987, *Der Diskurs des radikalen Konstruktivismus*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Schmidt, Siegfried J., 1987, „Der radikale Konstruktivismus: Ein neues Paradigma im interdisziplinären Diskurs“, in: Siegfried J. Schmidt (Hg.), *Der Diskurs des radikalen Konstruktivismus*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 11-88.
- Schnettler, Bernt, 2003, „Thomas Luckmann“, Schützeichel, Rainer (Hg.), *Handbuch Wissenssoziologie und Wissensforschung*, Konstanz: UVK, 161-170.
- Schütz, Alfred, [1927] 2006, „Lebensformen und Sinnstruktur“, in: Matthias Michailow (Hg.), *Sinn und Zeit: Frühe Wiener Studien, Alfred Schütz Werkausgabe*, Band I, Konstanz: UVK, 45-174.
- Schütz, Alfred, [1932] 2004, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie, Alfred Schütz Werkausgabe*, Band II, herausgegeben von Martin Endreß und Joachim Renn, Konstanz: UVK. (= [1982] 2006, 佐藤嘉一訳, 『社会的世界の意味構成——理解社会学入門』(改訳版), 東京, 木鐸社)
- Schutz, Alfred, [1941] 1966a, “Edmund Husserl’s Ideas, Vollume II”, in: Ilse Schutz (ed.), *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 15-39. (= 1998a, 那須壽訳, 「エドムント・フッサールの『イデーニ II』」, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・著作集 第4巻 現象学的哲学の研究』, 東京, マルジュ社)
- Schutz, Alfred, [1942] 1962a, “Scheler’s Theory of Intersubjectivity and the General Thesis of the Alter Ego”, in: Maurice Natanson (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 150-179. (=1983a, 那須壽訳「シェーラーの相互主観性理論と他我の一般定立」, M・ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 (1)』, 東京, マルジュ社, 239-278.)
- Schutz, Alfred, [1943] 1964a, “The Problem of Rationality in the Social World”, in: Arvid Brodersen (ed.), *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 64-88. (= 1991a, 那須壽訳, 「社会的世界における合理性の問題」, A・ブロダーセン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』, 東京, マルジュ社, 97-129.)
- Schutz, Alfred, [1945] 1962b, “On Multiple Realities”, in: Maurice Natanson (ed.), *Collected*

Papers I: The Problem of Social Reality, Den Haag: Martinus Nijhoff, 207-259. (=1985a, 那須壽訳, 「多元的現実について」, M・ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題(2)』, 東京, マルジュ社, 9-80.)

Schutz, Alfred, [1951] 1964b, “Making Music Together: A Study in Social Relationship”, in: Arvid Brodersen (ed.), *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 159-178. (=1991b, 渡部光訳, 「音楽の共同創造過程——社会関係の一研究」, A・ブローダーセン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』, 東京, マルジュ社, 221-244.)

Schutz, Alfred, [1953] 1962c, “Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action”, in: Maurice Natanson (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 3-47. (=1983c, 那須壽訳, 「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」, M・ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題(1)』, 東京, マルジュ社, 49-108.)

Schutz, Alfred, [1953] 1962d, “Concept and Theory Formation in the Social Sciences”, in: Maurice Natanson (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 48-66. (=1983d, 那須壽訳, 「社会科学における概念構成と理論構成」, M・ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題(1)』, 東京, マルジュ社, 109-134.)

Schutz, Alfred, [1955] 1962e, “Symbol, Reality and Society”, in: Maurice Natanson (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 287-356. (=1985b, 西原和久訳, 「シンボル・現実・社会」, M・ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題(2)』, 東京, マルジュ社, 113-204.)

Schutz, Alfred, [1955] 1964c, “Equality and the Meaning Structure of the Social World”, in: Arvid Brodersen (ed.), *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 226-273. (=1991c, 西原和久訳, 「平等と社会的世界の意味構造」, A・ブローダーセン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』, 東京, マルジュ社, 305-364.)

Schutz, Alfred, [1956] 1964d, “Mozart and the Philosophers”, in: Arvid Brodersen (ed.), *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 179-200. (=1991d, 渡部光訳, 「モーツァルトと哲学者たち」, A・ブローダーセン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』, 東京, マルジュ社, 245-272.)

Schutz, Alfred, [1957] 1966b, “The Problem of Transcendental Intersubjectivity in Husserl”, in: Ilse Schutz (ed.), *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Den Haag:

- Martinus Nijhoff, 51-83.) (=1998b, 西原和久訳, 「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・著作集 第4巻 現象学的哲学の研究』, 東京, マルジュ社, 101-138.)
- Schutz, Alfred, [1958] 2010, “The Meaning Structure of the Social World”, Lester Embree (ed.), 2010, *Schutzian Social Science*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers, Frontispiece, ix-x.
- Schutz, Alfred, [1959] 1966c, “Type and Eidos in Husserl's Late Philosophy”, in: Ilse Schutz (ed.), *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 92-115. (=1998c, 西原和久訳, 「フッサール後期哲学における類型と形相」, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・著作集 第4巻 現象学的哲学の研究』, 東京, マルジュ社, 157-184.)
- Schutz, Alfred, [1959] 2011, “Husserl and His Influence on Me”, in: Lester Embree (ed.), *Collected Papers V: Phenomenology and the Social Sciences*, Dordrecht: Springer, 1-4. (=1999, 矢部謙太郎訳, 「フッサールと彼が私に与えた影響」, 『文化と社会』, 1: 6-11.)
- Schutz, Alfred, 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, edited by Richard M. Zaner, New Haven/London: Yale University Press. (=1996, 那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳, 『生活世界の構成——レリヴァンスの現象学』, 東京, マルジュ社)
- Schutz, Alfred, [1977] 2011, “Husserl and His Influence on Me”, in: Lester Embree (ed.), *Collected Papers V: Phenomenology and the Social Science*, Dordrecht: Springer Netherlands, 1-4.
- Schutz, Alfred, 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, edited and introduced by Maurice Natanson, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=1983-1985, 渡辺光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題』(1-2), 東京, マルジュ社)
- Schutz, Alfred, 1964, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, edited and introduced by Arvid Brodersen, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=1991, 渡辺光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』, 東京, マルジュ社)
- Schutz, Alfred, 1966, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, edited by Ilse Schutz, Den Haag: Martinus Nijhoff. (=1998, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第4巻 現象学的哲学の研究』, 東京, マルジュ社)
- Schutz, Alfred, 1967, *The Phenomenology of the Social World*, translated by George Walsh and Frederick Lehnert, Evanston, Illinois: Northwestern University Press. (Schütz [1932] 訳)
- Schütz, Alfred und Thomas Luckmann, [1975] 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK.
- Schütz, Alfred und Talcott Parsons, [1940-1941] 1977, *Zur Theorie sozialen Handelns: Ein Briefwechsel*, herausgegeben von Walter M. Sprondel, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1978, Richard Grathoff (ed.), *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Bloomington, Indiana: Indiana University Press.) (=1980, W・M・スプロ

- ンデル編、佐藤嘉一訳、『A.シュッツ=T.パーソンズ往復書簡 社会理論の構成——社会的行為の理論をめぐって』, 東京, 木鐸社)
- Schütz, Alfred und Aron Gurwitsch, 1985, *Alfred Schütz Aron Gurwitsch Briefwechsel 1939-1959*, herausgegeben von Richard Grathoff, München: Wilhelm Fink Verlag. (=1996, 佐藤嘉一訳 『亡命の哲学者たち——シュッツ／グールヴィッチ往復書簡』, 東京, 木鐸社)
- Schützeichel, Rainer, 2003, *Sinn als Grundbegriff bei Niklas Luhmann*, Frankfurt am Main/New York: Campus Verlag.
- Simmel, Georg, [1908] 1992, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Otthein Rammstedt (Hg.), Gesamtausgabe, Band 11, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1994, 居安正訳, 『社会学——社会化の諸形式についての研究』(上・下), 東京, 白水社)
- Simmel, Georg, [1910] 1996, „Hauptprobleme der Philosophie“, in: Otthein Rammstedt (Hg.), *Gesamtausgabe*, Band 14, *Hauptprobleme der Philosophie/Philosophische Kultur*, herausgegeben von Rüdiger Kramme und Otthein Rammstedt, Frankfurt am Main: Suhrkamp., 7-157. (=1994, 生松敬三訳, 「哲学の根本問題」, 『ジンメル著作集 6 哲学の根本問題／現代文化の葛藤』(新装版), 東京, 白水社, 7-236.)
- Simon, Herbert A., 1947, *Administrative Behavior: A Study of Decision-Making Processes in Administrative Organization*, New York: MacMillan. (=2009, 二村敏子ほか訳 『経営行動——経営組織における意志決定過程の研究』, 東京, ダイヤモンド社)
- Simon, Herbert A., 1957, *Models of Man. Social and Relational: Mathematical Essays on Rational Human Behavior in a Social Setting*, New York/London: Wiley. (=1970, 宮沢光一監訳, 『人間行動のモデル』, 東京, 同文館出版)
- Sokolowski, Robert, 1964, *The Formation of Husserl's Concept of Constitution*, Den Haag: Martinus Nijhoff.
- Sorokin, Pitirim A. and Clarence Q. Berger, 1939, *Time Budgets of Human Behavior*, Cambridge Massachusetts: Harvard University Press.
- Sorokin, Pitirim A. and Robert K. Merton, 1937, “Social Time: A Methodological and Functional Analysis”, *The American Journal of Sociology*, 42: 615-629.
- Sorokin, Pitirim, [1943] 1964, *Sociocultural Causality, Space, Time: A Study of Referential Principles of Sociology and Social Science*, New York: Russell & Russell.
- Spencer-Brown, George, 1969, *Laws of Form*, London: Allen & Unwin. (=1987, 大澤真幸・宮台真司訳, 『形式の法則』, 東京, 朝日出版社)
- Spengler, Oswald, 1924, *Der Untergang des Abendlandes: Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte*, 2 Bände, München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung. (=2001, 村松正俊訳, 『西洋の没落——世界史の形態学の素描』, 東京, 五月書房)
- Srubar, Ilja, 1989, „Vom Milieu zur Autopoiesis: Zum Beitrag der Phänomenologie zur

- soziologischen Begriffsbildung“, in: Christoph Jamme und Otto Pöggeler (Hg.), *Phänomenologie im Widerstreit: Zum 50. Todestag Edmund Husserls*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 307-331.
- Srubar, Ilja, 1994, „Lob der Angst vorm Fliegen: Zur Autogenese sozialer Ordnung“, in: Walter M. Sprondel (Hg.), *Die Objektivität der Ordnungen und ihre kommunikative Konstruktion: Für Thomas Luckmann*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 95-120.
- Srubar, Ilja, 2010, „Der Streit um die Wissenssoziologie“, Georg Kneer und Stephan Moebius (Hg.), *Soziologische Kontroversen: Beiträge zu einer anderen Geschichte der Wissenschaft vom Sozialen*, Berlin: Suhrkamp, 46-78.
- Touraine, Alain, 1969, *La société post-industrielle*, Paris: Editions Denoël. (=1970, 寿里茂・西川潤訳, 『脱工業化の社会』, 東京, 河出書房新社)
- Touraine, Alain, 1978, *La voix et le regard*, Paris: Seuil. (=1983, 梶田孝道訳, 『声とまなざし——社会運動の社会学』, 東京, 新泉社)
- Turner, Bryan Stanley (ed.), 1990, *Theories of Modernity and Postmodernity*, London/Newbury Park, California/New Delhi: Sage Publication.
- Vaitkus, Steven, 1991, *How is Society Possible?: Intersubjectivity and the Fiduciary Attitude as Problems of the Social Group in Mead, Gurwitsch, and Schutz*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers. (=1996, 西原和久・工藤浩・菅原謙・矢田部圭介訳, 『「間主観性」の社会学——ミード・グルヴィッチ・シュッツの現象学』, 東京, 新泉社)
- Wagner, Helmut R. and Ilja Srubar, 1984, *A Bergsonian Bridge to Phenomenological Psychology*, Washington, D.C: Center for Advanced Research in Phenomenology & University Press of America.
- Wagner, Helmut R., 1977, “The Bergsonian Period of Alfred Schutz”, in: *Philosophy and Phenomenological Research*, 38(2): 187-199.
- Wagner, Helmut R., 1983, *Alfred Schutz: An Intellectual Biography*, Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Waldenfels, Bernhard, [1979] 1980, „Verstehen und Verständigung. Zur Sozialphilosophie von A. Schütz“, in: *Der Spielraum des Verhaltens*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 205-222. (=1987, 村田純一訳, 「理解と相互諒解——A・シュッツの社会哲学」, 新田義弘・千田義光・山口一郎・村田純一・杉田正樹・鷺田清一訳, 『行動の空間』, 東京, 白水社, 273-298.)
- Waldenfels, Bernhard, 1980, *Der Spielraum des Verhaltens*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1987, 新田義弘・千田義光・山口一郎・村田純一・杉田正樹・鷺田清一訳, 『行動の空間』, 東京, 白水社)
- Watzlawick, Paul (Hg.), [1981] 1985, *Die erfundene Wirklichkeit: Wie wissen wir, was wir zu wissen glauben?. Beiträge zum Konstruktivismus*, München: Piper.
- Weber, Max, [1904] 1982a, „Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozial-politischer

- Erkenntnis“, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, herausgegeben von Johannes Winckelmann, 5.Aufl. (1922, 1.Aufl.), Tübingen: J.C.B.Mohr, 146-214. (=1998, 富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』, 東京, 岩波書店)
- Weber, Max, [1913] 1982b, „Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie“, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, herausgegeben von Johannes Winckelmann, 5.Aufl. (1922, 1.Aufl.), Tübingen: J.C.B.Mohr, 427-474. (=1968, 林道義訳, 『理解社会学のカテゴリー』, 東京, 岩波書店)
- Weber, Max, [1922] 1982c, „Soziologische Grundbegriffe“, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, herausgegeben von Johannes Winckelmann, 5.Aufl. (1922, 1.Aufl.), Tübingen: J.C.B.Mohr, 541-581. (=1987, 阿閉吉男・内藤莞爾訳, 『社会学の基礎概念』, 東京, 恒星社厚生閣)
- Weiss, Johannes, 2009, “Schutz on Weber: A Weberian View”, Nasu Hisashi, Lester Embree, George Psathas and Ilja Srubar (eds.), *Alfred Schutz and His Intellectual Partners*, Konstanz: UVK, 33-48.
- Wendt, Alexander, 1999, *Social Theory of International Politics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wittenbecher, Iris, 1999, *Verstehen ohne zu verstehen: Soziologische Systemtheorie und Hermeneutik in vergleichender Differenz*, Wiesbaden: Deutscher Universitäts-Verlag.
- Woolgar, Steve and Dorothy Pawluch, 1985, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations“, *Social Problems*, 32(2): 214-227. (= [2000] 2006, 平英美訳, 「オントロジカル・ゲリマンダリング——社会問題をめぐる説明の解剖学」, 平英美・中河伸俊編, 『構築主義の社会学——実在論争を超えて』(新版), 京都, 世界思想社, 184-213.)
- Zahavi, Dan., [1997] 2003, *Husserl's Phenomenology*, Stanford: Stanford University Press. (=2003, 工藤和男・中村拓也訳, 『フッサールの現象学』, 京都, 晃洋書房)
- Zaner, Richard M., [1997] 2002, "Making Music Together While Growing Older: Further Reflections on Intersubjectivity“, in: *Human Studies*, 25: 1-18.
- Zerubavel, Eviatar, 1981, *Hidden Rhythms: Schedules and Calendars in Social Life*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1984, 木田橋美和子訳, 『かくれたリズム——時間の社会学』, 東京, サイマル出版会)
- Zimmerman, Don E. and Melvin Pollner, 1971, "The Everyday as a Phenomenon“, in: Jack D. Douglas (ed.), *Understanding Everyday Life*, London: Routledge & Kegan Paul, 80-103.
- 赤堀三郎, 2006, 「社会システム理論における自己言及パラダイムの由来」, 『経済と社会: 東京女子大学社会学会紀要』, 34: 61-79.
- 赤堀三郎, 2009, 「戦後アメリカにおけるサイバネティクスと社会学」, 『経済と社会: 東京女子大学社会学会紀要』, 37: 19-34.

- 北田暁大, 2007, 「分野別研究動向(理論)——領域の媒介」, 『社会学評論』, 58(1): 78-93.
- 飯田卓, 2009, 「行為と時間: 生活世界的時間の解明に向けて」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, 54(1): 67-81.
- 入江正勝, 1997, 「時間と行為: ミードとシュッツを中心として」, 『年報社会学論集』10: 25-36.
- 上野千鶴子編, 2001, 『構築主義とは何か』, 東京, 勁草書房
- 梅村麦生, 2011, 「社会学における《主客二元論批判》再考——ジンメル《主観・客観問題》から現代社会学の諸理論へ」, 『社会学雑誌』, 神戸大学社会学研究会, 27-28: 97-110.
- 大黒屋貴稔, 2002, 「観察者は循環である——ルーマンとシュッツの〈同時性〉概念における二つの〈同時性〉」, 『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』, 48(1): 89-96.
- 大黒屋貴稔, 2011, 「顕在的な統一と潜在的な統一——『分析的リアリズム』をめぐるシュッツとルーマンのパーソンズ批判を手がかりとして」, 『ソシオロジカル・ペーパーズ』, 早稲田大学大学院社会学院生研究会, 20: 1-9.
- 大黒屋貴稔, 2012, 「A・シュッツにおける2つの『意味』概念——R. Heiskalaによるシュッツの『意味』概念批判によせて」, 『ソシオロジカル・ペーパーズ』, 早稲田大学大学院社会学院生研究会, 21: 27-36.
- 金子務, 1993, 「同時性をめぐって——ベルクソン vs. アインシュタイン」, 『現代思想』, 21(3): 178-189.
- 木村裕之, 2003, 「N.ルーマンの歴史的意味論と二階の観察」, 『年報人間科学』, 24(1): 1-16.
- 斎藤慶典, 2000, 『思考の臨界——超越論的現象学の徹底』, 東京, 勁草書房
- 左古輝人, 1998, 『秩序問題の解明——恐慌における人間の立場』, 東京, 法政大学出版局
- 杉山榮, 1925, 『社会学十二講』, 東京, 新潮社
- 盛山和夫, 2006, 「規範的探求としての理論社会学——内部性と構築性という条件からの展望」, 富永健一編, 『理論社会学の可能性——客観主義から主観主義まで』, 東京, 新曜社, 28-47.
- 千田有紀, 2001, 「構築主義の系譜学」, 上野千鶴子編, 2001, 『構築主義とは何か』, 東京, 勁草書房, 1-42.
- 平英美・中河伸俊編, 2006, 『構築主義の社会学——实在論争を超えて』(旧版2000), 京都, 世界思想社
- 高橋徹, 2002, 『意味の歴史社会学——ルーマンの近代ゼマンティック論』, 京都, 世界思想社
- 滝沢恭司編, 2007, 『構成主義とマヴォ』(和田博文監修、コレクション・モダン都市文化第29巻), 東京, ゆまに書房
- 廳茂, 1995, 『ジンメルにおける人間の科学』, 東京, 木鐸社
- 廳茂, 2010, 「G・ジンメルにおける『社会はいかにして可能か』: 第3アプリオリ論の思想的意味(上)」, 『国際文化学研究』, 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 35: 1-32.
- 廳茂, 2010, 「G・ジンメルにおける『社会はいかにして可能か』: 第3アプリオリ論の思

- 想的意味(中)],『国際文化学研究』,神戸大学大学院国際文化学研究科紀要,36:21-58.
- 寺前典子,2009,「音楽のコミュニケーションにおける内的時間とリズムをめぐる考察:シュッツ音楽論およびフッサール現象学からのアプローチ」,『現代社会理論研究』,3:59-71.
- 富永健一,2006,「編者序言」,富永健一編,『理論社会学の可能性——客観主義から主観主義まで』,東京,新曜社,i-x.
- 鳥越信吾,2013,「A・シュッツにおける時間論」,『社会学史研究』,35:65-80.
- 長岡克行,2006,『ルーマン/社会の理論の革命』,東京,勁草書房
- 中河伸俊,2001,「Is Constructionism Here to Stay?——まえがきにかえて」,中河伸俊・北澤毅・土井隆義編,『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』,京都,ナカニシヤ出版,3-24.
- 中村文哉,2000,「A・シュッツのレリヴァンス概念と間主観性問題」,『社会学評論』51(2):188-203.
- 那須壽,1997,『現象学的社会学への道:開かれた地平を求めて』,東京,恒星社厚生閣
- 那須壽,1999,「レリヴァンス現象の解明に向けて——シュッツ理論継承のために」,『文化と社会』,1:60-85.
- 西原和久,1998,『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』,東京,弘文堂
- 西原和久,2003,『自己と社会——現象学 of 社会理論と〈発生社会学〉』,東京,新泉社
- 西原和久,2010,『間主観性の社会学理論』,東京,新泉社
- 西原和久編著,1991,『現象学的社会学の展開——A・シュッツ継承へ向けて』,東京,青土社
- 西原和久・張江洋直・井出裕久・佐野正彦編著,1998,『現象学的社会学は何を問うのか』,東京,勁草書房
- 馬場靖雄,2001,「構成と現実/構成という現実」,中河伸俊・北澤毅・土井隆義編,『社会構築主義のスペクトラム——パースペクティブの現在と可能性』,京都,ナカニシヤ出版,43-57.
- 馬場靖雄,2001,『ルーマンの社会理論』,東京,勁草書房
- 張江洋直,1991,「ベルクソニアンとしてのシュッツ1」,『現代社会理論研究』,1:65-73.
- 浜日出夫,1985,「シュッツと『意味』の社会学」,江原由美子・山岸健編,『現象学的社会学——意味へのまなざし』,京都,三和書房,91-107.
- 廣松渉,1991,『現象学的社会学の祖型——A・シュッツ研究ノート』,東京,青土社
- 福本和夫,1925,『社会の構成=並に變革の過程』,東京,白揚社出版
- 真木悠介,[1983]2003,『時間の比較社会学』,東京,岩波書店
- 松井克浩,2007,『ヴェーバー社会理論のダイナミクス——「諒解」概念による『経済と社会』の再検討』,東京,未來社
- 三上剛史,1993,『ポスト近代の社会学』,京都,世界思想社

- 三上剛史, 2003, 『道徳回帰とモダニティ——デュルケームからハバーマス・ルーマンへ』, 東京, 恒星社厚生閣
- 森元孝, 1995, 『アルフレート・シュッツのウィーン——社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』, 東京, 新評論
- 森元孝, 2001, 『アルフレッド・シュッツ——主観的時間と社会的空間』, 東京, 東信堂
- 守永直幹, 2006, 『未知なるものへの生成——ベルクソン生命哲学』, 東京, 春秋社
- 矢谷慈國, 1989, 『生活世界と多元的リアリティ——現象学から社会学へ』, 兵庫, 関学生協出版会
- 吉澤夏子, 2002, 『世界の儂さの社会学——シュッツからルーマンへ』, 東京, 勁草書房
- 渡辺慧, [1947] 1974, 「相対性理論とベルクソン」, 『時』, 東京, 河出書房新社 (旧版 1947, 『時間』, 白日書房), 221-298.
- 渡會知子, 2004, 「『構築主義論争』再考——ラディカル構成主義を手がかりに」, 『ソシオロジ』, 49(1): 21-37.